

登場人物紹介。

フェンリル 能力 フェンリル

黒白のゴシック・ロリィタの美少女顔の美青年。白皙の肌に金銀の長い髪をしている。二刀流の剣士。

(他、登場作品、ヴァンパイア・パロール、セフィロト・ロードなど。)

レイア 能力 エタン・ローズ

黒白のゴシック・ロリィタの少女。

萌黄色の髪の色をしている。

人間では無い、何か。

傲岸不遜な性格をしている。

(他、登場作品、ヴァンパイア・パロール、セフィロト・ロードなど。)

キマイラ 能力 カクテル・パーティー

殺し屋。ドーン的能力犯罪者ハンター（バウンティ・ハンター）。

頭に羊の角が生え、

確かな実力者である女性。

(他、登場作品、ヴァンパイア・パロールなど。)

ケルベロス 能力 アケローン

黒いコートを纏った筋肉質に精悍な顔の男。

能力犯罪者を収容する「アサイラム」の暫定的所長を務めている。

(他、登場作品、ヴァンパイア・パロールなど。)

カイリ 能力 ファイヤー・ブリンガー

教団「蓮」を守る幹部の青年。

ロータス 能力 ヴィア・ドロローサ

教団「蓮」の教祖である女。

長い黒髪に、

赤黒いローブのような服装を身に纏っている。

アンサー 能力 サーキュレーション

ルルイエにより造られた人造生命体である少女。

カイリの土から炎を創造する力により、復活を遂げる。

その地は、動乱の跡だった。

今も、その混乱が続いている。

此処は、“神”を失った地なのだ。

住民達は、死んでしまった神の幻影を追い掛けながら、生きている。

神が欲しい、そう思いながら。

縋ろうとしている。

彼は、『教団』の調査の為、自ら、その地にやってきた。

「一体、俺達と彼らはどう違うのだろうか……？」

純粋な疑問。

それでも、彼は自らの組織の教祖を信じるしか道は無い。

瓦礫と化した宮殿へと赴く。

そこには、石像となった肉体が砕け散った一人の男があった。

石像は首が外れており、細身で美しい顔をしていた。下半身は完全に崩れている。

何処の宗教でも、善神と悪神は存在する。

この石像の男は所謂、悪神であると、この地の人々は言う。けれども、誰もこの悪神の像を破壊しようとする者はいない。むしろ、聖なるものであるかのように、皆、祈りを捧げている。

この地には裁きがあった。

次々と、この地の人々が、この悪神によって、石へと変えられていった。

そして、新たな神の使いとして、泥の中から怪物が現れようとした。

しかし、それは生まれなかった。

悪神を倒した名も無き英雄がいると聞く。

その英雄の姿を見た者は誰もいない。

だからこそ、きっと英雄もまた、神格化されていくのだろう。

人々は、皆、今、苦しんでいる。

みな、神の一部だった。神の血肉を分け与えられた者達だった。しかし、神を失ってしまい、神の血肉もまた、失われてしまった。その為、みな、引き離されてしまった神の肉体を求めるかのように、狂乱している。

幻覚、恐怖によって蝕まれ続けている。

おそらくは。

その血肉と呼ばれているものは、ドラッグの一種であったに違いない。

彼はそう踏んでいた。

それにしてもだ。

「あの石像。……いずれ、復活するぞ。……まだ、死んでいない。いつかまた、何らかの形で再生する。ああ……」

彼は宮殿を離れた。

列車に乗る。

もう、何百年も前の技術で動いている。

彼は、ごとごとと揺れる列車に乗りながら、空を見た。

太陽が赤い。

美しい日の光が差し込んでいる。

こんな、地底のような空間にも、こんなものが煌いている。

しばらくして、列車を降りる。

彼は、丘陵へと向かった。

どうやら何らかの戦いがあった場所らしく、森が焼き尽くされている。

灰。

灰と、炭化した木々ばかりに埋め尽くされていた。

人々は此処に近付かない。色々な想像が飛び交っている。此処で、何があったのかと。

その中で。

黒ずんだ灰の中に、赤茶けた紫色をしている灰を見つけた。

違和感、この景色とは調和しないもの。

何を焼いたら、このような灰が生まれるのか。分からない。

彼は、持っている鞆の中から、瓶を取り出すと、それを可能な限り、採取した。

この街の調査も、これで終えようと思う。

そして、街の外へと向かった。

そこでは、一人の男が彼を待っていた。

白いマントを羽織って、白いタキシードを着て。赤白の格子模様の帽子を被った、がっしりとした体格の男。

彼は柔らかな笑みを浮かべている。

そして、同時に、何処か泣いた後のような顔をしていた。

此処に入る際に、外にいる街の住民を説得して、街の門を開けて貰ったのは彼だ。

「お待ちしておりました、カイリ。どうでした？」

「クライ・フェイス。……、収穫は無かった。ただ、石像を見てきた。あれには、余り関わらない方がいい。近付くのも、どうかと思う」

「ああ、そうでしたか。私も興味があったのですが、なにぶん、私の仕事はですねえ。教団関係者の護衛と護送役。此処を離れるわけには行きませんかねえ」

と、何だか、つまらなさそうな顔をする。

そして、クライ・フェイスに瓶を渡した。

「何だと思う？ これ」

泣き顔の男は、興味深そうに眺める。

「ロータスさまに見せてはどうですかねえ？ あの人は、世界の真理を何でも知ってそうだから。このくらい」

二人は、教団へと帰る事にした。

そこは、一先ず、教団と呼ばれている。

教団というよりも、居場所の無い者達で集まったようなものだ。

教団は、打ち捨てられた幾つかのビルディングを改造して、一つの集落のように使っている。

この組織を統治しているのは、ロータスという名前の女だった。

彼女は、大抵、いつも赤か黒のドレスに身を包んでいる。

いつも、特定の場所にいるわけではないので、教団の住民達に彼女の居場所を聞きながら、二人はビルの中を歩く。

そして、二十分ほど掛けて、彼女のいる場所に辿り着いた。

そこは、真っ黒なカーテンに、真っ黒なカーペットといった、黒い部屋だった。彼女のお気に入りの場所の一つだ。それと合わせるように、今日は全身、黒尽くめのゆったりとしたローブのような服を纏っている。

今はまだ昼だが、夜の暗黒のように暗い。

彼女はその部屋の中央に鎮座して、静かに壁にもたれて眼を閉じている。

いつものように、瞑想に耽っているみたいだった。

扉には鍵が掛かっている。

二人は慎重に、彼女の瞑想を妨げないように、瞑想の時間が終わるのを待つ。

ぱちり、と。

彼女は眼を開く。

「あら。カイリにクライ・フェイス。帰ったのね。おかえり」

彼女は童子のように無邪気な笑顔を見せる。

白い服に白赤の帽子、黒いマントを羽織った泣き顔の男と。

Tシャツにダメージ・ジーンズ、鎖の付いたリスト・バンドを嵌めた、薄い茶色い髪をしたカイリ。

二人は、罰の悪そうな顔をする。

「ロータスさま。“聖なる海溝”の調査を終えてきましたよ」

カイリは言った。

クライ・フェイスは帽子を直す。

ロータスと呼ばれた女は、ぽわぽわ、としたような笑顔のまま、二人にではなく、此処に存在しない、何かに語り掛けるように言う。

「空が暗黒に割れていて。雲が真っ黒。とてつもない、焼けた大地と、崩れてしまった空気。また視たの。世界が余りにも嘆き悲しんでいるって」

と、寂しげな口調で言う。

二人は顔を見合わせる。

彼女にしか見えない景色。それを見ている。

このロータスという女性にとって、世界の見え方が普通の人間と違う。

少なくとも、彼女はこの見え方を世界の本質だと言っている。

それは、余りにも絶対的な口調で。

まるで疑う事もせずに。

この世界に関して、説き伏せていく。

そう、此処は集団を意味する“クラスタ”と呼ばれている。

誰が最初に呼んだのか分からない。誰でもなかったのかもしれない。ひよっとすると、外の間だったのかも。

クラスタは奇妙な人間達の集まりだ。

みんな、何処か奇妙さを抱えている。

その奇妙さを一言で言うと、世界中から疎外されてしまった者達、とでも言うべきか。

この世界、あるいは社会に居場所を見つけられなかった人間達の集まり。

そういった者達が、ある者は、居場所のみとして、ある者は世界に対する憎悪の捌り所として集まってくる。

此処が、カルト団体の本部みたいな見方をされる事も多い。

実際、クラスタの中で、ロータスを中心として、ピラミッド型の組織を為している。しかし、ロータス自身は、自らを崇拜する組織が存在している事に関心が無さそうに見えた。

カイリは、組織の中核を担う幹部の一人をしていた。

クライ・フェイスもそうだ。

クラスタのメンバーは、大体、三千人弱、人の出入りは激しいので、百名程度は人数がつねに変動している。みな、何処からやってきて、何処に出て行くのか分からない。

とにかく、この集落には、人が集まってくる。

みな、ロータスの教えを聞きに来る。

彼女自身はというと、自らが教祖であるという自覚は無い。

ただ、教団は存在する。教団を動かしている幹部も存在する。

教団は大きく、七つの階級に分かれている。ロータス本人が決めたわけではなく、幹部の一人が作った制度だ。

階級はそれぞれ、最上位の『白蓮』。上位第三階級の『久遠』『浄化』『滅界』、中位である『回廊』『兆し』と位が下がっていく。そして、下位として『導き子』と呼ばれる、クラスタの中でもっとも大きな人数を占める位が存在する。

何故、そのような制度になっているのかは、その方が、集落を維持しやすいからだと言う。本当の処は、分からない。制度を作った者は、既にこの世にいないからだ。

制度が何の為にあったのか、おそらくは、集落を何か権力的なものに仕立て上げようという意図があったのかもしれない。だが、現状、余りそれは機能していないように思えた。

こんな意見を述べる者もあった。敢えて、階級を作り出す事によって、教団が存在していると思いたい人間が存在する、階級制度を作った者は、その心理に答えたのだと。

真偽はやはり分からない。

カイリは四番目の階級である『滅界』を統治していた。

だが、その階層の、構成員の数すら把握していない。大体、九十名前後だと聞かすが、よく分からない。

クライ・フェイスは十名しかいない、白蓮の中の一人だった。

主に、ロータスを守るボディー・ガードをしている。

何らかの“奇跡”を有しているらしいが、その力がどのようなものなのか、カイリも知らない。奇跡……、外の人間が主に“能力”や“魔法”と呼んでいるもの。

ロータスは、つねに理解不可能な雰囲気を持っていた。

この世界は邪悪であり、死の世界そのものだという。

カイリはそれに賛同する。

泣き顔の男も。

だから、彼女に付き従う。

二人とも、彼女に合わせて、部屋の中で瞑想に入る事にした。

不可視の神との対話の時間。

この世界の外側におそらくはいるであろう、何らかの神との。

その時間だけ、忘れられる。この世界が悪夢そのものである事に。

此処は、閉ざされた暗闇の世界。無垢な者達が閉ざされていく牢獄。

そうやって、此処の住民達は、世界を認識している。

だから、此処は砦なのだ。

外の、邪悪で悪意に満ちたものから身を守る為の砦。

「みんなみんな、死へと向かっていく。魂の死へと。みんな正しく生きるべきなのに、何故、こんなに狂った生き方に身を委ねるのかしら？ 私はそれがとても悲しくて仕方が無いわ。ああ、神はいつか誕生する。私達はそれを待たなければならない」

ロータスは言う。

二人は苦笑する。

そして、少し、気鬱になる。

この世界もまた、出口が無いのかもしれないのだと。

ニアスは知己の友人に会う事にした。

夕方に繁盛する店だった。繁華街から少し離れた、寂れた場所にある。

ニアスは、そこでオレンジ・ジュースのカクテルを注文して、友人を待っていた。

店の内装は、全体的に乳白色をしており、椅子も机も黒檀で作られている。

壁には黄土色のタペストリーが掛けられている。

ニアスはこれまでの二十数年間の人生において、友人と呼べるものは少なかったが、彼女にだけは、ニアスの閉ざした心の何割かを吐き出す事が出来た。

今日は、いつもの黒いローブではなく、普通の水色のカットソーに、チノパンを穿いている。我ながら、ラフな格好過ぎるな、と思った。

二十分ほどして、友人は店の中に入ってきた。

眼鏡を掛けた女だ。

年は二十代後半といった処だろうか。

彼女の名前はマッド・ライトと言う。

ニアスに合わせたかのように、ラフなノーブランドの白いブラウスに、黒いズボンを穿いている。

「久しぶり。ニアス、どうしたの？ 珍しいじゃない、連絡を寄越すなんて」

「ええ、久しぶりね。本当に元気していた？」

マッドは、コーヒーを注文する。

そして、何だか、陰鬱な顔をしているニアスを見て、彼女は少し声のトーンを落とす。

「どうしたの？ また、身体の調子、悪くなったとか？」

「.....そうね。あんまり体調は今でも良くない。マッド、あなたは最近、どうしているの？」

「えーと、私は。そうねえ、新しく洋服屋さんでバイトを始めたくらいかな」

ニアスは笑う。

彼女には普通の生き方をして、幸せになって欲しいと。

「ニアスの方はどうしているの？」

「.....そうね。自分探しかな」

それ以上、マッドはニアスの話に疑問を投げ掛けない。

それ以上は、聞いてはいけない領域。

その微細な領域を理解しているマッドは、確かに、ニアスの唯一の理解者だった。

十

ニアスはアサイラムに向かう事を決意している。

それは“能力”を持つ犯罪者を収容する施設だった。

そこでは、最大の人権が配慮されていると聞く。

そして、自らの持つ能力を、何とか秩序の維持や人類の未来の為に貢献出来たら、と。

そういった者達を収容する施設だった。

そう、ニアスはそこに出頭する事に決めている。

先日、犯罪者を狩るハンター組合である、『ドーン』に、名乗り出た。

そこまで上位ランキングに食い込んでいないニアスは、あっさりとお出頭を承諾された。これで、彼女の命は保障された事になる。

アサイラムに収容されれば、二度と、外の世界には出られないと聞く。

いわば、小さな一つの街に入れられて、そこで一生を過ごす事になるようなものだ。

娯楽なども充分保障されている。恋愛だって可能だ。

アサイラムは、刑務所という場所においての一つの到達点だと聞く。

受刑者に対して、ベーシック・インカム制度を設ける事によって、最大限の人権に配慮し、犯罪者の能力を社会の役に立たせようと模索する施設。

ニアスは、暗いバーの中で、アサイラムからの使いを待っていた。

時計の針ばかりを仕切りに見ている。

これで、外の世界とはお別れだ。

今後の人生は、一生、アサイラムの中だ。

二度と、色々な場所を旅する事など出来はしない。それでも、この界限では簡単に人間は死ぬし、以前の監獄制度のように暗い牢獄の中で一生を過ごすわけではない。

そう、分かっている。充分過ぎる程の贅沢なのだ。

それでもなお、怖い。

一時間が経過した。

その男は、バーの中に入ってきた。

それは、黒いジャケットに身を包んだ体格の良い男だった。

髪の毛はシャギーに切られており、精悍な顔をしている。顔立ちはまだ、若さが残っている。

大体、年は三十代前後といった処だろうか。

男はニアスの前に立った。

「君が『モーザ・ドゥーグ』のニアスか？」

彼女は首を縦に振る。

男はコートのポケットから、マルボロとジッポを取り出して、煙草に火を付ける。そして、煙を吸い込んだ後、言った。

「俺の名はケルベロス。アサイラムの所長をしている。もっとも仮だけどな。ニアス、御同行願えるかな？」

「ええ……………、でも所長って……………あなた自らが来ていいの？」

「人手が足りていない。今は所長が不在だし、看守長も死んでしまった。だから、俺が直接、出向くしかなくなっている。中途半端な能力者だと、殺される危険が高くなるだけだからな」

そう言って、ニアスをバーの外へと連れ出す。

既に、ヘリコプターが用意されているみたいだった。

黒塗りのヘリ、闇に溶け込めるような。

ニアスはその中へと入れられた。

鴉のようなヘリは、夜の街を飛ぶ。

ヘリを運転しているのは、ケルベロスだ。他には誰もいない。

ニアスは、俯いたまま、夜の街を見ている。

イルミネーションのような明かりがとても綺麗だ。

こういった景色も、今日で見納め。

「単刀直入に言うのだな」

体格の良い男は言う。

「今、アサイラムに向かっていない。ニアス、君に頼みがあってな。君が出頭する際に、自身の能力を明かしてくれただろう？ それに興味があってな。これは役に立つんじゃないかと」

彼女は、面食らったような顔をする。

言っている意味をつかみかねていた。

ケルベロスは一気に概要を話す。

「今、俺達が必要なのは精鋭部隊だ。知っているかどうかは分からないが、ドーンという組織は組織というよりも、組合。そして、それぞれハンターが好き勝手に動いている。しかし、アサイラムはアサイラム所属のハンターを欲しているんだ。分かるかな？ あの有名な“青い悪魔”を倒す為に覚悟を決めて、うちの看守長と何名かの精鋭が挑んだのだが、みんな返り討ちにあって殺されてしまった。それに次いで、精鋭の一人が、“暴君”という有名な犯罪者でな。看守長がこいつを押しえ込んでいたんだが、看守長が死んでしまった途端、暴君が裏切った。そして、アサイラムを破壊しまくって、逃走した。暴君は、うちの精鋭の一人が倒してくれたんだが。今なお、その傷痕は残っている。だから、ニアス。俺は君を精鋭部隊に推奨したいんだ、一緒に悪を倒していこう」

最後の台詞は冗談めかしていた。

彼の言葉を、たっぷり十数分間掛けて、彼女は理解する。

「あ、あたしなんかで、いいの？」

「頼む。すぐに分かった。俺は君の“良心”を買っている。アサイラムの最高戦力であった看守長が死んでしまった今となっては。それに次ぐ実力者である暴君が裏切って、死んでしまった今となっては。本当に人手が足りない」

「つまり、あたしは……」

「アサイラムの囚人ではなく、俺達専属のハンターとして共に戦ってくれないか？」

頷いていた。断る理由なんて何処にも無い。

話はそれで終わった。

ニアスは眼を閉じる。

これからの人生。

思いも付かなかった道。

ニアスは罪の無い人間を何名も殺した。自身の能力を試す為だけに殺した事だってあった。今

ではそれを酷く後悔している。何で、そんな事をしてしまったのだろうか。

傲慢さからだったのか。あるいは自分の世界に対する憎しみからなのか。

殺人に対する贖罪の問題。

それを拭い去る事が、能力者には出来る。

ケルベロスが言っているのは、アサイラムがやろうとしている事は、つまりそういう事だ。

ヘリを運転しながら、ケルベロスはジャケットのポケットからメモ帳と携帯電話を取り出す。そして、メモ帳に記載している番号を携帯に打ち込んでいく。

十

キマイラは携帯を取る。

その声には聞き覚えが無い。

掛けてきた番号も登録されていないものだ。

「あれ、貴方って誰だったっけ？」

「アサイラムの者と言えればいいのかな？」

「へえ。何だっけ？ それ」

「.....そうか、君は興味が無いのか。ドーンのハンターの間でならかなり有名なのだが。まあいい、キマイラ・ヘッド。君の実力を俺は買っている。チームに加わらないか？ 俺達アサイラムは、定期的に賞金首リストで、普通のハンターが中々、狩れずにいる犯罪者を始末する役目を担っている。もっとも可能ならば生け捕りにして、アサイラムに収容する事を理想としているんだけどな。そのチームに加わらないか？」

羊の角を頭から生やした女は、タールの強い煙草を口にくわえながら、面倒臭そうに息を吐く。

「.....胡散臭いわねえ。私の番号は何処で知った？」

「フェンリルから」

「あら、あの子に教えたんだっけ。まあ、いいわ。そのチームってのに入って、私に何のメリットがあるっていうの？」

「効率的に賞金首を捕らえられる。それに、アサイラムからも恩賞が出るぞ」

「へえ。あんまり興味が無いわねえ。それに、私はあんまりこの界限の間で有名に為りたくないのよねえ。面倒臭いから」

「お前が隠れた実力者であるという事は、もう皆に知れ渡っているぞ？ お前の噂もそれなりに広がっている。強いんだろう？」

「まあ、そうかもしれないわねえ。そろそろ、切っていいかしら？」

「“蓮”を潰す。それだけ手伝ってくれないか？」

キマイラは、妙にその何か確信じみた声に疑問を抱きながら答える。

「蓮って何？ 殺す、始末するじゃなくて、潰すって事は何かの組織？」

携帯の向こう側で、苦笑する声が聞こえた。

「そうか、キマイラ。君は本当にこの界限の情報に興味が無いんだな。そういう態度は嫌いじゃない」

「だって、どうだっていいんだもの。必要なら、その時に調べるから」

「蓮というのは、カルト団体だ。そう呼んでいる。クラスタとも呼ばれているが、教祖であるロータスの名を指して、蓮、と皆は呼んでいる。あれは反社会組織だ。我々は、彼らの団体を潰し、可能ならばロータスの捕獲を決行する事に決めた」

「反社会組織ねえ。何が社会なのか分からないけれども、たとえば、ドーンやアサイラムは違うの？」

彼女は何気なく言う。

電話の向こう側の相手は、意表を付かれたかのようにだった。

「何が社会か、反社会か、か……」

何かしらの韜晦を勘ぐったらしい。彼女としては普通に思った事を言ったまでなのだが。

「確かにその通りだ。何が社会で反社会か分からない。でも、俺達は秩序ってものを、取り合えず作った。それを維持しなくては為らないと思っている。まあ、法の番人という奴なのか。この世界においては、国家ですら既に曖昧だ。しかし、話を戻すが、蓮という団体。彼らのせいで、死ぬ人間、不幸になる人間が増加し続けている、そろそろ踏み切らなければならない。蓮はロータスを含めて、能力者が何名もいる。奴らの戦力は未知だ。どうしても、此方にも戦力がある」

十

「お断りだ」

一応、友人と呼べる人間からの電話だった。

今日は買い物の為、ブティック街を歩いている。

「フェンリル。頼む、信頼出来る者も必要だ。俺が勧誘している相手の中には、キマイラ・ヘッドなんてのもいる。彼女は信用出来ない。しかし実力者なのは確かだ。だから、バランスを取って、お前も必要なんだ。お前は強い、それは自信を持っていい」

「興味が無いんだよ。オレと相棒は、“在り得ないもの”を探す旅をしているんだ。そうだな、たとえば、“メビウス・リング”や“自由に死を。”やら“ルルイエ”やら、オレが今まで出会った。この世界の外側からやってくる何者かにしか興味が無い。なので、悪いけれど、今度にしてくれないかな？」

「……蓮、あるいはクラスタと呼ばれている教団を知っているか？」

「知らないな。オレはこれからイノセント・ワールドの新作を見に行きたいんだ。それから、ベイビー・スター・シャインブライトや、アンジェリック・プリティーにも興味がある。面倒事は後にしてくれないかな？」

「今すぐ来てくれとは言っていないじゃないか。出来れば、明日、会いたいのだが」

「面倒だな。正直、君達アサイラムが狙う相手って、割に合わないんじゃないのか？ 大体がドーン全体を通して、持て余している勢力じゃないか。君の師に至っては、寿命が近いからって、“

青い悪魔”に挑んだ。正気の沙汰じゃない。それどころか、その後の君の師が残した指令は何だ？ “死の翼”と“アヌビス”の打倒、どちらも解決出来たか？ 結局、出来なかったし、有耶無耶になってしまっただろう。だから、今度もそんなものなんじゃないのか？」

フェンリルと呼ばれる青年が引き合いとして名前を出している者達は、どれも在り得ない神に近い存在や、この世界を丸ごと破壊しかねない程の強さを持った能力犯罪者達だった。

遠回しに、アサイラムのやっている事は、愚行だとも言っている。

「そうか。そうだよな、お前はいつだって気まぐれだ。何処にだって、好きなように飛んでいける。悪かった。他を探ささ」

「待てよ。オレが捻くれ者なのも知っているだろ？ やって欲しいと言われれば、やりたくないと言う。でも、お前はやはりいらないとわれれば、それは少し腹立たしい。話は聞く。蓮、とは何なんだ？ その教団は一体、何をしている？」

「この世界に革命を引き起こすと考えているらしい」

フェンリルは首を傾げた。

「教団という事は教祖がいるんだな？ ヤバイ、能力者なのか？」

「ああ、教祖であるロータスはAランクに位置している。能力が正体不明なのにも関わらず、その危険性、規模を重視して、Aランク認定だ。少なくとも、この教団は所謂、テロ組織と考えた方がいいかもしれない」

「未知数か……、少し、携帯を離していいかな？」

彼は、人のいない場所まで歩いていく。

すると、いつの間にか、そこには白と黒のファッションを纏った少女が佇んでいた。

まるで合わせ鏡のような雰囲気を持つ二人。

フェンリルは彼女に、ケルベロスの話振る。

彼女はその話を吟味しているみたいだった。

「私は強い敵と戦いたい。それから、“神の世界からやってくる存在”とも会ってみたい。どちらも、私自身の存在とは何なのかについての疑問に対する返答になる可能性があるから。でも、そうね。その蓮、教団というものは、どうなのかしらねえ？ 強いて言うならば、その教祖の話には少しだけ、興味があるわ」

「なるほど。なら、この話に乗るか？」

「貴方はどうなの？ 私はどうだっていい」

「……直感だが、危険な感じがする」

それを聞いて、少女は何処からともなく、タロット・カードを取り出して、切っていく。

そして、一枚のカードを取り出した。

「『魔術師』の逆位置か。一枚指しで大アルカナか。となると、良くも悪くも、関わってみるだけの価値はあるかもしれないわね」

「カードの意味は？」

「始まりとか創造性とか色々あるのだけれども、今回の印象としてはコミュニケーション。しかし、ひっくり返っているって事は、この魔術師を象徴しているものは、詐欺などのイメージが

出てくる。そうね、その教祖と出会った時は気を付けた方がいい」

「オレ達は誘いに乗るか？ それとも断るか？ それともオレだけが乗る方がいいか？」

「.....私は様子見して。面白そうだったら、介入するわ」

十

教団の人間同士、あるいは幹部同士、仲が良いかどうかは分からない。

カイリとクライ・フェイスはいつもつるんでいる。

しかし、余り反りが合わない相手もいる。

そいつは、第二階級の久遠を統治しているアーティという男だった。

カイリと泣き顔の男は、彼を裏で嘲っているが、それは口には出さない。

クラスタの中の、ビルとビルの部屋の中を割り貫いた場所で、そいつに出会った。

緑の衣に、青い帽子を被った茶髪の男。

そいつは、いつも何処か張り付けたような笑みを浮かべている。

にこやかだが、何処か裏があるかのような。

「あ、カイリさん。クライ・フェイスさん、今日もお揃いだね」

アーティは、何処か夢見るような顔をしていた。

彼の持つ気配は異質だ。

それは、彼自身がまるで気付いていない。

カイリは微妙な笑顔を返す。

クライ・フェイスは、同じように張り付けた笑みを返した。

少しだけ、何だか幸せそうな笑み。

彼がクラスタにやってきたのは、いつの頃だろうか。

気付いたら、教団の中にいた。

かつて、逃げ込んできた殺人者の襲撃にあって、教団の階級を作った、『久遠』を統治していた男が殺された。その後、しばらくの間、久遠の統治者は欠員していたが。何年かして、この男、アーティが久遠を統治する事になった。

何故、その役目を担う事に決めたのか、カイリは訊ねてみた事がある。

帰ってきた答えは。

.....愛をみんなに教えたいから。

.....人を愛する大切さ。人を好きになる大切さ。

そんな事を語るこの男の眼は、幸せに包まれている。自身の思想が決して揺ぎ無いものだと思っ

ている。

カイリはこの男が苦手だ。

もうどうしようもないくらいに、苦手だ。

彼はこの世界を何も見ていない。

彼が見ているのは、彼にとって都合の良い世界だ。

十

教団とは一体、何なのだろうか。

カイリは考えている。

たとえば、此処に来る者の多くは、社会から除け者にされた人間達だ。

社会を厭い、嫌った者達。

色々な地方からやってくる。色々な国から。

だから、様々な言語が混ざっている。

彼らは口々に社会に対する怨嗟の言葉を放つ。

中には、犯罪者だっている。精神病患者も多い。

それから、国家を潰そうとしたテロリストの残党だっている。

教団は彼らを快く向かい入れる。

行き場所を失った者達の場所。

アーティは夢見るような口調で言った。

「愛の為に生きようと思うんだ。人間、誰でも良い部分を持っている。みんなそれに気付いていないだけ、人間が生きる理由は、日々の成長にこそあるのさ。人を愛し、隣人と共に生き、労働や奉仕が日々の生活の糧になる。そうやって人間は日々、成長して幸福をつかみ取れる、僕はその事をみんなに教えたいね」

そういう彼は気付いていない。

カイリは彼がこんな話する度、自分自身の考えを楽しそうに述べる度に、いつも思うのだ。

お前は本当は、ロータスの代わりになりたいだけなんだろう？ と。

アーティの眼は嫉妬に溢れている。ロータスに対する嫉妬だ。あるいは、自分よりも優れている者に対する嫉妬だ。自分自身にすら、そのような感情を誤魔化して生きている。

アーティの言う愛とは何なのだろうか。

正直、カイリには分からない。

しかしアーティという男の周りには、彼を慕う人間が集まっているのも事実だ。

十

「着いた」

聳え立つビルが密集している。

ビルが昆虫の巣のように繋ぎ合わさっていた。

その周囲には何万名もの人間が住まう街が広がっており、いわば、クラスタと呼ばれる教団がある区域は、街そのものの一角として存在していた。

ケルベロスはニアスを宿に案内してくれた。

ドーン界隈のバーにて、ケルベロスに出会ってから、二日ほどが経過していた。

ヘリで一度、別の場所に着陸して、そこで一日宿を取った後、更に半日掛けて、この街へと飛んできた。

「他に二人ほどの応援を頼んでいる。いずれも手練だ。ニアス、これが君の最初の仕事となる。君は今から来る者達と俺の、サポート役に徹して欲しい」

「四名？ いつもそんな少人数で戦っているの？」

「ああ。マフィア組織、テロリスト団体、カルト教団などを潰す場合。大体、多くても五名くらいのチームで動いている。敵側には大量殺戮が得意な相手、洗脳が得意な相手だって存在する。それもあって、いざという時の為の少数精鋭なんだ。昨日も述べたように、俺達はずねに全滅の覚悟と共に戦っている」

彼は煙草を吹かしている。

穏やかだが、確かに鋭い覚悟の目付きで集落を睨んでいた。

「二人の応援はまだ来ていない。それまでに俺達は、可能な限り教団の情報を集めようと思っている。本来なら俺は最前線で敵に向かっていく立場だったんだが、今は肩書きもあって、なるべくそれは控えないといけない。ニアス、君もどちらかといえば正面切って戦える能力者じゃない。俺達がまずやるべき事は可能な限りの敵の情報収集だ」

「敵の情報は集まっていないの？ これから？」

ニアスは当然のように疑問を呈した。

ケルベロスは吸い終わった煙草を携帯灰皿の中へと入れる。

「……全滅だ。クラスタに事前に送り込んだハンターは、みな戻ってきていない。みんな殺されてしまったか。あるいは“洗脳”されて引き込まれてしまったか……」

ニアスは少しだけ、顔が引き攣る。

今回はヤバイ仕事なのだ。

下手を打てば、生き残れないかもしれないと彼は暗に言っている。

ニアスは奥歯を噛み締めた。

彼女は今は、自分の戦闘装束として黒いローブを羽織っている。魔術師のようなローブ。ローブには幾何学模様のルーン文字が刻み込まれており、裏地は濃い紫に塗られている。

自分自身を魔女のように見立てた装束。

自らが怪物であるかのような姿。イメージ。

彼女なりの覚悟表明。

ケルベロスは携帯が鳴っている事に気付き、それを手に取る。

「そうか、着いたか」

彼は携帯を取った。

一瞬。

何が起こったのか分からなかった。

ケルベロスの周りに、いきなり鳥の羽毛が現れる。

彼は空中に突如現れた羽毛の一枚を手に取る。

瞬間、彼の首の辺りにボールが命中する。

ボールはてんてん、と地面を跳ねていく。

そして。

二人から少し距離が離れた場所、鉄骨の組み立て作業をしている場所に、そいつは姿を現した

金色と銀色の混ざった長い髪。

レースの白を黒い布地で覆ったドレスのような服。いわゆる、ゴシック・ロリィタの装束。薔薇の形を象った飾りを幾つも付けたヘッド・ドレス。黒いネック・コルセット。編み上げたヒールの高いブーツ。

そして、雪原のように白い、整った美しい顔。

そいつは鉄骨に足を組んで、二人を見ていた。

「なあ、フェンリル。悪戯が過ぎるぞ……」

「今の攻撃が敵の襲撃なら、お前、拙かったんじゃないのか？ 隙だらけだったから、試してしまっただけじゃないか」

そう言って、フェンリルと呼ばれた者は、鉄骨から飛び降りる。

十数メートル下の地面に着地しても、衝撃音は無く、悠然とそいつは地面に立っていた。

ニアスはそいつを知っている。

「あ、あなたは……」

「ああ、珍しい処で会うな」

と、“彼”はそっけなく言った。

ケルベロスとフェンリルの二人の能力者は対峙する。

「久しぶり」

フェンリルは淡々と言った。

「会えて嬉しい」

ふん、とフェンリルは鼻を鳴らして、長身で体格の良い男を眺める。

「以前よりも鋭さが無くなったじゃないか。今ならどうだろう？ オレとまた勝負してみないか？ 倒せる自信があるんだが」

「工作中だぞ？ トレーニングは今度にしてくれ。鋭さが無くなったのは、前線での戦いから引かざるを得なくなったからだ。以前のように、いつでも死んでもいい、という覚悟は無くなった。無くすしかなかった」

「そうか」

彼はあっさり引き下がり、クラスタの方を眺めた。

「あれか」

「ああ」

フェンリルは顎を摩る。

「特に見張りはいないようだけれど？ もう突入しないのか？」

「作戦を練っている。先遣隊は皆、全滅している」

とケルベロスは携帯電話を取り出した。

「もう一人が来る筈なんだけどな」

「……もう来ている。ずっとオレ達の様子を伺っていたらしい」

そう言われて。

いつの間にか、そいつはそこに立っていた。

一体、いつからいたのだろうか。

両肩に、毛皮の上に鳥の羽が添えてある、黄土色のローブで纏っている。背中からは、何枚もの刃物を重ねた鎌のようなものが、まるで鳥の羽のように生えている。

首からはペンタグラムやエジプト十字架、鳥の爪などを模したペンダントが吊られている。モスグリーンの少し混ざった金髪。

そして何よりも異様なのは、とても作り物とは思えない頭から生えた二つの羊の角。

そいつは、不気味な空気を放ちながら、そこに佇んでいた。

「キマイラ、来ていたのか」

「ええ」

その女は、感情の灯らない声音で頷いた。

「ごめんなさいね。貴方達を少し、観察したかったから」

「……まあいい。四人揃ったんだ、戦略を練るぞ」

ケルベロスと言う。

「カフェで」

フェンリルが付け加えた。

十

クラスタがよく見える場所だった。

四人の姿は異様に目立つ。

ケルベロスとニアスの二人はともかく、フェンリルとキマイラ。

彼らはまるで自分達の存在を隠避するという発想が無いみたいだった。

実際、店員や他の店の客も、二人の姿にちらほらと目線を送っている。

更に、キマイラに至っては、ミートボールと麺の浮かんだ中華料理のような味付けをしてあるものに、出されたパフェのような菓子を突っ込んで、それをカフェオレのようなドリンクで租借して食べている。

下品だな、とニアスは思う。

しかし、キマイラはまるでそんな彼女の感慨を意に介していない。

フェンリルは出されたダーズリンの紅茶を口にして、拙い、と一言言うと、それっきり不機嫌そうに黙り込んでいた。

ケルベロスは相変わらず、煙草に火を付けている。

「クラスタの詳細なんだが。大体、あのビル群に住んでいる人間の数は三千人弱。正確な数は分からない。あの中では教団が存在しており、その中枢として数名の幹部がいる。そいつらは教祖であるロータスを中心に動いている。俺達の目的はロータスの捕獲、もしくは殺害。教団を維持している幹部全員の捕獲だ」

「ロータスだけは殺害してもいいのか？」

フェンリルが口を開いた。

「ああ。駄目だろうな彼女は。アサイラムの信条としては捕獲し、収容が理想なんだが。彼女は無理だろう。捕獲のみで終わる事が出来ればそれに越した事は無いが。……やはり、始末した方が無難だと考えている……。アサイラムとしてはあまり良い決断ではないが」

食べ物を租借する音が止まる。

「他の警察組織もそうなんだけど。たとえば、幹部の誰かが抵抗して、私達や、他の罪も無き市民の命に危険が及んだ場合。不可抗力として殺害、という手段を取っても。それは仕方の無い事よね？ 勿論、標的である幹部以外の教団のメンバーにしても」

キマイラは口を挟む。

抵抗するならば、別に殺してしまっても一向に構わないだろう、と言っている。

「キマイラ……。君はアサイラムの精鋭メンバーの行動、その構造をよく理解している。……そうだ。可能ならば捕獲し収容。無理と判断したら、我々一人一人の判断で始末してしまっても構わない。俺は可能ならば捕獲したいんだが。もし、君達が標的と相対した時に、これは殺すしかない、と判断したのなら。そうすべきだ」

「そう。殺すか殺されるかになると思うわ。捕獲に成功しても完全に無力化してしまったわけじゃない。そう、仕方無い事よねえ」

キマイラは麺を口に入れる。

そう。結局の処、どちらにせよ同じ事なのだ。

収容可能そうだったら生かす。

無理そうだったら殺す。

言葉に多少のニュアンスの違いはあったとしても、それはまるで変わらない。

ニアスは少し気分が悪そうに、そのやり取りを見ていた。

「さて、情報収集はどうでしょうか」

「建造物の内部だったら、オレが調べる」

フェンリルが言った。

ケルベロスは彼の“能力”を知っているのですぐに頷く。

「クラスタの住民の一人を捕まえて、質問してもいいかしら？」

キマイラは言う。

「質問か。なあ、キマイラ。君の言う質問って何だ？」

すると、羊の角を生やした女は、服に手を入れる。

そして、奇妙なものを取り出した。

それは数本の針だった。それからライター。何故かヘアブラシと水鉄砲。

「これだけあれば。大抵の人はお友達になってくれるわ。何だって話してくれる。初めて会った相手とだって、すぐに親しくなれる。聞きたい事ならちゃんと教えてくれるわ。みんな親切にしてくれる、優しくしてくれる。色々打ち明けてくれる。私と彼らの間で、隠し事なんて無くなるわ。秘密だって共有出来る。彼らに質問してもいいかしら？」

ケルベロスは灰皿に吸い掛けの煙草を押し付ける。

「キマイラ……。君の言っている質問の件だが。……なるべく俺達は穩便に事を運びたい。

だからなんだ。……拷問して情報を聞き出そうとするのは、今回は止めてくれないかな？」

「あら。私はお友達になるだけよ？」

と、彼女はにやにやと笑う。

十

カイリはクラスタにある自分の部屋へと戻る。

部屋といってもマンションの一室のように、それなりに広い。

部屋の中はゴミのように古雑誌が散乱しており、台所は多少汚れ、数日前に作ったカレーが鍋に入ったままだ。

どうにも部屋を片付けるのは不得意だ。

赤茶けた戸棚の中から菓子類を取り出しては口に放り込む。

もう少し贅沢をしたい処だが、布施がまだまだ集まっていない。カイリが統治する『滅界』に与えられる布施の何割かが、そのまま彼の生活費になる。

もう少し、団員達を労働に駆り立てるべきなのだが、どうにもそれも面倒臭い。

結局の処、このクラスタは何割かの人間が労働によって賃金を得ており、何割かの人間が自給自足を行っており、何割かの人間がほぼ働かずに毎日を過ごしている。

その他にも、アーティストを自称して、絵画や漫画を描き、楽器を奏でて賃金を稼いでいる者達も存在する。彼らもまた、教団に布施として得た賃金を差し出している。

大体、大部分が社会不適合者ばかりで集まっているので、教団全体の資金はカツカツだったりする。それでも何とかやっていけるのは、街に行って市民社会に紛れ込めている人間が何割か存在出来ているからだ。

教団には固有財産というものの概念が少ない。せいぜいそれぞれに割り当てられた部屋の中にある幾つかの本や服、その他の娯楽道具などで、金銭的なものを多く所有する事は許されていなかった。

アーティなどは労働する事は重要だと言う。

労働によって人間は成長するのだと。

しかしまあ、過酷な労働環境にいたせいで心を病んで此処に移民してきた人間も沢山いる。ある種の精神病棟施設としても教団は機能している。

アーティは精神病患者を嫌っているのが分かる。彼らは愛される事に自覚が無い人間達なのだと言う。拳句の果てには精神病など存在しないと、彼は口にしている。

カイリはそんな彼が疎ましい。

しかし、自分の生活も自堕落なものだ。

自分なんかが、外の世界で、教団の外部の世界でやっていけるとはとても思えない。カイリは社会や家族から疎外されていって、此処に行き着いてしまった典型的なパターンの一人だ。

教団の幹部という役職にこそ付いているが、実態はこれといった仕事をしていない。たまに外の世界に出てきて、その情報を拾い集めて、教祖や住民全員に配る役割を担っているくらいだ。

彼は戸棚を開いて、そういえば、先日、“聖なる海溝”にて採取したものをロータスに渡していない事に気付いた。本当はすぐに渡して見せるつもりだったのだが、彼女の雰囲気飲まれてそれを忘れてしまった。

彼は瓶を持ってロータスの下へと向かった。

彼女は相変わらず、何も無い虚空を眺めては、酷く悲しそうな表情を浮かべていた。

彼女は部屋に入ってきたカイリを一瞥すると、すぐに瞑想へと戻る。

カイリは声を掛けるべきかどうか迷った。

しかし、話し掛ける決心が付いて、先日の件の事を口にする。

「先日は、“聖なる海溝”という場所の調査に向かいました。僕と泣き顔の判断で。僕達は、ロータスさまのおっしゃる通り、世界のあらゆる場所を見て回っています。聖なる地と呼ばれている場所や、紛争が行われている地域。戦争のある場所。思うに、僕はやはりこの世界は病んでいるのだと思います。あなたのおっしゃられる通り。先日、行った聖なる海溝という名の街ですが。そこは住民全員に、ドラッグが蔓延っており、どうやらテロリストの襲撃によってその流通ルートが途絶えて、街はパニック状態でした。自殺者が増加し続けている。それからあそこは、売春の斡旋場も多かった」

一気に喋る。

ロータスは眼を開く。

その双眸は、深い、深い憎悪を称えていた。

それなのに、何処までも優しく見える。

「そうなんだ。カイリ、偉いわ。危険な場所だったのでしょうか？ いつもご苦労様。ねえ、私達は世界を変革しなければならない。そうは思わない？」

彼は少し逡巡する。

世界の変革。

それを事も無げに彼女は言う。

とても、悲しそうな顔をしていた。

「ですよ。……そうですよ」

彼は頷く。

ロータスは大欠伸をする。

「あーあ。三時間もずっと瞑想して、沢山の思念を視ていたら、ちょっと疲れちゃったわ。うん、お腹が空いた。ねえ、カイリ。一緒にご飯を食べない？」

「いいですよ。そうだ、僕の部屋にカレーの残り物があります。味のしないヨーグルトを沢山漬けて食べるんですけども」

「うーん、私は焼肉が食べたいかなあ」

と、彼女は無邪気に言う。

クラスタの中には幾つもの食堂が存在する。

そこに二人は入った。

此処では、外の世界にある金銭の代わりとして、チケットのようなものが配られている。

二人はチケットを食堂にいる調理師に渡す。

しばらくして、専用のタレがふんだんに塗りたくられた豚ロースの乗った皿が運ばれてくる。肉の上にはレタスに似た野菜が盛られている。皿の隣には、ドングリに入ったトウモロコシの粉末が大量に入ったご飯と、お茶が置かれる。

二人はそれをフォークとスプーンで口に入れる。

ばく、ばく、とロータスは熱心に肉やご飯を口に放り込んでいく。

カイリは野菜を肉に巻いて、少しずつそれを飲み込むように食べていく。

少し、嘔吐感が込み上げる。

「あら？ カイリ、食べるの遅かったっけ？」

「いや。……僕ってほら、摂食障害で。……味も分からない時も多くて。カレーをよく食べるようにしているんですけど。栄養価のバランスが良いから。それにほら、カレーなら何とか口に入れる事が出来る」

「そう。でも此処の料理はとても美味しいから。勿体無いわね」

「ですよね。……良かったら、僕の半分食べます？」

「いやよ。人が口にしたものを食べるって、何かはしたくないじゃない」

「そうですか」

そう言いながら、どうにかご飯をスプーンに乗せて、口に含む。

がりがり、と触感は分かるのだが、やはり味を感じない。

「カイリ、気分が優れないようだけど？」

「最近、少し鬱気味で。周期的に起こってるんです」

「そう。あなたは世界からの苦悩をダイレクトに受け取っていて、それを病気という形で身体に現れているの shouldn't でしょうね」

と彼女は薄い野菜スープも追加で注文する。

ロータスは食事をするのは好きだ。

特に飽食という概念に対する否定的な考えはない。

赤貧や断食を信者達に強要したりする事も無い。

それどころか、彼女には快樂主義を推奨する部分も感じていた。

「でも、ちゃんにご飯は食べた方がいいわねえ。生きる苦悩の為に身体がボロボロになるのは頂けないと思うわ」

あらかたロータスは食事を終える。

カイリは懐から瓶を取り出して、彼女の前に差し出す。

「ロータスさま、これ何だと思います？」

彼女はその瓶に触れる。

……彼女はその思念を読み取り始めていた。

「あら、可愛い子じゃない。でも、可哀相。何にも報われず、ただただ利用される為だけに生まれてきた可哀相な女の子。痛々しいわ」

まるで慈しむように、瓶を撫でる。

カイリとロータス。

二人とも、それぞれの能力の一端として、思念を読み取る事が出来る。

「ねえ、カイリ。この子、元通りにする事って出来るかしら？」

「……いや。……僕の『ファイヤー・ブリンガー』では。多分、無理です。神様は、人に、死んだ人間を甦らせる力を与えてくれはしなかった。僕の場合もそうだ。決して、死んだ人間は甦らない。僕が知っている世界の確かな秘密はそれだけです……」

「うん、そっか。とてもとても悲しい事実よね。そうやって、みんな名前も知られずに死んでいく。でも、私達は少しでも、それを何とかしたい、そうでしょう？」

「ですけど、……」

「でも、この子は元通りに出来ると思うわ」

確信を帯びたように言う。

「そうですか？」

「そう、人間じゃないみたい。人間になるべきだった人間。可愛い子だから、出来れば、また形にしてあげたいなあ。うん、そうしよう？」

そう言って、ロータスは紫紺の灰が詰まった瓶を抱き締めた。

「ねえ、カイリ。やってみない？」

「そうですね。……明日でいいですか？ 今は少し、精神が安定していない。特に、それを元の形にするのには、不安定な今じゃ少し難しいです。昨日から、抑鬱が酷くて。……そうですね、明日の昼くらいまでなら、調子が戻っているとは思いますが……」

「わかったわ。お願いね」

食堂の中には、彼女の姿に見惚れている信者達が、沢山、集まっていた。

カイリなどは、親しげに彼女と会話をする。

他の信者から見れば、不可思議な光景らしい。

赤いドレスの女は立ち上がった。

「じゃあ、カイリ。私はまた自分の部屋に戻るから。また、明日、お話ししましょう」

そう言って、柔和な微笑みを浮かべる。

まるで、無垢そのものだ。

カイリは思った。

彼女に、いつまでも付き従おう、と……。

教団の人間同士、あるいは幹部同士、仲が良いかどうかは分からない。

カイリとクライ・フェイスはいつもつるんでいる。

しかし、余り反りが合わない相手もいる。

そいつは、第二階級の久遠を統治しているアーティという男だった。

カイリと泣き顔の男は、彼を裏で嘲っているが、それは口には出さない。

クラスタの中の、ビルとビルの部屋の中を割り貫いた場所で、そいつに出会った。

緑の衣に、青い帽子を被った茶髪の男。

そいつは、いつも何処か張り付けたような笑みを浮かべている。

にこやかだが、何処か裏があるかのような。

「あ、カイリさん。クライ・フェイスさん、今日もお揃いだね」

アーティは、何処か夢見るような顔をしていた。

彼の持つ気配は異質だ。

それは、彼自身がまるで気付いていない。

カイリは微妙な笑顔を返す。

クライ・フェイスは、同じように張り付けた笑みを返した。

少しだけ、何だか幸せそうな笑み。

彼がクラスタにやってきたのは、いつの頃だろうか。

気付いたら、教団の中にいた。

かつて、逃げ込んできた殺人者の襲撃にあって、教団の階級を作った、『久遠』を統治していた男が殺された。その後、しばらくの間、久遠の統治者は欠員していたが。何年かして、この男、アーティが久遠を統治する事になった。

何故、その役目を担う事に決めたのか、カイリは訊ねてみた事がある。

帰ってきた答えは。

.....愛をみんなに教えたいから。

.....人を愛する大切さ。人を好きになる大切さ。

そんな事を語るこの男の眼は、幸せに包まれている。自身の思想が決して揺ぎ無いものだと思っている。

カイリはこの男が苦手だ。

もうどうしようもないくらいに、苦手だ。

彼はこの世界を何も見ていない。

彼が見ているのは、彼にとって都合の良い世界だ。

十

教団とは一体、何なのだろうか。

カイリは考えている。

たとえば、此処に来る者の多くは、社会から除け者にされた人間達だ。

社会を厭い、嫌った者達。

色々な地方からやってくる。色々な国から。

だから、様々な言語が混ざっている。

彼らは口々に社会に対する怨嗟の言葉を放つ。

中には、犯罪者だっている。精神病患者も多い。

それから、国家を潰そうとしたテロリストの残党だっている。

教団は彼らを快く向かい入れる。

行き場所を失った者達の場所。

アーティは夢見るような口調で言った。

「愛の為に生きようと思うんだ。人間、誰でも良い部分を持っている。みんなそれに気付いていないだけ、人間が生きる理由は、日々の成長にこそあるのさ。人を愛し、隣人と共に生き、労働や奉仕が日々の生活の糧になる。そうやって人間は日々、成長して幸福をつかみ取れる、僕はその事をみんなに教えたいね」

そういう彼は気付いていない。

カイリは彼がこんな話する度、自分自身の考えを楽しそうに述べる度に、いつも思うのだ。

お前は本当は、ロータスの代わりになりたいだけなんだろう？ と。

アーティの眼は嫉妬に溢れている。ロータスに対する嫉妬だ。あるいは、自分よりも優れている者に対する嫉妬だ。自分自身にすら、そのような感情を誤魔化して生きている。

アーティの言う愛とは何なのだろうか。

正直、カイリには分からない。

しかしアーティという男の周りには、彼を慕う人間が集まっているのも事実だ。

十

「着いた」

聳え立つビルが密集している。

ビルが昆虫の巣のように繋ぎ合わさっていた。

その周囲には何万名もの人間が住まう街が広がっており、いわば、クラスタと呼ばれる教団がある区域は、街そのものの一角として存在していた。

ケルベロスはニアスを宿に案内してくれた。

ドーン界隈のバーにて、ケルベロスに出会ってから、二日ほどが経過していた。

ヘリで一度、別の場所に着陸して、そこで一日宿を取った後、更に半日掛けて、この街へと飛んできた。

「他に二人ほどの応援を頼んでいる。いずれも手練だ。ニアス、これが君の最初の仕事となる。君は今から来る者達と俺の、サポート役に徹して欲しい」

「四名？ いつもそんな少人数で戦っているの？」

「ああ。マフィア組織、テロリスト団体、カルト教団などを潰す場合。大体、多くても五名くらいのチームで動いている。敵側には大量殺戮が得意な相手、洗脳が得意な相手だって存在する。それもあって、いざという時の為の少数精鋭なんだ。昨日も述べたように、俺達はずねに全滅の覚悟と共に戦っている」

彼は煙草を吹かしている。

穏やかだが、確かに鋭い覚悟の目付きで集落を睨んでいた。

「二人の応援はまだ来ていない。それまでに俺達は、可能な限り教団の情報を集めようと思っている。本来なら俺は最前線で敵に向かっていく立場だったんだが、今は肩書きもあって、なるべくそれは控えないといけない。ニアス、君もどちらかといえば正面切って戦える能力者じゃない。俺達がまずやるべき事は可能な限りの敵の情報収集だ」

「敵の情報は集まっていないの？ これから？」

ニアスは当然のように疑問を呈した。

ケルベロスは吸い終わった煙草を携帯灰皿の中へと入れる。

「……全滅だ。クラスタに事前に送り込んだハンターは、みな戻ってきていない。みんな殺されてしまったか。あるいは“洗脳”されて引き込まれてしまったか……」

ニアスは少しだけ、顔が引き攣る。

今回はヤバイ仕事なのだ。

下手を打てば、生き残れないかもしれないと彼は暗に言っている。

ニアスは奥歯を噛み締めた。

彼女は今は、自分の戦闘装束として黒いローブを羽織っている。魔術師のようなローブ。ローブには幾何学模様のルーン文字が刻み込まれており、裏地は濃い紫に塗られている。

自分自身を魔女のように見立てた装束。

自らが怪物であるかのような姿。イメージ。

彼女なりの覚悟表明。

ケルベロスは携帯が鳴っている事に気付き、それを手に取る。

「そうか、着いたか」

彼は携帯を取った。

一瞬。

何が起こったのか分からなかった。

ケルベロスの周りに、いきなり鳥の羽毛が現れる。

彼は空中に突如現れた羽毛の一枚を手に取る。

瞬間、彼の首の辺りにボールが命中する。

ボールはてんてん、と地面を跳ねていく。

そして。

二人から少し距離が離れた場所、鉄骨の組み立て作業をしている場所に、そいつは姿を現した

金色と銀色の混ざった長い髪。

レースの白を黒い布地で覆ったドレスのような服。いわゆる、ゴシック・ロリィタの装束。薔薇の形を象った飾りを幾つも付けたヘッド・ドレス。黒いネック・コルセット。編み上げたヒールの高いブーツ。

そして、雪原のように白い、整った美しい顔。

そいつは鉄骨に足を組んで、二人を見ていた。

「なあ、フェンリル。悪戯が過ぎるぞ……」

「今の攻撃が敵の襲撃なら、お前、拙かったんじゃないのか？ 隙だらけだったから、試してしまったじゃないか」

そう言って、フェンリルと呼ばれた者は、鉄骨から飛び降りる。

十数メートル下の地面に着地しても、衝撃音は無く、悠然とそいつは地面に立っていた。

ニアスはそいつを知っている。

「あ、あなたは……」

「ああ、珍しい処で会うな」

と、“彼”はそっけなく言った。

ケルベロスとフェンリルの二人の能力者は対峙する。

「久しぶり」

フェンリルは淡々と言った。

「会えて嬉しい」

ふん、とフェンリルは鼻を鳴らして、長身で体格の良い男を眺める。

「以前よりも鋭さが無くなったじゃないか。今ならどうだろう？ オレとまた勝負してみないか？ 倒せる自信があるんだが」

「工作中だぞ？ トレーニングは今度にしてくれ。鋭さが無くなったのは、前線での戦いから引かざるを得なくなったからだ。以前のように、いつでも死んでもいい、という覚悟は無くなった。無くすしかなかった」

「そうか」

彼はあっさり引き下がり、クラスタの方を眺めた。

「あれか」

「ああ」

フェンリルは顎を摩る。

「特に見張りはいないようだけれど？ もう突入しないのか？」

「作戦を練っている。先遣隊は皆、全滅している」

とケルベロスは携帯電話を取り出した。

「もう一人が来る筈なんだけどな」

「……もう来ている。ずっとオレ達の様子を伺っていたらしい」

そう言われて。

いつの間にか、そいつはそこに立っていた。

一体、いつからいたのだろうか。

両肩に、毛皮の上に鳥の羽が添えてある、黄土色のローブで纏っている。背中からは、何枚もの刃物を重ねた鎌のようなものが、まるで鳥の羽のように生えている。

首からはペンタグラムやエジプト十字架、鳥の爪などを模したペンダントが吊られている。モスグリーンの少し混ざった金髪。

そして何よりも異様なのは、とても作り物とは思えない頭から生えた二つの羊の角。

そいつは、不気味な空気を放ちながら、そこに佇んでいた。

「キマイラ、来ていたのか」

「ええ」

その女は、感情の灯らない声音で頷いた。

「ごめんなさいね。貴方達を少し、観察したかったから」

「……まあいい。四人揃ったんだ、戦略を練るぞ」

ケルベロスと言う。

「カフェで」

フェンリルが付け加えた。

十

クラスタがよく見える場所だった。

四人の姿は異様に目立つ。

ケルベロスとニアスの二人はともかく、フェンリルとキマイラ。

彼らはまるで自分達の存在を隠避するという発想が無いみたいだった。

実際、店員や他の店の客も、二人の姿にちらほらと目線を送っている。

更に、キマイラに至っては、ミートボールと麺の浮かんだ中華料理のような味付けをしてあるものに、出されたパフェのような菓子を突っ込んで、それをカフェオレのようなドリンクで租借して食べている。

下品だな、とニアスは思う。

しかし、キマイラはまるでそんな彼女の感慨を意に介していない。

フェンリルは出されたダーズリンの紅茶を口にして、拙い、と言言うと、それっきり不機嫌そうに黙り込んでいた。

ケルベロスは相変わらず、煙草に火を付けている。

「クラスタの詳細なんだが。大体、あのビル群に住んでいる人間の数は三千人弱。正確な数は分からない。あの中では教団が存在しており、その中枢として数名の幹部がいる。そいつらは教祖であるロータスを中心に動いている。俺達の目的はロータスの捕獲、もしくは殺害。教団を維持している幹部全員の捕獲だ」

「ロータスだけは殺害してもいいのか？」

フェンリルが口を開いた。

「ああ。駄目だろうな彼女は。アサイラムの信条としては捕獲し、収容が理想なんだが。彼女は無理だろう。捕獲のみで終わる事が出来ればそれに越した事は無いが。……やはり、始末した方が無難だと考えている……。アサイラムとしてはあまり良い決断ではないが」

食べ物を租借する音が止まる。

「他の警察組織もそうなんだけど。たとえば、幹部の誰かが抵抗して、私達や、他の罪も無き市民の命に危険が及んだ場合。不可抗力として殺害、という手段を取っても。それは仕方の無い事よね？ 勿論、標的である幹部以外の教団のメンバーにしても」

キマイラは口を挟む。

抵抗するならば、別に殺してしまっても一向に構わないだろう、と言っている。

「キマイラ……。君はアサイラムの精鋭メンバーの行動、その構造をよく理解している。……そうだ。可能ならば捕獲し収容。無理と判断したら、我々一人一人の判断で始末してしまっても構わない。俺は可能ならば捕獲したいんだが。もし、君達が標的と相対した時に、これは殺すしかない、と判断したのなら。そうすべきだ」

「そう。殺すか殺されるかになると思うわ。捕獲に成功しても完全に無力化してしまったわけじゃない。そう、仕方無い事よねえ」

キマイラは麺を口に入れる。

そう。結局の処、どちらにせよ同じ事なのだ。

収容可能そうだったら生かす。

無理そうだったら殺す。

言葉に多少のニュアンスの違いはあったとしても、それはまるで変わらない。

ニアスは少し気分が悪そうに、そのやり取りを見ていた。

「さて、情報収集はどうでしょうか」

「建造物の内部だったら、オレが調べる」

フェンリルが言った。

ケルベロスは彼の“能力”を知っているのですぐに頷く。

「クラスタの住民の一人を捕まえて、質問してもいいかしら？」

キマイラは言う。

「質問か。なあ、キマイラ。君の言う質問って何だ？」

すると、羊の角を生やした女は、服に手を入れる。

そして、奇妙なものを取り出した。

それは数本の針だった。それからライター。何故かヘアブラシと水鉄砲。

「これだけあれば。大抵の人はお友達になってくれるわ。何だって話してくれる。初めて会った相手とだって、すぐに親しくなれる。聞きたい事ならちゃんと教えてくれるわ。みんな親切にしてくれる、優しくしてくれる。色々打ち明けてくれる。私と彼らの間で、隠し事なんて無くなるわ。秘密だって共有出来る。彼らに質問してもいいかしら？」

ケルベロスは灰皿に吸い掛けの煙草を押し付ける。

「キマイラ……。君の言っている質問の件だが。……なるべく俺達は穩便に事を運びたい。

だからなんだ。……拷問して情報を聞き出そうとするのは、今回は止めてくれないかな？」

「あら。私はお友達になるだけよ？」

と、彼女はにやにやと笑う。

十

カイリはクラスタにある自分の部屋へと戻る。

部屋といってもマンションの一室のように、それなりに広い。

部屋の中はゴミのように古雑誌が散乱しており、台所は多少汚れ、数日前に作ったカレーが鍋に入ったままだ。

どうにも部屋を片付けるのは不得意だ。

赤茶けた戸棚の中から菓子類を取り出しては口に放り込む。

もう少し贅沢をしたい処だが、布施がまだまだ集まっていない。カイリが統治する『滅界』に与えられる布施の何割かが、そのまま彼の生活費になる。

もう少し、団員達を労働に駆り立てるべきなのだが、どうにもそれも面倒臭い。

結局の処、このクラスタは何割かの人間が労働によって賃金を得ており、何割かの人間が自給自足を行っており、何割かの人間がほぼ働かずに毎日を過ごしている。

その他にも、アーティストを自称して、絵画や漫画を描き、楽器を奏でて賃金を稼いでいる者達も存在する。彼らもまた、教団に布施として得た賃金を差し出している。

大体、大部分が社会不適合者ばかりで集まっているので、教団全体の資金はカツカツだったりする。それでも何とかやっていけるのは、街に行って市民社会に紛れ込めている人間が何割か存在出来ているからだ。

教団には固有財産というものの概念が少ない。せいぜいそれぞれに割り当てられた部屋の中にある幾つかの本や服、その他の娯楽道具などで、金銭的なものを多く所有する事は許されていなかった。

アーティなどは労働する事は重要だと言う。

労働によって人間は成長するのだと。

しかしまあ、過酷な労働環境にいたせいで心を病んで此処に移民してきた人間も沢山いる。ある種の精神病棟施設としても教団は機能している。

アーティは精神病患者を嫌っているのが分かる。彼らは愛される事に自覚が無い人間達なのだと言う。拳句の果てには精神病など存在しないと、彼は口にしている。

カイリはそんな彼が疎ましい。

しかし、自分の生活も自堕落なものだ。

自分なんかが、外の世界で、教団の外部の世界でやっていけるとはとても思えない。カイリは社会や家族から疎外されていって、此処に行き着いてしまった典型的なパターンの一人だ。

教団の幹部という役職にこそ付いているが、実態はこれといった仕事をしていない。たまに外の世界に出てきて、その情報を拾い集めて、教祖や住民全員に配る役割を担っているくらいだ。

彼は戸棚を開いて、そういえば、先日、“聖なる海溝”にて採取したものをロータスに渡していない事に気付いた。本当はすぐに渡して見せるつもりだったのだが、彼女の雰囲気飲まれてそれを忘れてしまった。

彼は瓶を持ってロータスの下へと向かった。

彼女は相変わらず、何も無い虚空を眺めては、酷く悲しそうな表情を浮かべていた。

彼女は部屋に入ってきたカイリを一瞥すると、すぐに瞑想へと戻る。

カイリは声を掛けるべきかどうか迷った。

しかし、話し掛ける決心が付いて、先日の件の事を口にする。

「先日は、“聖なる海溝”という場所の調査に向かいました。僕と泣き顔の判断で。僕達は、ロータスさまのおっしゃる通り、世界のあらゆる場所を見て回っています。聖なる地と呼ばれている場所や、紛争が行われている地域。戦争のある場所。思うに、僕はやはりこの世界は病んでいるのだと思います。あなたのおっしゃられる通り。先日、行った聖なる海溝という名の街ですが。そこは住民全員に、ドラッグが蔓延っており、どうやらテロリストの襲撃によってその流通ルートが途絶えて、街はパニック状態でした。自殺者が増加し続けている。それからあそこは、売春の斡旋場も多かった」

一気に喋る。

ロータスは眼を開く。

その双眸は、深い、深い憎悪を称えていた。

それなのに、何処までも優しく見える。

「そうなんだ。カイリ、偉いわ。危険な場所だったのでしょうか？ いつもご苦労様。ねえ、私達は世界を変革しなければならない。そうは思わない？」

彼は少し逡巡する。

世界の変革。

それを事も無げに彼女は言う。

とても、悲しそうな顔をしていた。

「ですよ。……そうですよ」

彼は頷く。

ロータスは大欠伸をする。

「あーあ。三時間もずっと瞑想して、沢山の思念を視ていたら、ちょっと疲れちゃったわ。うん、お腹が空いた。ねえ、カイリ。一緒にご飯を食べない？」

「いいですよ。そうだ、僕の部屋にカレーの残り物があります。味のしないヨーグルトを沢山漬けて食べるんですけども」

「うーん、私は焼肉が食べたいかなあ」

と、彼女は無邪気に言う。

クラスタの中には幾つもの食堂が存在する。

そこに二人は入った。

此処では、外の世界にある金銭の代わりとして、チケットのようなものが配られている。

二人はチケットを食堂にいる調理師に渡す。

しばらくして、専用のタレがふんだんに塗りたくられた豚ロースの乗った皿が運ばれてくる。肉の上にはレタスに似た野菜が盛られている。皿の隣には、ドングリに入ったトウモロコシの粉末が大量に入ったご飯と、お茶が置かれる。

二人はそれをフォークとスプーンで口に入れる。

ばく、ばく、とロータスは熱心に肉やご飯を口に放り込んでいく。

カイリは野菜を肉に巻いて、少しずつそれを飲み込むように食べていく。

少し、嘔吐感が込み上げる。

「あら？ カイリ、食べるの遅かったっけ？」

「いや。……僕ってほら、摂食障害で。……味も分からない時も多くて。カレーをよく食べるようにしているんですけど。栄養価のバランスが良いから。それにほら、カレーなら何とか口に入れる事が出来る」

「そう。でも此処の料理はとても美味しいから。勿体無いわね」

「ですよね。……良かったら、僕の半分食べます？」

「いやよ。人が口にしたものを食べるって、何かはしたくないじゃない」

「そうですか」

そう言いながら、どうにかご飯をスプーンに乗せて、口に含む。

がりがり、と触感は分かるのだが、やはり味を感じない。

「カイリ、気分が優れないようだけど？」

「最近、少し鬱気味で。周期的に起こってるんです」

「そう。あなたは世界からの苦悩をダイレクトに受け取っていて、それを病気という形で身体に現れているのじゃないかな」

と彼女は薄い野菜スープも追加で注文する。

ロータスは食事をするのは好きだ。

特に飽食という概念に対する否定的な考えはない。

赤貧や断食を信者達に強要したりする事も無い。

それどころか、彼女には快樂主義を推奨する部分も感じていた。

「でも、ちゃんにご飯は食べた方がいいわねえ。生きる苦悩の為に身体がボロボロになるのは頂けないと思うわ」

あらかたロータスは食事を終える。

カイリは懐から瓶を取り出して、彼女の前に差し出す。

「ロータスさま、これ何だと思います？」

彼女はその瓶に触れる。

……彼女はその思念を読み取り始めていた。

「あら、可愛い子じゃない。でも、可哀相。何にも報われず、ただただ利用される為だけに生まれてきた可哀相な女の子。痛々しいわ」

まるで慈しむように、瓶を撫でる。

カイリとロータス。

二人とも、それぞれの能力の一端として、思念を読み取る事が出来る。

「ねえ、カイリ。この子、元通りにする事って出来るかしら？」

「……いや。……僕の『ファイヤー・ブリンガー』では。多分、無理です。神様は、人に、死んだ人間を甦らせる力を与えてくれはしなかった。僕の場合もそうだ。決して、死んだ人間は甦らない。僕が知っている世界の確かな秘密はそれだけです……」

「うん、そっか。とてもとても悲しい事実よね。そうやって、みんな名前も知られずに死んでいく。でも、私達は少しでも、それを何とかしたい、そうでしょう？」

「ですけど、……」

「でも、この子は元通りに出来ると思うわ」

確信を帯びたように言う。

「そうですか？」

「そう、人間じゃないみたい。人間になるべきだった人間。可愛い子だから、出来れば、また形にしてあげたいなあ。うん、そうしよう？」

そう言って、ロータスは紫紺の灰が詰まった瓶を抱き締めた。

「ねえ、カイリ。やってみない？」

「そうですね。……明日でいいですか？ 今は少し、精神が安定していない。特に、それを元の形にするのには、不安定な今じゃ少し難しいです。昨日から、抑鬱が酷くて。……そうですね、明日の昼くらいまでなら、調子が戻っているとは思いますが……」

「わかったわ。お願いね」

食堂の中には、彼女の姿に見惚れている信者達が、沢山、集まっていた。

カイリなどは、親しげに彼女と会話をする。

他の信者から見れば、不可思議な光景らしい。

赤いドレスの女は立ち上がった。

「じゃあ、カイリ。私はまた自分の部屋に戻るから。また、明日、お話ししましょう」

そう言って、柔和な微笑みを浮かべる。

まるで、無垢そのものだ。

カイリは思った。

彼女に、いつまでも付き従おう、と……。

十

「貴方が、“暴君”かあ」

その時は、赤いドレスを纏っていた。

そいつは、彼女を始末しに来た、という。

「そうだ。俺が暴君だな。その呼び名を知っている、という事は、俺が何者か分かるのだろうか。さて、問題だ。お前らの組織は所謂、社会にとって害だ。だから、俺が派遣されてきた。貴様を始末しにな。だが、その前に、俺には聞きたい事がある」

黒いTシャツに、所々を包帯で覆った男は、彼女を吟味しているようだった。

蛇のような眼をしている男だった。あるいは、捕食昆虫のような。

赤いドレスの女は、まるで夢見るように、男を見ていた。

「聞きたい事って？」

「……俺を怖がらないのか？」

彼女は、きょとん、とした顔をする。

「だって、あなたって。殺意が無いから」

「ふむ？」

暴君と名乗った男は、興味が湧いたようだった。

「俺は無感動に人を殺すぞ？ 何の理由も無く。何の価値も無く。何の目的も無く。ただたんに、純粹に人を殺す男だ。そこに快樂も何も無く、一個の死そのものとして、人を殺す人間だ。だから、俺に殺意なんてものが無いなどと言われるのは滑稽だな」

「だって、殺意ないじゃない」

確信を持っているような言い方だった。

「話しているのは、俺の方だが。……まあいい。聞きたい事というのは、お前の思想についてだ。あるいは、教義、教条なのかな？ 何故、お前に付き従う人間が現れるのだろうか？ 俺には分からない。お前に何故、色々な人間が群がってくる？ このまま、お前を俺の『エリクサー』で殺すのは簡単だ。しかし、聞いておきたい。何故、お前は皆から、崇拜されるんだ？」

そう言われて、女は首を傾げる。

「私は、“正しい事”を言っているだけだもの。みんな、正しい事が何か分からず、生きている。だから、この世界はおぞましい事ばかりに覆われているのよね。みんな、本当は幸福に為れる筈なのに、幸福から眼を背けている。悲しい事だわ」

それを聞いて、男は哄笑した。

「くくっ、ふはは、ふはははははっ。正しい事か。何が正しい事なんだ？ 俺にはまるで分からない。俺は正しい事なんて無い、と考えている。世界が正しかったら、俺のような、“純粹悪”は生まれてこない。いいか、全ては赦される。俺は人間の死の断末魔が聞きたい。そのメロディーを感じたい。俺は今は、犯罪者を狩る狩人という立場に甘んじているが、いずれ、この世界は壊す。その時に、人間は悪の部分が現出するさ。正しい事なんて無くなる。楽しみだな」

女は柔和な笑みを浮かべる。

「そう、そうなんだ。あなたは、とっても良い人なのね。この世界の狂気に気付いているんだわ。この世界は、良い人間ばかりが殺されていく。とてもとても悲しい世界。それを何とかしなければならぬ。人間にとって、必要なものが消されて、殺されていく。あなたはきっと、そういった人間の闇の部分が赦せないのよね？」

話がまるで噛み合わない。

こいつ、狂人か？ と男は少し思った。

もう少し、話を聞いてみたいが。飽きてしまったら、容赦無く殺してしまおう、そう思った。

女は言葉が続ける。

「凄い。“光”が何なのかを知っているのね？ 正義を為す事が何なのかを。あなたからは、それを感じるわ。いいオーラを放っている。歪みが無くて、真っ直ぐ。あなたは、本来の人間のあるべき規範を知っているのよ。貴方という存在そのものが、正義を体現しているのかもしれないわ」

暴君は首を捻った。

そして、少し考えてから、一気に吐き出す。

「いいか。この世界にルールなんて無い。特に人間はだ。ルールが無いにも関わらず、人間共は、自分達基準のルールを作りたがる。自分達の見ているもの、聞いているもの、嗅いでいるもの、感じているものを基準にルールを作る。反吐が出る。だからな、俺を良い人なんて言うな。

もし、何らかの形でそんなものを感じたとしても、それは錯覚だ。正義感など無い。俺はルールとか規範とか基盤とか言われているものを壊したい、という自身の衝動の赴くまま生きている。今はまだ、時期ではないが、いずれ壊すつもりだ。この世界を構成しているものをな。それは、正義の行為からじゃあない。俺が俺で在る為だ。だから、お前の言っている。何だ、よく分からないが、そういったものは無いんだよ」

そう言う暴君に対して、女はますます嬉しそうな顔をする。

「そう、そうなのよ。人間は素直のまま、真っ直ぐなままで生きるべきなんだわ。なんてあなたは素晴らしいのでしょうか」

男は呆れていた。同時に、彼女を殺す事を躊躇った。

それは確かな事実だ。

十

それは瞑想の部屋。

彼女が世界中に流れる苦痛、苦悩と対話する為の部屋。

空間に亀裂が生じているかのようだった。

世界がバラバラになってしまったかのような感覚。

世界中に偏在している負の感情を、彼女は自らの感覚の中に降ろしている。

ありとあらゆる痛みが、叫喚が、断末魔が精神の中に入ってくる。

彼女はふと、瞑想を止める。

昨日、カイリから瓶に詰められた灰を渡された。

それは、今は部屋の隅に置かれている。

彼女は立ち上がって、その瓶を手にした。

「あら。あなたはまた、生まれたいの？ ……」

とても愛しそうに、瓶の表面をなぞる。

景色が頭の中に入り込んでくる。

それは真っ赤な情景だった。

とてつもなく真っ赤。

とんとん、と扉を叩く音が聞こえた。

カイリだった。

約束の時間、彼は部屋に入ってきた。

昨日よりも、少し顔色が悪い。

ロータスは彼に瓶を渡す。

「やってみます……」

彼は瓶を開いて、中の灰に触れた。

数十分が経過する。

中の灰が、ざわざわ、と呻き声を上げているかのようだった。

実際、灰が動き始めている。

更に時間が経過していく。

少しずつ、少しずつ、灰に形が与えられていく。

最初、それは眼だった。眼球。

やがて、口が生まれ、歯が生まれ、髪の毛が這い出てくる。

瓶いっぱい、そいつの姿は形成されていく。

それは、女の顔だった。

そいつは、確かに発声していた。

「あ、あうああああ、ううううう、うううううう、あああ、あああ」

人ならざる声。

灰の中から肉体を取り戻した女。

女というよりも、少女といったような顔立ち。

「僕の能力で、こんな現象が起こるのは初めてです。……生き返るなんて……」

この儀式を行ったカイリ本人が、驚愕の表情を浮かべていた。

「あらあら。あなたのお名前、なんていうの？」

ロータスは誰何する。

少女は答えた。

「ああ、あああ、あうううううあああ、あ、あん、あああ、さあああ——、ああああ」

しばらくして、やがて、それが一つの単語になっている事に気付く

アンサー。

……………彼女の名は、アンサー。

「そう、よろしく。アンサーちゃん、そして会えて、とても嬉しい」

にっこりと、ロータスは笑った。

「ああ、駄目だな」

フェンリルは早速、告げた。

キマイラも頷く。

ビルとビルが融けるように組み合わせあって、並んでいる場所。

ニアスは何が何だか分からない。

「どういう事なんだ？」

ケルベロスが訊ねた。

彼も感付いていたのだろう。だが、それが何なのか分からない。

「そうだな、まずオレの能力で中の“内部構造が視れない”。つまり、その場合、大体、それがどういう状況が起こっているかと言うと、他の能力者がそいつの異空間みたいなのを作っているんだ。おそらくはビル全体を覆い包むように。だから、あの魔窟に入るのは危険だ。怪物の胃袋の中に直接、入り込むようなものだ」

「それから、ビルの質感が奇妙だわ。どう言えばいいのか分からないけれども、ビルの所々の色彩が何か変。ビルの外壁って灰色と茶色によって覆われているけれども、何だか違和感を感じるのよ。何かの罠を仕掛けているとしか思えないわ、ほら、草木に偽装したトラップってあるじゃない。ちょうど、それに気付いた感じ」

二人はそれぞれの持っている能力で、すぐに、そんな事を見抜いてしまったみたいだった。

ニアスは呆けたように、二人の会話を聞いていた。

本当に彼らは実力者なのだと、改めて感じる。

「助かる。やはり君らを連れてきて正解だった」

ケルベロスが嘆息する。

「さて、どうしたものかな」

「勿論、相手側にオレ達の存在はとっくに気付かれている」

フェンリルは断言した。

お前らの目立つ服装のせいもあるだろ、とニアスは思わず、心の中で横槍を入れた。

フェンリルとキマイラはにやにやと笑う。

二人とも、何だか、楽しそうだった。

「あちら側にも、好戦的な人間がいるみたいだな」

「どうしたものかしらねえ？ ねえ、一人で私達四人と遊びたいみたいね」

ビルの窓の無い部分。

ニアスは、そこから、何か人影のようなものが動いている事に気付く。

まるで大砲によって打ち込まれたかのように。

そいつは、四人のいる場所の付近へと飛んできた。

おどけたような顔をして、柔らかい癖っ毛をしている。

しかし、その双眸は肉食獣のそれだった。

小柄だが、肉体は鍛錬を重ねている。猫背の為、身長はかなり低めに見える。

そいつは、薄青色のシャツに、黒いズボンを穿いていた。

「名前は何だ？」

フェンリルは腕を組みながら訊ねた。

「ヴリトラ」

猫科の肉食獣のような男はそう告げた。

ケルベロスは、彼の名を聞いて、何かを思い出したみたいだった。

「お前、アサイラムの前に作られた監獄で、有名な『地獄の世界』に送り込まれる途中、脱走した、あの有名な男か」

こきり、こきり、と肉食獣は両手の骨を鳴らす。

「へえ。昔の俺を知っているんですかあ。いやいやあ、あの頃の俺はやんちゃでして。沢山、暴れ回っておりましたからねえ。でも今はですねえ、おとなしいもんですよ」

そう言いながら、彼は今にも飛び掛かってきそうな雰囲気をかもし出している。

ケルベロスはジャケットを脱いだ。

「確か、お前の『エウリノーム』。大層、人が死んだそうじゃないか。お前も近接格闘タイプなんだろう？ 俺はケルベロス。地獄の番犬の名称を持つ男だ」

ぼきり、ぼきり、と筋骨隆々とした男は言った。

さり気なく、ニアスを守るように立つ。

「ああ。ケルベロスさん。貴方の『アケローン』の話も聞いてますよ。でもですね、まずは俺達、拳で語りませんか？ 男同士の礼儀って奴、やりましょうよ。能力無しで。後ろのお嬢さん達、危ないですから。下がっててくださいね」

言われて、ニアス、フェンリル、キマイラの三名は、十数メートル程、彼らから距離を置く。ケルベロスも、ああいう馬鹿は相手にしなければいいんだ、とフェンリルの呟き声が聞こえた。

二人は既に、勝負に入っていた。

まず、ヴリトラが全体重を掛けたストレートを撃ち込んでくる。

ケルベロスは身を引いて、それを避ける。そしてそのまま身体を回転させて、顎にアップパー・カットを決める。ヴリトラは仰け反りながら数メートル吹っ飛んでいく。

ヴリトラはそのまま空中で身を捻って、肉体を回転させる。そのまま地面に着地する。

そして、左足で地面を蹴って、再びケルベロスの方へと向かってきた。

そして再びカウンターを決められる。

三人は肩を竦めていた。

「もう少し、やるかと思っていたんだけどな？」

「あら？ 可愛いじゃない。忠実な番犬みたいで。でも、彼の牙ってちっちゃいのよねえ。甘噛みしか出来ないのよ」

ヴリトラはケルベロスになす術もなく、ボコボコにされていく。

観戦していた三名は飽きてきたので、暇潰しを考え始めた。

「ヴリトラが逆転勝ちする方に三千。何かを狙っているんじゃないのか？」

フェンリルが冗談でそれを口にする。

「あら、じゃあ、私は小細工されてもケルベロスが勝つ方に五千。貴方、わざわざ、負けるギャンブルって好きなの？」

ニアスはそんな二人のやり取りを見て、苦笑する。

「まあ。取り敢えず、あのお馬鹿さん。おそらく、別の人間がオレ達の様子見の為に送ったんだろうな。こちらの能力は余り見せない方がいい。おそらくは、あのビルの何処かから観察されている」

キマイラはビルの窓や隙間などを一つ一つ指差していく。

「あそこと、あそこと。多いわね。ひよっとすると、狙撃系の攻撃で私達を暗殺したいのかもしれないわよ。もう少し、物陰に隠れた方がいいかも。相手の方も、私達の情報収集をしたがっていると思うわ」

打撃音が盛大に響く。

また再び、ヴリトラの全身が空中へと舞った音だった。

顔面血塗れになりながらも、それでも、目の前の敵にしぶとく向かっていっているみたいだった。

十

「さて、どうしたものかな？」

ケルベロスは露店から買って来た濡れタオルで顔の汗を拭っている。

「久々に運動した。やはり鈍っている」

「サンドバックを殴っていただけじゃない」

キマイラは楽しそうに言った。

ポケットから、色々な物を取り出している。

ヴリトラと名乗った男は、両手を背中の辺りで縛られて、木にくくり付けられていた。顔面はかなり殴られたみたいで、膨れ上がって変形している。

「いや。本当は一、二撃で沈めるつもりだったんだ。もし彼の能力が触れた時点で発動する何かだった場合、俺は終わっていたからな」

ケルベロスは、キマイラの軽口に応じる事無く、真面目に答えた。

触れた時点で終わる。ケルベロスの持つ能力がまさにそれである為、殴り合いの勝負にわざわざ答えたのは、彼の優しさであると言える。

ヴリトラは小さく唸っていた。

ケルベロスが彼に向かって語る。

「聞こえているか？ ヴリトラ。俺達の目的は可能ならば、君達の拘束だ。殺害じゃない。今ではアサイラムという監獄が作られている。幸せな場所だ。昔のような、囚人の人権を否定するような場所には連れていかない。どうだろう？ このまま投降してくれないか？ そして出来れば、クラスタ内部の情報をほんのちょっぴりでいい、教えて欲しいのだが」

ケルベロスは濡れタオルを、彼にも差し出す。

キマイラが脇に入った。

「生かせば問題ないんでしょう？ やっぱり、ちゃんと聞き出しておくべきよ？ そう思わない？ ちゃんと合理的に動かないと。私達だって死の危険と隣り合わせなのよ？ 貴方の信条は分かったわ。でも、私達の命の心配もしてくれなくちゃ、ねえ？」

ケルベロスは少し、むっとする。

キマイラは何かを彼の手の中に放り投げた。

人体の皮を直接引き剥がしたもののようには思えたが、その裏側には半透明のプラスチックの箱がくっ付いていた。銅線が幾つも付いている。どうやら、真鍮の幾つかは引き抜かれたみたいで、装置としての機能は完全に破壊されていた。

「この男の皮膚の一部に付着していた。三個も。特殊メイクのように表面を皮膚の形に擬態させている爆弾。いざとなったら、彼、スーサイド・ボマーの役割も果たすつもりだったみたいね」

ヴリトラは声に為らない声で唸っていた。

キマイラは彼の眼の辺りに、一本の針を突き付けていた。

「さて、喋れるかしら？ 私は貴方と仲良くなりたいのよ。ちょっと、今、お話するのが苦しいでしょうけれども。どもっても、噛んでもいいから、話してくれない？ ちゃんと翻訳してあげるから。とにかく、話して、ね？」

彼女はくるくると、目蓋から鼻、耳、そして喉、腹、太腿を、針でなぞっていく。

男は、微妙な表情で彼女を見ていた。

「そうねえ。まずは、能力者は何名いる？ 貴方の知っている限りでいいの。貴方に自分の能力を教えていない者もいるかもしれないから。それから、出来れば、知っている範囲で、貴方のお友達の能力を教えて欲しいのよ。それから、私達、とっても困っていて。せっかく、貴方達のお宅にご挨拶に行きたいのだけれども。あんまり、歓迎されてないのよねえ。それはとっても怖い。だから、安全に入る方法も教えて欲しいのよねえ？」

ヴリトラは頑なに彼女を睨み付けていた。

キマイラは、くるりくるりと、彼の太腿の辺りで太い針を弄くっている。

「じゃあ、一つ一つ。貴方のお友達の能力を教えてくれないかしら？」

彼は首を横に振る。

そして、初めて、まともに答えた。

「し、知らない。俺には聞かされていない。みんな、自分の力を隠したがる……」

「あらそう」

キマイラは針を、太腿から腹の辺りへと移動させる。

「じゃあ。クラスタ。安全に入る方法、教えてくれないかしら？ そっちは本当に困っているのよねえ。さすがに、それは知っている筈よねえ？」

ヴリトラの顔が引き攣っていた。

勢いよく何かを貫く音が聞こえた。

男の顔面のすぐ隣の、太い樹木に、針が深々と突き刺さる。

くりくり、くりくり、と指先は針を回転させていた。

そして、針を引き抜く。

「上腕骨と大腿骨。どっちがお好きかしら？」

ぎゅるぎゅる、とドリルを回すように、キマイラは木の幹を針で削っていく。

「ねえ、人体って。壊れやすいものなのよ。一部が損傷してしまうだけで、大部分が動かなくなる。サッカーの無い生活と犬食いで食事、どっちが素敵だと思う？」

「キマイラ……」

それまで黙って見ていたが、いい加減にしろ、と言わんばかりに、ケルベロスが彼女を制した。

「拷問は止めろと言っただろう」

「あら？ 私は彼とお話しているだけよ？」

キマイラはへらへらとした調子で言う。

「い、言う。言う、言う、言いますよ。だから、お願いします！」

男は可哀相にも、顔を蒼褪めながら首を縦に振っていた。

お願いします、とは、彼女を遠ざけて欲しいとの事だろう。

「ほら。お話だけだったでしょう？」

キマイラは満面の笑顔を、今回の仕事のリーダーへと向ける。

彼は少し頭を抱えた。

やはり、彼女は。

かなり、危ないものを抱えている。……。

蓮の香りはこんなに優しくかったのか。

カイリは初めて蓮に近付いて、その匂いに触れた時、感じた事だ。

緩やかな深い眠りに落ちていくような香り。

蓮からは、そんな香りが漂っている。

安らげる香り。心が落ち着いてく。とても瞑想的な。

可憐な薔薇には棘があるように。

綺麗な蓮は汚い泥の中に咲いている。

硬い大地の土壌では、決して咲かない花。

此処は、地獄を見てきた者ばかりが集まっている。

此処は、死の恐怖を視てきた者ばかりが集まっている。

余りにも、酷い。……。

肉体が変形した人々。

彼らは身体中にコブなどが出来ている。

どうやら、戦場での薬物の投擲によって、このように肉体が変形してしまったらしい。

焼夷弾による、焼け跡なども存在する。

この傷を見る度に、彼らは戦場から戻れなくなる。

心が引き戻されていくのだと。

肉の変形。

彼らの眼が空ろになるのは。

彼らの中には、肉体の損傷の為に。物理的にマトモに身体を動かせない者達だっている。

徐々に、心が腐っていくのだと。聞く。

「ガルドラ、元気かい？」

彼は戦争によって、両足を失った男に会釈した。

髭面のこの男は、うっうっと唸った。

この男は、何故か、カイリと親しくなった。

何となく、波長が合うのだろう。

彼もまた、戦場で沢山の人を殺した。

なので、殺した者達の亡霊を夢に見るのだと言う。

両足だけではなくて、両手も差し出せとそいつらは言ってくるのだと。

それから、眼球も、腎臓も肝臓も。脳も心臓も、差し出せと。

亡霊達は、彼の事を強く、強く恨んでいる。

いつか、彼らに殺されるのだろうか。

彼はナイフを手にとって。自分の腕に押し当てる。

そして、何度も何度も、十字の傷を刻んでいく。

血液が流れ続ける。

彼は自らを傷付ける事によって、何とか贖罪を果たしたいと思っている。
何に届かなくても。何処に届かなくても。
彼は言語器官が壊されてはいない。
しかし、体験によるショックで、まともに発音するのがキツイ状態らしい。
それでも、カイリは熱心に、彼の話の聞き続ける。
カイリは、ガルドラと一通り、会話をした後。
ロータスの下へと向かった。
そこは何名もの者達が座れるような、多少、広い空間だった。
ロータスはアンサーを優しく抱き締める。
可愛い女の子、だと言った。
彼女の痛みは、力にならなければならないと。
アンサーには知性が無い。
生きる目的が無い。何も無い。
いわば、何にも汚されていない、とも言える。
一度、死に。生き返り、更に灰になって土に還った少女。
「そう。あなたは、自分が醜いと思っているんだ」
ロータスは少女の事を、漠然とだが理解しているみたいだった。
「その自らを醜いと思う感性が、美なの」
この二人が出会った事は宿命なのだろう。
ロータスは彼女に宇宙を観る。
それは、もうどうしようもない程、悲しい孤独のような。
彼女はアンサーに、子守唄を聴かせるように言う。
「人々は永遠の悲しみと贖罪の中で生きている。みんな、只、灰のように死んでいく。何故、人々は重荷を背負いたがるのだろうか？ それによって、人は人を傷付けるというのに。重荷の為に、戦争が起こり、権力争いが起こり、沢山の血が流された」
それは無限に広がる、とてつもない闇。
何処までも、何処までも、広がっていく。
神の世界を視なくても。
彼女は神の存在を感じている。
神から流れてくる情報を何とかして伝えようとして、生きているのだと言う。
どうにか、言葉にしようと。
この力の名を何としよう。
それは死体だらけの道であり、救世主が歩んだ血塗りの道。
まるで、自らが拷問され、処刑へと向かっていくかのような歩み。
彼女は自らの力の名を『ヴィア・ドロローサ』と呼んでいる。
それは荊の道。
あらゆる、苦痛と苦悩と受難を引き受ける為の道。

「俺達は何を為すべきでしょうか。ロータスさま」

彼女はアンサーの髪を梳きながら答えた。

「あなたが為すべき事は、あなたはあなたの欲望に忠実であれって事。自分を曲げないでね。それが生きる事だから」

自分自身の意思。生き方の全て。言葉。

美しいと感じる感性。

それらの全ては世界から与えられたものに過ぎないという事実。

自分なんて何も無いのではないかという徒労感。

自分はいないのではないんじゃないか、と。

そんな事を、ロータスに告げた。

「万物を信じる事。それはとても大切。国家、社会を信じる事じゃない。万物、自然。あなたはそれらの一つとして、決して国家に従属されない存在として生きている。あなたは世界の、本来の意味のある世界の一部として生きている。それは何処までも誇らしい事なの。だから、あなたはあなたの感性を信じるべきだし。認めるべき。でも、あなたが自らを醜く感じる、というのは、この世界の秩序に絶望しているから。わたしはそう思っている」

ロータスは価値を創造していく。生きる意味を。

人間の闇を可能な限り、見つめ続け。弱さを認めたいという意志を持ち付けてもなお、彼女は希望を信じ続けている。カイリ達の生きる力になる。

香りが辺りに満ちていくかのようだった。

虚空の中に一片の花弁が咲くかのよう。

カイリは狂喜する。

彼女を護る為ならば、命すら投げよう。

自分が生きた証とする為に。

祈りだ。

空へと向かう祈り。

カイリの故郷は今や水の中へと沈んでいる。

都市開拓の為に破壊された場所。

ダムの中へと沈んでいった都市。

死者の都だ。

立つべき大地が、もう無かった。

全てから否定された。

今や、外の世界の全てが、彼の敵だった。

何者もが悪意を持っている。

光が無い。

外の世界は、全て、敵だ。

ロータスは教える。此処から外は、邪悪さしか満ちていない、と。

みな、互いを貪り、貪られ合う世界が広がっていると。

あるいは命が無い。
慄然とした恐怖に支配される。
全てが転げ落ちたような世界。
全てが壊れた世界。
戦争が広がり。平和な国家においても、互いが互いを貪り合う世界が広がっている。
ああ、世界は死んでしまったのだな、と。
悲しみに埋もれた。
何処までも深い、悲しみに。沈んでゆく。
クラスタは外部の人間からどう映るのだろうか。
宗教団体？ カルト？ 分からない。
カイリの認識としては違う。
此処に来た者は、誰もが心に何処か欠損を抱えている。
それは苦手なアーティだって同じだ。
弱さ。
みんな、余りにも弱かった。もう、どうしようもないくらいに。
クラスタ以外では生きていけないだろう。
ひょっとしたら、クラスタにおいてもなお、彼らは生きていないのかもしれない。
きっと、もう生きながらにして、死人なのかもしれない。
けれども、彼らは生きているのだ。それでもなお。
空を眺める。
太陽が身を焼く。
日の光は黒く見える。底知れない深淵のように。
優しい香りがまだ消えない。
蓮は何処までも、美しい。

十

セルキーという男がいる。
彼もロータスの側近のような位置にいる。
いつも、彼の身体からは絵の具の匂いがする。
彼は絵画を描いていた。
彼の描く絵は、デッサン、構図が狂っている。
しかし、その絵を見るものはそれを恐ろしく思う。
恐ろしければ、恐ろしい程に、それは幾筋もの救済を放っていた。
……………
白い翼があった。
男のような。女のような。あるいはどちらでもないような白い服に包まれた肉体。

そいつの顔はぐちゃぐちゃに潰れていた。

顔を黒く、黒く黒く、幾何学模様を描くように潰された天使。

翼は所々の骨が剥き出しだ。へし折れている。

顔の無い天使の中には、腹を切り開かれて内臓が零れ落ちている者もいた。

まるで、そいつらは生きていたかのようだった。

配色として、全体的に、緑、深緑や黄色を強調させている。

.....アニマの描く絵とは対照的だ。

しかし、ロータスは彼の描く絵をえらく気に入っているみたいだった。

彼の描く絵画に、えらく魅せられているみたいだった。

彼女は言う。

「永遠の夜のようなね。この世界は。何処に行ったら、綺麗な空間ばかりが広がっているのかしら？ 宇宙の果てにはあるのかしら？」

.....

セルキーの描く絵は、この世界の人間達を現していると彼女は言う。

顔が潰れた天使。

ぐちゃぐちゃに折れた両翼。

腐乱した肉体。

そこには。内臓が。大腦が。骨片が。筋組織が。曼荼羅のように、記されている。

全ての調和が破壊され尽くしている。

そして、もうどうしようもない、空虚感を感じる。

悲しみ。痛み。苦しみ。

手を繋ごうとして、手と手が重なり合わない者達。

それらが、混合されて。

光の粒子のように、溶けている。

一筋の安息を覚える。

反転こそしているが、確かな希望を。

美なんてきっと、無い。

人間が作り出した、まやかさに過ぎないのだと思っている。

それでもだ。

それでも、カイリは、この絵画を観て美しいと感じる。

気付けば、涙が零れ落ちる。

何も無い暗闇の中に、亀裂が走るかのよう。

彼の絵画を見ていると、涙が零れ落ちるのだ。

闇を描いていながら、心に光が灯っていく。

人間が美を感じる瞬間。

おそらく、それは自分自身が置かれている環境や立場によるのかもしれない。

何かを美しいと思う感情。

それは、自分自身が心の奥で求めているものが、この世界に顕現されていた時なのだろう。
セルキーの絵画。
それは、カイリの胸を深く打つのだ。

十

カイリの故郷は、今や水の中だ。
小さな集落だった為、国家にとってはいらないと判断された。
積み上げられた大きなダム。都市。
故郷無き世界に生きて、生まれ落ちた場所を喪失し、彼は世界を呪詛している。
自分が何処にもいないような感覚に、日々、襲われている。
そう、覚えている。
彼の故郷には、生命の誕生があった。老いがあった。
歓喜があり、悲哀があった。
故郷であったお祭り。
頻繁に訪れる疫病の対策。
故郷でしか取れない農作物、育たない草花。
今や、全ては失われてしまっている。
しかし、彼の故郷はいらぬものだと大国から言われて、水の底へと沈んだ。
ずっと、地面が無い感覚に襲われている。
何処にも、自分の着地場所が無い。
光が無い。そんな感覚。
きっと、彼の希望の光は。水の底に沈んでしまったのだろう。
故郷を潰した、大国を今でも憎んでいる。
彼はクラスタにいて、頻繁にその事ばかりを考えている。
三日か四日に一度くらいの割合で、悪夢に魘される。
故郷の事。
家族。友達。
彼らは散り散りに散ってってしまった、今、どうしているのだろうか。
自分が立っている場所が何も無い。
その為、カイリは酷い鬱に苦しめられていた。
何度も、何度も、反復して、昔の事が頭を過ぎる。
昔というものを、いつまでも引きずっている。未来が見えていないのかもしれない。
けれども、今は愛する者の為だけに生きたい。
アニマ。ロータスさま。
そして、親友のクライ・フェイス。
自分は今、満たされている。

守らなければならないと思う。この日がずっと続く事を。

クラスタに住んでいる人間。

決して、外の世界では生きていけないのだと思う。

境遇は違うけれども。

寄り添いながら、みな、生きている。

クラスタには様々な国の様々な地域で、虐待された子供達も、沢山、集まってくる。彼らの持つトラウマは深刻だ。爆撃や地雷の恐怖。散乱していく死体、眼の前で殺された両親。それらのトラウマといつも戦っている。時折、悲鳴を上げる者達も多い。

中には、十歳に満たない頃に、銃器を持たされ、沢山の人を殺した者だっている。

十歳にならずに、売春に走らされた者達も。

言うならば、此処には世界の闇が集まってくる。

救われない言葉達が、沢山、集まってくる。

一体、どうすればいいのか。カイリにはまるで分からない。

ロータスはありのままの彼らを肯定する。

アーティは社会に溶け込めるように、説教する。

どちらが、正しいのか、彼には分からない。何もかも、分からない。

アニマは、みなに絵を描かせる。

すると、ぐちゃぐちゃに叩き付けるように、彼らは戦禍の悲劇を書き続ける。そこには、救いも希望も感じ取れない。アーティがどれ程、愛や希望の言葉を与え続けても、彼らには闇しか見えないし、暗い漆黒の中から抜け出す事が出来ない。

きっと、彼らはまだ戦場の中にいる。安心なんて無い。生涯無いのかもしれない。

散乱した人体。

脳漿の飛び散った両親の顔。

黒く顔を塗り潰した軍服の男達。

ガリガリに痩せた空ろな眼の労働者達。

戦車、爆弾を積んだ飛行機。火花。

.....

そういった絵を描く者達の眼は空ろ。

たまに、空を見上げている。ご飯の味もよく分からないとも言う、戦禍の中にいた頃は、あれほど食糧を強請っていたというのに。

食べる事が、何の救済にもなっていない。

その皮肉に、彼は心を痛めていた。

彼らは、まだ戦禍の中にいるのだろうか。ご飯の味が、泥を食っているように思えるのだと言う。

奇妙な事に、此処に来る者達の中で、他人の顔を覚えられない者も多い。

顔が怖い。

顔を覚えてしまった瞬間に、それは自分を殴り付けるかのような恐怖になるのだと彼らは言う。

。

もう、生きる事に何の希望も抱いていない。

ただただ、日々は流れ続ける。

そのような者達が多い。

けれども、何処か彼らは期待している。世界に。

きっと、彼らの欲する世界を繋ぐのが、ロータスなのだと。.....信じて。

命の大切さ。

命とは、何なのだろうか。カイリには分からない。

分からないからこそ、此処にいる意味があるのだと思っている。

クラスタ内には、戦争で手足の一本、二本を失った者も住んでいた。手足が丸々無くなっていないくとも、手足の指を欠損したり。片目や片耳を失っている者達もいた。

そういった者達の受け皿がクラスタだ。

そして、犯罪者や売春婦も大量に流れてきている。

それでも、ロータスとアーティの二人の存在感によって、此処は平穏が保たれていた。彼らは

クラスタの外では、略奪を尽くし続けるが、決してクラスタの中では行わなかった。せいぜい、小さな喧嘩や揉め事程度しか問題を起こさなかった。

.....仲間意識なのだろうか。

何処かで、痛みを共有しているのかもしれない。これまで、分かり合えなかった痛みをだ。カイリはクラスタが何なのかについて、考えている。

考えれば考える程、分からない。ひよっとすると、ロータスもアーティも分からないのかもしれない。

ある意味で言えば、偶発的に出来てしまったもの。

いつの間にか、ロータスが此処の教団を纏めていて。

いつの間にか、アーティがもう一つの分派のようなものを作っていた。

それは、本当に、気付けば自然とそうになっていた。

多分、みんな信じられるものを欲したから。

この二人は、信じられるものを言葉によって、作り出す事が出来た。

信じられるもの、きっと、人間はそれなしでは生きていけない。

虚無でさえも、人間は信仰する。空虚さでさえ、生きる意味に変える。

そういうものなのだろう。

アニマの絵を見ている時は幸せだった。

彼女は花の絵が好きだった。

特に、小さな雑草などを集めて、野花の絵を描いている。

彼女は花売りだった。

自分自身の花を売った。

沢山の男達に。.....

.....本音を言うと、カイリはアニマの売春を止めさせたかった。

それでも、彼女はクラスタの外に出て行って、自分自身の肉体を男達に提供する。

何故、そんな事をしてお金を稼ぐのかを、訊ねた事がある。

答えは、心が楽になるから。.....

カイリには、理解が出来ない。

十

.....。少し前の話になる。

.....。

.....。

キマイラは現在の自らの生に対して、困惑していた。

十

あの古城から戻って、何ヶ月、過ぎたのだろうか。

キマイラ・ヘッドは、未だに生きている事が信じられない。

何で、生き残ったのだろうか。そんな陳腐な疑問。

この世界に生きてきて、あそこまで窮地に立たされたのは久しぶりだった。

別に今更、死ぬ事なんて怖くない、というか、少し、死は解放なのかも知れないと思う時がある。

悪鬼の名を持つ、弟、ゴブリン。

弟の為に、ずっと何十年も生きてきたようなものだ。

弟を失って、自分の生きる目的を見失ってしまった。

弟は、敢えて言うならば、愚鈍で蛆虫のような奴だった。成虫になって、飛んでいける、蠅にもなれない蛆虫。不快で醜悪なだけでしかない。……。

子供の頃の話だ。

弟は自身の能力をコントロールし切れず、自身の脆い自我もコントロールし切れずに、実の両親を殺してしまった。キマイラは、その事を今でも赦せない。

弟を、今もなお、絶対に赦していない。

と、同時に。そんな弟だからこそ、守らなければならないと思っていた。それは、盲目的で偏執的で狂信的でさえあるのではないか、と自分では思う。

だが、それも。

よく分からないが、やはりこれは、家族愛、という奴だったのだろうか、と。

キマイラは、廃墟のような屋敷を訪れる。

外装こそ汚いが、中は小奇麗に掃除が行き届いていた。人が住める場所になっている、勿論、一見、廃墟に見えるのはカモフラージュの為だ。

一通り、家具や台所、風呂場など、生活に必要なものは揃っている。

此処は、いつもキマイラが隠れ家として使っている場所だ。今の処、襲撃された事は無い。

彼女の傍らには、一人の少女が寄り添っていた。少し男の子っぽい服装だが、それは少しでも彼女の女性的な弱さを克服させる為にと、彼女の以前の“保護者”が、彼女に与えたものだった。

彼女の名前は、モニカと言う。

人見知りで、情緒不安定、そして泣き虫だった。いつも自分の殻に閉じ籠っている。

キマイラはそんな彼女が、別に嫌いではない。

弟の死に関与した者から、キマイラは彼女の保護を頼まれていた。

断らなかった。

彼女の元々の保護者は、キマイラにとって復讐対象でしかなかったが、彼女は違う。

新しい人生を迎える手助けをしてもいいと思っている。

「貴方は、今日から。此処で、寝泊りするけど、いい？」

「は、はい……」

モニカは震えている。

無理も無い。

「貴方って家事出来る？」

モニカは、ぷるぷる、と小動物のように縮こまったような顔をする。

そして、首を勢いよく横に振った。

「へ、下手です。……わたし」

「そう」

キマイラは、特にその答えに感慨を見せる事は無い。

この羊の角を生やした女は、モニカに一つ一つ、屋敷の中の構造を教えていく。台所やバストイレの場所など。

冷蔵庫には、アルコール類ばかりが入っている。

それから、戸棚にはタバコが何カートンも置かれており、その隣に申し訳程度に缶詰が積まれている。

殺風景のような場所だった。

「何か、買出しに行く？」

「え、えとあの……」

「そうね、疲れているんでしょう？」

キマイラは淡々と言った。

モニカはやはり怯えている。それは分かる。しかし。

キマイラには、そんな感受性がもう分からない。他人への共感は、何処か、壊れてしまっている。昔はもっと違っていたように思える。きっと、モニカの今の不安も理解し、共感したのだろう。

自分は、鈍感なわけでも、愚鈍なわけでもないと思っている。

別に、繊細さが無いわけでもない。しかし。

何処か、ズレている。おかしい、それは自分でも分かっている。

「ああ、そうだ。モニカ」

未だ、面と向かって、目を合わせてくれない少女に向かって言った。

「私、他人の痛みって分からないから。貴方を容赦無く傷付けるかもしれないし、不快に思わせるかもしれない。分かんないんだけど、私ってほら、貴方のお友達、殺しちゃったじゃない。そういう人間と一緒にいるとやっぱり、嫌なのが普通よね？ それは理解している」

その事実を、キマイラはやはり感情の灯らない声音で告げていく。

すると、モニカは、もう一気に泣き出してしまった。

怯えているようでもあり、その事実を振り払おうとしているようにも見えた。

キマイラは少し、困惑したような顔になる。

「え、……。私、何か、失言したのか？」

キマイラは理解していない。

自身の発音の冷淡さ、無感情さを。

モニカは受け止めてしまう。

それは、まるで見えない氷の刃のようだ。

人間は、声の質、口調、抑揚などによって、言葉の与える意味合いが変わってくるのだと。キマイラは知らない。一応、理解こそしているつもりだが、実感が無い。

言葉の持つ、あるいは言語表現、声のトーンの持つ暴力性を理解出来ない。

「ああ、そうね。ごめんなさい」

彼女は、また抑揚の無い声で、モニカにそう言った。

更に、その無感情さが、モニカを傷付ける。

一体、どういう風に接すればいいのだろう？

キマイラは思う。

いつもならば、コミュニケーションの相手は、ハンターやら殺人犯やらばかりだった。そんな奴らと関わる上で、まともなコミュニケーション能力など必要無かった。

でも。

今は、“人間”と触れているのだ。

それも、普通の、弱い人間、と。

この泣き虫の少女は、きっと辛く生きてきたんだろうなあ、とは思う。

それに関しての、深い想像力までは及ばないが。

この世界は、こんなに弱い人間が生きていられるような場所なんかじゃない。

だからこそ、弱い人間は死ぬべきだ、などとは、キマイラは思わない。

強い人間は大抵、醜い。強欲で傲慢で、サディストで支配的な奴らばかりだ。そもそも、人間の強さ故に、死ななくてもいいだろう、人間が沢山、死んでいる。

権力だとか、貧困だとかも、強い人間がいるからこそ、その格差は広がっている。

弱肉強食の摂理が嫌いだ。生物の規範が嫌いだ。

突き詰めて考えれば、人間もそういった生物の一種。

だからこそ、キマイラは人で在りたくないのかもしれない。

「ああ、そうそう。モニカ。青髭の物語じゃないけれど、地下室には近付かないように。一応、地下は貴方が絶対に近付いてはいけない場所だから」

そう言いながら、キマイラは地下に鍵を設置していない事を悔やんだ。

どうせ、誰もこの屋敷に近付かないだろうし、仮に誰かに侵入されたとすれば、鍵など合っても無意味なのだから。

十

夜だった。

キマイラは、ありったけの食料を買い込んでいる。

彼女は何が好きなのだろう？ そんな事を思い返す。あんまり料理には自信が無いので、インスタントで食べられるものばかりだが。

家を出て、二時間。彼女はちゃんと家の中で待っているのだろうか？ それとも、屋敷を逃げ出したりしてしまっていないか。

モニカはいた。

何をするわけでもなく、台所の椅子に座っていた。

どうやら、二時間もの間、ずっとそういう風に座っていたらしい。

動くのが怖い。そう察する。

あと、それから。

「トイレの場所、そこから遠いでしょ。一緒に連れて行って上げるわよ」

俯いていた彼女は顔を上げた。

そして、キマイラは彼女をトイレへと連れて行く。

水洗トイレだ。ちゃんと水が流せる。トイレット・ペーパーの買い置きが無かったので、それも買って来た。

モニカがトイレに入っている間、キマイラは夜食を作る事にする。

作るといっても、適当に買って来た冷凍食品をレンジに放り込んだり、ティーカップに紅茶を注いだり。惣菜のチキンや白身魚を盛り付けたり。

自分の味覚も変なのも、自覚している為、人様に自分の料理なんてとても出せやしない。

モニカはトイレに閉じ籠っているみたいだった。

この子は、本当に隙あらば、自分の殻に閉じ籠る。

キマイラは言った。

「夕食出来たわよ、出ていらっしやい」

たっぷり十分近くかけて、彼女は外に出る。

そして、彼女をテーブルの前まで連れてくる。

無言のまま、キマイラは皿に乗った料理を口に入れていく。

その際に、ドレッシングやケチャップ、ソースや香辛料の粉末などを、めちゃくちゃに料理に振り掛けて食べる。

そして、ぐちゃぐちゃと音を立てて、口に運んだ。

モニカは出された食事を、おそるおそる、口にしているみたいだった。

顔を見る限り、味を感じなさそうだった。

「ちゃんと食べなさいね。嫌いなものは残してもいいから。食べられるものは食べなさい、何だかんだで、貴方、衰弱しているから」

そう、彼女の肉体の調子は余り良くない。

きっと、身体にも異変が出ている筈だ。

十

「モニカ。サイコパスって言葉、知っている？」

いつも怯えている、小柄な少女は首を縦に振る。

「私、それみたいなのよねえ。他人に対する共感の欠如。他人に対する苦痛の共感性の無さ。後、ちょっとサディストな部分もある。ああ、勿論、向ける対象は完全にコントロールしているけど。人の痛み、分からないから。自分の衝動しか分からない。もっとも、『能力』のせいもあるけれど。その視点で考えるのって意味無いか。能力って、そのまま持ち主の人格、実存に根差したものになっているから」

そう言いながら、キマイラは気付く。

ああ、きっとこの少女も。まったく違ったベクトルとはいえ。

“他者がいない”んだらうなあ、と思った。

自分の殻の中に閉じ籠り。

世界を否定している。

でも、思うのだ。

キマイラは、そんな人間が嫌いではない。

そういえば、古城の事を思い出す。

暴君の周りにいた、女達。

モニカとどれだけ、仲が良かったかは分からない。

たとえば、彼女達とモニカはどんな会話をしたのだろう？

キマイラが殺してしまった女達。……………。

その事に関して、後悔はまるで無い。

女達は、敵として向かってきた。だから、殺す必要があった。

しかし、問題は敵にも、そいつを慕う家族や友人がいるという事実。

その事に関しては、いつもなら無視する。他のハンターだってそんな感傷は、同じように無視する。そうしなければ、……この世界では、生き残れない。

……狂っていなければやっていられないのよ。

キマイラは煙草の箱を取り出して、火を付ける。

そして、指で空気を掻き混ぜて、煙がモニカの処に行かないようにする。

窓の外は、夜闇が広がっている。

この空間。この時間。

一体、二人の間で、どれだけの距離が縮まる事が出来るのだろうか。

ひよっとすると、傷付ける事しか出来ないのかもしれない。

氷の壁は未だ、溶けない。

そういえば、彼女くらいの年齢の頃、どうだったのだろう。

……、昔の自分はもう少し、優しくったかなあ。思い出せない。

今はただただ、強い狂気によって支配されている。

他人の痛みに対する欠落。

弱さの無理解。

あるいは、ひよっとすると、強さに対する無理解。

自分が少女だった頃、一体、どんな性格だったのだろう。思い出せない。

何十年も生きてきて、今ではただ時間ばかりを浪費している。

何か。言葉があるのだろうか。コミュニケーションの仕方。

何故、自分はこのようにしか生きられず、振舞えないのだろう。

自分の心は、きっと壊れている。これからも、ずっと。

ただ、キマイラは思うのだ。

彼女は。この女の子は。

きっと、キマイラが無いからこそ。大切にしなければならない、何か、だと。

クラスタには、よく暗殺者などがやってくる。

大体は、そういった者達は、ロータスの側近達によって始末されるので。むしろ、ロータスも、カイリも、アニマも、それを日常の事として享受していた。

どうも、ヴリトラ達が動いているらしい。

どうせ、ビルディングの構造的に、ロータスやカイリ達の元へは辿り着けない。クラスタ内にいる、能力者の誰かの能力に引っ掛かって、死んでいくだろう。

風に誘われるように。気分の赴くままに。

赤い少女、アンサーはビルディングの中を放浪していた。

そこは、公園だった。

子供達が、遊戯で遊んでいる。

アンサーは、彼らに近寄った。

走っていく。しかし、近くにあった小石を踏んで、転んでしまった。

「う、うう。ううっ」

アンサーは唸る。

そして、近くにあった草花を掴んだ。

そして、その草花を意味もなく弄っていく。

何だか、あらゆるもの、全てが真新しい。実際、そうなのかもしれない。

ある意味で言えば、初めてみる世界。

彼女は、鼻をひくひくっと動かす。

何処かで知っている香りだ。

それは薔薇の香り。

何処かで嗅いだような。

それから、独特の別の香りもした。

覚えている。忘れられない。

彼女はそこへと走っていく。

「私、私、私、この匂い、知っている」

駆け足。

十

「そろそろ、休憩しませんか？」

ヴリトラは言った。

四名は首を傾げる。

「休憩？」

「私、疲れてしまいました。さっきから、しんどいですよ」

ケルベロスは仏頂面のまま、唸る。

「まあ、いいんじゃないの？」

キマイラは言った。

「そうだな、そろそろ、面倒臭い」

クラスタの内部に突入してから。

四時間が経過していた。……。

ヴリトラに対しては、わざと道に迷わそうと疑ったのは幾度とあった。

しかし、そんなものじゃない。

四名とも分かっていた。

そう、このクラスタというビルディング自体が、何らかの能力者の能力によって、迷宮と化している。ヴリトラは誠実にも、少しでも、歩く位置がズレただけで、注意を入れてくれる。

そう。

何と言えればいいのだろうか。

眼に見えている距離では、十メートルの場所が。実は、十数キロも開いていたりするのだ。

その事に関しても、ヴリトラは彼が知っている限りで教えてくれた。

「えとですね、アーティさんの『ライト・ブリンガー』っていう能力と。クライ・フェイスさんの『コカドリーユ』っていう能力で、このクラスタの中って、部外者が完全に迷い込むような設計になっているんですよ」

ヴリトラが知っている限りの能力者は、この二人だった。

それから、カイリという灰を使う能力者がいるらしい。

「ああ。クライ・フェイスさんは、最近、違うかな。維持し続けられる能力じゃない、って言ってましたし。俺にはどんな能力か、分からないんですけど……」

ヴリトラの役割は、おそらくは斬り込み隊長。

完全に、人間爆弾扱いされて、ケルベロス達の下へと向かってきたらしい。

キマイラは、納得して、それ以上の尋問をしようとはしなかった。

「やっと、休憩出来る場所に辿り着きましたよ。ほら、あそこ、食堂と休憩室になっています」

ヴリトラは指差す。

それは、小屋のような場所だった。

五人は、その中に入る。

中には、何名もの教団の住民達がいた。

彼らは食事をしている。

中には、休憩室らしき場所があった。

「おい、みんな、一応、住民は警戒しておいた方がいい、此処で食事とかするってのはどんなもんなんだろうか」

ケルベロスは一応、まとめようとして皆に、言った。

フェンリルは、面倒臭そうに、休憩室へと向かった。

そして、置いてあった布団にくるまって寝る。

キマイラもキマイラで、食堂の椅子に座り、適当な軽食を注文していた。

クラスタ独自のチケットか、物々交換が必要と言われて、適当な金品を渡している。

完全なまでに、二人共、ケルベロスに断りもなく、自分勝手な行動に走っていた。

「俺の言う事って、まるで聞いてくれないんだな……」

ケルベロスは項垂れた。

ニアスはそんな彼を気遣うように言う。

「あたしは、従いますから」

「助かる……とても」

彼は少し自己嫌悪に陥っているみたいだった。

「何で、フェンリルはあんなに不遜で。キマイラはあんなに狂っているんだろうなあ」

思わず、精悍な顔の男から、愚痴が漏れた。

ニアスは苦笑する。

「あの、私、どうしたらいいですかね」

ヴリトラは困ったような顔をしていた。

「ああー、逃げたら。俺以上に、あそこで飯食っている女が、また怖いぞ」

「……分かりました」

猫顔の男は、すっかり情け無い顔になる。

十

休憩室にはカーテンが取り付けられていた。

そして、妙に大きい姿鏡が置かれていた。

フェンリルは、自分の顔と身体を隠すように寝入っている。

何だかんだで、彼が一番、疲れているのではなかろうか。

そういえば、もう空が夜に包まれている。

ニアスは、彼の顔に魅入っていた。

セルロイドのような肌だなあ、と思う。

ニアスは、眠る彼の顔を見る。

整った顔立ち。雪原のように白い肌。

仄かに赤い唇。長く伸びた睫毛。

その唇に触れてみたい衝動。

…………ニアスは、思わず自らを制する。

私は同性愛者だったっけ？

すぐに思い出す。

彼は男。

女のような衣装を纏うけれども。それでも男。

……。

男とは思えない。……。

寒気のするような、美貌。

その唇に。

自らの唇を重ねてみたい。

どうしようもなく胸の中から熱いものが込み上げてくる。

自分が女なんだと意識せざるを得ない衝動。

頭の中で、否定しようとするが、感情が溢れてくる。

……。

彼に抱かれない。

彼を誘いたい。……。

そんな思考をすぐにかき消そうとする。

……何、指先ってあたしより細いじゃない。悔しい。

こうやって眠っている彼は、本当に人形そのもので。

色々な角度から干渉して、色々な表情に見える。

どうやったら、男なのに。こんな美貌を持てるのだろうか。

彼女よりも、よっぽど綺麗だ。可愛い。

ニアスの根源の中には、おそらくは父親憎悪がある。

男らしい男に対する嫌悪。

獣欲のような眼をした男。視線。

それが薄気味悪い。

そのせいか、男らしい男が気味が悪いと思っていた。

それは、どうしようもない事だ。ニアスがニアスであるという事実。

ニアスは、あの少女のように生きていない。

ニアスはその点は、普通の女なのだ。

そして、鋭利な声が胸に刺さる。

「盛りの付いた雌犬ね」

突然、背後から、そんな声が聞こえてきた。

休憩室の中は、カーテンによって閉ざされている。

そいつは、いつの間にかそこにいた。

……ひょっとして、置かれている鏡の向こうから、やってきたのかもしれない。

嘲笑の笑い声が響いた。底知れない軽蔑の声。

「汚らわしいわ。そんな眼で見ないでくれない？」

悪意と敵意と嘲笑の入り混じった声が響く。

「……何よ」

ニアスは鏡越しに、いきなり姿を現したそいつを睨み付ける。

「あら？ 私は彼に代わって代弁してあげているだけだけど？」

ニアスが言い返そうとした言葉の先を読んで、そいつは告げる。

全身を白と黒で纏っている。

その白は清楚というよりも、何処か邪悪だ。

「貴方だって、男の人を好きにくらいなるでしょう？」

「いつか、言った筈よね？ 私は男も女も嫌いだって」

彼女は、悪意に満ち満ちた笑い声を上げた。

「男は気持ち悪いわ。女は胸糞悪いのよ」

冷然と断言する。

「私は誰も好きにならない。私は誰も愛さない。私は鏡だけがあればいい」

……………。

何処か、倒錯的というよりは、空虚さを感じた。

まるで、信じられる者は、自分しかいないのだとでも言いたいような。

「そんなに甘名の事が好き？」

今にも、彼女は笑い転げそうだった。

ニアスは彼女が苦手だ。

というか、明確に嫌いだ。

いつだって、憎らしい。

会うたびに、その憎らしさが増大していく。

この女。本当に、気味が悪い。

「何よ」

暗い感情を込めて、ニアスは言った。

「貴方、私の事が嫌いでしょう？」

萌黄色の髪をした少女は悪意のある笑みを浮かべる。

まるで、死刑宣告を告げるかのような口調。

とても楽しそうな笑顔。

「でも、言っておくわよ。きっと、甘名は私なのよ？」

鋭利な物言い。

「私はフェンリルの精神の一部。そしてフェンリルはエタン・ローズの一部。その事実から貴方は眼を背けるわけにはいかないんじゃないかしら？」

ふっふっふっ、と。とても楽しそう。

「嘘よ」

「そうかもしれないわね。でも、仮説としての可能性は高い。私達は合わせ鏡。コインの表と裏。甘名の押し殺している一部が、私の人格と為っている。同時に、彼は私の被造物である可能性だって高い」

ニアスは思う。感じる。

それは、本気で言っているのだろうか？

彼女の傲慢さから、自身を彼の付属物だと考えるとは、とても思えない。

そして、意味深な発言。彼は私の被造物？

まるで、延々と自問自答を繰り返しているかのような。

二つの鏡を合わせて、どちらが本当の世界なのか、と考え続けているかのような。

「ふふっ。私達はナルシストでエゴイスト。自分以外には愛せないし、好きじゃない。だから、貴方のその感情は無為よ」

冷笑の言葉。

「貴方なんか大嫌い」

ニアスは心底、傷付いた顔をする。

その相貌を見て、レイアはとても嬉しそうだった。

「……ああ、でも」

ふと、思い付いたように言う。

「私を殺せばいいじゃない？」

余りにも当たり前のように言う。

ニアスに、というよりはまるで自分自身に問い質すかのような口調。

自分自身に問い掛けているような。

「私を、何らかの方法で消滅させれば。私は彼の中からいなくなるのかもしれない。やるだけの意味はあるわ。それは私自身が興味がある。私は彼に依存して存在しているのか。それとも私は彼から完全に独立して存在し得ているのか」

彼女は延々と自問自答を、繰り返していた。

ニアスは、そんな彼女を睨み付け続ける。

「へえ？ あなた、素直に死んでくれるの？」

「まさか。貴方ごときに殺されてやるのもつまらないものよねえ」

十

結局、いつまで経っても、クラスタの暗部には辿り着けなかった。

ニアスは、現れたレイアの相手にも憔悴していた。

ケルベロスとキマイラは、捕虜となったヴリトラを見張っている。

彼の言葉に嘘は無い。実際、罠に嵌めようというわけではないみたいだった。

彼の話进行分析していく限り、どうも、このクラスタというものは、ちゃんとした統制の取れた組織でない事は分かる。

十

赤い少女は匂いを追っていった。

二つの匂いに覚えがある。

よく知っている匂いと。

独特の薔薇の香り。

何処で嗅いだのだろうか。

思い出せない。まるで、前世の記憶のような。

「あー、あーっ」

彼女は喜びの声を上げた。

自然体で、感情を露にする。

何物にも加工されていない、感情の発露。

休憩室の裏口から、二人の女が出てきた。

「あたしに付き纏うのは止めてくれない？」

「あら？ 貴方が、フェンリルに付き纏っているのでしょうか？」

黒いローブを纏った女は、心底、彼女が憎らしそうだった。

二人共、何だか、本当に仲が悪そうだ。

きっと、相性が悪いのだろう。

赤い少女は構わず、彼女達に駆け寄っていく。

まるで、よく知っている友人のように。

かつて、実際、そうだったのかもしれない。

すると、二人の女は、そんな彼女を見て、呆けたような顔になる。

特に、黒いローブの女は、本当に信じられないものを見ているような顔をしていた。

「死んだ筈じゃ……何で？ ……」

黒白の衣装を纏った女は、淡々と、そんな彼女を眺めている。

彼女が会った時よりも、随分と髪が伸びていた。前はロングボブの長さだったが、その萌黄色の髪は、今は腰の近くまで伸びている。

「また、貴方か」

二人とも、微妙な顔をしていた。

一人は困惑し。

もう一人は、呆れたような顔。

……………。

動いていたのは、黒白の服を纏った女の方だった。

眼にも止まらない速度で、赤い少女アンサーの下へとやってくる。

そして。

有無を言わずに、アンサーの喉に手刀を入れて、地面に叩き込む。

そして彼女を組み敷いて、そのまま斧で薪でも叩き割るように、渾身の拳を顔面へと振り下ろ

していた。

拳の殴打は幾度となく続いていく。

身動きが取れないように、脇腹に片足を乗せて、そのまま転がるように、何度も何度も、彼女の顔面に全体重を乗せた拳を下ろし続ける。完全に、マウントポジションを取られているので、赤い少女は一切の抵抗が出来ない。

瞬く間に、アンサーの顔面は原型を止めない程に、粉碎されていた。

そして、踵を返して、黒いローブの女の下へと戻っていく。

「……アンサー、何で、“生きていた”のかしら……」

生きていた、さながら過ぎ去った事に対しての、過去形でものを言う。……。

ニアスは本当に、不思議そうに首を傾げていた。

「何者かが復活させたのかしらね。それとも、何らかの能力で、私達の記憶から引きずり出してきたのか」

レイアは淡々と分析していた。

「……それにしても、あなた、容赦無いわね……」

「あら？ 困るんじゃないの？ 何にしる、敵側が送り込んできたのは間違いないじゃない」

そう言いながら、彼女は右手に付着した真っ赤な血を、自身の能力で消滅させていく。黒い光がレイアの右手に集まって、血液を空気へと溶かしていった。

ニアスは思い出したように、外を見回す。

「ああ、用足しに行く途中だったわ、あなたは羨ましい身体よね」

そう言いながら、ニアスは振り返る。

ぷちゃり、ぷちゃり。

赤色の少女は、起き上がっていた。

顔は完全に潰れていた。

しかし、少しずつ再生していく。

「うう、うううううああああああつ、うううううう、うああああ」

赤い少女は唸り続けていた。

「そういえば、そういう能力だったかしら」

レイアは面倒臭そうに言う。

むしゃり、むしゃりと、赤い少女は、地面に手を置いて、そこら辺に生えている雑草を引き抜いては、それを口の中へと放り込んでいく。

レイアは本当に面倒臭そうな顔で、そいつを眺めていた。

「はあ……」

ニアスは溜め息を吐き出す。

そして、土や石を咀嚼して飲み込む少女に向かって言った。

「アンサー」

赤い少女は振り返る。

顔はぐちゃぐちゃに崩れていた。

剥き出しの眼球が、ニアスの視線と交差する。

瞬間。

ニアスの能力が発動した。

途端に、赤い少女の挙動が更に、おかしくなる。

がたがた、と全身を痙攣させていく。

そして、うああああ、と叫び声を上げながら、身体を震わせていた。

ぐるぐる、ぐるぐる、とアンサーの首がフクロウのように、回転しながら、回り続ける。ニアスの能力の効果ではなく、アンサーの肉体の構造がそれを可能にしている。

「うしゅしゅしゅしゅ、うっしゅしゅしゅしゅっ」

奇妙な奇声を発し続けていた。

それは、とても人間のそれとは思えない雄叫びだった。

「はあ……。あれで、しばらくは大丈夫でしょ」

黒いローブの女は、本当に面倒臭そうな顔で、休憩所の外にあるトイレへと向かっていった。汚くないといいな、と頭の中で思う。

萌黄色の髪をした少女の方も、面倒臭くなって、休憩室の中へと戻っていった。

後には、人間の声ではとても計り知れない異常な叫喚だけが、鳴り止まなく続いていた。

十

「なんで、あの二人、仲悪いんだろうな」

フェンリルが馬鹿馬鹿しそうに羊角の女に訊ねた。

「私に聞かれても、ねえ？」

ケルベロスが、仮眠を取っていた。

ヴリトラも寝ている。

みんな疲労している。

クラスタに突入して、約六時間くらいが経過していた。

すっかり、夜になっている。

フェンリルとキマイラの二人は、計画を練っていた。

まず、ヴリトラから聞き出した情報によれば。

ロータスの他に、中核として、アーティという奴が存在する。

そいつは、ロータス派と分かれて、クラスタ内で半分独立した組織を作っているのだそうだ。そして、思想的にはアーティはロータスと違っている為、分裂が起きつつある。

アーティから見れば、ロータス派は惰性で生きているだけにしか見えないらしい。

そして、ヴリトラはどちらにも付いていないという。

ただ、ロータスの側近である十人いるという『蓮』の一人だという。

十人が十人とも、能力者というわけではないらしい。

何故、十人の側近を設けたかという、それはロータスの気まぐれなんじゃないかとの事だ

った。

「どう思う？ キマイラ」

「さあって。私も分からないわねえ。貴方の相棒に聞いた方がいいんじゃないかしら？」

フェンリルは、カーテンが開けられた、休憩室にいる二人を見る。

二人とも、何だが、陰険そうにたまに口論になっていた。

なんだ、あいつら。それが素直な感想だった。

「あのニアスって子。貴方に好意あるわよ」

キマイラは断言する。

「……はあ？」

フェンリルは呆けたような顔になった。

「何かあったの？ 昔」

「いや、あんまり覚えてない。印象に残っていないんだけどな」

そういえば、この前、『聖なる海溝』という場所で会ったか。

「何だったかな。この建物の裏庭で、アンサーっていう赤い少女と会ったらしい。取り敢えず、完全には始末せずに様子を見ているらしいが」

フェンリルは、アンサーという少女の概要を、羊角の女に話す。

「ふうん、能力がやっかいね。おそらくは、復活させる能力者が一人いる」

「……いや、あのアンサーってのは正体不明らしいんだ。アンサー単独で甦ったのを、ロータスの一味が何らかの手段で手に入れた、という事も考えられる」

「なるほど。まあ、どちらにせよ。何か、引っ掛かるのよね」

キマイラは煙草に火を点ける。

「ヴリトラといい、アンサーといい。私達に、さも。返り討ちに合わせる為に送り込んだとしか思えない」

それを聞いて、フェンリルは首を捻る。

「その理由は？」

「もしかしたら、それが奴らの中にいる、誰かの能力に関係しているのか。それとも、ただの様子見でしかないのか」

彼女は煙草の灰を、地面に叩いて落とす。

「アーティとクライ・フェイスって奴の能力が気になるな」

黒白の青年は言った。

「ええ、やっておくべき事は。ケルベロスが、嫌がっていたけれども、試しに誰かを、そいつらの能力の攻撃の生贄になって貰う事ね」

フェンリルは眉を顰める。

「クラスタ内にいる住民は、能力の指定外らしいし。まさか、オレ達の誰かが敢えて受けてみる、っていうリスクも避けたい処だしな」

「本当はやっておくべきだったのよ。クラスタの外にある街にいる、適当な人間を捕まえて、攻撃を受けて貰うって事を」

キマイラ、こいつ。……。

達すべき目的の為なら、何の手段も選んでいない。……。

「お前って、本当に何と言うか非情だな」

非道と言い換えてもいい。

「……昔はそうでもなかったような気もするけどね。子供の頃とか」

キマイラは少し困惑したような顔になる。

「そうか、こういう事って、やっぱり非情、というか非人間的なのかしら？」

今度は、フェンリルが困惑する番だった。

「いや、オレも本音を言えば。他人なんてどうでもいいけど、何だろう。やはり、後味が悪いからな」

「私は……人の痛みが分からない、人の苦しみが……」

キマイラは無感情に、呟いた。

フェンリルは、どう答えればいいのか分からなくなった。

「フェンリル」

彼女は言う。

「私は、強くなり過ぎて、その……心が壊れてしまった。最初に貴方と会った時の事、覚えている？」

彼女は言う。

「ああ、どうだったかな」

「私を、怪物を見るような眼で見てなかった？」

「思い出した。お前、サイコパスだと思った」

「やっぱり、そうか」

何だか、悲しそうに見えた。

「おかしい、とはよく言われる。狂っているとも、でも、その評価はきっと、正しいのでしょうね」

「まあ、基本、人を人として見てないよな」

「これでも、友達に対する思いとかは強いつもりだけれどね。もっとも、今は友達とかいないんだけど」

フェンリルは苦笑した。

十

「それにしても。こういうの、あんまり好きじゃないのよね」

レイアはタロット・カードを広げて、キマイラを占っていた。

「こういうの？」

「何ていうか。所謂、“馴れ合い”。あんまり好きじゃないわ」

そう言いながら、彼女はタロットをめくった。

いつもの、ケルト十字法。それが一番、占いやすい。

「ええと。キマイラ、貴方、最近、大切な人間でも出来たの？」

「……………そうね。出来たわね。女の子かしら」

「守りたい、と」

「ええ」

「それから、そうねえ。貴方も、決して油断慢心しないでしょ？」

「そうなのかしらね」

「しばらくは、ずっと死なないわ」

「……それはよかった」

「それで。貴方、少し前に死にかけていたわね。過去に破滅を意味する『塔』が出ている。深層心理の部分に『死神』。影響されているものが、友愛を意味する『カップの6』」

レイアはカードを読み込んでいく。

その後、キマイラの詳細を言い当てていく。

羊角の女は驚愕の表情を浮かべていた。

「そういえば、レイア。貴方、馴れ合いは嫌いって。貴方、コミュニケーション能力、それなりに高そうに思えるけれど？」

「嫌いよ。友人なんていないわ」

「あら、そう。私はこれで、お友達、欲しいけど。一緒にお茶出来て、映画でも一緒に見に行つて」

「そう。それは残念ね。貴方、他人に対する共感能力の欠如。反社会性人格障害って奴なのよ。マトモに人と接する事なんて、出来ないわ」

「傷付くのよね。そう言われると」

「嘘ね。貴方が傷付く？ 笑わせないで。貴方は自分の感情なんて分からないわね」

「その通りよ。……だから、困っている」

「いつか、大切な人間を壊してしまいそうだから？」

「そう、どうやって接すればいいか分からない……」

レイアは、少し黙った後に、真剣な眼で言う。

「壊せばいいんじゃない？」

「そういうわけにもいなくてね」

キマイラは少し笑う。

「あら、そう」

彼女はすぐに引き下がった。

特に韜晦があって、言ったわけではなかったみたいだった。

レイアにサディズムは無い。

キマイラにはある。

何が違ったのだろうか。

「ねえ、レイア。本当に、貴方は一人が好きなの？」

「ええ。独りがいい」

「私は友達、欲しいわ」

「私はいないわね。……もう、いない……」

レイアは言った。

キマイラは黙る。

二人とも、沈黙した。

しばらくの間、二人共。黙り続けていた。

キマイラはごそごそと、煙草の箱を取り出す。

煙草に火を灯す。

レイアはさり気なく、煙を吸わないように離れる。

……それは唐突だった。

キマイラが頭を抱える。

何かに苦しんでいるみたいだった。何か、過去の記憶か何かでもフラッシュバックしたような

。「私は……破壊した人間に興味なんて、無い……」

彼女は呻くように言う。

何かの不調だろうか、レイアは思う。

キマイラは両眼を見開いていた。

強大なまでの殺意が、彼女の中から溢れ出してくる。

キマイラは服の中から、針を取り出した。

そして、自分の頭蓋に刺し込む。

ガクガクッ、と彼女の全身が痙攣している。

レイアは至った。

……まさか。これは、ニアスの『モーザ・ドゥーグ』？

ニアスの方を見る。

彼女は眠りに付いていた。

ぺたぺたと。

口から沢山の涎を垂らし続ける、赤い少女、アンサーの姿があった。

ニアスが放置していた少女。

突然。

レイアの胸や腹の辺りに、打撃が飛んでくる。

レイアは咄嗟に、後方へと飛んだ。

しかし、そのまま壁に激突して家具などに勢いよくぶつかる。

アンサーは首をぐるぐる、ぐるぐる、と回転させていた。

少女は、確信する。

あの攻撃は、確かに自分のものだ。

すこん、とアンサーの額に針が刺さる。

ほぼ、錯乱しながらも、キマイラが放った針だった。

それは少々太めで、アンサーの頭を壁に完全に打ち付けていた。

そして、すぐに。

レイアは起き上がる。

そして、辺りを見回した。

キマイラも起き上がる。

自分の頭から、針を抜いた。

二人は顔を見合わず。

「……何？ 今の。記憶と、脳の中を搔き毟られたような攻撃。咄嗟に頭に針を入れて、抜け出したけれど」

「キマイラ。貴方は私よりも、あそこで寝ている女と相性がいいようね」

三竦みだな、と思った。

『聖なる海溝』での事を思い出す。

レイアはキマイラには普通に勝てる自信があるが、ニアスの方がやっかいだ。もっとも、彼女の攻撃の瞬間における癖や行動パターンなども、ある程度把握して、もう負けるつもりは無いが。

キマイラはまた、両眼を見開いて、とっさに後ろに仰け反る。

何も無い空間から、勢いよく何かが飛んでいて、キマイラの右手の甲を貫き、地面へと孔を開けた。

キマイラは忌々しげに、自分の孔の開いた手を見る。

そして、左手の指で触れて、開いた孔を塞いでいく。

「今の私の攻撃が、撃ち込まれてきた……？」

二人は、赤い少女を眺める。

ぐしゅぐしゅっ、と顔が変形していつている。

十

「さてと」

ケルベロスとフェンリルは起きていた。

ニアスとヴリトラも、そいつを見ていた。

交互に、寝たり起きたりして、周囲を見張っていた。

ケルベロスは少し困惑する。いつの間にか、レイアという少女が増えている。気にするな、とフェンリルとキマイラに言われて黙る。好き勝手に気分で介入しに来ただけだろうと。何処から来たのか、彼らはケルベロスに答えなかった。

赤い少女。

アンサーが壁に打ち付けられている。

キリストのようだ、と見るには、余りにも滑稽だ。

顔面の筋肉が萎縮、伸縮を繰り返して。ぐしゃぐしゃに変形した顔になっている。

顔が完全に崩れていた。ぷつ、ぷつ、と出来物まで出来始める。

出来物から、大量の膿が零れ落ちていく。

ニアスは、少し、後ろめたそうに見ていた。思わず、両目を手で覆う。

何だか、いたたまれない。

レイアとキマイラは二人して、それを真剣に眺めている。

「なるほどね。やはり、この少女を使って、敵は何か仕掛けてきている」

キマイラは言った。

彼女の能力は治癒とは少し違うので、自分の右手が未だに痛いと思痴っていた。

「反射かしら？」

萌黄髪の少女は言う。

先ほど、レイアがアンサーに放った拳が、レイアの下へと返ってきた。

キマイラにもだ。

「他人の攻撃を吸収しているのかも」

キマイラが言う。

「フラッシュバックとか」

ニアスも述べてみる。

「どれかは知らないけれども、分かった事がある」

フェンリルがヴリトラの方を見る。

「この役目、最初の計画ではお前の役割だったんだろうな」

猫顔の男は俯いた。

「俺には分かりません。本当です」

「なるほど……。教える必要は無いんだろう、勝手に送り込めるんだろうな。この能力者の全貌は知らないんだな？」

「はい……」

様子見だろう。

あちらは、遠くから、此方を観察しているのだろうか。

「幾らでもやり方はあるけれども、何も手段を選んでこなかったら、かなりやっかいね」

「ええ」

キマイラとレイアの二人は頷く。

「敵は味方にどれだけの犠牲を念頭に入れていると思う？」

キマイラは煙草を取り出す。

「まだ、不明ね。そもそも、この子が来たのも計算外だったかも」

「言われてみれば、そうかもしれないわね」

彼女はヘビー・スモーカーなんだろうなあ、とニアスは思った。

「後は、規模だろうな」

フェンリルが言った。

十

「そういえば、アンサーが見つかりません」

ロータスは朝の瞑想を終えて、食事をしていた。

今日は吸い物だ。

「あら、そういえば何処にいったのかしら？」

ロータスは箸を置く。

「可愛い子だから、ちゃんと手元に置いておかないと」

彼女の声を聞いていると、安堵感を覚える。

そういえば、ロータスが気に入って、優しく髪を撫でていたっけ。

「あれは何なんでしょうね」

カイリは訊ねた。

「そうね。あの子は、奪われ続ける子。周りのみなに、ずっと酷い事をされてきたのね。きっと、これからも。そうなんでしょう。何度も生き返って。何度も殺される。可愛い子。とても悲しい子なのよ。仲良くしてあげてね？」

不可解な言葉だ。

「奪われ続ける子ですか……」

カイリはあの少女の顔を思い浮かべる。

純真無垢で。何物にも染まれず。それ故に何物でもない。

「わたし、あの子。とても大好きだな」

彼女は言った。

「そうなんですか」

「ええ、だって彼女は無垢だと思う。誰も彼女に価値や意味を与える資格なんてないんじゃないかって」

十

「処で、あなた達ってすごく仲良さそうに見えるのだけど」

ニアスは三名に訊ねる。

彼女は興味深く、この三名のやり取りを見ていた。

フェンリルは眉を顰める。

レイアはせせら笑うような顔をする。

キマイラは困惑したような顔をする。

「オレは彼女達と仲良くした覚えは無いけど？」

「ええ、まったく同感だわ。おぞましい」

「よく分からないわね」

そう言いながら、黒白の少女はタロット・カードを取り出して、キマイラ相手に占いをしてあ

げて。羊角の女はフェンリル相手に、洋服の解れた部分を直してあげ。ゴシック・ロリィタのドレスの男は、レイア相手にダージリンの紅茶を作っていた。

ニアスは本気で、分からない、といった顔で首を傾げる。

.....性格のクソ悪い者同士、反りが合うのかしら。

はたから見てみると、本当に奇妙に映る。

関係性とは、分からないものだ。

三人共、微妙にお互いの距離感を探り合っているかのようだった。

「処で、レイア、キマイラ。お前らはどっちが強いんだ？」

まるで、悪意に満ちた助言でもするかのように彼は言う。

二人は、しばしお互いを分析し合っているみたいだった。

「二分くらいかしら」

「いや、貴方程度なら、一分で終わる」

「最初の五秒が勝負なのよね」

キマイラは言った。

数分間、彼女達は沈黙していた。

「まあ、普通に私が後ろから殴るわね」

「あら。私が何か仕掛けてこないとでも？ 頭部は罨かも」

「なら、寸前に既に、私は見抜いているわ」

「でしょうね。.....うーん、そうなのよねえ」

キマイラは飄々とした顔になる。

そして、羊角の女は両手を広げた。

「私の負けね。色々、練るけど。駄目ね。相性も良くない」

「あら、あっさり引き下がるのね」

レイアは笑った。

「実際にやってみたらどうなんだ？」

フェンリルは少し、邪悪な笑みを浮かべる。

「口上だけなら、何とでも言える」

「まあ、最初の一撃を当てた方が勝ちなんだけど」

キマイラは答えた。

レイアはくだらなそうな顔をする。

「興味ないわ」

「私も戦う理由が何も無いわねえ」

二人の関係は、そのような形みたいだった。

何だか、どっちもお互い、戦う事に意味を感じていないみたいだ。

仲良さそうだなあ.....ニアスは少し羨ましげに見ていた。

.....うーん。

.....ヒネかれている者同士、相性が合うのかしら？

よく、分からない。

しばらくした後。

朝になって、そろそろ出発する事にする。

ヴリトラは眠気と陰鬱さの入り混じった顔をしていた。まあ、普通に心労が一番、酷くなるのは捕虜である彼だろう。

赤い少女は結論として、放置していく事にした。

下手に破壊するにしても、再生されるし、攻撃が何らかの形で跳ね返ってきているのは確かだった。身動きを取れないまま、そのままにする事にした。

まあ、何も出来ないだろう、との結論だった。

クラスタの迷路を作っている、『ライト・ブリンガー』も『コカドリーユ』も、詳細は分からないと、ヴリトラは言う。ただ。

「僕の見解はですねえ。……見えなくするんじゃないかなあ、と。見える筈のものが、見えなくなるっていうか」

ライト・ブリンガーのアーティという人物の詳細を聞いていた。

「なんですかねえ。俺が言うのもアレなんですけど。みんな、信じたいものしか信じてないっていうか。……見たいものばかり、見たくなくなっているのかなあって」

ケルベロスはその話を真剣に聞いていた。

ニアスは困惑したような顔になる。

何だか、自分自身に言われているようだ。

他の三名も、一応、彼の話聞いていた。

「私からしてみれば、人間なんてみんなそう映るけれど？」

萌黄髪の少女が口を挟む。

そして、せせら笑った。

「そうそう」

黒白のドレスの青年が頷く。

「……そうなんですかねえ。僕には分かりません。でも、何ていうか、アーティさんの場合は、見て分かるっていうか」

フェンリルは、何かを理解して。凄く嫌悪感を露にする。

「ふうん？ なら、私はロータスっていう女に会ってくるわ」

黒白の少女は、嘲笑うかのように言った。

「アーティだけ。そっちの方には、もう何の興味も湧いてこない。大体、分かった」

「ええ、大体、分かったわね」

キマイラも頷く。

そして、羊角の女は煙草の箱を取り出して、火を付けた。

本当に、煙草ばかり吸っているなあ、とフェンリルは嫌そうな顔をした。

ヴリトラは首を傾げた。

レイアは答えない。

キマイラが持論を口にしていく。

「アーティっていう人。分かりやすい人なんじゃないかねえ。分かりやすく教祖になりたくて、分かりやすく所謂、“綺麗事”ってのを言っているんじゃないかしら？」

「綺麗事、ですか」

「そう、愛とか夢とか希望とかお好きなんじゃないの？」

「あら、いいじゃない。面白いくらいに、それを言い続けると、人間って不幸になるわよ？」

「レイア。それを幸福だって思っている人間だっている」

フェンリルが冷ややかに言った。

三名の共通認識はこうだった。

アーティとかいう奴は、どうやら取るに足らないが、人間の弱さを利用するのが巧いみたいだ

。

三名とも、所謂、綺麗事とかいうものの、一切を信じていないみたいだった。

三人が三人共、それぞれ禍々しくマイナスのエネルギーを周囲に纏っていた。

言うならば、情念。悪意。冷酷さ。非人間性。そのような得体の知れないものを発している。

そのような異質なものが、空間に佇み、凝縮されている。

ヴリトラがさり気なく、黒いローブの女に囁く。

「俺、……あの人達、怖いんですけど……」

「大丈夫。……あたしもだから」

ニアスは全力で、彼に同意の言葉を言う。

先ほどから、同じ場所をひたすら迂回している。

同じ路地に来るが、歩く場所を違ってヴリトラが道を教えている。

まるで、見えない空間と空間を切り分けているみたいだった。

五名はどうすべきかを考えている。

それは、おそらく五名とも違う。

ケルベロスはず、何よりもまとめ役と、任務をこなす事を考えている。

ニアスはニアスで、ドーンで生きるという事を迷いながら模索したいと思っている。

何が出来るか分からないが、何かを為したい。

後の三名は何を考えているのか分からない。

全員、どこか気まぐれのように見えるし。逆に何か独自の目的を見出したようにも見える。

キマイラは紙とペンを取り出して、何かを書き続けていた。

「こんな処かしらね？」

おおざっぱだが、地図のようになっている。

しっかりと、要点は細かく描かれていた。

レイアとフェンリルの二人は、それを見て神妙な顔をしていた。

「あの城の、『ヨルムンガンド』を思い出すな。奴とどちらが強いのだろうか？」

「こういうのはどうかしら？」

キマイラは二人に言う。

「私がアーティの方を始末する。貴方達二人は、ロータスを」

三名は計略を練っているみたいだった。

ニアスは彼らと彼らの会話を聞いていない、ケルベロスを交互に見る。

……リーダー。完全に置いてけぼり。……あの人達って、本当に自己中ね。……。

「この敵の攻撃、大体、分かったわ」

キマイラは二人に話していた。

「パターンが分かった。迂回の仕方。それから、おそらくは……空を飛べるなら、飛んでいった方がいいわねえ。空はおそらく、効果の外だ」

キマイラは書き写した地図を、二人に見せていた。

レイアとフェンリルは頷く。

「ロータスとかいうの、どうでもよかったんだけど。まず、私が会って話してみるわね。どれだけの奴なのかしら？」

「オレは彼女の周りを固めている奴らの方にこそ、興味があるな。何で、カルトなんかを崇拝するんだろうな。オレは幹部共と話してみたい」

「三人とも、役割が決まったわね」

キマイラが纏めていた。

ケルベロスを完全に無視して、勝手に。……。

ニアスは、もう完全に呆れていた。

……どうすればいいのかな、あたしは？ つか、もしかして、一番、振り回されているのって、あたし？

キマイラは地図に印を付けていっている。

おそらく、当たりを付けているのだろう。

「纏めてみるわね。色々、迂回していたけど。このクラスタ。ビルが七百から八百の間くらいあって。形は菱形に近い。それは空から確認出来る。問題は、人間が住んでいるのはおそらく、百から二百。大半は廃墟のままなのでしょうね」

クラスタは、元々は、戦争下においての集落地だったとも聞いている。物質、兵糧の保管場所だったとも。

「アーティは多分、相当、人間心理に付け込むのが巧い。私は大丈夫だけど、もし鉢合わせたら、貴方達、気を付けなさいね」

「愚問ね、私を何だとも？」

レイアは相変わらずの調子で返す。

「同感だな。カルトに嵌まる奴の心情なんて理解するつもりもない」

彼らはケルベロスに聞かれないように、打ち合わせをしている。

ニアスはこのチームのリーダーに、彼らのやり取りを話すべきかどうか悩んでいた。

彼らは別にリーダーに悪意があって、このやり取りをしているわけではないように見えた。何と言うべきか。合理的に物事を進めようとした結果、ケルベロスとニアスの二人を置き去りにするという決断を下しているような……。

ニアスは思い切って囁くように訊ねた。

フェンリルに近寄る。

「え、えと、あの。ケルベロスさんの指示は……」

「駄目だろうな、彼は」

フェンリルは飄々と言う。

「えっ？」

「迷っている。ヴリトラを見てからなのか。それとも、この任務に入る前からなのか。このクラスタってものの存在に対してな。今、ケルベロスが死ねば確実にアサイラムはヤバいだろうな。じゃあ、申し訳無いが、彼には道化でいてくれた方が有り難い。オレ達、三人で、ロータスとアーティを始末する」

羊角の女がニアスを見た。

「そうよ。かなりヤバイのよ。この敵は。貴方とあの男じゃ無理ね。甘い。それが、かなり命取りになるわよ。言っているのかしら？ 引き返した方がいいって。貴方達は」

キマイラは淡々と告げていく。

「……そうなんですか？」

ニアスは困惑したが、何故か、このキマイラという女に対しては、萌黄髪 of 少女のような腹立たしさは感じなかった。

目的を達成させる為に、合理的に思考した結果辿り着いた結論を述べているだけとでも言うべきか。……。

「まず、あの赤い少女を使って攻撃が跳ね返ってきたのも謎なんだけど。それから、アーティの“結界”。歩く道筋を誤ったら、多分、周囲の空間がまるで認識出来なくなるとか、見えなくなるとか、って状態になるんでしょけど。問題は規模。こんな何キロもあるビルの密集地帯にかなり複雑に張り巡らされている。かなり、やっかいな能力者なのよ。ひょっとすると、他の応用の仕方があるのかもしれない。だから、私が始末しなければならない。私なら、攻撃を受けても抜けられる可能性が高いから」

「あの男、ロータスとかいうのに対峙した時に、本当に殺せるのかしら？」

黒白の少女が口を挟んだ。

ニアスは少し、ムッ、とする。

「そういう事だ。だから、三名で倒す。お前らはヴリトラを適当に見張っていてくれ」

「あのね、あんた達……」

段々、腹が立ってきた。人を何だと思っているんだ。

「重要な役割だ。ニアス。あのヴリトラ、……かなり強いぞ。猫被っているが。いざとなったら、ケルベロスが始末しなければならない。お前の力も必要かもな？」

三名とも、真剣な表情だった。

一歩も引くつもりはない顔付きをしていた。

ニアスは気付いた。

ヴリトラ……。

クラスタに仕掛けられた能力の性質上、捕虜にして道案内せざるを得なかったが、キマイラは早めに始末しておきたような顔を、ずっとしている。

そして、彼は未だ、一切の能力を明かしていない。

更に、気が付いた事。

ケルベロス。……。

彼は本当に、甘い。

優し過ぎる。

それが、裏目に出る可能性が高い事を、彼ら三人は示唆している。

「まあ、大体、ヴリトラの能力も推測している。ケルベロスは彼の能力を何処かで見聞きしていたみたいだったな。エ……何だったっけ。その筋では、有名なのか？ 知らないが、彼が極めて、ストレートに破壊力のある能力を持っている、って事だけは分かる」

「そうなの？」

「うん、立ち振る舞いだけで分かるんだ。あいつ、面と向かって敵に挑んでいく事に、絶対の自信を持っている。策略なんか練らずとも、ストレートに強いんだろうな」

「正面切って、全力でやったら、私じゃ勝てないかもしれないわね」

キマイラが少し後ろ向きに言った。

そして、付け加えた。

「そもそも、私達四名をヴリトラだけで始末させようとしていた事を忘れちゃいけないわよ。他の能力者の小細工を抜いても、そういう自信はあると見ていいわ」

ニアスは思わず、絶句していた。

何か、反論してやりたいが、反論の言葉が思い浮かばない。



カイリとクライ・フェイス、そしてアニマとロータスの四人で、トランプで遊んでいた。
いつも、泣き顔の男が強い。

大体はポーカーだ。金は賭けない。

瞑想が終わると、彼女は大抵、こんな風に遊んでいたりする。

本当にみな、気分屋だ。

「2のスリーカード」

泣き顔は言った。

手付きが、また流麗だ。彼は昔、そういった仕事をしていたらしい。カジノで働いてただとか

。一応、ロータスいわく。こういった遊びなども、修行の一環なのだという。

因果律、統計率を調べて、コントロールしていく。

カード・ゲームも瞑想の一種だ。

図柄などを追って行って、自分自身と対話出来る。

そういえば、クラスタでは定期的に修行も行う。

荒行みたいなのは無い。

大体が、一見、遊びに見えるものばかりだ。

しかし、遊ぶ事。実はそれ自体が、かなり困難を極めている者も多くいた。

フラッシュバックに苦しむ者は、まともに他人との対話が出来ない。

戦争やテロを経験した者達は、特に、心的外傷などに苦しんでいる。

だから、普通に生きる事が大切なのだろう。

食べ、飲み、寝て、遊ぶ……。

それが出来ない。

それすらも出来ない。

もう、彼らにとって現実なんて無い。全ては壊れてしまった。

ただ、空ろな命のように、空気に漂うように。

彼らは生きている。

生きていると言えるのか。

……………。

両眼は何も見っていない。

きっと、いつかの戦争や貧困だった時代を思い出しているのだろう。そこから、永遠に抜け出せない。

そう。…………。

報われない人生もある。

だから、報われる人生とは存在する。

カイリの大嫌いな世界。何もかもが壊れてしまえばいいと思う。

決して、愛されない人間が存在しているという事。

報われない希望があるという事。

死後の世界は無く、天国も地獄も死後には存在しない。

ただ、現実の世界にのみ存在する。

罪や悪、それらのものが裁かれる事の無い現実。

それが、心の傷となって、此処では露になっている。……………。

此処には、きつとこの世の最後に満ちている。

悲哀、憤怒、歓喜、絶望。

感情がとぐろのように、渦巻いている。

その感情に出口は無い。ただただ、闇ばかりが日々、凝縮されていく。

「そうだ、カイリ。あなたも、私の視ている世界の根源を視る？」

ロータスは無邪気な笑顔を向けた。

カイリは頷く。

すうっ、と彼女はカイリの肩に手を置いた。

彼女の『ヴィア・ドロローサ』が視ている世界。

この世界の闇の一端。……………。

十

濁ったドス黒い、緑色のイメージ。

沢山の廃棄物のような液体の詰まったタンク。

そのイメージの本流が押し寄せてくる。

ロータスの能力、“荊の道”。

彼女が瞑想によって視続ける幻視を、カイリもまた、視ていた。

それは。

さながら。

……………。

根源。

人間の持つ根源のイメージに迫ろうとしていた。

ドス黒いヘドロ色の本流。

環境汚染……？

とても言葉では現せない。

怖い夢だった。

カイリは目覚める。

まるで、世界の全てが無くなってしまったかのようなだった。

部屋が消えて、自分一人が白い砂漠の中に取り残されたかのような感覚。

斑の中に浮かぶような、緑の夢。

ああ。そうか、これは。

すぐに思い出す。

ロータスの能力が、カイリの中に流れ込んでいるのだ。

夢の続きをまた見たい。それは悪夢なのだが、何処か懐かしかった。何故だか、自分の人生の中でとても大切なのだという事が分かる。

未来が無い。希望が無い。自分はその中で生きていると思う。

ロータスからもアーティからもアニマからも、彼には希望を抱けなかった。何処か、みな、寂しい。

ロータスは教祖なのに、希望の言葉を口にしない。……………。

ただ、世界の真実を告げ続ける。

そこに希望は無い。ただ、真実だけが虚ろに漂い続ける。

アーティはロータスの世界を否定している。笑顔で笑って、頭の中に夢を思い描いている。生

きる事には夢が必要なのだろうと思う。夢を失ったカイリはおそらく、もう生きてはいない。
ただ、毎日が灰色だ。全てが燃え殻の灰のようだ。

そういう人間ばかりが此処には集まっている。

解答が無い。出口が無い。

生きる事にもう何の希望も抱いていない。

誰にも愛されない、と考える人間も此処には多い。所々、それに共感を抱いてしまう。教祖の愛すらいらないう人間も多い。此処はそういう場所なのだ。

全ては無で、全ては無価値。それをどこまでも正しいと思う事。

ロータスの言っている正しさ、おそらくはこの世界には何の希望も無いのだと突き付ける事。
もう、この世界は一度、死滅するしかない。

それでも、瞬間、瞬間における。幸福。これは、他人から与えられたものなのだろうか？

カイリはアニマを優しく撫でて。

手を握り締める。

そして思った。

生きていたくないな、と。……。

けれども、死ぬ事さえも無価値に思えて仕方が無い。

食事、睡眠。恋愛。友愛。

労働や芸術。

全てに生きている。

全てに、生きる意味が無いな、と思った。

けれども。強く感じるもの。

大きな母性愛に包まれているという感覚。

そう捉える者もいるのだろうか。

違うのではないか、と思う。

ただただ、死の匂いばかりが漂っている。

此処に陽は昇らない。

みな、心が徐々に腐敗していつているのだと思う。

何とかしなければならぬ。

どんなに此処で、真理と対話しても。

此処の住民は、この世界から疎外されているのだ。

みな、漂流者だ。

元の世界には戻れない。行くべき場所も無い。

クラスタに、留まるしかない。

いつも思うのだが、目覚めて部屋の外に出る為にドアを開ける。

底無しの暗黒が、目の前に広がっているのではないかという想像を掻き立てられる。

足元は暗い闇しかない谷底だ。

しばらくして、現実に戻り、地面に足が付いている事を理解する。

浮遊感はまだ残るが。確かに此処にいるんだ、という感覚に戻れる。
空を飛んで、何処かへと向かう事が出来れば、どれ程、いいのだろう。

.....。

生きる事は闘争ならば。

少なくとも、カイリは闘争を望んでいない。

ただただ、深海へと沈んでいくような怠惰な生を生き続けている。

未来なんて何も無い。

むしろ、未来の希望を信じる事を徹底して否定している。

思うのだ。

自分の能力『ファイヤー・ブリンガー』とは一体、何が出来るのだろう。

ロータスにとって、クラスタにとって、何が出来るのだろう。

そんな事を考えたりする。

炎。

炎のイメージ。

ごうごうと燃え盛る。

意識の奥底に封じ込められた。多重の意味。

生命とは炎に似ている。

体温。命のゆらめき。

螺旋を描くように続いていく人類の歴史。

燃え盛る炎。渦巻きのよう。

それが、肉体の中から、発せられているかのようだ。

内部のエネルギー。生命があるという事。自分の心臓の鼓動。

変わっていく炎の形状そのものが。

様々な命の形に模している。

少しずつ、歪みながら。

生々しい生を上げていくようだった。

ああ、これが、炎を齎すという事なのだろうか。

カイリは自分自身の内なる力と対話する。

自分に、何か出来ないだろうか。ロータスの為に。

あるいは、沢山の同胞達の為に。

彼らに、未来は無い。過去さえも、否定している。

どこにも、生きる拠り所が無い。

空虚さしかないカイリの中にあるもの。確かなもの。

それは、きっと、単純なもの。.....仲間を大切にしたい、と思う気持ち。.....

そんな事に気付いて、泣きそうになる。

カイリは優しいよね、とアニマは言う。

ロータスも、よく彼の頭を撫でる。

何だかなあ、と気恥ずかしく思う。

アーティに会いに行こうと思った。

ロータスの顔と思念を視る度に、彼はアーティの下に行きたくなる。

一体、何が正しいか分からないからこそ、自分の中で“間違っている”と思う相手に会いに行く。

十

レイアは指先から荊の蔓を生み出して、周囲に魔方陣のように張り巡らせていた。

蔓が伸びて行って、一定の箇所まで辿り着くと、生長が止まり、蔓が捻じ曲がっていく。

既に、クラスタに張り巡らされていた異空間は攻略していた。

一日近く掛かったが、キマイラは空気の質で。フェンリルは空間の微細な変化で、敵の攻撃の範囲を読み取るに至っていた。

ロータスとアーティのいる場所も大体、調べている。

始末しなければならない、二人。

ケルベロスとヴリトラと込み入った話を続けていた。

やはり、彼は駄目だろう。それが三人の結論だった。

彼はひょっとすると、この仕事に向いていない。

向いていないからこそ、優秀という面があったのだろう。だが、逆もまた然り、だ。

この敵は必ず殺さなければならない、何となく三人の間で結論が出ていた。

まず、レイアがロータスの下へと潜入して、様子見を行うという計画になった。

そして、殺せそうだったら、そのまま殺すと、レイアは言った。

彼女の相貌は冷淡だ。

何の感情も灯っていない。

殺人に対する、何の感慨も無い。

フェンリルは彼女の無感情さを知っている。

おそらく、きっと、彼女は悪の側なのではないか。少なくとも、彼はそう思っている。

おそらく、メンバーの中で、一番、人殺しを何とも思っていない。

おそらく、羊角の彼女よりも。ずっと。

「キマイラ。お前一人に任せていいのか？」

「ええ。私一人なら、全員、殺せる」

彼女は指先を軽く、指揮棒のように回す。

それは躊躇なく、殺せる、という事だろう。

それは、フェンリルには絶対に出来ない事だ。その点はかなり、彼女に期待していいだろう。

ロータスとアーティの二人を始末すれば、後は有象無象で、柱を破壊された建造物のように、勝手に倒壊していけだろうと踏んでいた。

レイアとキマイラ。

彼女達二人は、殺す事に何の迷いも無い。

躊躇も一切、無いだろう。

強いて上げるならば。

レイアにしろキマイラにしろ、殺す時に、別の感情で殺意にブレが出る事。

キマイラはきっと、僅かながらも、甘い部分が無処かあるだろうし。

レイアは面倒臭いと思っている部分がある。

しかし、二人は殺すと言ったら、必ず殺しに行く。

そこに、何の罪の意識も無い。

その辺りは、ドーンやドーンが狙っている平均的な賞金首の思考と同じだった。

何故、あれ程、殺す事に躊躇が無いのか、彼には理解出来ない。

しかも、殺せる人間に限って、ある種の爽やかささえ感じる。

逆に、彼はいつも、ドロツとしたような、情念に支配されていた。

フェンリルは少し、迷っている。

萌黄髪少女と、羊角の女。

そう、殺すのは、この二人なのだ。

結局、彼は手を下さない。

悪夢を見ない。

両手が赤く汚れていないという事。

けれども、きっとドス黒く汚れてはいる。

膨れ上がった殺意が誰にも届かない。

だから、余計に自己嫌悪に襲われる。

何かを壊さなければならぬし、誰かを殺さなければならぬ。

その使命を一度として果たしてはいない。

覚悟の問題なのだろう。

自分が一番、邪悪なのではないか、と思う時がある。

何処までも、他人の死を冷やかに見ている。

そういえば、色々な人間の死と立ち会ってきた。

彼らは様々な意志の下、死んでいったっけ。

.....

フェンリルは、自分自身を我侭で自己中だと認識している。

むしろ、それは世界やら他人に対する敵対心そのもので。

世界に対する断絶なのだと知っている。

たとえば、だ。

真っ青な空と、実り豊かな自然。それらは美しい、美しいけれども、何処か空虚に満ちている

。

他人に対する憎悪がきっと根底にはあるのだろう。

ただ、分かる事は迷いが無い、という事だけ。

一体、何の為に生きているのか分からないが、それでも他人の価値観に押し潰されたくない、

きっとそれは迷いが無いという事。

その事、自体には一切の迷いは無い。

ただ、気になった事。

教団の奴ら。

正直、彼はカルトが好きじゃない。

何かに依存しなければ生きていけない。その依存対象が世界と断絶した集落なのだという事。

しかし、どういう風に嫌いかと問われると難しい。

たとえば、レイアならば何かに依存していない人間は実質いないし、存在出来ないと言うだろう。

そして、それでもなお。その環の中から抜け出そうとするのが、彼女なのだが。……。

……ケルベロスはお人好しだった。オレは彼のそんな部分が甘いと思う。……腹が立つ。オレはお人好しにも冷酷にもなれない。ヴリトラに感情移入し過ぎだ。彼は甘過ぎる。けれどもオレはレイアやキマイラのように割り切れない。いつもオレは優柔不断……違うな。他人事だ。

彼は立ち止まる。

レイアとキマイラの二人から、少し距離を置いて、考え込んだ。

「さてと。あの辺りにいるんじゃないかしら？」

レイアは遠くのビルを指差す。

キマイラは頷いていた。

「迂回の仕方を見て、考察していたんだけど。どうやら、ロータスとやらのいる場所に、なるべく近付けないように、能力が張り巡らされているみたいね。だとすると、あの遠くにあるビル。あの辺りにいるのが正しいんじゃないかしら？」

レイアとキマイラ。二人の見解は一致する。

フェンリルは、そんな彼女達のやり取りを見ながら、ある種の結論に辿り着いた。

……そもそも、オレ達は悪の側なのだろうな。

彼はそんな事を思っている。

三人共、何かを守る為の戦いなんかじゃない。

ヴリトラを見て分かった。

彼は、大切な人間達を守る為に戦いたいと思っている。

ケルベロスもだろう。けれども。

自分と、レイアやキマイラは、誰かの為に戦っていない。

悪の側でしかないのだ。……。

それでも、少なくとも、レイアとキマイラは揺るがない。

自身もまた、いつも通りに動くつもりでいる。

ただ。……。

……クラスタの者達と、少し、話してみてもいいかもしれないな。

そんな事を、少し、思った。

……。

「あら。貴方、良い処にいるわね」

レイアは住民の一人を捕まえる。

そして、キマイラから借りた拳銃を持たせる。

そして、彼女は住民に命令する。

ひ弱そうな肉体の男だった。

「ねえ、この拳銃。あのビルの、あの辺りに撃ってくれない？」

レイアは無言を言わせない。

男は、言われた通りにする。

銃口からの、弾丸の発射。

弾丸の中には、エタン・ローズの薔薇の蔓が撒き付いている。

レイアは男に、『エクスターズ・ワールド』という存在と存在を近付ける能力を使っていた。

レイアの肉体は、浮上する。

撃ち込んだ弾丸と、自身の速度が同一線上になる。

レイアは。

瞬く間に、遠くのビルへと飛び移っていた。

おそらく。あの辺りに、ロータスがいる。

十

一つ、他人を愛せない者は幸福になる資格が無い。

一つ、夢無き理想に意味は無い。生の意味は理想を持つ事。

一つ、労働する事。それは神への奉仕を意味する。

一つ、信じ続ける事。神は貴方に与えてくれる。

一つ、不幸は何よりの試練。人生は報われる。

一つ、私達は神の意志により生れ落ちた生命。愛されるべき者。

.....

.....

アーティがよく口にする信条。

大体、こんな処だ。

カイリはアーティの下へと向かっていた。

苦手だが。

それでも、彼の信じるものと相対化する為に、苦手なものの言葉も聞きに行く。

カイリは彼から言われている。あなたの世界に神は訪れない、と。彼には神は見開かれていない。

流転していく世界。一つ一つ、生命の一つ一つ、物質の一つ一つに命は宿っているという。それらを愛する事、信じ続ける事によって。神は訪れるのだと。一つ一つは歴史の積み重ねなのだ、命と命の伝達なのだ。

カイリの能力。灰を操る力。

それはおそらく、誕生を意味している。

間違いなく、何かを創造出来る力なのだ。

きっと、自分の中には沢山の力が眠っている。それは確信だった。

しかし、巧く力を使いこなせていない。

醜いものは、全て間違っただけでしかない。いつか捨てていく為の試練でしかないのだと、アーティは言う。停滞からは何も生まないのだと。

どれだけ傲慢なのだ、とってしまう。

それと同時に、おそらく、彼の言っている事によって多くの人間は生きていて、幸福を手に入れられる一つの道なのだろうという事を。……認めざるを得ない。

たとえば、クラスタ。

クラスタというビルの群生にだって、歴史はある。

作ってきた者達の想いがある。

しかしだ。

それが何になるのだろうか。

穏やかな風が、吹き抜けていた。

空は青空。何処までも広く澄んでいる。

カイリは、空を見て重た過ぎる感情を浮かび上がらせる。

空は何処までも広い。この地上、大地よりも。

だからこそ、カイリは空を信じたい。

アーティ。

彼は自分達が植えた植物の中に佇んでいた。

それはまるで、聳え立つ城のようだった。

何年もかけて、築き上げたものだ。

彼の汗と血の結晶。

此処は、教団なのだろうか。分からない。

アーティも特に、修行などをその信奉者達に求めない。

ただ、彼は話すだけだ。語りかけるだけ。

カイリは典型的な鬱気質だった。たまに一日中、気分が重くて立てずに、部屋の中で横になっている時もある。

そういう時は、適度な運動をした方がいいのだが、どうにも身体が動かない。

そんな時は、何とか数十分くらい粘って、肉体を起き上がらせる。

最初にこの男に不快な印象を受けたのは、この事だ。

鬱に苦しむカイリ。そんなカイリの様子を見て、この男、アーティは鼻で笑っていた。

きっかけはそれ。

今でも彼が、大嫌いだ。

アーティは相変わらず、カイリを見下すような、憐れむような眼で見ている。

「光を見ないからですよ。夢を見ないからです。愛はそこに生まれます。カイリさん、どうでしょう？ あなたの生き方もいいかもしれない。でも、前を向いてもいいんじゃないですか？」

アーティは植物に水をやりながら言った。

彼は心から笑っている。

それを羨ましいとは思えない。

カイリはひたすら、彼の言っている事を否定し続けていた。

それこそ、一言一句、全否定するような感じだった。

大嫌いなのだろう。

憎しみが、ふつつつと湧き上がってくる。話せば、話す程、気分が悪くなっていく。

「ロータスさまは、ご病気なんですよ。でも、あなたは戻れる。違いますか？」

「違います。俺は病気だっていい。でも、俺が病気なら、世界の方がもっと病気だ」

二人共、お互いを険のある眼で見据える。

おそらく、どちらもきっと正しい。

正しいけれど、それは矛盾する事なく、徹底的に間違っている。

その間違いを認める程、アーティは感受性が高くない。そう思っている。

どちらも、一步も譲らない。

どちらも、お互いを決して、認めない。

.....

アーティは草木や花を育てる為の本を、熱心に読んでいた。

「次はこの花を植えたいなって」

彼は頭を掻く。

「君は思想を持っているだろ？」

「わたしに思想なんてありませんよ、ただ、みんな幸せに生きれば良いと思っている」

彼は屹然とした言葉を紡いでいく。

「善いと思うものを見ていれば良いと思うんです。人間が受け止められるものはそれだけじゃないかって。邪悪なものを見続けるのは、人間には無理なんじゃないかって思いますよ。それはもう、神様の領域なんじゃないかって。わたしは別にすごい事をしたいんじゃないって。みんな幸せになって欲しい。強く生きて欲しい。それだけです」

ロータスにしる彼にしる凄いのは。

修行や洗脳やらを一切使わずに、触れ合いだけでたくさんの信者を集められる処だ。

いわば、思想、によって人間を集めているのだと言える。

魅力的な言葉を言えるし。

行動にも移しているのだろう。

それが、彼らだ。

「みんなで創造しましょう？ 破壊も虚無も何も生んでいない。生きる希望も未来も。愛も救済も。何も創り出していないでしょう？ クラスタをずっと見てきたわたしだから言えるんです」

」

「俺達は何も創りだしていない、か……」

確かにそうかもしれない。いや、きっとその通りなのだろう。

しかし、だ。

セルキーの絵画。

アニマの水彩画。

蓮の側にだって、創造者はいる。

真実を刻み込む事。

少なくとも、それだけは虚無ではない。

まるで、灰のような燃え殻のカスでしかない、カイリ。

彼の人生は確かに、虚無で塗られているのかもしれない。

けれども、他の者達は違う。

意味があるのだと思う、彼らの生には。

変わらない、という事。

「代償が大き過ぎると思います。ロータスさまの人達は、自殺者も多い。苦しむ必要は無いです。苦しむなら喜びで。労働で手にする汗で。友情や愛情への探求で苦しむ事だと。その為なら、わたしはどんな宗教だって作り上げるし。認めるべきだと思います」

屹然とした口調で、彼は言う。

彼には迷いが無い。

だからこそ、やっかいだ。

「自殺は生きた意味だ。なあ、アーティ。君に自殺者を侮辱する事が赦されるのか？」

「侮辱なんてしてません。……惜しいと思っただけです。生きていれば、生きてさえいれば。どんな可能性だって在り得たのに」

彼は歯噛みした。

「そう。たとえば、此処に植えている野菜や果物。穀物。彼らは二度とそれらを口にする事なんて無い。死を過ぎた時は、生きる試練なんです。耐えなければならぬ時間。未来はある。わたしは、此処で植物を植え続けました。最初は失敗した。風で薙ぎ倒された事もある。土地が汚染されていて、一切、芽が出ない事に気付いていなかった事もある。僕だって、苦しかった。石ころを払い除ける作業。雑草ばかりが生えてくる。けれども、その経過さえも、楽しいと思った瞬間に、僕は分かったんだ。これが生きる事だろう、って」

何か言い返してやろうとして、口ごもった。

「生きている事か。それを感じ取れない人間だっている。違うか？」

「感じ取るまで、頑張ればいいでしょう？ 誰だって苦しい時間を乗り越える必要がある」

ロータスとアーティの間には、深い断裂が存在する。

ひょっとすると、ロータスとカイリの間にも。

その断裂は決して、埋まる事が無いのだろう。

価値観の違い、といってしまえばそれだけで終わってしまうのだが。

しかし、それはもうどうしようもないくらいの決別で。

もう、どうしようもないくらいに、この世界で生きられる人間は、彼のような思考形式の下、生きていたりする。

「それでも、俺は俺達は俺達の真実を求めているんだ。探している。お前の信じている真実じゃない。俺は俺の正しい事を信じている。探している。お前の言葉は俺には届かない、って事だ」

アーティは悲しそうな顔をする。

それはまるで、間違っただけの子供を何とかして教え諭したい、といったような表情。

彼は、自分の思想、生き方を信じている。信じ切っている。

実際、所謂、正しいとされてきた考えの一端を担っているからこそ、困る。

彼は、いつもポジティブだった。

彼は種を植え続ける。それはみな希望になる、と言う。

カイリはそこで悩む。

一体、何が正しいのだろう、と。

「なあ、アーティ。君はこの世界は狂っているとは思わないのか？」

「思ったとしても、どうにもならないと思います。だから、創らないといけない。それは、あなたの言う、本当の真実ではないのかもしれない。けれども、そんなもの、必要無いと思います。人間が生きていく上では。大いなる神なるものが、存在していると思う。僕達は、神様以上の事は考えるべきじゃなくて、人間の領分の中で、必死に生きるべきなんじゃないかって」

二人の意見の一切は、一致しない。

二人共、強い意志を持ってそれぞれの信じるべきものを信じている。

アーティは夢。

カイリは虚無。

お互いにどちらの言葉も、相手側に通じないし、響かない。届きはしない。

アーティの信者達。

みなで作った野菜や穀物を料理して、分け合って食べている。

豚や牛も作っている。

彼らは労働に意味を見出している。

肉体を動かし、自分の身体で自分の食物を作り出す。

まるで、自分で自分を生成しているような感覚なのだ、と聞いた。

きっと、彼らは自由なのだろう。

カイリ達みたいに、精神の牢獄の中には生きてはいない。

けれどもだ。

カイリは決意している。

彼らとは、決別しているのだ、と。

彼らは、彼らで生きていけばいい。

決して、ロータス側の人間と相容れるべきではない。

畑の外を眺めた。

簡易的な工場が作られている。

此処で、布や電化製品なども精製していると聞く。

アーティの側の者達は、クリエイティブな事が好きなのだ。

汗の中に、生きる意味があると信じている。だから、みな、労働者だ。

緑と工場。

自然の人工物。

両方との調和を彼は言う。

……。普通に考えて、彼らは素晴らしく生きているのだろう。

きっと、普通に人から尊敬されるような生き方をしている。けれどもだ。

カイリは決意している。そんなものの、一切を信じないと。

荊の道を歩き続ける、ロータス。

カイリもまた、闇と空虚の道を望む。

そこに、何の迷いも無い。

自分自身の正しいと思う道。

それは、決して他人から認められるような、正しさ何かじゃない。

だからこそ、目指す意味があるし、生きる意味があるのだ。

十

グロウはアーティの片腕とも呼べる存在だった。

彼は神を信じている。

大なる神がいるのだと考えている。

思うのだが。

神とは一体、何なのだろうか。

訊ねた事がある。

すると、大地と答えられた。

……よく分からないと返した。

すると、グロウは地面に指を指した。

自分達はみんな、大地によって支えられている、それが神だ、と。

だから、いつも彼はどこか幸福そうだった。

たまに、大地と一体化したような感覚に襲われるのだという。

世界に真実があって、真実の為に人は生きているのだと。

グロウも含めて、アーティの周辺の者達は、宗教を信じている者が多い。

自分のイメージを広げて行って、神なるものがあるのだと言う人間も多い。

正直、薄気味悪いとさえ、感じている。

見ない事によって、幸福を手に入れる。

あるいは、存在しない者を創り出す事によって、幸福を手に入れる。

.....正直、理解が出来ない。

カイリは、このグロウという男を見ていると、どこかムカムカと敵意が湧いてくる。幸せそうで。自分は正しいのだと信じ込んでいる。

彼を見ていると、何で、こんな風に存在しないものを信じられるのだろうと思う。在り得ない神秘体験を語ってくる。

大地と話す事が出来た、など。

こいつは頭がおかしいと思っている。

本当に、見たいものしか見ていない。

ひよっとすると、アーティの能力の悪影響でもあるのかもしれない。

しかし、逆にそういう人間だからこそ、幸せなのかもしれない。

幸せを感じる瞬間、それが全力で走った後に訪れる開放感のような感覚だという。幸せになる資格。

きっと、自分はそんなものを求めてなんていない。

こいつにはあるのだろうか。きっとあるのだろう。

愛や希望などの言葉を口にする度に、酷い陶酔感を感じる。

他人に言っているというよりも、自分自身に言い聞かせているかのような。

グロウは言う。

いつか、世界中の人間に向けて、メッセージを発したいのだと。

この世界には希望しかないし、希望を信じ続ければ、みな幸福になれるのだと。

「だからさあ、俺達は神様の庇護下にあるんだよ」

グロウはでかい図体で、馬鹿みたいな声で言う。

カイリはこの男も大嫌いだ。吐き気がする。

「へえ、神様ってのは何だよ？」

思わず、そんな事を訊ねてしまう。

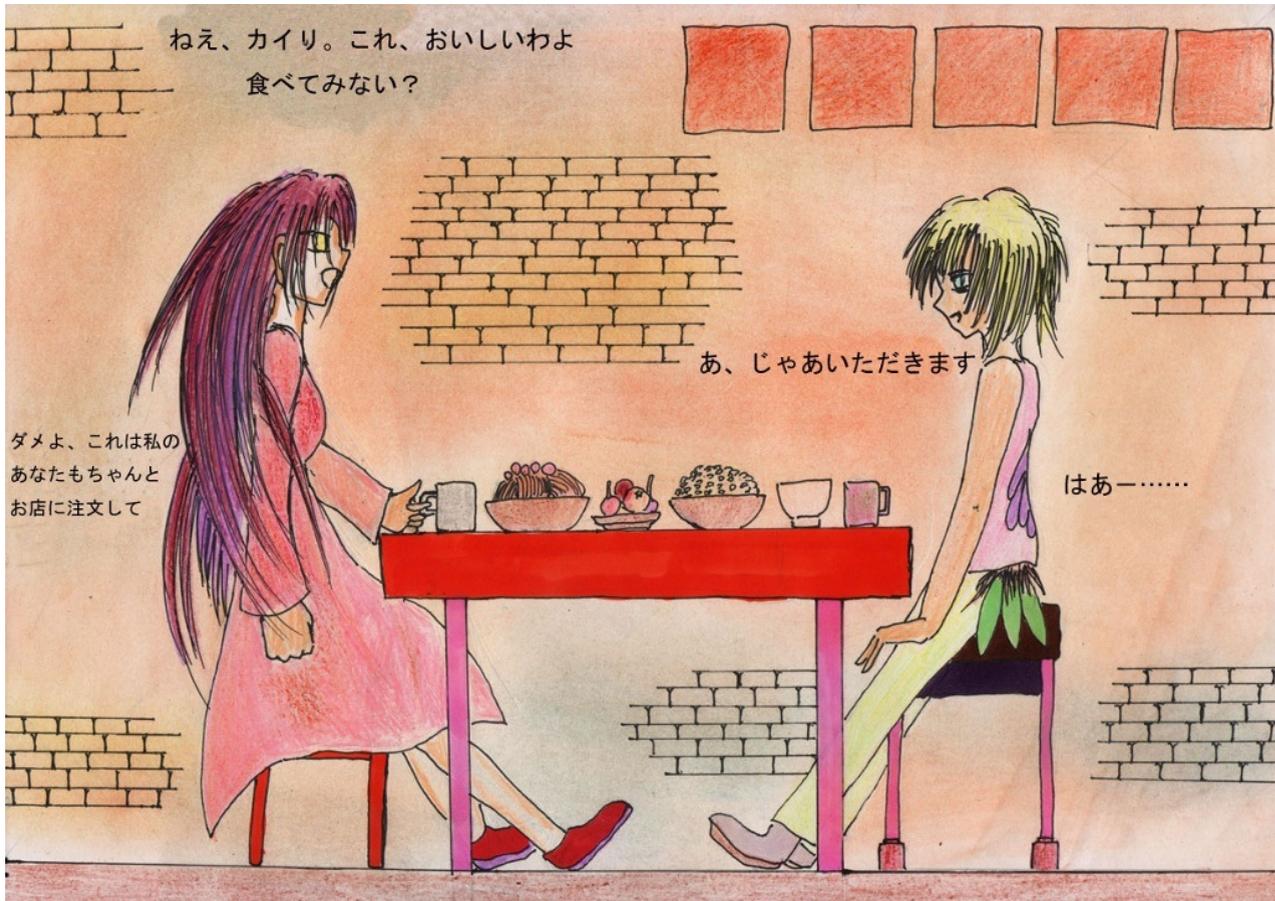
グロウはいつものように、同じような事を言った。

ねえ、カイリ。これ、おいしいわよ
食べてみない？

ダメよ、これは私の
あなたもちゃんと
お店に注文して

あ、じゃあいただきます

はあ……



その男は、大きな衝撃によって頭を吹っ飛ばされて、そのまま壁のシミになった。

彼女は死体となった、その男に何の興味も抱いていなかった。

クラスタの中に侵入した。

彼女は、他の男に尋問していた。

「で、ロータスとやらは、その部屋にいるのね？」

淡々とした声音。

彼女は眼光だけで、男の口を開かせていた。

男はしどろもどろに、ロータスの居場所を話し続ける。

それだけ聞くと、興味を無くして、男の下から去っていった。

彼女は無駄な殺害にも、興味が無いみたいだった。

壁のシミになった男は、レイアに対して刃物を向けてきたからだった。避けるのも面倒なので、軽く頭を殴り付けてやったら、男が死んだ。

人間。特に非能力者は脆いな、と思った。

彼女は人間を人間と認識していない。

彼女は、ただひたすら、自分の目的の為だけに動いていた。

何名か他にも、クラスタの住民と顔を合わせる羽目になったのだが、今度は面倒臭いので、『リュミエール』を使って、レイアの姿を認識の外へとすっ飛ばしていった。

薔薇の蔓を這わせていく。

どうやら、この辺りにはアーティの能力が張り巡らされていないみたいだった。

レイアはすたすたと、歩き続ける。

何名かの間人達とすれ違おうが、レイアは彼らには何の興味も示さなかった。

時折、レイアが侵入者であり、害をなす存在であるのだと気付いた者がいて。彼女を排除しようとして襲ってくる者達がいた。

面倒臭いから、全員、殴り殺して。挽肉に変えた。

そこに、何の感慨も湧かなかった。

そして、レイアはその“祭壇”へと辿り着いた。

神降ろしの儀式となる場所。

ロータスの瞑想の部屋だ。

此処に、敵の首領がいる。

あっさりと、始末するのが、彼女の役割だ。

さっさと、頭をぶち抜いて、終わらせよう。

彼女は扉を、乱暴に開いた。

そして、眉を顰める。

光と闇を纏う少女は、その女の目の前に立っていた。

女は、赤い衣の上に、黒い衣を纏っている。

さながら、黒白の色彩と、赤黒の色彩。

同じ色も、組み合わせた色、纏う人間によって、色の持つイメージが変わる。

あらゆる者から、認識される事を厭う少女。

彼女は、腕を組んで、女の前に姿を現している。

「あら。可愛い女の子ね」

女は言った。

少女は少し、眉を顰める。

「可愛い、か。ふうん。まあ、いいか。私は貴方の思想とやらに興味があるわ。少しだけ。本当に貴方ごとき、どうでもよかったのだけれども。貴方の考えとやらに興味湧いた。何の為に、此処の彼らは貴方を狂信するのかしら？ 分からない」

「それは、あなたがこの世界の闇を何も知らないからよ。みんな、私を信じているんじゃないわ、みんな気付いているだけ。この世界はおかしいんだって。みんな、みんな、邪悪さから逃げる為に、闇に貪られない為に、此処に集まってくるわ」

少女は首を傾げた。

「あなた、傷付いた事無いと思うの。だから、この世界の狂気が分からないのね？」

「何を言っているのか理解出来ないのだけれども？」

少し不機嫌そうな口調で言う。

「この世界は病気なの。みんな病気に侵され続けている。それを何とかしなくてはならない。ねえ、そうは思わない？」

「抽象的過ぎて、何を言っているか分からないわ」

少女は鼻で笑った。

すると、女は傷付いたような顔をする。

「あなたは、綺麗なものに為れる筈なのに。諦めているのね。理想を追えるだけの力がある筈なのに。この世界は悪夢そのもの、あなたはそれから眼を背ける事を選んだ。違うかしら？」

光陰を纏う少女はまた、眉を顰めた。

話を煙に巻いていっているようにも思えない。

とすると。

「なるほど。貴方は貴方の言語で語っているのか。私には分からない。ただ、分かったのは。私の生き方に対して、疑問を抱いている。私の生き方は間違っている、と。随分と馬鹿にされたものね？ そもそも、貴方に私の何を理解しているのか？ 認識しているのか？ 私はそれを判断し兼ねているのだけれども？」

「そう、悲しいわ」

女は本当に、悲しそうな表情を浮かべる。

まるで、少女を哀れんでいるようにも見えた。

それがまた、少女の怒りを買う。一瞬、激昂しそうになる。今までに相對した事の無いようなタイプの相手。

「でも、そんなあなたの弱さは、とても愛しいなあ」

周囲の空気が震撼するかのようだった。

暗い感情が、少女の中で湧き上がってくる。しかし、少女はそれを律し、冷静な態度で、女へと話しかけた。

「よく分かったわ。貴方とは話す意味が無い。貴方も私の事を忘れるといい。でも、一応、確認。何故、私の事を弱い、と？」

「弱いわよ。だって、あなたって人を愛せないのよね？」

少女は、ふん、と髪をかき上げた。

「人を愛せない事が何故、弱い、と？」

「弱い。だって、強い人間はね。みんなを愛そうとするの」

「……………私は、確かに自分しか愛せないけど。それ故、強いと思っている。弱いと言われる筋合いは無いわ。何なら、今、此処で試してみてもいい」

空間に満ちている明暗の中に、殺意が混じっていく。

確実に、目の前の敵を、倒せるという自信。

「その弱さが。美なのよね。その弱さが、正しいの。あなたは、この世界から受ける呪縛を、弱さによって、自らを守っているのよね。それはとっても正しいわ。あなたは、そう、何というか。純潔さを守ろうとしているのね？ そう、そうなのよ。あなたとは、ひょっとしたら、お友達になれるのかもしれない、嬉しいわ」

女は子供のように、無邪気にはしゃぐ。

少女は背筋に、ぞっと冷たいものが走った。

寒気がする程の嫌悪感。

これ以上、会話を続けていると、何か得体の知れないものに蝕まれそうだった。

気味の悪さばかりが目立つ。

その嘔吐感にも似たものに対して、激しく迸る殺意で対峙する。

しかし、女の眼は、更に底無しに深かった。

暗黒そのもののような、あるいは昼に見る悪夢そのもののような双眸。

「貴方に私の何が分かる？」

内に溜まる敵意を吐き出すかのように言う。

今すぐ、目の前にいる女の頭を吹っ飛ばしてしまいたい衝動。

「分かるわ。だって、私も昔はあなたのように、世界を見ていたから」

それはとてつもなく慈愛に満ちたような。

あるいはとてつもなく憐れむかのような。

絶対的な断定の言葉。発した本人は、その言葉をまるで疑っていない。

「そう」

少女は呟く。

沈黙。静寂。

少女はくるりと、踵を返した。

空間に満ちるかのような感情が止んだ。

少女の髪は風も無いのに靡いている。

その足取りは極めて、淡々としたものだった。

そして、思い出したように言った。

「一つ聞いていいかしら。たとえば、私は傷付いて生きてきたかもしれない。貴方よりも、ずっと。そういった疑問を思ったりしないの？」

「あなたは本当に傷付くという事を知らないのよ。あなたは傷付いた事があるかのように思い込んでいるだけ。本当に傷付いた事があるなら。私の言葉が分かる筈なの、違う？」

「そう」

少女は振り返らなかった。

そして、数分後、青年の下へ戻る。

しばらくの沈黙。

どうやら、彼女が敵の首領を始末出来なかった事に対する、驚愕のようだった。

少し、空気が重苦しくなる。

「どうだった？ ロータスという女は」

青年は訊ねた。

少女は言った。

「大体、分かったわ。たとえば、私は善でも悪でも無いと自分では思っているのだけれども。彼女の場合は邪悪だ。何が邪悪なのかを強引に、敢えて定義するなら、悪人ってのは他人がいないって事。私は他人なんていないけれど、他人だって私なんていらなくたっていい。むしろ、それを望んでいる。けれど、彼女の場合は、そう、他人を認めなくて他人を支配する。そんな処かしら？」

相棒はそれを聞いて、少し考える。

「どういう事だ？」

「別の言い方に変えるなら。被害者ぶった加害者って処かしら？ おそらく彼女の本質はそれね。あるいは、自分にとって都合の悪い存在は、全部、間違いなのよ、彼女にとっては。その存在の全てが間違い」

と、少女は冷然と自分の見解を述べていく。

彼は、そんな彼女の話聞いて、首を捻る。

「なあ、何でそんなにキレているんだ。珍しいな」

「そうかしら。そんな風に見える？ 私はしばらく休むわ。面倒臭い」

彼は少し、たじろいでいた。

彼女の全身から、無数の刺々しく禍々しい殺意が滲み出ていたからだ。

まるで、自分という存在そのものを侮辱されたかのような精神の底の底から湧き上がってくるかのような、打ち震えんばかりの怒り。

しかし、彼女はいつものような氷結したかのように表情を変えていない。
いつもの冷淡そうな、無感情な顔を。声音を。
しかし、分かるのだ、彼には。
腹の底から煮えくり返っているのだろう、と。

十

一人。

一人。闇の中に、佇んでいた。

彼女は、一人、呟く。

「正直、屈辱なのよ。倒さなければならなくなったじゃない……」

彼女は虚空に向かって、独り呟く。

自分の意志も、信念も、自分自身で解答を出さなければならない。

レイアは、独りだ。

おそらく、自分の意志を何度も反復して、考えている。

フェンリルともキマイラとも、おそらくはこれ以上、馴れ合うべきじゃない。フェンリルは仕方無いとしても、キマイラ。彼女とは馴れ合う理由がまるで無い。

愛する事も出来ないし。他人の愛なんていらぬ。

それが答えだ。

自分の指先を見つめる。

しゅるしゅる、と音が鳴る。

指先から荊の蔓が伸び、薔薇が生まれる。

何故、薔薇なのだろうか。

思うのだが、薔薇という花は好きなように幾通りにも解釈しやすいのかもしれない。

どんな人間も、大体、薔薇というのは平均して美しさの象徴だと認識している。

薔薇とは、女の象徴なのだろうか。

ある意味で言えば、この花の存在が自分という存在に対する尽きない疑問へと変じている。他人との絶対的な断絶の中で、この花に対する好意が他人と自分の感覚を近付けている。薔薇は普遍的に人類の好きな花だ。……。

けれども、違和感を感じ続けている。みなが好きだという意味で、自らが同じような感覚で好んでいる事に対する違和感とでも言うべきだろうか。

レイアは人類でさえないのかもしれない。

何故、薔薇が好きなのか。

初めて薔薇は美しいと思った時、それは実体を持って悪意を灯したもののなのだと思ったからだ。黒い闇によく似合う花。

薔薇もまた、自らの意志の象徴だ。そう思っている。

どうやら、自分は冷たい人間なのらしい。

生きる中でそれに気付いた瞬間に、世界との大きな断絶が襲い掛かってきた。

もうどうしようもないくらいに、大きな壁が存在するのだろう。

冷淡な人形みたいなのだろうと。

けれども、だからこそ。自らが好きなのだ。

部屋中に荊の蔓が伸びていく。

攻撃性、敵意が分散して巻き散っていく。

これは。自分の弱さでしかないのか？ レイアは疑問に思う。

攻撃性とは、つまる処。自分自身の弱さでしかないのだろうか。

ロータス、赦せない、不快な女。

しかしだ。

そもそも、彼女の言葉に耳を傾ける事自体が、極めて敗北を意味しているような気がする。

自分自身の在り方そのものに投げられた否定の言葉。

くだらない。

彼女の言葉の全てを肯定するつもりはない。

分かった事は。

ロータスに対する言葉を思考しなければならない、という事だ。

彼女を打ち倒す言葉を考えなければならない。

もう、彼女との戦いは思想の戦いだ、と考えてしまっている。

負けられない。

レイアがレイアである為に。

強く、在る為に。

……、おそらくは。

全ては孤独から始まった。

世界に対する無関心さはそこにある。

そして、その事に対して、強い意志を持っている。

……………。

レイアは鏡の中で眠りに付いた。

夢が、靄掛かって。

やがて、人の形を形成していくかのようなようだった。

気付けば、暗い廃墟を歩いていた。……。

十

レイアは夢を見る。

それは、鏡の裏側の世界。

今、何処にいるのだろう。

暗闇。

夢の中で起きる、明晰夢か。……？

しばらく、歩き出す。

何処までも廃墟が続いている。

廃墟が広がっている。

月の光がそれらを照らし出している。

それは不気味な程、とても美しかった。彼女の精神世界の中だ。

岩山だ。

そこには一人の男が立っていた。

そいつは、天上から見下ろしているみたいで、とても不快だ。

「貴方は誰だったかしら？」

レイアは誰何する。

「俺か。……」

影は徐々に月光を吸って、形を露にする。

そいつは、刃物みたいな顔の男だった。

全身に包帯を巻いている。

肌を露出させた、漆黒の衣服を纏っている。

「貴方は確か……」

「ウォーター・ハウス。忘れたのかな？」

暴君ウォーター・ハウスは、くっくっ、と笑う。

「死んだ筈じゃなかったかしら？」

「そうだな。俺は死人だ。俺は幽霊としてお前の前に現れている」

「そういう能力だったかしら？」

レイアは淡々とそいつを見上げる。

そいつは、月光に晒されながら、細長い肉体をこきり、こきりとしならせるように、鳴らせた

。

「まあ、生前の俺と話した奴に片っ端から呪いを掛けてな。俺の『エリクサー』による毒物の中に、俺の情報を混入させておいたんだ。本当に、小さな微毒を入れた。つまり、俺はお前らの脳内の中に根強く刷り込まれたってわけだ。凄いだろう？」

レイアはふん、と鼻で笑う。

小馬鹿にしている感じ。

「貴方は不死になったの？」

「違う。俺と出会った奴、全員が死ねば、俺の情報は完全に失われる。それに、ところが、俺はやはり死人なんだな。お前らが俺の記憶を勝手に引き出して、勝手に情報を再生させているだけなんだ。情報を付け足したりもしてな。なあ、歴史の書物ってあるだろ。たとえば、聖書。古典文学。つまり、俺はそういうものになったんだな」

「……貴方が出現した条件が在る筈。それは何？」

「そいつが迷った時」

男は断言した。

「俺はつまり、幽霊であると同時に、もう“観念”なんだ。微毒って言っただろ。それは、言葉だ。俺は相手と言葉を交わす事によって、自分の情報を可能な限り、相手に与え続けていた。なあ、俺はもう俺じゃない。俺はいわば、お前なんだ。分かるか？ お前が見ていた俺。それが、勝手に再生されているんだよ。夢の中でな。あるいは、想像や回想の中で再生している奴もいるのかもな？」

「なるほど、確かに貴方は分かりやすい対話相手だ。なら、勝手に私の話にも合わせてくれるわよね？」

「ああ、俺はもうお前だからな」

男は自嘲的に言う。

そして、自分の茶色がかった金髪を撫でた。

レイアの腰まで伸ばした、萌黄色の髪が揺れる。

此処は、何処でも無い世界の。鏡の裏側の、更に夢の中。

本当に、在り得ない世界。

在り得ない人間との対話。

「そういう才能があったんだろうな、俺には。会話の内容はくだらないかもしれない。けれども、巧みに相手の心の奥底に俺を根付かせる事が出来た。だから、カリスマ的なものがあったのだろう」

「その言葉も全て。私のイメージの中から拾っているの？」

「そういう事だ」

男は何処か、声音が空ろだ。

「だから、実は、俺はお前のイメージ以上の答えを返せない。あくまで、お前が見ていた俺のイメージとお前の中の意識が結合して、俺をこの世界に出現させているんだ」

なるほど、彼女は心の中で、舌を打つ。

迷った時か。

こいつはふざけた事に、宗教的な何かの神になったつもりらしい。

「まっ、どうだっていいだろ」

「……ロータスをどう思う？」

彼女は率直に答えた。

「お前はどう思うんだ？」

「不快ね」

冷淡に言う。

そこには、敵に感じる畏敬の一切を感じ取れなかった。

「ははっ、お前の相棒も。俺を見て、そう感じていたんだろうな？」

彼は笑い転げる。

「貴方は何だったかしら。何を言っていた？」

「全ては赦される。俺は人を殺す。そこに理由は無い。どうだ、思い出しただろ？」

「……そうだったかしらね」

そういえば、フェンリルが彼の事をかなり愚痴っていた。

彼の能力や強さには余り興味が無かったが、彼の思考、思想には多少、興味があった。

少しずつ、思い出す。

人間は、人間らしさの中に拘束されているだったか。

あるいは、この世界は檻だとか言ったか。

「彼女の能力は何だと思う？ 彼女の目的は？」

「さあな。お前はどの推理している？ 俺に分かるわけないだろ」

出来損ないが。思わず、心の中で毒づく。

「……ひょっとして、貴方は生前、あの女と何か会話を交わした？」

「知らんな。俺に分かるわけが無いだろ」

「会話を交わした可能性が高い、と考えている。あのアケロンの能力者。彼と貴方は同僚だったのよね。貴方を派遣した可能性が高い、そして貴方は気まぐれで、あの女を殺さなかった。…
…それを前提で話を進めるわね」

「いいぜ」

くっくっ、と男は笑った。

満月が少しだけ、雲によって翳る。

「私は自分の意志を脅かそうとする者が嫌いだ」

彼女は憎憎しげに言う。

「ほう？」

彼は相槌を打つ。

「そいつにとっては、そいつの思考形式があるのでしょうかね。でも、私の意志に触れるな。彼女にはそれが分かっていない。正しいと自分で思い込んでいる。なるほど、それは彼女にとっては正しい。彼女には何らかの苦悩があるのも理解出来る。けれど、私には一切、関係がない。私はこの世界に何の影響も与えたくない。だから、世界も私に何の影響も与えるな」

「ははっ、お前、知っているか」

暴君は笑った。

「俺は意味も無く人を殺す、と自らに課しておきながら。それを完全に実行に移す事は出来なかったんだな。なあ、自らの作った生き方、思想って。全部、その通りに実行出来るもんでもないだろ。お前はそのズレに苦しんでいるんじゃないのか？」

「……参ったものね。自分自身が救せないわ。おぞましい、気味が悪い」

彼女は首を振る。

「お前はあれだな。そう、たとえば、俺が絶対悪として行動し切れずにいたように。自分の考えと、行動にズレってあるだろ。難しいんだな、本当に」

反復し、再確認するかのよう、男は同じ事を繰り返して、言った。

風も無いのに。彼の髪が靡く。

「お前は孤独と孤高を求める。誰も愛さない事を。しかしだ。お前がフェンリルやら誰やらと

関わっている時点で、すでにお前はお前にとっての孤独と孤高の思想を行使出来なくなっているんじゃないか？ ああ、難題だな？」

まるで、彼は自分自身の影であるかのような事を囁いてくる。

生前の彼ならば、こんな事を言ったのだろうか。どうなのだろう。

そう、こいつはレイアの見ている幻影だ。

だから、レイアはレイア自身の影の形として、こいつは姿を現しているのだ。

「そうね。ロータスなどに関わらない方がいい。フェンリルやらキマイラやらなどとも」

「ああ、その通りだ」

男は頷く。

「だが、ロータスってのは私を侮辱した。赦せない。奴とは戦わなければならない」

「それすらも、お前が興味を持ったから。それは愛とは違うんだろ？ お前の中では」

「ええ」

彼女は屹然と言った。

何処に行けばいいのか分からない。

何処に向かえばいいのか。

触れられざる存在として、生きる。

私が私に為る。

愛せない。愛さない。

一人。余りにも、一人だ。

行き着く先は、無限の孤独。

きっと、それは無限の無なのかもしれない。それでもなお、それを求め続ける。

その為に、生きているのだから。

ふと、気付く。

もし、世界を絶対的に形作った神が存在したとするのならば。

そいつこそが、一番の孤独なのだ。

万物を一番上から眺めながら。

無限の孤独を抱え、無限の虚無の中に置かれているのかもしれない。だとするのならば、レイアの望んでいるものとは、神になる事なのか。

.....気持ち悪いわね。

嘲笑する。

.....神か。神なんていう言葉は気持ち悪い。

それは人間の言葉でしかないからだ。所詮、人間の弱さより生まれた言葉。

ロータス。

「うーん。やはり、あれは、ただのお馬鹿さんなのかしら。それとも、ただ、狂っているだけなのかしらね」

「お馬鹿さんとやらにも色々な種類があるだろ？ 何がどうイカれているのかってのも、色々あるだろ。狂気の種類ってのは、分けていく必要がある、そうだろ？」

彼女は頷く。

「愚鈍故に、余りにも中身があるかのように見える。そんな種類の人間だっている、違うか？」

「なるほどね」

「納得のいかない顔だな」

また、彼女は頷く。そして、彼を少し睨んだ。

「いいか、レイア。馬鹿とは、その人間にとって都合の悪い他人、って事でしかない。俺は思うんだが、明晰だとか馬鹿だとかは存在しないんじゃないかとな。問題は、そいつが、どういう規範を持って、行動しているかって事だ」

レイアは眉を顰めた。

確かに彼の言う通りだ。

それにしても、自らが探し求めている世界とは何なのだろうか。

「さて、そろそろ俺は行くぞ」

「随分と、気まぐれなのね」

ふん、と男は溜め息を吐いた。

「まあ、お前が見ていた俺の認識って奴を補完する情報を増やせば、また来るさ。何しろ、俺はお前の思考の一部なんだからな。ウォーター・ハウスっていう男の姿を借りているが、やはり、お前の思考なんだろうよ。じゃあな」

全ては、虚実のように、消えていく。

レイアは、フェンリルの何処でもない部屋に。一人いた。

「正しい事ってのは何なのかな？」

暴君と呼ばれる男は、カイリに聞いてきた。

ロータスを前にして、去っていったわけではなく。

どうも、彼女の取り巻きにも興味を持ったようだった。

茶色がかった髪を撫でながら、彼はカイリに詰め寄る。

「ロータスさまとお話したんですか……」

「まあな」

男はくくっ、と笑う。

カイリは身動きが取れなくなってしまった。

この男、正直、本当に……怖い。

彼の双眸はまるで、硝子玉のようだ。人間のそれとは思えない。

何か、人間を人間と思っていない者の眼をしている。

これまでに会った事の無い、得体の知れない怖さだった。

「正しい事ってのは、何なのかなあ？ 彼女の。興味があるんだ。俺には、なあ、お前は何だ、何と言う名前なんだ？」

「カイリ……」

「ほう、何だ。お前はこのカルトのメンバーか何かなのか？」

「そうです」

「何だか、弱弱しいな。クラスタってのには入りたてなのか？ 古参なのか？」

「……どっちかっていうと、古参ですかね」

彼はカイリを分析しているかのようだった。

「しかし、お前なんか聞いたって。仕方無いのかもな。お前、クラスタの下の方にいるメンバーだろ？ 何だか、頼りなさそうだし、ぱっとしないしな」

「……………いえ、幹部です。ロータスさまの側近で、大幹部です」

それを聞いて、暴君は初めて、その顔に人間らしい笑みが満ちる。

「ははっ、ふはははははっ、なんだそれは？ お前がか？ それはいい。それは最高だ。このクラスタってのは、本当に何なんだ？ 俺には分からんぞ。お前、クラスタ内での仕事って何やってんだ？ 実務とかあんのか？」

「……………なんですかね。……ロータスさまとお話する事以外、何もしてないような……」

聞かれてみると、確かに何で、自分は彼女の側近で、クラスタの幹部的地位にいるのか分からない。気付けば、そうになっていたというべきか。

そもそも、このクラスタが一体、何なのか、カイリはまったく分からないのだ。

その事を、正直に、この男に話す。

男は、真面目にそれを聞いていた。

「それで、カイリ。お前は正しい事ってのは何だと思うんだ？」

最初の質問に戻った。

「そうですね。……自分の欲する事を、望むままに行うべきだ、なんじゃないかなあって。ロータスさまのおっしゃっている正しい事ってのは」

「それは、何だ。正義とか道徳とかとは違うんだな？」

「うーん、……ですね。違うでしょうね。ロータスさまいわく、正義とか道徳と違って、邪悪なるものとか、って言いますよ。それこそが、人間を不幸にしているって」

「なんだそれは。ひょっとして、俺の“人間は人間らしさの中に拘束されている”に通じるものがあるのかな？」

「です。そうです。あなたはそんな考えをもっていらっしゃるんですか。面白い人ですね。ロータスさまが評価するわけだ」

だんだん、カイリはこの得体の知れない男に対して、くだけた口調になっていった。

意外と話しやすいのかもしれない。

「僕達は何も真実を知らないそうです。だから、真実を降ろさなければならぬって」

「真実ってのは、何だ？」

「世界の根源なのかも。世界は偽りなんじゃないかって」

「根源？ 偽り？ 抽象的だな。ヤケに」

「ええと、ほら。何だろう、此処のクラスタに住んでいる人達って、みんな、色々、背負ってきたり、傷付いてきたりして、此処に来たんです。家庭環境が酷かったり、貧困国で育ったり、戦争体験を得たりして。散々、人間の闇を見てきたっていうか。……でも、そういうものを体験せずに生きている人間って、やっぱり多くいて」

「ふむ？」

「強い人間が奪い続ける世界が、何か嫌だなって。僕も思います」

男は何だか、今にも笑い出しそうな、逆に、何だか悲しみに共鳴するような、あるいはどちらでもない不可思議な表情になる。

ひょっとして、もしかすると。彼はかなり理知的なのかもしれない。

「人間の持つ、闇か。成る程、あれか。単語だけ並べれば幾らでもあるもんか？ 虐めだとか、拷問だとか、色々な？」

「ええ」

「救いたいのか？ そういう体験を受けてきた奴らを」

「救いたい、ってのは、多分、人間全てだと思うんです。みんな本当は、分かり合える筈なのに。眼を背けているって。正しくない、って」

「ほう、分かり合えるのか。凄いな、それは」

男は顎に手を置いた。

そして、何かをふと、思い付いたように言った。

「処で俺は純粹悪で、今、何となくお前を殺してみようかと思うんだが。それでもいいのか？ そうだな、酒瓶で頭を割って殺したい」

カイリはぞくっ、と寒気がした。

この男の眼は本気だ。

じっと、カイリの頭部を眺めている。

鈍器で自分の頭を割られるイメージが浮かぶ。

「……………冗談、ですよ？」

「勿論、本気だ」

数秒の間、二人とも沈黙する。

男は両手を広げた。

「問題は、だ。酒瓶が無い。俺はお前を酒瓶で殴り殺したいんだが、酒瓶が無いってのは、本当に困っている。だから、まあ、殺すのを止めにしたわけなんだが。……俺みたいな人間は、みんなと分かり合えるのか？ 根源ってのは何なんだ？」

男はまったく眼の色を変えないまま、話を続ける。

カイリは考える。

「そうですね。……………」

確かに、だ。迷いが生まれてくる。

「俺は思うんだが、人間は別に殺し合って、奪い合っても構わないと思うけどな？ その事象を認めたっていいんじゃないのか？ どうなんだろうな？ 世界に苦しむ人間が幾ら至って構わない。それが自分やら自分の恋人やら家族、友人じゃあなければいい。それじゃ駄目なのか？」

「……いや、やっぱり悲しいものですよ。それが、自分の見ず知らずの人でも……」

「俺は絶対悪になりたかったんだがな。本当は。でも、どう考えても無理だろ、って思って。純粹悪って思うようにした、自分の事をな。この違いって何だか分かるか？」

「……………うーん、説明してください」

「純粹悪って、在りのまま意味も無く理由も無く殺す者、って定義している。俺がそうだと思っている。別に殺すではなく、理由も無く犯罪を行う。壊す、と言い換えても構わないな。そう、俺の人生はずっとそうだった。けどな、絶対悪、ってのは何だろうな？ もう、どう考えても、誰からどう見ても、どんな価値観でもどんな見方をしても、悪い奴ってしか思えない、その悪さにある種のカタルシスさえ覚ええない悪人ってのは、いるのか？ どうなんだ？ もっと言えば、本物の悪なる行為ってのは存在するのか？」

カイリは彼の言葉を一つ一つ、吟味していつて考える。

「ほら、大虐殺者って、結構、崇められているだろ？ 大悪人ってのも。人間の不幸ってのを、好む奴ってのもいるだろ？ 絶対悪ってのはあるのかな？」

「……分かりません。難し過ぎますよ」

男は肩を竦めた。

「いや、俺が悪かった。つまり、俺の聞きたい事ってのな、絶対善、ってのも存在しやがるのかなって思うけどな？」

そして、更に付け足して。

「人類愛ってのも、何なのか分からないな」

と、言った。カイリは、また少し考えてから。訊ねる。

「人を好きになったり、愛したりとか出来ないんですか？」

「いや。俺は人を好きになったりするな、愛情だってある。これでも、結構、恋愛とかしてきたぞ？ 結婚を誓った恋人だった。まあ、何となく別れたり、何となくナイフで刺し殺してみたりしたんだけどな」

彼はおどけたように言う。

しかし、多分、それは事実だ。

カイリは再び、冷や汗が流れた。

目の前に、たまたま、酒の瓶があれば、先ほどの言葉通りに、カイリを殴り殺すのだろう。理不尽な暴力行為。

「純粹善、ですか……」

カイリは少し、考える。

「善を為す、って何だ？ 俺には分からない。思うんだが、人間一人を助けるって事は。誰かを助けないって事だろ？ 人間一人を愛するって事は誰かを愛さない事だ。みんな助けられる、みんな愛せる、って思い込むようにするかもしれない。どうも、この地上の物質は有限らしいから。それを適当に奪い合って、人間ってのは生きてるよな？ まあ、段々、人間ってのは成長を伴うに連れて。適度に折り合いを付けて、適当にこの世界は愛せるに足るものなんだ、って思って。前向きに生きようとするよな？ 俺はだ、そこで。善も愛も何もかも理解出来なくなる」

「なるほど」

カイリは驚嘆した。

「ロータスさまなら、きっと言うでしょうね。あなたは、正しい事を知っている、と」

「正しい事か。俺は壊したくなるだけだぞ？ それは正しいのか？」

「正しいです。……ロータスさまなら、そうおっしゃいます」

「ふむ。そうか」

「社会はおかしいから、壊すべきだ、ってロータスさまはおっしゃいます」

「ふむ。そうか」

彼は、やはりよく分からない、といった顔。

「そうすると、どうなるんだ？ ロータスによると」

「本当の人間の幸せが現れる、と言います」

「本当の人間の幸せ？ よく分からんな」

「……………自分自身の為に生きる、という事なのかも」

カイリは自問自答するように言った。

「……どういう事だ？」

「人間は誰かの為に生きようとした瞬間に、自分自身を否定する。自分は何かの為に生きなければならないという事。それって、多分、仲間だとか、もっと言うと、国だとか。そういうものの為に生きるって、汚いんじゃないかって。少なくとも、俺は彼女の言葉からそんな事を見出したし。彼女の言葉を糧にして、彼女の言葉を自分なりに解釈しながら、俺は生きています。俺には、

何もなくて、俺には強い虚無感しかないけれど。……」

「ううむ、取り敢えず、自分勝手に生きている奴が正義なのかな？」

「彼女は言います。本当に自分勝手に生きられる人間は、むしろ他人を大切にするだろうって」

「なんだそりゃ、凄い暴論だな？」

「処が、暴論じゃないんです。人間は国家とかみんなが決めた法律だとかに縛られて、自由や目的を失っているって。そういったものから、解放されていけば、真の愛をみんな思い出すだろうって。ロータスさまは言います」

「ふむ、そうか……………」

尖ったナイフのような顔の男は、ふうっ、と溜め息を吐いて。自らの頭をぼりぼりと搔く。

「それにしてもだ。人類の歴史ってのは、あれだ。大失敗だ。失敗の失敗。大失敗。だからな、俺は滅んじまっても、いいんじゃないかねえのかって思うな？ 俺はお前らに餞がしたいな。しかし、何も渡すもんがねえ。だから、俺は祈ってやるよ。お前らの成功をな」

「俺達の成功ですか」

彼は苦笑した。

いつの間にかだろう。

二人は、打ち解けていた。

純粹悪とやらを標榜する暴君。

そして、虚無主義者のカイリ。

二人は、相手を嫌う理由が無かった。

カイリは、彼に殺される事を別に怖いと思っていなかったし。だからこそ、彼はカイリを殺さなかったのだろう。

その後、食堂に寄って。彼と更に、小一時間程、会話を続けた。

彼は食事がとても好きな男だった。

出てくる料理の一つ一つに対して、自分なりの考えを話した。

破天荒なのか、紳士的なのかよく分からない男だった。

それから、彼の考えについて、カイリは更に色々と聞かされた。

十

ビルの中を、歩いて行って。ある場所に辿り着いた。

そこは、おどろおどろしい絵画が、沢山、並んでいる場所だ。

そこに、一人の茶髪の男がいた。顔立ちはまあ、良い部類だろう。

彼女は、彼があの子の側近だろうという事を見抜いた。

一目見て、見抜いていた。

だから、怒りの矛先としても使いたかった。

「さてと。貴方の言葉を聞きに来たのよ」

……………。

女。

何だか、声が若い。

カイリは、そいつが少女なのだと気付いた。

しかし、纏っている雰囲気は、まるで普遍的な少女然としていない。

「貴方は何なんですか？」

「ああ。私はレイア。まあ、所謂、能力者という奴かしら？」

カイリは黙る。

こいつはいつから、クラスタに侵入した。いや。

クラスタに侵入者がいる、という情報は既に入ってきている。

クライ・フェイスが、今、クラスタ中の住民を、何とか避難させようとしていた。

「あのロータスというのは、一体、何が言いたいのかしら？」

陰のある眼だ。

今すぐにでも、カイリに対して害を為しても構わない、といった趣をしている。

実際、もし何らかの理由があれば。彼女は躊躇なくカイリを殺すだろう。

そういう眼をしている。

彼女は少女的な部分は確かにある。しかし。

普遍的な少女とは何処か違う。邪悪さと、無垢さと。そして、何よりも強い悪意と敵愾心と、強い意志が感じられた。

それは、一つに凝縮され。一つの殺意にさえなっている。

「ロータスの考えとやらを聞きたいのよ」

「以前」

カイリは既視感を覚えて言った。

「以前、ロータスさまとお会いして。同じ事を俺に訊ねた人がいます」

「へえ？ それは誰？ どんな人だったのかしら？」

「ウォーター・ハウスという男です」

それを聞いて、レイアと名乗った少女は愕然とする。

しかし、すぐに気を取り直した。

「成る程。私の夢の中に彼が出てきたのは、貴方の思念が入り込んできたからかもしれないわね」

「そうなんですか……」

きっと、ロータスの能力の影響ではあるまいか。そんな気がしてならない。

ヴィア・ドロローサは。周囲にも影響を及ぼす。特に、カイリは彼女が読み取った思念を読み続けている。その為、深い底無しの絶望に落下していく事が多い。

その事を告げずに、彼女に訊ねていく。

「俺に聞きたい事があるんじゃないですか？ ウォーター・ハウスさんが以前、俺にどんな話をしたか、とか」

「ふーん。確かに興味があるわね。お聞かせ願えないかしら？」

カイリは以前、暴君ウォーター・ハウスとの交流の内容を思い出しながら、彼の語った事について思い出せる範囲で、彼女に伝えていく。

ロータスに関する疑問。

カイリなりの、ロータスの言葉の解釈。

暴君の飄々とした態度の事。

「たとえば。人間が自ら悲劇を創りたがるのは、それは何処までも快樂に満ちた行為だからだろうとも言っていました。ある意味で言えば、それこそが人間の一面であり。それを否定する事こそが、更なる人間の悲劇を齎すだろうとも。そして、彼は自らが破壊と殺人に溺れる事によって生きる意味を獲得したいと言っていました。そして、それ自体を目的にする事によって、純粹無垢な悪になるのだと」

「純粹な悪ね」

彼女は無表情のまま、相槌を打つ。

「ロータスさまとはまるで考え方が違うんです。でも、ロータスさまは彼は正しい事を理解していると言った。それはどういう事なんだろう、って俺も思いますね。彼女とはいつも分かり合えるような気がする時と。俺にさえ、全然分からない時がある。それは彼女の中に、何か降りているからなのでしょう。彼女が視ている世界は、彼女自身でさえ理解不可能なのかもしれない。彼女は何とかしてそれを言葉にしたいと考えている。その為、彼女の会話は分かる時と、分からない時がある。それは彼女の能力の性質上、仕方が無い事だと思っています」

「なるほど。そういう事だったのね」

少女はくくっ、と笑った。

「というわけなんです。どう思います？」

少女は顎に手を置いた。

「へえ。あの男、そんな一面もあったのね」

「彼を知っているんですね。もしまたお会いする機会があれば、伝えて欲しいんです。俺、貴方と、また話してみたいって」

「それは無理ね」

刃物のように、鋭利な声音で彼女は言う。

「だって、そいつ。私が殺したから」

何の韜晦も含まない、淡々とした事実。

カイリは一瞬、呆けたような顔になる。

「こ、殺したって……」

「ええ。私が殺したの」

少女は鼻で笑う。

事実なのだろう。

「そうですか。彼は自分が死んだ後の事も考察していましたよ。死んでもなお、自分が残るだろうって。そんな事を語っていました」

少女は首を傾げる。

「どういう事かしら？」

カイリは少し言いにくいそうに言った。

カイリ自身でさえ、どういう事が分からない。

「俺は観念になる”って言っていました」

それを聞いて、彼女は眉間に皺がよる。

「なるほど。そんな力があるみたいね。つい前に、私の夢にも出てきた。おそらくは、彼の言葉に私が何処かで感化されていて。貴方の首領の言葉によって、私の中で何らかの思考のズレが生じたから、現れたのでしょうかね」

彼女は淡々と何かを分析しているみたいだった。

「それは彼の能力、というよりも。別の才能とでも言うべきか」

「他に何を言っていたのかしら？」

「俺は再生され続けるだろう。俺が言葉を与えた者達に。単純なトリックだ。催眠暗示のようなものだ。俺はそいつに囁き掛ける。俺の言葉はきっと強いんだ。たとえば、俺の持っているオーラ。俺の言っている言葉の力強さ。会話の中で生じる空間と空間の情感。その中に俺は他者に侵入する事が出来る。”って。彼自身は、自身の能力である『エリクサー』ってのとは別物だ”って言っていましたけど。単純な技術の問題だ”って」

「ますます分からないわね。技術でそんな事が出来るっていうのかしら？」

「だから、実験している”って言っていました」

カイリは自然と暴君の言葉が出てきた。

まるで、テープ・レコーダーのように再生されていく。

「破壊在る処に、俺の意志があるだろう。俺は殺戮と破壊に対する言語を持ち得る可能性がある筈だ。俺は殺人する。俺は夜と夢の中に存在する事を願っている。俺がこの世界から消え去ってしまった後もなお、俺は生き続けるだろう。お前らの中でな。お前らは俺を再現する為の道具になるだろう。俺は書物になりたい。破壊の言葉が書かれた書物にな。俺は何処までも強大になっていこう。俺を知る者がいる限り。俺はいつか世界中に浸透していくのかもしれない。俺は永遠に滅びない存在になる。俺はお前のような奴が大好きだ。きっと、俺を語り継いでいこうからな”」

少女はふうっ、と溜め息のようなものを吐いた。

「世界中の人間の苦悩と苦痛を見てみたい。それはある意味で言えば、ショーでさえあるし。俺はそれを楽しいと思う。俺は悪であるが故に、それらを傍観するんだ。そして、俺は死や破壊を撒き散らす。俺は救い難い無価値になる。何の理由も無いからこそ、俺はそれが楽しいと思っている”」

カイリは話していて、何だか楽しくなってきた。

何故だか、清々しい気持ちになる。

「もういいわ」

彼女は踵を返した。

暴君はカイリに言った。

ある実験をしているのだと。

自分が生きている内に、それを成し遂げたいと。

暴君は自らの死も、念頭に入れていた。

彼は果たして、今、どうしているのだろうか。

何処で何をやっているのか。

しかし、よからぬ事をやっているのは確かだろう。

もし、生きていたとしたら、また会ってみたいな、とも思う。

実は、沢山、話したい事がある。

命の美しさ。

そんな言葉が頭の中を過ぎった。

ロータスが伝えようとしているものは、結局はそういう事なんじゃないのか、と。

命の大切さとは何なのだろうか。分からない。

人間はただ生きているだけじゃない、食物で生きているわけじゃなく、言葉で愛で生きていると思う。

大切なアニマの為に、カイリは生きている。

守れるだろうか？ 守りたい。

幸せが何なのか分からない。けれども、幸せにしたい。

自分なんかは幸せになっていいのか分からない。

いや、そもそもだ。幸せの状態というものが余り、分からない。

命の輝き。

何もかも、失われていく。

生きるという事。

それは、大気や食物で生きているわけじゃない。

国家の為、社会の為、家族の為、誰かの為に生きているわけじゃない。

自分の為に生きるという事。

そういうものだと、分かっているながらも。……。

あの男は何て言ったっけ。そう、暴君は……。

美しさなんて存在していない。

だからこそ、人間は美しさを認識したがる。

神がいるとするならば、きっとこの世界に何の干渉もしてこないのだろう。

だからこそ、人間は大いなる神の導きを信じたがる。

そんな事も言っていた。

在り得ない世界にて。

闇は言う。

「ふははっ、レイア。俺が何なのか理解したか？ 俺がやっていた事が」

「ええ、胸糞悪いわね」

カイリという男と会って、話して、ようやく理解した。

「そう、俺はイデオロギーになりたかったんだ。俺は死んでもなお、再生産され続けている。そんな実験をずっと行っていた。カイリって奴にも話したんだな」

男は哄笑を続ける。

「私からすると、貴方の言っていた考えなんて大した事なかったわ」

「そう。でも、勝手に捏造していつているだろ？ 俺と話していた奴がな」

男の金色の髪は揺れている。風も無いのに。

「いわば、俺は“神”になったんだろうよ。神さまってのはあれだ。人間の思考と観念の増殖によって生まれてくるんだろうな」

辺りは。

空間が渦巻いている。

闇がとぐろを巻いていた。

暗黒の空は、漆黒の海溝のように深い。

破裂音。

少女は振り返る。

そいつの肉体はバラバラに砕け散っていく。

沢山の羽虫となって、飛んでいく。

細かい粒子の粒。蠅だ。

腐乱した肉に蔓延る怪物。それはおぞましく飛び回る。

黒い羽虫の渦。そいつが立っていた場所には。

朽ち果てた、テレビの残骸が置かれていた。

沢山のビデオ・テープとビデオ・デッキ、テレビの山だ。

沢山の映像が再生産されて、映像が映り込む。

映像が流れ出される。

各世界の、各歴史の、各場所における戦争が映し出される。

それらの全ては宗教戦争だった。各々の旗や信仰する教条を掲げている。

各々が、自らの信条を信じて戦っている。

沢山の戦死者達の映像が映った。

彼女は何処までも冷たく、その映像を眺めていた。

「汚らわしいわねえ」

レイアは言う。

ウォーター・ハウスは無言で頷く。

「だろうな。お前は何も信じていない。そうだろ？ 宗教なんざ、完全に馬鹿にしている。真理なんざな。神だの何だのをまるで信じない。創造主だの、万物だのを。しかし、どうもそれを信じたがる人間がいやがる。俺だって、きっと信じなかったんだろうな。だから、実験を開始したんじゃないかな？ 適当にでっち上げた思想や観念とかいうものを、他人に撒き散らしてみると、どういう結果が起こるのか。生前の俺はそう暗躍していたんだろうな？」

二人は、お互いを見据える。

「人間の弱さに吐き気を覚えるわ。何かに縋る事でしか生きられないという事実。何かに依存して存在しているという事実」

「お前の凄い処ってのは、その縋るだの依存だのってのが、世界の環、みたいなものにまで行き着くからなんだよなあ？ たとえば大気、たとえば食物。たとえば社会。たとえば国。たとえば愛。なあ、お前は何処まで孤独になるんだろうな？ 俺は興味がある。お前の行き着く先に」

「ふん、貴方ごときに何かを言われる筋合いは無い、わね」

「ははっ、だろうな」

ウォーター・ハウスは哄笑する。

レイアは不快に思った後、すぐに気付く。

こいつを“再生”させ続けるのは、どうしたものか。

おそらくは、他の誰かも、こいつを夢や回想や幻覚などの中で、再生させ続けているのだろうか。

神。観念。

ビデオ・テープは回り続け、映像は続く。

独裁国家も共産国家も、民主主義国家も、何かしらの宗教を掲げて国を維持し続けていた。

本質的には、みな、同じものなのだろう。

聖書、聖典、哲学書、文学書、芸術作品。

それらは歴史を超えて、時間を超えて、様々な地域、様々な場所、様々な人間の間で、認識されて。再生産、再生され続けて、その人間に影響を与え続ける。

そして、それらの物語に触れた者は、物語に様々な解釈を与え続ける。様々なイメージの投影を続ける。

歴史に残った書物は、そうやって、日々、成長を続けていく。

様々な人間が、解釈を肥大化させていき、注釈を付けたり、他の書物と比べて語ったり、新しい書物を書く上での参考にしたり。

……………

「不死だろう？ 俺は死ななくなった。違うか？」

「馬鹿らしい……」

レイアは心底、嫌そうな顔をする。

「無限のエネルギーだ。俺は何処までも“強くなる”。そうだろう？」

「本当に、おぞましいわね」

果たして。

それは、彼に向かって言ったものなのか。

あるいは、……人類全ての持つ気持ち悪さに対しての……。

自分自身の。

所謂、強さとやらの行き着く先は何なのか。

レイアが求め続けている、強さ。象徴的なもの。

誰にも触れられず、誰も届かないもの。

それは、一体、何を意味しているのか。

「仮に私がフェンリルの創造したものだとする。そして、私のイメージが、貴方を創造している……分からないわね」

「そう、イメージは無限だ」

「まあ、私は在る、と思うけどね。私はフェンリルと独立して存在していると」

「なるほど。お前も、“神”とやらを目指しているんだらう？」

「不本意だけれど、そうかもしれないわね。そういう事になるのかも」

レイアは小さく舌打ちする。

神になるか。気持ち悪いし、気味が悪い。

「神を作った神がいるかもしれない。更に、そいつを作った神も。それで、だ。お前は考えるわけだ。神の神の神の神の神の神の神の……を、あるってことじゃあないか？ お前が探し求めているのはそれなのかもな？」

「あるいは、世界は無限か有限か、かしら」

だんだん、この男の思考が、彼女の思考の反復へと変わってきている。

それが、得た情報の限界。

それが、ウォーター・ハウスという男を認識して、形作ったレイアのイメージ。

彼は彼であって、彼ではない。

「まあ。その思考はもういい。分かった事がある」

「何だ？」

「ロータスの能力……瞑想とか言ったかしら、おそらくは……」

過去の世界、その帳尻を合わせようと人間は生き続けているのだろうか。

レイアは願う。

世界を形作る環も、絆も、何もかも壊してやりたい。

解放されて、自由になりたい。

それ故の、孤独なのだから。

ただ、独り。自分に触れようとするものの全てを壊す。

それは、きっと今、関係している者達も入る日が来るのだろう。……。

全ての絆に意味は無い。

自分は孤独を望む。

しかし、それは他人の為に背負うわけじゃない。

深い闇が辺り一面の空間に広がっていく。

無感情なまでに。無感動なものとして。

人間は独り、生まれ。独り、死んでいく。

そして、様々な空間、場所、地域の中にある、心とした瞬間の中に。

孤独に触れる。

それは、確かに実体感を伴って、人は孤独の只中に落ちていく。

何故、人は人と共に生きようとするのだろうか。

レイアには分からない。

余りにも、何処まで行っても、人間は一人一人、孤独の中に幽閉されているというのに。

世界という環の中。

人間が何処までも、堂々巡りだ。

大量の貨幣の生産と大量の死体の生産。

奪う者と、奪われる者。

多く持つ者と。持たない者。

その差異は、何処にあるのだろうか。

全ての孤独を吸った時。

何が視えるのだろうか。分からない。

ただ、分かるのは一つ。

レイアは誰も愛さない。

それだけは確かな。意志。

絆と絆が結んでいる、世界の環。

一切を信じない、という事。

決して。信じ続けない事。

テレビの映像が今、映し出しているもの。

沢山の人間が、小さな牢獄の中に一人、押し込められている。

それぞれ、ガリガリに痩せている。

哀願を乞う者。空ろな眼で天井を見上げる者。檻を握り締めたまま無言でいる者。

年齢もバラバラ。場所もバラバラだ。

ただ、彼らは独り、檻に入れられている。

それぞれ、深い悲しみや怒りを讃えていた。

今にも、死にそうな者も多い。

次に、テレビが映し出したもの。

それは、沢山の腕達だった。

それらの腕達は、一体、何に手を伸ばしているのだろうか。分からない。

神なのか。国の支配者なのか。

その腕は何を欲しているのだろうか。

食べ物だろうか、それとも金なのだろうか。それとも愛……？

……くだらない。くだらない。くだらない……。彼女は頭の中で、嘲笑し、罵倒し続ける。人

間は、何故、これ程までに同じなのだろうか？

延々と繰り返される、何処までも何処までも。歴史が続く限り。

一面に光が刺し込んでいく。

世界全体の黒雲が渦を巻き、消し飛んでいく。

それは、広がりながら、収束する事を止めはしない。何処までも何処までも世界全体へと広がっていく。あるいは、この渦こそが世界なのか。

気が付けば。

そこは、一面、廃墟だった。

沢山の瓦礫の山が並んでいる。

彼女は歩き出す。

生命は無く、その空ろな幻影ばかりが漂っているかのようだった。

人の生活の名残。人が生きていた残骸。

今や、誰も生きていない世界。

おそらく、この世界には誰も来れない。

何故ならば、此処に来る前に人間は死んでいるからだ。

生きた人間のいない世界。かつて、誰も見なかったであろう世界だ。

人間ではない者である二人が、歩き出す。

微かな、肉の腐る臭いが充満している。

大気は濁り水のように、腐っている。

そこには。

沢山の死体達が置かれていた。

腐っている者。白骨化した者。拷問死した者。様々だ。

「此処は？」

「強制収容所じゃないのか？ 色々な国の」

何か、奇妙な形の建物の前まで来た。

それは、建物ではなかった。

山だ。……。

人間の死体で積み上げられた山。

それぞれが、様々な表情で死んでいる。

「ははっ、戦争ってのはすげえーな。あんなに殺せるんだもんな？」

沢山の骸骨が、瓦礫の山から立ち上がり、這い出してくる。

そいつらは、それぞれシャベルを手に持っていた。

そして、ひたすらに意味も無く。地面に穴を掘り始めた。

ウォーター・ハウスは山の中から、死体の一つを動かす。

その死体の眼は、もう何の希望も灯していなかった。人生、生命の全てに絶望し切った顔をしている。その死体はガリガリに痩せていた。

肉体には幾つもの痣がある。おそらく、何らかの虐待を受け続けたのだろう。

「ははっ、見ろよ？　なあ、レイア？　人間は生存しているのか？　俺には分からない。なあ、俺に教えてくれないか？」

「知らないわよ」

萌黄髪の少女は、あくまでも無感動だった。

「こいつの顔、見てみろよ？　少なくとも、こいつは言っているぞ？　人間は絶滅すべきだ。俺のようになってな？　なあ、こいつは死んだ後、この世界を赦せたのかな？　ほら、こいつ何の希望も無いじゃないか？　きっと何年も何年も虐待され続けたんだろうな。捕虜収容所か何かののかな？　こいつの皮膚、疫病にも掛かっているし。頭なんて、何度も、何か鈍器で叩かれたような痕があるぞ？　なあ、人間なんて生きていていいのかな？」

ウォーター・ハウスは笑い転げた。

腹を抱えて、笑っていた。

「世界は無慈悲だな？」

「私には関係無いわね」

レイアは面倒臭そうに言った。

雪のようにも見える。

空から大量に何か降ってきた。

レイアとウォーター・ハウスの周辺を除いて、沢山の雨が降り続ける。

それは、紙幣の雨だった。

沢山の金の束が、様々な国の様々な時代の金の束が、大量に降り注いでいく。やがて、それらは積みり積もって、ビルを積み上げていく。ビルは大量に出来て、一つの国のような形へと変貌していく。

ウォーター・ハウスは笑い続けた。

完全にこの光景を馬鹿にしている。

しかしまあ。

彼の嘲笑には、レイアもある程度、同感だった。

「あんなの全部、死んだ木なのにな？　金なんてほら、只の木の死体に過ぎないだろ？」

彼は、そう言って、哄笑する。

壊れたように、ゲラゲラと笑い続ける。

一通り、笑い終えた後、彼は言った。

「そう、お前は知っている。人間同士の友愛、絆なんてものの正体。それが、アレだもんな？　確かに生きる事に救いはあるかもしれないな？　だが、救われない人間も間違いなく存在し続ける。救われない人間ってのは、何だろうな？　救われる人間の為の養分なのかな？」

また、二人は歩き続ける。すると。

沢山の十字架が並んでいた。

それは、沢山の人間に突き刺さった剣だ。

十字架は炎を上げて、燃えていく。

焼け爛れる人間の死体。

皮膚が炭化し、黒い骨と化していく。

その黒い残骸も、ポロポロに崩れていき、墨へと変わっていった。

人間というものの、終焉。

レイアは面倒臭そうに、淡々とそれらの光景を眺めていた。

何処まで行っても、彼女にとっては他人事ではなかった。

「だから、絆だの友愛だのなんて嫌いなのよ」

レイアは言った。

彼女にとっては、これらの、人類の悲劇の数々は、余りにもどうでもよく、下らない事でしか無かった。余り、興味がある事でも無かった。

きっと、この光景は、それを再確認する作業。

ウォーター・ハウスは頷く。

「さてと。俺は次の場所に向かう」

「次の場所？」

「ああ、他にも俺を見たがっている奴がいるんじゃないのか？ 俺を再生させたがっている奴がな」

「そう。ひょっとして？」

「そう、俺はそいつの言葉で。お前に語ったのとは、別の事を言うのだろうか」

神の概念。

それは、あらゆる神を否定していった先に視たものなのだと。

自然、都市。物質。粒子。宇宙。

その中で、確かに神は存在しているのだと。

そう。

あらゆる絶望の中においてもなお、神は存在しているのだと。

そう信じる事によって、救済される。しかし。

救済だけでは駄目で、いつかこの世界をひっくり返さなければならないのだと。

この世界に現れている苦痛、悪夢、悲劇。

その全ては報われない。

死後の世界は信じてはならない。それでも。

彼らの苦しみは、浄化されなくてはならない。

このままだと、報われないから。

酷過ぎる世界の只中においてもなお。

希望を持ち続けるという事。

苦しみは反芻し、反復していく。

何故、その環から逃れられないのか。

何も信じられない世界、けれども。確かに思うのは。

死んだ者達を、死んだままにしているのはならない。

彼らは呼び覚まされ、受けてきた苦痛を、悲鳴を、再び、この世界で訴えなければならない。

彼らは復活しなければならないのだ。

彼らが生きた証として。彼らが存在した証として。

そう、ロータスは。

届かなかった言葉達の声になる。

救われなかった者達の、声になる。

彼女は、苦しみと対話し続けている。

それこそが。

彼らの意志を呼び覚ます為の力。荊の道。

磔刑への道だ。

それは、ただ吊るされて、人々に石を投げられるだけの生き方でしかないのかもしれない。

そこには、未来は無いのかもしれない。

「カイリ。わたしは神託しか出来ない。何故なら、わたしは他に何も出来ないから」

ロータスは何処か遠い眼をしているように語った。

「それでもいいですよ。みんな、貴方に貢献したがる。貴方は神託を伝えるだけでいい。貴方はみなにとって必要な、言葉、なんだ。それに関して、貴方は決して気負う必要なんてない」

「そっか。嬉しいわ」

ロータスは、景色を眺める。

この場所から見える景色は、とても美しい。遠くに見える海原。砂漠と溶け合うビルの群れ。「青空にも、木々にも。風のせせらぎにも。汚染された大地にも。くすんだビルにも。赤茶けた海にも。戦争によって破壊された瓦礫の街にも。沢山の言葉が眠っている」

二人の間に、風が吹き抜けた。

陽光。

刹那の中に、今が永遠なのだと感じた。

カイリは絶望している。

この世界に闇しか見えない。だから、暗い部屋。夜の時間が好きだ。しかし。

ロータスという瞬間。アニマという瞬間。

昼の時間も赦せるようになる。温かささえ感じる。

眼を閉じる。風をより強く感じた。

カイリは知っている。

ロータスとアーティ。

どちらも、正しくないのだろう、と。……………

それでも、感覚だけで、彼はロータスの側に付いて。

感覚だけで、アーティを嫌っている。

実は、正しいとか正しくないとか、どうでもいいのだ、と。

情緒、感性、美意識。そんなものと正しさは共有するのだろうか。

それにしてもだ。

この世界の全てはイメージの連続なんじゃないだろうか。

誰かを認識し、何かを認識し、イメージを形作っていく。

分からないのは、そのイメージのズレがあるという事。

きっと、それは体験なんだろう。

未来を作り続けるのは、いつだって過去だ。

過去に根差したものの、それによって人間は自分という存在を形作っていく。

歴史を構築していく。

壁一枚を剥がしたような世界。

一面が瓦礫の山だ。

全ては無情。無情な死ばかり。

そこには何も無い。

叫喚ばかりが上がっている。

死んでいく感情ばかりがそこには横たわっている。

何も無い空虚。ある種の開放感さえ伴っている。

破壊の痕。無情なる死。

無慈悲。

横たわる死体。

腐臭が漂い始め、蠅達の巣窟へと変わっている。

爆撃。沢山の悲鳴がまた上がった。

そこにいる者達は、ただただ天を仰いでいるが。しかし、それが届かない事を知っている。
無情なる死。

ただただ、みな、自身を一個の悲鳴へと変えようと。

逃げ惑っている。

そこに触れる者なんて無い。

爆弾で飛び散った手足が散乱している。

断面はぐちゃぐちゃだ

そこは深い死の空間ばかりが広がっている。

ある意味、それは極めて創造的でさえあった。

一つの絵画として、音楽として、その空間は存在していた。

.....

汚い緑。

ヘドロの群れだ。

死体達の発する臭い。

蠅の群れ。

.....

カイリは、彼女の能力に触れている。

イメージが頭の中に浮かび上がってくる。

そう、それは紛れもない、地獄の世界だった。

ロータスの無制限のヴィア・ドロローサが唸りを上げる。

真っ赤な炎が、世界を焼く。

人々の肉が焙られ続けて。

腐臭の汁が、ポタポタと流れ落ちていく。

汁からは、白い蟲達が産まれて、やがて黒い羽虫へと変わっていく。

沢山の十字架が並んでいる。

積み上げられた死体。

.....

人間だった形を少しずつ、少しずつ崩していき、爛れて、溶けていく。

人間の痛みフラッシュバック。

荊の道の力。それは、人間の闇を引き戻す事だ。

かつて、行われた苦痛。虐殺。拷問。

それらを、再び、この世界に引き戻す。フラッシュバックさせる。

.....そう。

ヴィア・ドロローサは、彼女の手で触れた相手に、幻影を見せる。

そして。

その能力は、現象として、敵を攻撃する事も可能だ。

フラッシュバックさせた悲劇や痛みを、そのまま敵に送り込む事が出来る。

……。彼は、ロータスの見せた、その光景を思い出しながら、眠りに付いていた。

カイリはアニマを抱き締めていた。

同じベッドの中で、彼女の息遣いが聞こえる。

何で、他の男達にも身体を預けるの？ カイリは訊ねる。

アニマは答えに詰まる。どう言葉に現したらいいか、分からないといった感じ。

十

「さてと」

暴君は眠そうに眼を擦った。

彼の腰の下ではヴリトラが地面に沈んでいた。

「どうするべきだろうな？ ああ？ 俺はお前を始末するべきなのか？ せっかく、カイリと話して楽しめたってのにな？」

彼は静かに溜め息を吐いた。

ヴリトラは頭を上げようとする。びくとも動かない。

まるで、大岩が頭に押し掛かっているかのようだ。

屈辱感ばかりがこみ上げてくる。

暴君は首をこきり、こきりと鳴らす。

これが、『ドーン』最強の一角。……。

「さてと。お前は何で、ロータスに従うのかな？ 俺はそこに興味がある」

彼は圧倒的な力で、ヴリトラのプライドを挫いていた。

更に、全身に体重を乗せていく。

ヴリトラの顔が地面に沈んでいく。

暴君は立ち上がった。

そして、おもむろにヴリトラの顔を蹴り続けた。

まるで、抵抗する気になれない。

頭蓋が鳴り響いていく。

「質問がある。お前は強い方の人間か？ それとも弱い方の人間か？」

何故か、真面目な口調だった。

口の中が切れて、巧く喋れない。それでも、暴君はおかまいなしだ。

ヴリトラは、彼の姿を見て、ロータスやアーティ達に仇なす者と認識して、思わず、キレて飛び掛ったのだった。結果、この様だ。

こいつは、気分で動いているのだろう、というのは分かった。

どんなに死ぬ覚悟があったとしても、こいつのような圧倒的な暴力の前では、全てが無意味だ

った。けれども。

こういう気まぐれに、秩序を破壊しにくる奴を好き放題にさせてはならない。

ヴリトラは誓っていた。クラスタを守らなければならない、と。

ヴリトラは自分を一つの死へと変える事を願っていた。

自分自身が一個の兵器へと変わる事。

一個の弾丸をイメージする。

自分自身は敵を殺す為の爆発物なのだ。

自分自身の命と引き換えに、主に仇なす敵を殺す為の。

矛にして、盾。

自分は死ななければならない、と思っていた。

主の為に、仲間の為に、死ななければならない。

自分の死一つで、全てを守りたい。

いつも、そんな事ばかりを考えていた。

だから。もっと、強くなりたかった。

美しく死ぬ為に、強く強く、今よりもより強く。

そんな生き方をしなければならないし、そんな最期でなければならない。

くだらない人生だった。

かつては野心家だった。

名を上げて、栄光を勝ち取れると思っていた。

かなり、自尊心が肥大化していたと思う。

権力さえも、手中に収められるのだとも思っていた。

結果、ズタボロになった。

彼は沢山の者達を殺した。罪の無い者達。

どこかで、友愛や平和などにも憧れている部分があった。

弱い奴を助けたいとか、も。

けれども、彼がやった事と言えば、沢山の人間を殺した事だった。

余りにも、下らない事。何処までも愚かしい事。だからこそ。

今は守るべきものがある。

それは幸せな事だ。

彼は充分、生きたと思っている。幸せを生きた、と。

自分は死ななければならないと思っている。死ぬ事が出来るのだと。

自分自身の命によって、大切な者達を守る事が出来るのなら。自分が生きた意味はある。

もし、それが犬死にだとしても。どうか、意志を残せないのか、と。

そればかりを、延々と、延々と考え続けている。

もうすぐ、戦うべき時は来るのだろう。きっとだ。

クラスタに突入する前の事だ。

ケルベロスはフェンリルと、こんな話をした。

「自らの命を使って、何かを成し遂げる事に意味があるのだろうか。たとえ、その結果が無理であるとしても。……」

ケルベロスはすぐに理解する。

「ヴリトラの事か」

「ああ」

「以前の俺と似ているんだろうな……」

彼はマルボロの箱を空にしている事に気付く。

そして、ポケットに手を突っ込む。

「フェンリル。……お前は煙草は吸わないのか？」

「吸わない。可愛くないから」

何だか、ちぐはぐな会話。

「困ったな。少し落ち着かない」

彼は口の中で舌を動かしていた。

「向精神薬ならあるけど」

「そういうのは俺は駄目だ」

フェンリルは何かを思い出す。

そして、何かを何も無い空間から取り出した。

細長い棒状の物が幾つか。

「お香とかじゃ駄目か？」

「……ああ、それでいい、煙が出るなら。礼を言う」

彼は棒に火を付ける。

煙が流れる。

「いい匂いだな」

「サンダルウッド。所謂、白檀。煙草に近いかなって」

彼は笑う。

「ふう。頭が回る。……」

彼は煙を勢いよく吸い込む。

「……そう、ヴリトラだが。どういえばいいのかな」

彼は少し、考えて。言う。

「あいつの眼は死ぬ事を怖れていない」

その理由は自分以上の何か大きな存在に対する使命感。

……以前の俺もああだったのだろうか。

ケルベロスは悩む。

今はどうなのだろう。

自分は実直に生きたい。

そうする事によって、大切なものを守れるならば。……。

……………。

正直、迷っている。

クラスタを本当に壊していいのだろうか、と。

だからこそ、話す必要がある。

ロータスと、そして、おそらくは他の教団の住民達とも。……。

しかし。

これも分かっている。

フェンリルやキマイラ。

二人は、彼を信用していない。何やら、勝手に行動しようとしているみたいだった。

実際、いつの間にか、彼らの姿が無い。

ケルベロスには、彼らを繋ぎ止める力がまるで無い。

彼らの好きにさせるしかない。

おそらく、ケルベロスよりも極めて合理的に、目的を達成する事が出来るのだろう。

「リーダー・シップがまるで無いな、俺……」

先ほどから、ニアスが心配そうな顔をしている。

何かを言いたそうだが、喉下まで出掛かって、飲み込んでいるかのような。

しかし、何だか。言えない、そんな表情。

「あの……」

ヴリトラだった。

彼は困惑したような顔で言う。

「あのですねえ。ロータスさんの他にも、アーティさんっていう方がいるって言ったじゃないですか。彼のいる建物の辺りに今、来ているんですよ。お会いになりますか？」

ケルベロスは頷く。

十

「今日も生きている事に感謝しなきゃな」

グロウはタオルで、汗を拭っていた。

自分の手で作り上げたタオルだ。

丁寧に、ミシンで縫われている。

此処で、少しずつだが、小さな社会が出来上がっている。

いずれ、完全にロータス側と分離していくだろう。

彼の仲間であるゲイズが、同じように汗を拭っていた。

そして、水道で両手を洗って、泥を落としている。

ゲイズは細身の筋肉質だった。いかつい顔をしている。

二人共、農業や工場労働によって、日々、生きている。

ゲイズはかつて、貨幣や私有財産の無い世界を夢見て、共産主義に目覚め、爆弾で大企業などを吹っ飛ばした事のある男だ。今も然るべき場所では、指名手配を受けているらしい。

クラスタは何でも受け入れる為、彼のようなテロリストタイプの犯罪者なども存在する。

ゲイズは、よく昔の事を自慢していた。彼の所属していた組織は、理想国家の建設を願っていた。ある国を傾ける寸前まで行って、次々と仲間達が捕まっていき、彼はこんな場所にまで逃亡したのだと。

グロウは彼が好きだ。

共に、国家や神、資本主義のおかしさなどについて語る時、本当に仲間意識を感じる。

「いやあ。やはり、神様ってのは、俺達を見守ってくれているんじゃないかって思うよ」

ゲイズは笑った。

二人共、楽しそうだった。

「しかし、此処は楽しいな。適度な仕事と適度な食事。俺は此処に来て、本当に良かったと思っているぜ」

ゲイズには、クラスタに来る住民独特の影が無い。

彼はいつも前向きに生きてきた為、アーティの思想と波長が合ったのだろう。

アーティの努力すれば、必ず報われる、という言葉に糧に、これまで頑張ってきた。

気配。……。

異質な気配がする。

突如、その異邦人は現れる。

「あのね、貴方達。アーティとかいう奴の部下だっけ？」

その女は、いつの間にか、そこに立っていた。

異様なまでの空気が、全身から発せられている。

言うなれば、それは瘴気とでもいうような。

同じ空間にいるだけで、足が竦みそうだ。

こんな存在を見た事は無い。

強いて言うならば、あのロータスの齋す闇に近い。

第一印象。

言葉が、一切、通じなさそうだった。

まず、こいつは、彼らをまるで人間として見ていなかった。

そもそも、こいつの両眼。まるで、人間のそれとは思えない。

彼女は畑に植えられていたレタス手にしていた。

奇妙なものを見るように、眺めている。

「よく頑張っているわねえ。貴方達って」

彼女はその色形を真剣に眺めていた。

「まあ、後、数年すればもっと立派な野菜を作れるでしょうね。何だか、形が歪だわ。小粒も多いし」

でも、作れる量が多いから。食べ物には困らないかも、とも付け足す。そして。

「ああ、そうだ。数年後の先なんて無いの。貴方達には」

彼女は寒気のするような表情をしていた。

まるで、一切を見下すかのような。

少しだけ、何処か楽しそうだった。

唇を指先で撫で続けている。

グロウは、咄嗟にゲイズを庇うように、彼女の下へと向かった。

「アーティさんに会わせるわけには行かない。どこから入ってきたか分からないが、お前は此処にいてはならない。お前は俺が倒す」

「あら、そう」

彼女は何か手にしていた。

「貴方が会わせたくなくても、私は会おうと思っいてね。それから、やっぱり貴方は私を倒す事なんて出来ないわね。何故なら、貴方の未来なんてもう何も無いから」

彼女は、恐ろしい程、優しい笑みを浮かべていた。

まるで、捕まえてきた昆虫の羽根を摩るような。

「これから、私は貴方に質問したいの。貴方に未来が無い事は決定している事なんだけれども。そうねえ、たとえば、ほんの少しでも、楽に死ぬるかも。いいかしら？」

グロウは、彼女の独白に付いていけない。

グロウは後ろを振り返る。

すると、思わず、頭が混乱しそうになる。

ゲイズが地面に倒れていた。

一体、何があったのか分からない。

彼の頭は異様に曲がっている。

口元から、大量の泡を吐いていた。

「ああ、そうそう。彼、もうすぐ死ぬから」

「お、お前、何をした？」

「何って」

彼女は、レタスを剥いていき、中から、何かを取り出す。

それは、赤く染まった灰色の何かだった。

「それは……？」

「これ？　そこで眠っている。彼の頸椎の骨」

そいつは、満面の笑顔になる。

残虐的な行為に愉悅を感じる者の笑み。昆虫の羽根を耑り取るような。

「処で、アーティって奴は何処かしら？　この辺りにいるのでしょうか？　それにしても、驚いたわ。ビルの中に工場があるなんて。畑も素敵ね」

他の野菜は駄目だけど。でも、カボチャの出来は良かった。どうやったら、あんなに大きなカボチャが作れるのかしら？　と彼女は賞賛する。

グロウは能力者だった。

『セイント・ブリンガー』という力を持っている、アーティから名付けられた。

そして、グロウは階級の一つ、“浄化”を纏めている者でもあった。

咄嗟に、グロウは能力を使う。

自身の全身が、硬化していく。

これが、浄化の能力。肉体を硬化していき、更には。あらゆる物質の強度を増していく。

「お前は、お前は何だ？」

「ああ、私はキマイラ。異形の者。処でアーティは何処？」

彼は拳に力を注ぎ込む。

自らの能力を発動させている。

「ああ、処で貴方が何をしようとしても無駄よ。何故なら、もう貴方は。私に始末されちゃっているから」

彼女はポケットから、煙草の箱を取り出す。

そして、火を点ける。美味しいわね、と呟いた。

グロウは気付いた。

足首から下が殆ど、動かせない。

まるで、地面の中に埋まっているかのようなようだった。あるいは、地面そのものと同化してしまったかのような。

感覚が無い。神経が通っていないのか。

腰から下に、巧く力を入れられない。

しかし、彼はそのまま硬化させた拳を勢いよく、キマイラへと叩き付けた。鉄槌のような攻撃だ。これで、人間の頭部くらい、簡単に砕く事が出来る。

べっしゃ、という勢いのよい音がする。

彼女の顔が溶けるようになって、彼の拳を貫通させる。

しかし。

「なるほど。お前の能力は大体、分かった」

グロウの拳を顔面に貫通させたまま、彼女は楽しそうに言った。

彼の能力は、敵に対して。一切、何の役にも立たなかった。……。頭蓋を粉々に破壊する事が出来ても、このように溶かす事なんて出来ない。グロウの能力は。……。まるで通じない……。

遠くで話し声が聞こえる。

どうやら、アーティの声だ。

助けを求めたい。

「……ケルベロス？」

キマイラと名乗った女は、首を傾げた。

そのまま、彼の腕が顔の中から、離れる。

顔は無傷だ。

何事も無かったかのように、キマイラは歩き出す。

「ああ、貴方はそのまま。良かったわね、ちょっとだけ、生きる時間が長くなったわよ」

グロウは首を捻って、彼女を見る。丁度、彼女が向かっていく位置に、友人がいた。

見ると、ゲイズが絶命していた。

口元から、大量に吐血していた。酷い形相をしていた。

「ああ、そうそう」

彼女は何かを思い出したように言った。

「此処に来る途中、何名か工場労働者風の者達と会って、お話してみたら、襲われちゃって」

本当に困ったような顔。

「全員、もうお日様を見られない身体にしちゃったのよね。ごめんなさいね？ 二度と、彼らはお話する事が出来ない身体になっちゃったわ」

やはり、満面の笑みだった。

「お、お、おお、お前……………」

ぼん、と彼女は何かを投げ付けてきた。

べっちゃ、とそれが、グロウの顔に当たる。

べちゃ、べちゃ、べちゃ、と次々と何かが顔に当たっていく。

それを手にしてみた。

舌だった。

根元から、引き抜かれている。

舌。機能としては、声帯の器官だけではない。引き抜かれると、呼吸が出来なくなり、死に至る……。

その舌が、沢山ある。軽く、十枚を超えている。

「こ、こ、こ、この、この人殺しがあああああああっ！」

グロウは絶叫していた。

「地獄に堕ちろおおお！ 下衆野郎っ！」

精一杯、腹の底から叫び声を上げる。

キマイラはまるで、もう何もかも興味を失ってしまったかのように、振り返らなかった。

十

ヴリトラには、アーティのいる建物の外で待っているように言った。

何なら、何処かへ行っても構わないと、ケルベロスと言う。

どうやら、ヴリトラはもう、捕虜として解放されたのだ、という事らしい。

猫顔の男は、困惑しながらも頷く。

そして。

アーティ。

ケルベロスは、彼と対話していた。

アーティは優男だった。

熱心に本を読んでいた。

どうやら、野菜を栽培する為の本だった。

「今回は、トマトとナスの栽培を成功させたくてね」

「そうか。凄いな」

「すぐに育つと思っていたけれど、此処の気候じゃなかなか巧くいかなかった。前は実ったものが小さかった。今回は何とか成功させたい」

ケルベロスは、真摯な顔で彼の話聞いていた。

ニアスは、少し困惑している。

どうしたものだろうか。

ケルベロス。

どうやら、彼はアーティと対話を望んでいるみたいだった。

そう、初めからそうだった。

彼は対話を望んでいた。クラスタと。

ニアスをドーンに引き入れた時もそうだ。

まず、対話を望んだ。

彼は戦いを望んでいない。

ニアスは、だんだん、この男というものが分かってきた。

彼は。……お人好しなのだ。……。

もう、どうしようもないくらいに。

ケルベロスは彼らが作ったという、畑を真摯に眺めていた。

様々な野菜、穀物、花などが植えられている。

「来年には、工場で、絹も作ろうと考えていてね。まるで方法とか分からないんだけど、やってみようと思っているんだ」

「なるほど。なら、アサイラムでも取り入れようと思う。囚人達も、新しい仕事をやりたがっている」

二人は少しずつ、お互いに、話を合わせていくかのようだった。

ニアスは困惑し始める。

どうしたものなのだろうか。

いや、そもそも。

自分達の当初の目的は、ロータスの捕縛、始末だ。

しかし、ひょっとすると、ケルベロス。彼は和解を求めたがっているんじゃないだろうか。

いや、そうなのだ。そうなのだろう。彼は此処の住民との和解を求めている。

間違いない。……。

「あなたが、此処に訪れたのは。このクラスタの者達が、外の者達に迷惑を掛けているからだろう？」

「あ、ああ……」

「それは、わたし達も非常に困っている。もう、ヴリトラを通して知っているのかもしれないけ

れども、このクラスタってのは、ちゃんとした組織じゃないんだ。みんなバラバラだ。だから、一応、他の教団や組織を模範して、各人間達を統率する為に、階級なんてものを取り入れてみたけれど、意味が無かった。みんなやはり、バラバラだ。協調性がまったく無くてね。ほら、此処ってどんどん外で疎外された者達を取り入れていくシステムになっていて、やっぱり元犯罪者や、此処を逃走場所に考えている現在進行形の犯罪者も多い。それから、全部を把握しているわけじゃないんだけど、何処かの国家を破壊しようとしているテロリスト達も確実にいる」

アーティは流暢な口調で話し続ける。

寡黙なケルベロスは、ただただ聞くばかりだった。

「彼らはわたし達にとっても、“悪”なんだろうけれども。わたしには分からない、どうすればいいのかを。だから、あなたが協力してくれるならとてもありがたいと思っている。お互いに協力し合えないだろうか。あなた達の“アサイラム”と、わたし達のクラスタ。どちらも、疎外された者達によって、築き上げられたものなんじゃないかな？」

ケルベロスは唸る。しかし。

足音。建物の中に、盛大に響いていた。

「意外と優秀だったのね」

その声音には侮蔑が無かった。

ただ単に、認識に多少の齟齬を感じている、といったような。

「しばらく、様子見させて貰ったのだけれども。どうするの？」

キマイラは物陰から、彼らの話の全て聞いていたみたいだった。

不可思議な人間のものではない、足音が鳴り響く。

機械音のような、金属音のような。どれでもないような。

「で、ケルベロス。どうするの？ アーティは始末しないと、それでいいのかしらね。私は賛同しかねるけれど」

彼女は、パシィ、パシィ、と指を鳴らしている。

巨体の男は、少し黙った。

そして口を開く。

「俺達は、彼らを殺す為にやってきたわけじゃない。話し合う為にやってきたんだ。お前は殺せば解決って考えなんだろうけれども、俺の立場はそうじゃない。未来を創る必要がある。何とかして、法を整えたい。みなが住みやすい世界を創りたい。犯罪者を否定したくない。俺はずっと、そんな考えで生きてきた。なあ、善とか悪とかって赦されるのだろうか？ 俺は人間を悪だと思いたくない。正しい社会ってのは無いかもしれないけれども、その実現の為に少しでも努力したい。だから、俺はずっと救いようの無い者達と、何とかして対話する事を考え続けてきた」

普段は余り口を開かない為、彼の性格はよく分からない。

しかし、彼はかなり熱い考えを持っている者だった。

自分なりの正義を真摯に信じている。

「救いようの無い相手ね」

彼はすぐに、自分の失言に気付く。

キマイラを何とか説得しようとする中で、どうも言葉の使い方を間違えたのではないかと焦る。

「勿論、この言い方じゃアーティに対する侮蔑になるな。クラスタに対するな。俺は正直、凄いてって思ってしまったているんだ。このアーティって奴を。何とかして、理想を追い続けたい。その気持ちが分かるんだ」

「そう。そうなの、凄いわね。でも、やっぱり駄目ね。始末するべきだと思うわ。さっきから、そこのアーティとかいう奴。能力を送っているわよ？ 周囲に張り巡らせようとしている。貴方との会話の間に巧みにね」

「……俺だって、その気になればいつだって仕掛けられる。お互い様だ」

「ええ、そう。じゃあ、私が悪人と言うわけね。仕方無いのね」

「お前が分かってくればいい、俺はお前も否定したくない」

羊角の女は、首を振った。

「それは駄目よ。ケルベロス」

キマイラはくっくっ、と笑った。

そして彼女は服の中から、何かを取り出す。

バラバラと、沢山の人体のパーツが落ちていく。

喉仏。心臓。脳の一部。……びくんびくんと、まだ脈打っているものもある。

「私、彼らの仲間を何名も始末しちゃったわ。これから行う事も止めるつもりは無い。アーティは死ぬべきだと思うの。残念だけれども。ごめんなさいね？」

「何故だ？」

「だって、下らないじゃない。みんな仲良く生きようとかってお話って」

一切のブレが無く、真っ直ぐなまでに歪んだ事を言っていた。

「調和する事が大切なんだ。違うか？ 俺は余り死人を出したくないし、みんなが幸福になる事はいい事だと思っている。その為に俺は戦ってきた」

彼もまた、強い決意を秘めている。

「調和か。みんなが仲良くなれる社会、秩序立った共同体。その意味を貴方がどれだけ理解しているのか分からないけれども。まあ、私はそれが素晴らしいと思っていないのよね」

彼女の相貌から、少しだけ険と陰鬱さが見えた。

ニアスはそれが何を意味するのか分からない。

「じゃあ、目的はこうかしら？ 私は此処の教団の者達、全員を可能な限り皆殺しにしたい。それで、貴方は此処の教団の者達、全員を可能な限り説得したいし、あるいは対話したい。落とし処を見つけたい。そういうわけね」

「ああ、そうなるな……」

「そこで、問題が浮上するのだけれども、私と貴方の目的は異なる事になる。その延長線上として、私と貴方はぶつかる事になるわよね。これは私達は衝突して、対決する、という事になるのかしら？」

キマイラはこう言っている。

自分達は戦うべきなのか？ と。

「そこの処は、俺も妥協点を考えている。なあ、キマイラ。元々、この仕事は俺の問題だったわけだ。お前を巻き込んで悪かったと思っている。お前の性には合わないだろ？」

キマイラは余り、納得していないみたいだったが、仕方無さそうに両手を広げた。

「分かったわ。私は引く。それでいいかしら？」

「ああ、助かる……」

驚く程、あっさりと彼女は身を引いた。

ニアスはそれが、とても不気味に思えた。

「アーティは殺さない。それでいい？」

「ああ、分かってくれたか」

「ええ。妥協するわ、私はアーティは殺さない」

彼女はクスクスと笑う。

「本当に、それでいい？」

「ああ、そうだ。それでいい」

それを聞いて。

キマイラは何処かへと去っていった。

後で、また連絡を取らなければ、とケルベロスは呟く。

アーティは険しい顔をしていた。

「何故です？」

彼もまた、折れなかった。

「何故、ああいう人を仲間に行っているんですか？」

まるで、責めるような口調だった。

「ああ。そうだな……、確かに信用出来ない」

「それもありますけれど。あの人は明らかに人として間違っているでしょう。おかしいじゃないですか？ 何で、ああいう人を野放しに？」

ケルベロスは項垂れた。

確かにだ。

アーティの思考というものが、段々、分かってきた。

アサイラムの形式を話していく。

犯罪者に敢えて、徹底した人権を認める事によって、可能性を探る装置。

それは、犯罪者に徹底して人権を認めなかった“地獄の世界”と対比して創られたものだ。

その話をして、アーティは眉を顰めた。

「わたしには理解出来ません。明らかにおかしいですよ、その考え」

きっぱりと彼は言った。

ケルベロスは一見、優柔不断そうに見えて、頑固だ。

彼には彼なりの不屈の意思を持っている。

その中で、どうにか周りとの折り合いを付ける事を考えている。

そして。ニアスは。
キマイラの言葉を思い出し、反芻する。
何となく、引っ掛かるような物言いだったような。
巧く、説明出来ないのだが。

十

ビルの屋上。
レイアは腰を下ろし、脚を組んでいた。
彼女は首をこきりこきり、と鳴らしていた。
正直、彼女はこれまでの闘争の中で、敗北も多い。
しかし、自分の敗北に対して、余りこだわりは無かった。
「やはり、私がロータスを倒すべきなのでしょうね」
もう、フェンリルやケルベロス達は関係が無かった。
自分の意志の下、戦う。
このクラスタがこの世界において、どのように機能していて、どのような意味を持っている。
どのような善と悪の認識のされ方をしているのか。そんなものはどうでもいいし、余りにも興味が無い。
レイアは自分自身の為には戦い続けている。
それは誰かの為だとか、正義の為だとかじゃない。
自分が自分である為。
レイアは咄嗟に、ロータスに攻撃出来なかった。
それは、敵の策略を見抜いていたからだ。
攻撃出来ないだろう、と感じた。
だから、引いたのは、敗北なんかじゃない。
体勢を立て直ただけだ。
「でも。ただ、殴り倒して勝つ、という決着の付け方じゃ駄目ね。不快。何とかして、彼女の思想に勝たなければいけない。どうなのかしら？ 勝敗とかあるのかしら？」
数十メートル先の地面を見下ろす。
そして、彼女はある人物を見つけた。
それ程、高く評価出来ないかもしれないが。……。
彼女は屋上から飛び降りた。
そして、そのまま壁を勢いよく蹴り付ける。
全身が、解放されていくかのよう。
数十メートル先の地面に着地する。
猫のような顔立ちの男。
ヴリトラは少し、驚いた顔で彼女を見ていた。

「少し、試したい事があるのだけれど」

彼女は言う。

「貴方はあの女達の側近なのかしら？」

ヴリトラはしどろもどろに状況を把握しようとする。

「え、ええ、そうですけど？ 何か？」

「私と手合わせ願えないかしら？ 勿論、断らないわよね？」

ヴリトラは少し、考える。

「ひょっとして、ロータスさまにお会いしたんですか？」

「ええ。不快だったわ」

ヴリトラは、少し。むっとなる。

そんな彼の感情を、彼女はまるで意に介していない。

「そうね。たとえば、キマイラだったらどう言うのかしら？ 私は彼女程、合理的じゃないのよね。貴方と戦ってみようと思ったのは、そういう気分だったから。でも、ひょっとしたら、貴方を倒せば、ロータスを攻略する手段が見つかるかも」

彼女は淡々と、冷え切った声音で言う。

ヴリトラは呆けたような顔をしていた。

レイアは蔑むような顔になる。

「俺はあなたと戦う理由って無いですよ……」

ふうっ、と彼女は溜め息を吐いた。

「お馬鹿さんね。貴方は私を殺しておいた方がいいんじゃないの？ だって、今からロータスを倒そうと思っているのよ。私は。となると、貴方は私を倒すべきなんじゃない？」

ぞぞっ、と何かが辺りを支配していくかのようだった。

ヴリトラの背筋に寒気が走る。

まるで、全身が氷結していくかのよう。

目の前にいる者を、他の人間と見てはならないのだと、ヴリトラは感じた。

いや、そもそも。

こいつは、本当に人間なのか？ まるでそう思えない。……。

まだ昼過ぎだった筈だが。辺りに、暗い闇のようなものが広がっているかのようだった。

そう、彼女の全身から、暗黒の光のようなものが渦巻いているようだった。

鋭利な冷気が渦巻いている。

暗黒の翼。

凝縮された光に似ている。

空間が、裂けていくかのようだった。

「一応、聞いておくわ。貴方の能力、何てお名前？」

「ううっ。……『エウリノーム』。それが俺の力です」

「貴方は逃げ腰だけど、一応、言うておくわね」

彼女は人差し指を差し向ける。

「私を倒さないよ。沢山、貴方が守るべき者って死ぬかもしれないわよ？ 面倒臭いから、もう何人も始末しちゃったわよ。人間は脆いわね」

彼女はぞくりとするような笑顔で言った。

まるで、言葉がナイフのようだった。

ヴリトラは必死で、自分の中の恐怖と戦っていた。

……。……。

そうだ。

ケルベロスと和やかに話していたから、緊張が完全に解れていた。

少なくとも、こいつは、倒すべき敵なのだ。

どうやら、敵の側でも考え方が分裂しているらしい。

こいつは少なくとも、決して揺るがないだろう、問答無用で倒すべき相手。

負けられない相手。

しゅるしゅる、と荊の蔓が渦巻いていた。

どうやら、アーティの結界の位置を把握する為に、周囲に撒き散らしているみたいだった。

つまり、激突は避けられそうになかった。

アーティのライト・ブリンガーによって、ヴリトラを彼女の認識の外側に飛ばす事が出来ないという事だ。

「分かりました。俺はあなたを倒さなければならない」

「そう、その通り。さて、全力で戦って貰おうかしら」

ヴリトラは眼を閉じた。

全身の筋肉を弛緩させる。

地面に沢山の孔が広がっていくイメージ。

深淵の底。

底の中から、無数の怪物達が口を開こうとしていた。

それは沢山の口だけの怪物だった。

何者かを丸呑みし、噛み砕くだけの怪物。

ぎっしりと並んだ、四角い歯。獣のような尖った歯ではなく、人間のように四角い歯。

そんな歯が生えた口だけの怪物が、大量に地面から生え出してきた。

そいつらは、レイアを補足する。

「『リュミエール』は使わないつもりだったけど。どちらにせよ、意味が無いわね。私を認識しようがしまいが、無差別に攻撃してくるタイプか」

彼女は、自分とあの羊角の女の違いを考えていた。

たとえば、戦闘において。

彼女は敵をいたぶる趣味は無い。

全力で倒してしまえば、それでいい。

ヴリトラ相手にも、そうするつもりだった。しかし。

……ロータスの能力を見極めなければ、ならない。彼は何故、ロータスに従う？ おそらくは

、それが鍵なんじゃないかしら？

レイアは即座にヴリトラに接近していた。

そして、肩の力をすうっ、と抜く。

そして、軽く、顔面に拳を当てた。

ヴリトラの全身が、回転していく。

死なない程度の攻撃だった。

エウリノームの攻撃が、レイアを襲う。

口達は、次々に彼女へと襲い掛かった。

レイアは、すぐに背後へと飛んでいた。

立っていた場所が食い荒らされて、孔だらけになっていく。

怪物は物を食った後、直後に、風船でも膨らませるように体積を増加させていた。まるで、中で何か破裂したかのように。おそらく、口の中を爆発させている。

ふしゅううううう、と口から吐息を吐き出しながら、ヴリトラは眼の色を変えていた。

戦闘態勢に入っている。

言葉のやり取りなんかよりも、一度の拳の直撃によって、今は戦うべき時なのだ、と彼に教諭したみたいだった。

エウリノーム。

それは、巨大な破壊の口だった。

エウリノームの口腔が、次々とクラスタのビルを飲み込んでいく。

圧倒的な破壊が渦を巻き始めた。

レイアは中々、ヴリトラ本体に辿り着けずにいた。

次々と、口達が、辺り一面を噛み砕き、飲み干している。

方陣を描くように、敵が近付けないようになっている。

「中々ね」

レイアは息を飲む。

戦うに値する敵だ、と認識を改めた。

こいつは、中々、強い。

「さて、どうしたものかしら」

少しだけ、高揚している。

純粋な決戦。

レイアは敵と戦ってはいない、むしろ、戦いとは自分自身の鏡なのだと考えている。自分で自分を超えたいという事。対戦相手との勝敗が、問題なのではない。

彼女は長く伸びた髪を触れる。

そして、髪の一部が荊の蔓へと変わっていき、周辺に枝のように伸びていく。

「美しくないのよね。アーティとかいう奴。純粋に戦いたいのに。彼の能力の外に行きたいものね。此処は窮屈。彼も住民を守りながら戦うのは、窮屈でしょうに」

むっ、と彼女は空を見上げる。

いつの間に、跳躍したのか。

ヴリトラは空を跳んでいた。

そして、彼女の下へ向かって、落下していく。

すうっ、と避ける。

乗っていたビルが、縦に裂けていく。

「あら。素晴らしいわね。巻き添えに興味が無いのかしら」

よい対戦相手だ。確信する。

バランスが崩れる。

ヴリトラは目の前に立っていた。

レイアは咄嗟に、拳を押し出した。

しかし、命中しない。それ処か。

ヴリトラの拳が深々と、彼女の顔面に突き立てられていた。

カウンターを決められた、という形になっていた。

衝撃の全てが、彼女の全身に伝わる。

そのまま、ヴリトラは頭に血液が上がったかのように、全力で彼女を殴り続けていた。

そのまま、二人は地面に向かって激突する。

レイアの顔面が、大地へ深々と沈んでいく。

ヴリトラは何度も、何度も、拳を振り下ろし続けていた。

大地は割け、地面に亀裂が伸び続ける。

大きな鉄骨の衝突のような、凄まじい打撃が彼女の顔面に振り下ろされ続ける。

何度も、何度も、渾身の拳は彼女の頭越しに、地面の岩盤を粉碎していく。

閃光が飛び散る。

ヴリトラの全身が浮いた。

彼の全身に拳の連撃が入れられる。

さながら、それは流星のようだった。夥しい光の粒のような。

ヴリトラは数十メートル先へと、吹っ飛ばされていく。

砂塵が舞う。

レイアは立ち上がる。

「やるじゃない、やっぱり、貴方は戦うに値する相手だったわ」

レイアはほぼ無傷の顔面を摩る。

そして、軽く血の混じった唾を吐いた。

そして、顔の埃を、ぱんぱん、と払い除けた。

服のドレスをさすって撫でる。ブーツの靴紐が解け掛かっていたので、直した。

それから。

十秒に満たない時間が経過した。

吹き飛ばした先から、何かが跳んできた。

ヴリトラは。

再び、超高速の速度で、レイアの下へと向かってきた。

その両腕は、異様に肥大化しており、その形相は鬼気迫っていた。

やはり、ダメージを与える度に、潜在意識で封じている力が解放されていく。

闘争本能。それが、この猫顔の男の本質なのだろう。

レイアは孤円を描くように、鮮やかな形で。拳を振り上げ、ヴリトラを殴り飛ばしていた。化け猫は、十数メートル、宙を飛んでいく。

殴った時に、空気が振動する。

ヴリトラは空中で旋回した後、全身を捻って、レイアの下へと落下していく。

彼女は周辺に荊の蔓を張り巡らせていく、飛んで避ける場所が無い。

迎え撃つしかなかった。

彼女は全身の力を抜く。

そして、拳を天空へと振り上げた。

レイアの拳と。

ヴリトラの拳が。

それぞれ、激突する。

レイアの全身が沈んだ。

ヴリトラの拳が裂けて、砕けていく。

猫顔の男は、全身を捻って、距離を置いた。

びき、びきっ、と拳の筋肉を弛緩させていく。

ヴリトラの顔面は、怒りにより修羅のような形相へと変化を遂げていた。

やはり、彼はダメージを与える度に、防衛本能を発動させて、力を引き出していく。

そういう体質なのだろうか。それが、精神のトリガーになっているのだろうか。

レイアは指を顎に置いた。

……ふーん。私にそのうち、届くのかしら？

レイアは再び、飛び跳ねて攻撃してくるヴリトラの顔面を吹っ飛ばしていた。

嫌な音を立てて、ヴリトラが再び、遠くへと飛んでいく。

あれは、顎の骨辺りでも、折れたかもしれない。……。

彼女は、薄ら笑いを浮かべる。

すぐさま。

ビッ、と何かが、在り得ない速度で飛んでくる。

レイアは咄嗟に拳を振り翳して、全てを払っていく。

どうやら、石飛礫のようだった。

ヴリトラは尖った石飛礫を、彼女へ向かって投げ付けてきている。

圧倒的な握力によって。

ヴリトラはコンクリートの地面を、紙屑のように、指先で引っ搔いて、挟り続けていた。まるで、猫が地面に爪でも突き立てるように、指先で地面を引っ搔き続けている。

それは、さながら散弾銃のような攻撃だった。

破片が壁に激突して、孔を穿っていく。
レイアも、どんどん本気になっていく。
こいつ相手ならば、全力で戦えるかもしれない。
自分の持っている力の全てを使い切れるかもしれない。
いつ以来だろうか、全力で戦ったのは。
全力を出すという事。自分自身の限界を超えられる好機だ。
凝縮している闇が濃くなっていく。
それは、ぱあっと碎け散って、光の粒へと変化していく。
肉体が濃厚に凝縮されていくような感覚。
意思の塊によって、築き上げられた肉体。
全身の細胞一つ一つが、存在し、実体として在るのだという感覚。
陶酔感。
力の意志。
更なる速度で、ヴリトラはまた仕掛けてきた。
既に、その速度は見切っていた。
相手が自分の限界を引き出そうとしているのと同じように、レイアもまた、自分自身の強さを
全力で使おうとしている。
煮え滾るような鼓動。
空気の質が変わっていく。
濃縮されていくかのようだ。
速度はどんどん、刹那へと凝縮されていく。
空間を切り裂きかねない、エネルギーが周囲に満ちていく。
少しずつ、時間が止まっていくかのような感覚。
全身が浮遊しているかのようだ。
衝撃音が鳴り響き、旋風によって、空気が振動していく。
飛び掛ってくるヴリトラの。
胸の辺りに、重い拳を叩き込む。
肋骨の碎け散る音が聞こえる。
ヴリトラの口元が、三日月形に歪む。
レイアは殴った右腕を掴まれていた。
ヴリトラは自身の肉体を、命を、捨てるつもりで、攻撃してきていた。
そのままレイアの肉体が旋回し、地面へと勢いよく叩き付けられる。
カウンター。
残った左腕で、顔面をひたすらに殴り続けた。
けれども、ヴリトラは渾身の力で右腕を離さなかった。
周囲の空間が裂けていく。
大量の大口の怪物が、姿を現した。

レイアの頭や腹などを喰らい尽くそうと、這い出してきた。
気付くと。
ヴリトラは右腕の感触が無い。
見ると。右腕がぐしゃぐしゃにへし折れていた。
ヴリトラは眼を見開く。
無理やり、引き抜いたのだろうか。……………。
レイアは、彼から距離を離していく。
次々と、空間に亀裂が走り、怪物達が這い出してくる。
……もう、ロータスどころじゃなくなっているわね。面白いわ。ロータスを意識して戦う余裕が無くなってきている。ふふっ。
レイアは地面に蹲る。
「さて、どうしたものかしら」
少しだけ、引き攣った顔をしている。
激痛に耐えていた。
彼女は右腕が、肘から先が消失していた。
切り離れた腕は、荊の蔓で巻き取って、掴んでいる。
そう。
ヴリトラは右腕をへし折っても、彼女の腕を放さなかった為。
彼女は仕方なく、自ら切断せざるを得なかった。
荊で切断面と切断面を繋ぎ合わせる。
蔓を細くしていき、糸のように縫い合わせる。
更に、髪の毛の一部を切り離して、包帯のように上から巻き付ける。
お互いに痛み分けだった。
純粋な力と力の衝突。
純然たる、暴力と暴力の交差。
ヴリトラは咆哮していた。
ビキッ、ビキッ、とへし折れた右腕にエネルギーの塊が巻き付いていく。
エウリノームによって作り出した怪物の一体が、彼の右腕に取り付いた。
お互いに、能力によって、ダメージを受けた器官を補助しようとしている。
……能力の出し惜しみをしている余裕が無くなっていくわね。
レイアは笑っていた。
相手がどんどん、強くなっていく。
むしろそれは、とても喜ばしい事だった。
彼女の方が、彼に戦いを挑んだのだから。
「『エクスターズ』を使おうかしら？ まだ黒い蓮も残っている。まだまだ、楽しめそうね」
彼女の口元はただただ、愉悦に歪んでいる。
「ふふふっ。あはははっ。あはははっ、ふふっ。ヴリトラ。此処からは、本気で行きましょう？

」

レイアの髪が靡く。

淡い、黄緑の髪。光に照らされると、少しだけ茶色も帯びて見える。

長髪が引き千切れていき、短いショート・ボブへと変わっていく。

そして、また髪が蔓のように伸び。長い長髪へと変わっていく。

植物の生長と、衰退のような姿。

彼女は左手を掲げる。

右手から、赤黒い薔薇が生まれた。

薔薇が震え出す。少しずつ、腐っていくかのような。

やがて、それは暗い光を放っていく。

光と闇の、暗黒。

「『修羅蓮華』と名付けている。貴方は貴方の全力で来て欲しいわ。私は私の全力で挑むつもりだから」

大地が砕け散っていく。

エウリノームの攻撃が地割れのように、荒れ狂っていた。

このまま放っておけば、クラスタ中を破壊していくだろう。

無制限の無差別攻撃。それが彼の能力だった。

ドーンにおいては、その悪名が響き渡っていると聞く。

肉体の苦痛に比例して、ヴリトラは強くなっていた。

苦痛が、生きるエネルギー。闘争のエネルギーへと変換されている。

ヴリトラの速度が上がっていく。

いつの間にか、レイアの周囲を伺うように、走り回っていた。

追うのが、もう面倒臭い。

彼女は『エクスターズ・ワールド』を発動させる。

存在と存在の距離。認識と認識の距離。

それが、同一線上に並ぶ。

レイアは、もう意識して、敵の攻撃の速度を追う必要は無かった。

本来ならば、この能力で、大抵の敵は終わっている。

しかし、ヴリトラはなおも食い付いてきた。

ヴリトラのエウリノームの怪物達が、不規則な速度で襲い掛かってくる。

「成る程。面白いわね。私のリュミエールもエクスターズも、その性質上、意味を為さないのね。本当に、良い感じよ」

彼女はヴリトラを追っていた。

怪物達の方には効かなくても、彼には効果があった筈だ。

レイアは本当に楽しそうな顔をしていた。

そこには、ある種の無垢さすらある。

ある意味で言えば。

それは、無邪気な少女性だ。

不可思議な感覚。

まるで、何の屈託も無く、彼女は笑い続けていた。

陶酔感と高揚の中に、彼女はいる。

狂的なまでの、笑顔だ。

そこには、無邪気な邪悪さが灯っている。

伶俐な悪意。無感動な殺意を体現したような。

「何処まで私に近付けるのかしらね？ 私は何処までも何処までも、貴方が触れられない存在になっていく。いいかしら？ 貴方は初めから私に勝てるわけが無かった。けれども、とても楽しめたわ。そろそろ、終わりにしようと思っているの」

彼女の左手に纏った、真っ赤な薔薇が。黒く、黒く焼け焦げていく。

やがて、それは薔薇という形状を止めて、さながら蓮のように形を伴う。

薔薇には様々な種類がある。

薔薇から蓮への変化。

燃え上がる、黒い、黒い蓮。

その蓮の熱から、様々な光の弾が生まれていく。

光の弾は、周囲に飛び散っていった。

その弾丸は、周囲の瓦礫を蹴散らしていき、張り巡らされた結界も弾いていき、何処かに隠れたであろう、ヴリトラの居場所を探していく。

彼は隠れてなどいなかった。レイアの周辺にいた。

大地に大穴が開いていく。

巨大な大口が姿を現した。

レイアは空へと跳躍する。

大口は、ぽっかりと黒い孔を空けていた。

真っ黒な暗黒空間のような、口。

ヴリトラは、そこから這い出してきた。

彼の眼は何も見っていない。

自動的に動く者を殺そうとする、殺人マシンのようだ。

右腕には矯正器具のように、怪物が絡み付いている。

このまま、全身が落下していく。

危機的状況だった。

このままだと、怪物の口に飲み込まれていくだろう。

それでも、彼女は冷然とヴリトラを見下ろしていた。

一切の、不遜な態度を止めはしなかった。

勝負は決しようとしていた。

レイアは削岩機のような拳を振り下ろす。

ヴリトラは鉤爪状にした左腕を突き立てた。

先に攻撃がヒットしたのは、ヴリトラの方だった。
レイアの顔、右半分を大きく削り取っていた。
続いて、レイアの攻撃がヴリトラの腹に深く、抉り込まれる。
それは、そのまま彼の腹をぽっかりと、割り貫いていた。
腹部に巨大な孔を空けられて、猫顔の男は闇の中へと沈んでいく。

十

レイアは男の肉体を蹴って、暗黒の口の外へと出た。
一面が、空漠に包まれていくかのようにだった。
レイアの身体は、アーティの張り巡らせた結界へと触れる。
勿論、これも計算の内だった。
大体、どのような状態に陥るかも、既に予測している。
誰かが、攻撃を受けて確かめるべきだった。
だから、彼女が行っている。
突然。
別の場所に出た。
そこは、どうやら以前通った、休憩所の辺りだった。
瞬間移動したのか。それとも、幻影を見ているのか。
どちらにせよ、大体、こんな現象が起こるのだろう、と予測していた。
……そして、至る。
光の屈折によって、この辺りの空間自体が、全てまやかしのかもしれない。と。
「さてと。誰かと合流しようかしら」
誰かに認識して貰う事。
おそらくは、この能力の攻撃はそれで終わるのではないかと考えている。
休憩所の中へと入る。
そして、掛けられている鏡を見た。
顔の右半分がメチャクチャに破壊されている。
しかしながら、右目は特に潰れていない。なので、何の問題も無かった。
彼女は、肉体を構成している物質が、人間とは少し違う。
このまま放っておけば、傷は塞がるだろう。
彼女は、そんな肉体なのだ。
さてと。どうしたものか。
あの女を、倒しに行くか。
彼女は、立ち止まった。
「あら」
レイアは冷ややかに言った。

「お馬鹿さんね。まだ続けるの？」

彼女は、振り返る。

咆哮が聞こえた。

ヴリトラは巨大な孔が開いた腹と胴体を、自身のエウリノームの怪物達で、どうにかして塞いでいた。

誰の眼にも、彼の顔には死相が出ている事が分かった。

「もう、死ぬ人と戦っても意味が無いのよ」

彼女は冷たく言う。その眼は、何処までも冷酷だった。

ヴリトラは口元から、大量に吐血する。

しかし、執念だけで立ち上がっていた。

レイアは自分の髪を撫でる。

「分かったわよ。仕方無いわね」

どうやら、正攻法からの殴り合いを望んでいるみたいだった。

リュミエールを、使う気はない。修羅蓮華もだ。

今の状態の彼ならば。

認識外に自身を吹っ飛ばして、無視する事も可能だが。……。

ヴリトラの全身は震えていた。

それは、さながら大地の震動のようだった。

恐怖の為ではない。武者震い。

ヴリトラは、全身全霊の力を込めて。レイアに向かって、拳を振るう。

高速の殴打。空気が引き裂かれる音がする。

もう、死ぬという結果が待っている中で、ヴリトラの肉体は、更に強化されていた。

レイアは、それに気付いて。相手をする事を決める。

風を喰い破るような音。

ヴリトラの拳が、何度も、何度も、レイアの全身に打ち込まれる。

彼女は、巨大な岩石のように立ちはだかり、それらを受け流していた。

そして。

ヴリトラの顔面に、拳が入れられる。黒い炎を纏っていない、普通の打撃。

ヴリトラの全身は勢いよく、跳ね上がった。

レイアはヴリトラが地面に倒れる前に、彼の首を握り締める。

そして。

何度も、何度も、何度も、何度も、握った拳を打ち込んで殴打していく。ヴリトラの顔面が弾け飛んで、唇が裂ける。前歯がへし折れていく。鼻が潰れる。それでも、彼女は拳の連撃を止めない。

エウリノームの口腔が、レイアの肩と頭に喰らい付く。

それでも、彼女はヴリトラの顔面を殴り続ける事を止めない。

「貴方の身体って、ゴム鞠のようね。何で、そんなに丈夫なのかしら？」

彼女は言いながらも、猫顔の男を殴り続ける。

顎が砕かれ、頭蓋骨に無数のヒビが入っていく。

ヴリトラは消えていく意識の中、闇の中へと沈んでいく意識の中、思う。

彼女の華奢な肉体に、何処に力があるのかを。

いや、能力者の肉体に、表層的に見える力など関係無い。そんな事は分かっている。

しかし。

強化された肉体を、更に、鍛錬に鍛錬を重ねて作り出した筋組織。骨格。

その鋼の鎧が、紙屑のように壊されていく。

それでも、エウリノームの怪物達を消しはしない、彼女の肉体を深く、食い千切ろうとする。

レイアは。

ヴリトラを地面に降ろす。そして。

ヴリトラの頭を蹴り潰していた。顔面が砕けたザクロのようになっていく。

ドリルやチェーンソーで物を破壊するような音が響いていく。

ヴリトラの身体を使って、コンクリートの地面を砕いていた。

再び、首を掴む。

そして、風船でも放り投げるように。

ヴリトラの全身を、十数メートル離れた壁へと投げ付ける。

ヴリトラの肉体が、壁の中へと沈んでいく。

彼の全身の骨は、ボキボキに砕けていた。

それでもなお、エウリノームの口は、レイアの肉体を破壊するのを止めない。

「しつこいのよ。貴方はもう、終わっているの」

彼女は面倒臭そうに、怪物を引き千切る。

そして、踏み潰して弾け飛ばした。

彼女の左頭部と、右肩は抉れていた。即座に、荊の蔓を巻いて、治療に入る。

瞬間。

ヴリトラが、彼女の下へと飛び掛っていく。

気付けば、彼は肉体を。空中へと高く上げられている事に気付いた。そして。

腹と胴体の中から、臓器が零れ落ちていく。浮遊感。無重力。

それでも、まだ死ねない。零れ落ちた内臓を、発生させた怪物達が拾い上げて、彼の腹へと戻していく。

レイアは。

彼の上にいた。

そして。

彼の首を、ミサイルの射撃のように蹴り飛ばす。骨がへし折れる音がした。

そして、地上数十メートル離れた上空から、ヴリトラの顔面を踏み付けたまま超高速で落下していく。

地面に。

戦闘機からの爆撃のような大きなクレーターが出来た。

彼女は、ヴリトラの頭部を削岩機に使っていた。

数秒もの間、静寂が訪れる。

ジェット・エンジンのような拳が。

レイアの顔面に叩き込まれた。

彼女は見事なまでに、旋回し、一回転し、地面に沈む。

そして、すぐに立ち上がった。

彼女は鼻血を拭う。

「酷いわね。口の中も、少し切れているじゃない」

男は立ち上がっていた。

全身の筋肉が、わなわなと震えている。

彼自身が、一体の怪物の。口腔のように見えた。

巨大な顎だ。

本当に、全身全霊の最後の一撃だった。

ヴリトラは、機関銃のように、レイアを殴り続けた。

あらゆる、角度から拳の連撃が打ち込まれる。全身を廻して、彼女の下顎にも蹴りを入れた。

レイアは防御しようとしめない、体勢さえ崩さない。只ひたすら、殴られ続けている。

「で、もう終わりなの？」

ヴリトラの、心は砕かれていた。

もう、どうやっても、通じないのだと理解する。

自らの拳を見る。

拳が弾け飛んで、骨が露出していた。レイアは。

無表情のまま。冷たい刃物のような視線で彼を見据えて。

レイアは拳を握り締め。それは、彼の身体に吸い込まれていく。

肋骨が完全に破壊され、肺に突き刺さる。肩甲骨が粉々になる。頭蓋骨の破片が脳の奥深くにめり込んでいく。両足の骨は機能する事を止め、腱は完全に断裂していた。背骨が溶けていくように崩壊していく。

エウリノームの怪物達が、暗黒の中から生まれていく。

しかし、彼らは外へと出る事は出来なかった。そのまま、さらさらと、砂粒のように風の中に舞い上がっていく。彼の拳に巻き付いていた怪物も消える、そういえば、とっくの昔に、右腕は死んでいたのだ。

暗黙。

レイアは。顔の左半分が、綺麗に整ったまま。地面に血の唾を吐いた。

先ほど爪で抉られた右側は、まだ治っていない。

……爪での攻撃は、防御し損ねた。……。

「ふふっ。楽しかったわよ。じゃあ、私はこれから、ロータスを殺しに行くの。もう、邪魔しないでね？」

彼女は去っていく。

ヴリトラは、もう引き止める力は無い。

心臓の鼓動が聞こえない。深い闇の中に、何処までも何処までも落下していく。

それは、酷く失恋の痛みにも、似ていて。

「神を信じるという事。僕はそれを重視しています」

「神、か。いるのか？」

ケルベロスは考える。

「いると思っています。というか、人間は信じるしかない。この地上、自然。それらを創った大きな存在がいる筈です。だから、僕達に出来る事は、自分達は大きな神の被造物でしかなくて、正しい事を可能な限り、行っていくべきなんじゃないかって」

アーティは何やら、熱っぽく言った。

そこには、何処か攻撃性すら感じ取れる。

けれども、彼は自分の思想を信じているし、曲げるつもりもないみたいだった。

「死後の世界は在ると思うか？」

「在るかどうかは分からない。けれども、その存在を信じる事に意味があると思います」

アーティは力強く言った。

「人間はね、普通に生活出来るという状態が幸福だと思いますよ」

緑と青を基調とした服装の男は言う。

「幸福の在り方は。普通の生活をする事。それだけなんじゃないでしょうか。だから、その為には神が必要になるんだと思います。辛い事、苦しい事、悲しい事があっても。それを乗り越えて、あるいは視ないようにするのもいいかもしれない。出来るだけ、そんな人間が増えるべきだと思いますね。憎悪や殺意、自殺願望。それらはいつか乗り越えるべきものです。試練なんです。いつまでも留まってはいけない。そうですね、そういう状態も必要なのかもしれない。よりよく生きる為に。人間は意志の下によって、人間を赦せるのだと思うし。僕は誰だって、赦す事が出来ると思います。まず、何よりも光を愛する事。愛を愛する事。希望を持ち続ける事。太陽を仰ぎ見る事。自然を愛する事。それら全てが人間には必要だと思っています。勿論、殺人も自殺も本来ならば赦されるべきものではない。精神の暗い闇の中に、いつまでもいつまでもいるわけにはいかない。前に進まなければならないんですよ、成長こそが人間の人生だと思っている」

成長。

努力。

それらの中に、幸福があるのだと、彼は言う。

「人間には、神が必要なんです。神秘的なものが。自分達以上の存在が。僕はそれをみなに与えるべきだと思っています。今の処は成功しています」

ケルベロスは、ただただ、彼の持論に聞き入るしかなかった。

「僕の下に来た者達。彼らは少しずつ、少しずつ。色々な事を覚えていっている。農作業、衣服の縫い方。建設作業。それらは素晴らしい事なんですよ。生きているんだ、彼らは。死の淵の中にいない。それはとても良い事なんじゃないでしょうか？ 彼らは神様を信じている。大きな大地と、大きな天空。その中に、神様がいるんじゃないかって。僕は人間は、神を信じ続ける事によって生きている存在になれるんじゃないかって思っている」

ケルベロスは強く。

溜め息を吐いた。

「そうなのか。俺達が、お前らをどうこうする資格は無いんだろうな」

「だから、協力しましょう」

アーティは真摯な眼差しだ。

しかし、取り残されたように。

ニアスは何だか、覚束ない。

違和感みたいなものを覚えている。

自分はどうするべきなのだろうか。分からない。

何をすればいいのか。

いや。そうなのだ。

ケルベロスは元々、説得に来たのだ。

彼らを始末しに来たわけじゃない。

「テロリストや犯罪者の問題。確かに分かっています。クラスタには確実にそんな人間が溜まっている。しかし、彼らをどうこうする事は不可能なのか。僕にはそうは思えない。彼らを排除するのは簡単だ。けれども、長い時間を掛けて、説得していけばいいのだと思います。人間を信じましょう。僕達の答えはそこにある」

彼もまた、悩んでいるみたいだった。

「たとえば、あのキマイラさんも分かってくれると思いますよ」

彼は凜然とした口調で言った。

ニアスは。

このケルベロスという男に。

好感を抱き始めていた。

不安定な立場に置かれているからだろう。

それは、少し。何だか。邪ささえある。

だからこそ、思ってしまうのは。

このアーティという男。腹が立つ。

先ほどから、ケルベロスは流されるままだ。その事に関して、凄く腹が立つ。

こいつは、一体、何様なんだと思ってしまう。

自分自身の衝動が抑えきれなくなりそうだ。

アーティ。

こいつに対する不快感が、何処かにある。

どう言えばいいのか分からないが。

「共存を考えましょう。争いの無い世界を。せめて、僕達の間だけでも争う事の無いように」

ケルベロスは頷いた。

あの猫顔の男。

彼に、ケルベロスはシンパシーを感じていた。何故だろう、過去の自分を見ているような。が

むしゃらに何かを守ろうとした。

彼とは、また話したい。敵同士ではなく。

彼も、もしかしたら、アサイラムの仕事を手伝ってくれるのかもしれない。

十

ヴリトラは死んでいた。

開いた瞳孔に、蠅が止まる。

胴体に大きな孔が開いている。

彼の周囲には、倒壊したビルが並んでいた。

瓦礫の山。

大きな破壊の痕ばかりが残っている。

なるべく、敵を住民達に被害が及ばないように。無人の建物に向かって移動していったが。それでも、数十名を超える犠牲者は出てしまった。巻き添えを食らった者達が、泣き叫んでいる。

彼の意識はもう無い。

彼は完全なまでに、死んでいるからだ。

何名かの住民達は、彼の死体を遠くから眺めている。

彼は敵と戦って、クラスタを守ろうとしたのだ。

住民達は、敵に対する憎しみを募らせていた。

彼は優しい男だった。どことなく、危なっかしい男でもあったが、それでも住民達にとっては良い男だった。

それが、今、物言わぬ骸となって横たわっている。

彼はエタン・ローズの能力の本質を、最後まで理解する事は無かった。

それでも、彼は挑んでいったし。実際、彼女を本気にさせた。

余り、誰にも知られないであろう、業績。

十

クライ・フェイスはカードを切っていた。

トランプを何度も切っては。何度も、抜いていく。

ハートだけが出ない。そういう風に、細工してある。

彼は無機質な顔で、トランプに見入っていた。

ボロボロに朽ちた沢山の人間達の絵。それが並んでいる。

キャンバスに向かう、一人の男。

セルキーは病んだ顔の男だ。

彼の背後で、泣き顔はカードを切り続ける。

「クラスタに侵入者が来てますね」

彼は呟く。

セルキーは、それでも。何も気に留めない。

彼の生涯の仕事が続けるだけだ。

ロータスの側近達。彼らは、只、彼らの人生を生きるだけだ。

アニマは、また。仕事に向かった。此処には、彼女の水彩画も置かれている。

綺麗で透明な魚の絵だ。それから、植物の絵。淡く透明な色彩。

「セルキー。私も私の仕事を致します。あの方を侵入者からお守りしないと」

そう言って。彼は、カードを切り続ける。ただただ。

十

いつか、光が刺し込むのだろうか。

この集落にも。また。

絶望の底の底にいて。

この深海のような意識の中にいるからこそ。

何かを掴み取れるのだと、彼は信じている。

炎。それは原初の大地を生まれてきた、煮え滾った命。

光よりも、聖性よりも。

彼は、炎の力を信じている。

アニマは彼の寝台の上で眠っている。安らかなの吐息。

二人の間に、愛はある。

クラスタの中にあるカフェテラスで。

ロータスと一緒に、クッキーを食べて。紅茶を飲んだ時の事を思い出した。

「苦痛は無限に反復していくわ。苦痛と苦痛。心の傷は。ずっとずっと、受け継がれていく。何世代も、何世代も。人間同士が分かり合えないという事。何故、この世界はこんなに終末の中にあるのかしら。まさに、地獄の世界だと思わない？」

「人は人の心を読めないからだと思います。自分の心でさえも」

カイリもまた、苦悩していた。

「分かり合えないという事が、とても寂しい事よねえ」

「それでも、俺は貴方の言葉を理解したいですよ」

「ええ。嬉しいわ」

ロータスは言う。

「情感の中に幸福はある。どんな時にでも。もし、この世界を救済出来るとするならば、たとえば、幸福であるという情感が永遠に続く事。安らかである事。それは大切にしなければならない。それも、心の底から。けれども、みんな、偽りの情感に身を置く。それは大きな支配を享受して、偽りの情感の中に身を置く。偽りの官能の中に。でも、それって生きている事なのかしら。それはとてつもなく不幸だと私は思っている。それは生きていくという事ではない。支配

から抜け出さなければならない。食べる事、眠る事、愛する事、夜の褥。全てに美の世界がある。けれども、それが暴力によって殺される。この世界から官能性は剥奪されて、全て死の世界になっていく。それが傷付けられる、という事。何処にも、生きる事の出口が無い。清らかな感情の身の置き場が無い。何故、人々は人を愛せないのかと。偽りの支配的なものによって齎された愛によって、わたし達は生かされ続けているのだろうか。延々と、人類の歴史が始まって以来。それは繰り返されている」

幸福と。

不幸の差異。

官能と虐待の差異。

その境界。

「わたし達は神のいない世界で、神を創らなければならない。それは美とか聖なるものと呼ばれる。清らかなものだとか。人間がこの世界に生まれ落ちた事。それに価値を置く為には、聖なるものの創造なのだと思っているわ」

彼女はとても悲しそう。

「此処に来て。自ら死を選ぶ人達。わたしは彼らを否定しない。むしろ、讃える。彼らは、自分の心の中にある、大切なものを守る為に死んだのだと」

カイリは敢えて、疑問に思った事を訊ねた。

「物質はどうするんです？ 食糧とか衣類とか。人はパンだけでは生きられないとは言うけれども、やっぱりパンは必要ですよ」

「そうね。ただ、そのパンを作り出す者達。物質を作り出す者達。彼らが苦痛を持たずに生成する事が出来れば。わたしはそれを望んでいる。まだ、人間が到達出来ない感性の領域に。人間が行く事が出来るのならば」

「うーん」

カイリは少し考える。

ロータスは視ている世界を言語化する時に、感性ばかり先立っている。中々、それが論理体系だった言葉にする事が出来ない事がある。

詩的であり、感覚的であり。もう少し言えば、結論を急ぎ過ぎて、感覚的に視てしまったイメージを、何とかして言語化させようとしているのだが。やはり、普遍的な言葉に直すのは難しい部分がある。

カイリは何とか、彼女の言葉をもう少し、みなに伝わるような言葉に変えたい。

「うーん。苦痛の無い社会の構築なのかなって。確かに、みな言いますよね。労働が悪夢のようだって感じる人達。此処には多い。まあ、関係性の問題なんだろうが」

「支配の問題だと思うわ」

ロータスはにっこりと笑った。

「人間が人間を支配したい、っていう観念が大きくなって。一つの物語になっている。人間が作り出した化け物ね。それは形が無くて概念の中にしかないけれど、確かに存在しているわ」

「化け物、ですか」

「そう。化け物が人に乗り移って。人が人を殺す。戦争。虐待。強姦。全て、化け物が降りてくる事によって行われる。人間が他人を傷付けたい、という意志を持って。けれども、もし、人間が暴力を止める意志があるのならば」

「そうですね。……でも、暴力ってのは何なのかなって。どんな言葉もどんな意志も、関係性によって時として暴力に変わる。難しいですよ。偶然性によって他人を傷付ける羽目になる事だってある。ちょっとしかすれ違いだって。言語だって違ったりする。俺達、人間は暴力を無くせるんでしょ。人が人を傷付ける、という事を」

「わたしは無くせる、と思うわ。もし、正しい、というものがあるとするならば。正しい世界というものがあるとするならば。無くせる。必要なのは、無くそうとする意志。その中に、人間が調和する意志があるんじゃないかって」

「ふむ……」

カイリは少し、考えた。

「感情の流れがちゃんと、廻る事が出来るならば。人間の持っている感情と感情の流れ。それは一体、何処からやってくるのか、っていえば。やっぱり、人間は心のどこかで大いなる存在と対話しているんじゃないかって思っていて。どんな形をしているのか分からないけれども。わたしはまだ視えないけれども。それはとても美しく、聖なるものだと思っっているわ」

聖なるもの。

カイリもきっと、それを望んでいる。

「大いなる存在。なんでしょうね。……。俺もあなたと同じ感覚を視る事が出来れば、あるいは。けれども、あなたの言葉を伝える為のツールになる事だって俺は出来ると思うし、したいと思っっている。正しい事、行わなければならないと俺も思います。でも、その正しさをどう正しいって、伝えるか。難しい。正しさか。創らなければならないですよ」

そこがまた、齒がゆく思う。

「思うに、ロータスさまは、正しさ、ってのを直情的に感じ取ってしまっていて。論理よりも感情が先に来ちゃう。俺が補完出来ればいいのですが」

「うーん、そうなのかしら？」

「うーん、何でしょうね。言ってしまえば、何だろう。ロータスさまって女で。特に女性的な感受性と感情ばかりが先行しているなって。で、俺は論理的に補完出来ればいいなっては思っますね。言葉の伝え方によって、印象は様々に変わっていく」

神のいない世界においてもなお。

神を信じ続けなければならないし、あるいは神を創造しなければならない。創造ではなく、捏造なのかもしれない。

神とは、永遠に届かないものだ。

永遠に、永遠に触れられなくなっていく。

カイリは、虚無の只中にいる。

虚無とは何なのだろうか。

何にも縊れない、という事。

何処にも拠り所が無い。出口が無い。

立って歩けるだけの大地が無い。

何処にも、落ちていく事が出来ない。

道が見えない。

そこには、過去の素晴らしさもなく。

未来に対する、希望も無い。

クラスタの住民達には。

様々な形の虚無がある。

虚無の種類は、一つではない、という事が分かるのだ。

希望はあるのだろう。けれども。

その希望に、魅力を感じない。美しいとも思わないし。希望を持って生きる事が、果たして本当に生きているといえるのか、とも思う。

「美しさを信じ続けたいわね」

ロータスは満面の笑顔で。無垢さを伴って、言った。

その意志の中に、迷いは無い。

カイリは彼女のようにになりたい。なれないかもしれないが、それでも、目指したい。

自然との対話。世界は生きるに値するものがあるのだと。

何故、人は暴力の連鎖を止められない。支配の連鎖を。

他人を傷付ける事を。

報われない死。報われない涙。

沢山の死体達。顔の無い者達。声を上げられなかった人々。

終わらない戦争とテロリズム。

終わらない虐待と強姦と、拷問。

一体、人は何に救済されればいいのか。分からない。

痛みの連鎖。悲しみの連鎖。

人が人を傷付ける世界。

終わらない戦争。

終わらない搾取の世界。

それは、国家単位の戦争から。先進国においてもなお、繰り返される虐待と差別。

傷付く人間がいるという事。

何故、この世界はこんなに醜いのだろう。分からない。

カイリは心が弱い人間だと思う。

ロータスも、きっと。

蓮の香りが、とても優しい。

彼女は世界と対話している。無限の善なるものを探し、無限の悪なるものと対峙して。

愛と官能の美しさ。優しさ。

自然の中の息吹。

食べ物の美味しさ。睡眠の安息。恋愛の中の一体感。生きるという事。

決して奪われてはいけない。人間が生きる、という事。

一体、人間は世界の中における邪悪さにどれだけ抗えるのだろうか。

国家。宗教。支配の歴史。

どんなコミュニケーションでさえ、時として暴力でしかなく。

どんな性愛でさえ、一つ間違えれば凌辱にさえ変わってしまうという事実。

子供達の未来。

弱き者の未来。

強き者が邪悪ではなく、支配こそが邪悪なのだろう。

人間が人間を支配し、拘束したいという欲望。

そうやって培われてきた人類の歴史。

その構造を破壊したい。クラスタの中枢にいる者達は、みな、そう願っている。

そう。暴力は永遠に、永遠に再生産されていく。

明日の正しき者達の為に、何かを創りたい。

しかし、カイリはテロリストにはなれない。世界に剣を、拳銃を、突き立てたいとは思わない。終わりのない暴力ばかりが、また連鎖していく。

ヴリトラの事を思う。

彼は正しいのだろうか。少なくとも、カイリには分からない。

ロータスも、答えない。

「ロータスさま」

カイリは言う。

「なあに？」

「もし、俺達の死を持って。未来の子供達、未来に生きる者達が救われるのだとすれば、命を差し出しますか？ 俺には分からない」

「何言っているの。今、此処で。わたし達が幸福を目指すという事。安らかさを目指すという事。美しさ、清らかさを目指すという事。その全てが未来を築くという事だと思いの」

未来。

カイリには分からないもの。……。

「人間はね、カイリ。どんな事でも傷つくし。どんな事でも苦痛と絶望の只中に落とされていく。それは彼らが弱いからといって、切り捨てていいものなんかじゃない」

無限の苦痛の可能性。

人が人を傷付けるという事。突き詰めれば。

どのようなものも、暴力であり。その結果として、その先に殺人や自殺、精神病、強姦、拷問。戦争、テロリズム、それらが巻き起こっていく。人が人を傷付けるとは、何なのだろうかと。

ロータスは、ふと話題を変えた。

「ああ、いい男のいないかなあ。ねえ、カイリ。アニマとの関係はどう？」

「うーん、どうでしょう、結構、上手くいっていると思いますよ」

「そう。あーあ、わたしも、もっと若かったらなあ。恋したいなあ。愛する人の中で抱かれない」

無為の中では、何も育たないのだと聞く。

ロータスの持つ人間臭さ。

それが、彼女の聖性と矛盾する事なく、備わっている。

彼女の言葉は、神降ろしの言葉。

彼女が在ると信じている神は、人間の官能を。意志を、食べる事、飲む事に対する素晴らしさを。芸術を見て感動する事の美しさ。感情の持つ美しさを教えてくれるのだと言う。

その中において。

支配とは何なのだろうか。

それは、人間の中に備わっている、征服欲だ。

他人を所有したいという事。

たとえば。

動物の世界でさえ、生存競争の為の搾取の世界ではないか。

あらゆる生物の世界でさえ。

人間も動物の一種である以上。

他の動物の模範でしかなく。

どうしようもなく。

そして、それを築き上げているのは。

物質の不足。自然災害。飢餓や病気はどうしようもない。

ある意味で言えば、人間の権力が肥大化していくのは、そういったどうしようもない、自然からの暴力のせいではないのかと。

けれども、人間はもっと可能性を持てる筈なのだ。物質も自然も、全て分かち合える事が出来るのではないか。それが、生きるという事をする事。

歴史の中で、苦しみながら死んだ者達。彼らの殆どは忘れ去られている。

記号化され、埋没され、大きな一つの悲劇として名前も無いまま忘れ去られている。

愛されなかった者達は存在する。

けれども。

死んだ者達を、死んだままにしているのではない。

彼らは呼び覚まされ、受けてきた苦痛を、悲鳴を、再び、この世界で訴えなければならない。

彼らは復活しなければならないのだ。

彼らが生きた証として。彼らが存在した証として。

言うならば。

届かなかった言葉達の声になる。

救われなかった者達の、声になる。

彼女は、苦しみと対話し続けている。

彼らの意志を呼び覚ます為の力。荊の道。

磔刑への道だ。

それは、酷く固い荒野に、樹木を植えるようで。あるいは、何処までも辿り着けない場所として。辿り着けない真理を持って。それでもなお。

それでもなお。

彼女は世界を救済したいと願っている。

世界中の孤独に閉ざされた、悲しみ達を。

しかし、たとえば。

自分以外、誰もいない無人の島で暮らし続けた者。

そいつが、餓えや怪我の為に苦痛で苦しみ続けるのならば。

それは違うというのか。

そんな、疑問も、口にしてみた。

ロータスは、少し考える。

「そうね、彼らもまた。どうにかして、手を差し伸べないといけないのよね」

「俺は分かっています……」

カイリは悲しそうに言う。

「貴方の考えにもまた、思想にもまた。限界があるんじゃないかって。俺、考えるんです。貴方の思想が実現した世界がどうなっているかって」

支配の世界にいたくても、苦しむ者がいるのではないか？

搾取する者とされる者。そんな構造など関係なく、苦しみ呻く者がいるのではないか？

あるいは、この世界の人間の支配欲に関係なく、この世界にいてもなお、苦しむ者が存在し、権力などの、何かからの支配によって彼らは苦しめられている、と勝手に規定してしまうという事は。その行為でさえ、支配的なのではないのか。

そんな事を問うてみた。

人間の可能性が有限なのではないか、という根拠の一つに。

人間には個体差があって、寿命があって、脳もまた臓器の一つでしかないという事。

だから、有限の中に閉じ込められて、分かり合えないまま。死んでいく。

虚無にも、空虚感にも色々な種類がある。

カイリは虚無の中にいるのは、思考し続ける故に。

絶望の可能性を思索し続けるが故に、虚無に潰されそうになる。

神を信じない。死後の世界を信じない。輪廻を信じない。

美しい世界。

たとえ、そんな世界が存在したとしても、それが決して美しいものだとも、清らかなものだとも思えない。

それは、きっと自分が間違っているからだろう。言い聞かせたい。

「カイリ。わたしは神託しか出来ない。何故なら、わたしは他に何も出来ないから」

ロータスは何処か遠い眼をしているように語った。

「それでもいいですよ。みんな、貴方に貢献したがる。貴方は神託を伝えるだけでいい。貴方は

みなにとって必要な、言葉、なんだ。それに関して、貴方は決して気負う必要なんてない」

「そっか。嬉しいわ」

彼女は屈託なく笑う。

その笑顔が、何処までもなく、眩しい。

二人の間に、風が吹き抜けた。

「青空にも、木々にも。風のせせらぎにも。汚染された大地にも。くすんだビルにも。赤茶けた海にも。戦争によって破壊された瓦礫の街にも。沢山の言葉が眠っている」

「.....そうですね。それを、復活させなければ、ならない.....」

陽光。

刹那の中に、今が永遠なのだと感じた。

ロータスという瞬間。アニマという瞬間。

美しさ。清らかさ。

綺麗な金髪に染められた女の髪に触れる。

カイリはアニマを愛している。

彼女の声。肉質。瞳の黒さ。髪質感。

愛している。

アニマもまた、カイリの胸は温かいと言う。

けれども、アニマは色々な男に抱かれていく。

その事によって、実はカイリは傷付く。

傷付いて.....そして、彼女を赦し。どうでもいいと思うようにしている。

嫉妬心なんて、捨てたいと願っている。

「今日はどんなお客さんだった？」

カイリはアニマに優しく訊ねる。

「うーんと。今日は結構、優しかったよ？」

「そう、良かった」

子供の事を考えていた。

アニマには、その事までは考えていないだろう。

きっと、アニマにとってカイリなど、人生の間の。束の間の伴侶に過ぎない。

子供を持つ、か。

もしそうすれば、あらゆる絶望も。虚無も、振り払えるのかもしれない。

ロータスはこの世界で、今のまま、生を誕生させる事に悲しみを覚えるが。

カイリの見解は少し違う。

自分自身の生命の一部。それを産み落とすという事。

廻っていく世界。廻っていく世界を認めたい。

フェンリルは。レイアとキマイラとは、別のルートを辿る事にした。

あの二人と、彼は目的が別だった。

住民達と会話をしてみたい。

彼らは一体、何を考えているのか。正直、分からない。分からないし、理解が出来ない。だからこそ、接触を試みようと思っている。

元々の三人で決めた目的とも一致している。

レイアはロータスの討伐。

キマイラはアーティの討伐。

そして、彼は他の能力者達の無力化だった。

.....避けているなあ、と自分なりに思う。

キマイラの描いてくれた地図を頼りに、道を歩いていく。

大体の見えない迷路の構図は、ある規則的なパターンによって組み合わせられたものだった。だから、それを攻略すれば簡単なものだった。

特定のビル内部には、アーティの能力が張り巡らされてないと、ヴリトラは言っていた。どうやら、此処がそうだろう。

フェンリルは今や一人だ。他のみなも、おそらくはもう好きに行動しているだろう。

だから、彼は彼の好きにさせて貰おうと思っていた。

自らの意志と生き方の為に戦う。それだけだ。

大きな衝撃音が響いた。

どうやら、近い。

直感。

どうやら、レイアが戦っているのだろう。能力者と。

巻き添えを食らわないように、気を付けなければならない。

彼女は、本気の眼をしていた。他の者に何の容赦も無いだろう。

フェンリルは、導かれるように、その場所に辿り着いた。

その場所には。沢山の絵画が飾られていた。

不気味な画廊だった。

そのどれもが、生々しい惨劇の賛歌を描いている。

「もう、この辺りには。アーティさんの能力の効果は無いですよ」

声は言った。

いつの間にか、そいつは現れていた。

そいつは、白いタキシードのようなジャケットを着込み、白いズボンを穿いている男だった。

何だか、全体的に無機質な印象の男。

「ああ、私の名はクライ・フェイスって言います。クラスタによろこそ」

フェンリルは、一応、警戒しておく。

いつでも、この男に斬り掛かれる準備をした。

「ちなみに、住民達が固まって住んでいる辺りには。アーティさんの能力が及んでいません。アーティさんはクラスタの頭目に為り切れていないから、彼と接触せずに、クラスタに住む人間も多くいるんですよ。だから、この区画内では彼の能力が働いていないです」

「そうか」

フェンリルは彼を吟味する。

「処で、お前はオレを排除するか。始末しなくていいのか？」

「そうですねえ。私はどちらかというと、友好的に行きたいんですよ。情報によれば、やってきたのは、アサイラムのケルベロスさんでしょう？ なら、幾らでも説得の余地あるじゃないですか。どうやら、彼はアーティさんと出会って、お話しているみたいですね」

クライ・フェイスは被っている、シルクハットの帽子を取る。

「まあ、ゆっくりしてってください」

男は歩き出す。

フェンリルは、彼に付いていく。

しばらく歩くと、画廊に着いた。

様々な絵が架けられている。

一人の女がいた。

キャンバスに絵を描いている。

「ああ、彼女はアニマって言います」

タキシードの男は言う。

アニマは少し、弱弱しそうな女だった。顔立ちは何処となく品がある。

艶やかな髪。切り揃えられた、綺麗な金髪をしている。

何処となく気品はあるが。何処となく陰のある女だった。

「こんにちは」

彼女は笑顔を向ける。

十

カイリは。黒白のドレスを纏った青年と話をする事になった。

彼は美しい顔形をしている。そして、ぞっとするような鋭利な雰囲気纏わり付かせていた。金色の中に銀が混ざる、長い髪。長い睫毛。小さな顔。滑らかで、整った骨格。

どう見ても女にしか見えないが。鋭利な攻撃性が、彼を近付けがたいものとしていた。

「クラスタってのは何なんだ？」

彼は問うた。

「クラスタですか。正直、俺にも分かりません。何なのか。弱い人間、疎外された者達が集まって出来た集落としか言えないし。分からない」

「クライ・フェイスから聞いた。お前は幹部の一人なんだろう？」

「そうです。でも、俺にもこの集落が何なのか分かりません」

クラスタ内で、轟音が響き渡っている。

誰かが、戦闘を続けている。

おそらくは、ヴリトラではないだろうか。

揺れが此処にまで、伝わってくる。

絵画の何枚かが、地面に落ちる。

慌てて、アニメは絵画を元の場所へと戻していく。

「どうしたのかなあ？ カイリ」

不安そうな顔。

カイリは直感的に思った。

このフェンリルという青年は知っている。

あの暴君の事を。

だから、それを前提に話をしてみようと思った。

「俺は神なるものを、信じるに値するものを見出していないんです」

次に言われるであろう言葉、お前は一体、何者なのか？ と聞かれる前に答えた。

自分は何者なのだろう。

幹部というのは、あくまで流れに任せた結果に過ぎない。

役職の意味も機能していない。

では、自分はクラスタにおいて何者なのだろう。

この世界において、何者なのだろう。そう自ら問うた。

何者でもないのかもしれない。

ただ、虚無と何も出来ないという失望の只中に生きている。

死ぬ事さえも。自ら死ぬ事さえも、諦めている。

生きる事に希望も見出せないもの。しかし、重度の病人ですらない。

ロータスの言葉。アーティの言葉。

どちらにも希望を見出せていない。

「ふん、そうか」

彼は何か、興味を失ったみたいだった。

「オレは変えるかな。正直、ケルベロスの頼みもどうでもいい。ドーンもアサイラムも、興味が無い」

カイリは、ふと、彼ともう少しだけ話してみたいと思った。

彼は何か、言葉を持っているのかもしれない。

カイリの心を揺さぶる何かをだ。

「カフェテラスに行きませんか？」

彼は首を傾げた。

「ロータスさまと、よくお茶を飲む場所です。とても景色が良い」

カイリは、フェンリルをその場所へと案内する。

階段を上っていく。

バルコニー。

階段を上り終える頃には。

いつしか、クラスタ内の地震のごとき振動と、轟音は止んでいた。

どちらの勝利か知らないが。きっと、決着が付いたのだろう。

そう、信じたい。

仲間が勝利したのだと。信じたい。

十

そこは海が見える場所だった。

遠くで、カモメが飛んでいる。ウミネコかもしれない。

晴れた日の昼は。雲が太陽と溶け合っている。

絶景だ。

クラスタの中の、一番、景色の良い場所の一つ。

ロータスとカイリは、此処の景色がとても気に入っていた。

アニマも。画家のセルキーも、よくこの場所に来て、イメージーションを膨らませている。少なくとも、此処の景色を眺めている間は。生きている時間なのだと感じる。

クラスタの中で、苦しみ絶望している者達。

いつか、彼らもまた、この景色が美しいと感じる事が出来ればいい。

今は、夕刻に差し掛かっている。

一番、美しいと思う

太陽が海原に沈んでいく。

赤と青の混合。それは溶けるように鮮やかな色彩だ。

フェンリルは冷たい紅茶が好きなのだという。

紅茶の中に、少量のスパイスが入っているのが、最近は好みなのだと。

カイリは、彼の前に。クッキーと此処の庭園で取れる茶葉から作られた紅茶を置いた。

対話。対話。

まず、害が無い事を何よりも伝えるべきだ。

クラスタという場所。

此処にやってくる者も多い。此処を破壊しにやってくる者も。

「此処に集まってくる人達は。生きる事に絶望している。というか、希望の形が分からない。その中に、犯罪者も多くいて。此処が魔窟と化しているという一面も確かにあります。それを否定する事が出来ない。俺達は彼らをコントロールする事は出来ない」

「そうか。まあ、オレにはどうだっていいんだけどな。オレは依頼を受けて来ただけなのだから」

「でしようね。だから、話したいと思った」

「俺はね、フェンリルさん。死のうと思い続けて、死ぬ事さえにも意味を見出せずに生き続けている人間なんです。俺の人生は灰なんだ。何も無い」

「そうか、別にオレはそんな人間は嫌いじゃないな」

彼は紅茶に口を付ける。

そして、美味しいな。と神妙な顔になる。

「クッキーなのだが。干し葡萄は嫌いだ。ドライ・フルーツ全般も。残していいか？」

彼はむうっと眉間に皺を寄せた。

「ああ、違うの持ってきてみましょうか？」

「いや、いい」

彼は巧みに、干し葡萄を弾きながら、クッキーを食べていた。

そして、少し不味そうに食べ始める。

「言葉で人は救われるのでしょうか？」

カイリは理解している。

色々な人間を見てきたから分かる。

その人間を見れば、その人間と少し話せば。感覚的に、その人間がどういう人間なのか、何となく分かるものなのだ。

きっと、このフェンリルという青年は。

カイリにとって、意味のある言葉を言ってくれるような気がした。

「言葉で人は救われる、と言う人もいる。でも、此処の施設では言葉も食べ物も、何もかも、与える事によって生きる意味を見出せない人ばかりだ。みんな、色々なトラウマの体験から、その体験を克服出来ずに生きている、生きているとはいえない生を生きている。俺には一体、どうすればいいのか分からない。出口が無いんだ。答えが見つからない。俺はどうすればいいのか分からない。ロータスさまはロータスさまの視ている神を信じ続けている。アーティはきっと、既存の神を。俺は何も信じられない。何処にも向かえない。俺は一体、どうすればいいのか分からない。生きる事をしなければいけないと言われる。でも、生きる事って何なのかって」

涙が零れ落ちていた。

顔がくしゃくしゃになる。

何故、こんな初対面の相手に、こんな事を言ってしまうのだろうか。

分からない。

「瞬間、瞬間の中に生きる事があると言う。確かに、瞬間の中にある歓喜。それはとても、幸せなんだと思う。けれども、俺はそれですらも、空しく感じる。俺は贅沢なだけかもしれない。怠惰なだけなのかも。でも、俺は答えを見つけたい。探している。俺はどうすればいいのか分からない」

カイリはアニマとの子供が欲しかった。

自分の分身となる、我が子がいれば。

もしかしたら、この虚無も消せるのかもしれない。

彼女の肉体。

それは、カイリにとっての宇宙だった。ロータスなどに比べたら、小さな宇宙でしかないの
だろうが。それでも、何処かで願っている。ささやかな幸福。

胎内の中から、カイリの子を宿してくれれば。

どれ程、良い事だろう。

一つの生命が終わり、また新たな生命が生まれる。

種が地に落ちて、新たな芽を吹かせるように。

もし、そんな事が可能ならば。

きっと、幸福はあるのだろう。

太陽の暖かさ。

命の温もり。

生命。

命の炎。灯火。

愛。

「ふん。恋愛やその延長線上の行為でお前は幸福になれるんだな？」

彼は冷たく言い放つ。

彼には、本当に分からないようだった。

人を愛する、という事が。

その事を、実際に言ってみる。

「いいや、オレは他人を愛する事もあるかもな。お前の愛って奴とは違うだけだろう」

彼は少しだけ、眼が泳ぐ。

「もっとも、オレは独りが好きだけだな」

空疎な空間。

彼はこの世界を、きっと忌み嫌っている。

しかし、カイリとは生き方が違う。

彼には、生きる為の強い目的があるように思えた。

決して、みなに理解されるようなものではないかもしれないが。

確かな信念を感じる。

少しだけ。

羨ましいな、と思った。

彼にも、何処か空虚感を感じる。しかし、けれども彼は自分の意志を信じている。

目的を信じている。

「オレはこの世界が嫌いだ。けれども、オレは勝手に生きていく、それじゃ駄目なのか？」

カイリは何かを返そうとした。

しかし、何も無い。

カイリは空ろに生きている。未来の世界を信じていない。

二人は、似て非なる者同士だ。

「オレはもう行く。興味が無いから」

彼は席から立ち上がった。

カイリは、まだ何かを聞きたい。

あの、と言おうとした。

「オレの事、聞きたいんだろう？ もっと」

彼は自分の性に関する事を話してくれた。

カイリにとっては、衝撃的な内容だった。そんな人間もいるのか、と。

フェンリルの持っている、強い性行為に対する嫌悪感。

彼が見つけた、生命に対する解答。

これらもまた、二人の間に。大きな境界が引かれている。

埋められない断絶だ。

理由を問うた。

女が嫌いなんだ、と言われた。

男も嫌いなんだとも言った。

人間の肉体が気持ち悪いのだと言った。

体臭だとか、何だとか。あるいは、全てが。

彼は官能を否定している。情欲を憎悪している。

カイリは彼を見て、不思議な感情が湧き出てくる。

彼は異端でありながらも、決して自身が疎外された者だと思っていないのではないか。あるいは、まるで気にも留めていない。それが当たり前なのだと思います、自分の感性を信じ切っている。

新しい命。

新しい始まり。

新しい声音。

それらは。

全て、小さな灰から生まれるような。

自分自身の可能性とは、一体、何なのか。苦しみの中に芽生える、花のように。

泥の中より、生まれる無垢なる蓮のように。

十

性的なものに対する拒絶。

あるいは、性に対する拒絶。

強い意志の下、自分は自分である事が揺ぎ無い。

フェンリルは、決してクラスタの住民に共感を示すつもりはなかった。

確かに、彼らの人生は悲劇の只中にあるのだろう。この世界が不条理で、何よりも残酷で、サディスティックでさえあるという事。

そんな只中で、フェンリルはニヒリズムの思考を持ってもなお、戦い続ける決意をしている。

殺意、敵意。それらを抱えながらも。

しかし、彼のジレンマは。どれ程の情念があろうとも。人を殺せない、という事だ。
自分自身の生に対する問答。

カイリ。

あいつの眼を見て、何となく分かった。

彼は、本当は絶望なんてしていないんじゃないだろうか。

自分ではそう思っているが、本当はずっとずっと模索している。

何かの解答を見つけようとしている。

おそらく、本質的には分かり合えない相手なのだろう。

あれは。

覚悟を持っている人間の眼だ。

何に対する覚悟なのだろうか。

十

アーティは始末する。

それは決定事項だ。

ケルベロスの説得など考えるつもりはない。

ケルベロスは、自身の行おうとしている事の本質というものを理解してはいない。

キマイラは決断している。

自らの生きる意味に、対して。

十

先ほどのヴリトラとの闘い。

楽しかった。

敢えて、殴られてみたりもした。何度も、何度も。

この肉体が、何処まで強いのか分からない。

分からないからこそ、知りたい。

ヴリトラに爪で、顔面を引き裂かれた時。酷いダメージを負った。

しかし、その後の攻撃は、更に強大になっていたにも関わらず、ダメージが少なかった。

これは、どういう事なのだろうか。……。

速やかに、自分とは何なのかを考察していかなければならない。

自分の肉体の構造。……若干、受ける時のダメージにブレがある。

レイアは精神エネルギー体だからなのだろうか。

意志の力によって、自身の肉体の強度が若干、変質するみたいだった。

そう。

肉体は細身で、筋肉の欠片も無いが。それは、彼女の肉体の強さが表に現れていないだけだ。
普通の人間の肉体と、構造が違う。

直感で分かる。

ヴリトラを練習台にして良かった。戦う意志を取り戻せたから。

自らを信じ続ける事。それ以外に対面する理由などない。自らを信じた結果、今、此処にいる。
あの女は気に入らない。それは自分にとって、決して間違った解答ではない。

再び、ロータスと対面する。

けれども。

もし、仮に。

意志の力を、碎かれる何かがあるのならば。

.....負ける事も、在り得る。

.....。

「貴方の能力『ヴィア・ドロローサ』がどんなものなのか、大体、分かっているわよ？」

くっくっ、とレイアは笑い続ける。

その女は、今日、纏っている服は真っ黒だった。

全身、黒だ。

あらゆる、色を呑み込んだかのような黒。

瞑想の座。

ロータスは、重い腰を上げた。

黒髪が靡く。

曼荼羅のように描かれた呪詛の言葉の数々。

様々な言語圏における世界に対する憎悪と怨嗟の言葉が、渦を巻いて、壁や地面に沢山、描かれて。それが一つの絵画へと為っている。

「可愛い女の子。貴方、お名前、教えてくれなかったのよね。戻ってきたのね。会いたかったわ」

彼女はにっこりと笑った。

怖気のするような笑みだった。

きっと、それは普通は柔和だとかでも言うのだろうか。

宇宙の神苑の中に佇んでいるかのようにだった。

真っ黒な女と。

黒白の少女。

二人は、一切、自身に対して妥協していない。

信念がある。強い信念が。だから、曲げられない。

「貴方の思想なんて、私にはどうだっていい。貴方は私に倒される。それ以上の事実なんて、必要無いって思ったのよ」

レイアは一步、前に踏み出た。

「そう。可愛そうに……。女の子がそういう風に生きている、ってどういう事かなあ？ 美しい恋愛とかして、愛する人と一緒に生きたりするのっていいと思うわよ。あなたなら」

「黙れ」

レイアは鼻で笑った。

「言わなかったかしら？」

くっくっ、と少女は笑う。

笑い続ける。

それは、暗鬱な笑いだった。酷く歪で。

「私は独り、生きる、と。愛なんていらぬ。愛されたいとも思わぬ。愛したいとも。馬鹿みたいなのよ。くだらぬ。おぞましいの。吐き気がする」

ロータスはとても、とても悲しそうな顔になる。

痛みによって、心が焼き尽くされていくような。

「わたしも、昔、少女だったわ。自分で言うのも何だけど、可愛かったなあ。その頃を思って、今も思って。わたしは女の子達を大切にしたいと思っているの。とても愛しくて。昔のわたしに言葉を投げ掛ける為に」

「あらそう。けれども、私は少女じゃないかもしれないわよ？ この身体は、老いない」

レイアは彼女の言葉を、ただただ拒絶している。

「ねえ、あなたは今、幸せ？」

言われて、レイアは面食らった。

言葉に耳を貸してはいけないと分かっている。

「あなたの心は何色なのだろう？ あなたは色を完全に隠している。だから、わたしにも分からないの。でも、あなたはとても綺麗。綺麗過ぎて……」

黙れと言っている、という言葉の口にしようとして、レイアは止めた。

彼女の言葉に耳を貸している時点で。

何らかの対話の余地を与えている時点で、駄目だ。

今は只、彼女を合理的に倒す事を考えなければならない。

いつもの自分を思い返す。

決して、油断しない。

それだけは、戦いにおいて必須としている態度。

負けられない。

今は、この女と戦っている、という以上に、自分自身と戦っている。

全ては、鏡だ。

全ては、人形のようなものだ。

レイアは全身を捻っていた。

空中に浮く。全身が、大きな鎌のような鋭利さを帯びる。

渾身の飛び蹴りを、ロータスの頸椎へと放っていた。

このまま首の骨を破壊して、床へ叩き付けて、脳漿を地面にぶち撒けて、新たな肉塊の曼荼羅を作るつもりでいた。そこに何の躊躇も迷いも無い。

しかし、レイアの攻撃は、彼女へと届かなかった。

攻撃は空を切っていた。

彼女は思わぬ浮遊感を味わいながら、何とか片手を地面に付けて、体勢を立て直す。

ロータスは動いていない。

しかし、自分の攻撃が避けられた。

迷っていたからか？ ……断じて違う。

彼女はすぐに至った。

……何らかの能力？

彼女は心の中で舌打ちする。

……彼女の能力は大体、分かったと思ったけれども。解答が正しくなかった。……………それも

、早計ね。ひょっとして、別の能力者が、守っている……？

その考えが、自然のように思えた。

アーティの『ライト・ブリンガー』といい。

まるで、彼女のエタン・ローズの類型にさえ感じる。やっている事は違うのだろうが、現象自体は近いものを感じる。

レイアはすぐに考えを整理した。

この戦いは、試練なのだと。

自分が更なる先に行く為の。

触れられざる者。

それを目指し続ける。

永遠の無垢。絶対の、敢えて言うならば、処女性……。

レイアは心の中で苦笑する。

概念の定義はどうだっていい。

自分が目指そうとしているものの言葉として、それがあつただけなのだから。

目の前の敵は、明らかに自分の意志にとって邪魔なのだ。

排除しなければならない敵。

あるいは、認めよう。こいつは、雑念なのだ、と。

立ちはだかるべき、岩山。

ロータスを屹然と見る。

彼女を取り巻く曼荼羅は、一種の方陣なのだ。

ある種の結界のように機能している。

大宇宙の只中のような、空間だった。

凍えるような寒さが吹き抜ける。

レイアは鼻で笑っていた。

こいつの攻撃は、大体、理解している。

おそらくは、世界に落とされた何らかのエネルギーを再現させている。

反復させる能力、とでもいうべきか。

おそらく、それは人間が負とでも呼んでいる感覚なのだろうか。

痛み、苦しみ。過去に行われた感覚を、再び、この世界に引き戻す事が出来る。

視界に、様々な情景が浮かび上がる。

二つの眼とは違う。もう一つ、眼があつて、その眼が現実と重なって見せているような。

そういう能力なのだろう。

彼女は世界に落とされた、痛覚を読み取っている。

そして、それを他人にも共有させる事が出来る。

それが、ヴィア・ドロローサという能力。

「人間は正しき道を歩まなければならないと思うの」

彼女はとても悲しそうに言う。

「でも国や社会。そういったものに繋ぎ止められる事によって、人間は人間で無くなってしまふ。本来の人間らしさを失ってしまう。わたしはそれを、とても悲しく思っている。ねえ、あなたもそうでしょう？ そうなんでしょう？」

彼女は信じるものを持って、佇んでいる。

「人間の根源は、万物との調和。その中でわたし達は生きている。けれども、みんな、いつしか忘れてしまった。みな一つである事を。自然とも神とも、一つである事を。邪悪さが全てを支配している。世界は暗黒に包まれている。それを視ようとしない人達だって多い。多過ぎる。この世界は闇に塗られている。わたしは、何とかして、この世界の構造を変えたい」

ロータスは自分の思想を、雄弁に語っていく。

レイアは一切、折れなかった。

「ふん。何が根源なのか分からないけれども。私にはどうだっていいのよ。貴方は死ぬべき。私が殺す。せいぜい、覚悟を決める事ね？」

それを聞いても、ロータスの口調は変わらなかった。

「世界を変える力が欲しい。私はそんな事が出来る人達を集めている。みんな、わたしの下に集まってくる。みんな、傷付けられた人達。ねえ、聞きたいの。.....あなたも、かつて傷付けられた子なんでしょう？」

レイアは舌打ちした。

話が噛み合っていない。

レイアは憎憎しげに彼女を見ていた。

「私が傷付けられた子、か」

自分でも理解出来ないくらいに、冷え切った声をしていた。

まるで。ナイフのような感情。

「うん。だって、あなたは可愛いんだもの。綺麗な心を持っている」

「馬鹿じゃないの？」

彼女は思わず、髪をかき上げる。

「私を。人間の領域の言葉で語るな」

一瞬、深い憎しみに襲われた。

レイアは此処で折れるわけにはいかない。

何故ならば、人間を止めようと思ってしまった時。

彼女の未来は決まってしまった。

世界の環から外れるという事。

少しだけ、顔色が蒼白になる。

ニアスのモーザ・ドゥーグでさえ届かなかった心。

折れなかった心。

しかし、こいつは.....。

こいつの能力は.....。

.....ニアスは現在の私を倒すだけの力が無かった。しかし、もしこいつが過去の私に干渉する

事が出来るとするならば？ 反復させる能力とは、つまり何なのか。

心の傷を呼び戻そうとしている。

自分が人間を止める前ならば。

こいつの攻撃は……。

ざわっと、蟲が這うように、闇が這い寄ってくる。

過去と。現在と。未来。

全ては因果律として、繋がっている。

そう、因果律の環から外れる事さえも出来ない。

レイアは自分自身の肖像を見る。

それは、モーザ・ドゥーグの黒い犬でさえ辿り着けなかった場所。

現在の彼女自身から切り離された過去。

この世界に来る前の。……………。

現在ではない。過去の亡霊。

もう、振り返らないものだが。

無限のような時間と空間。

暗黒空間が渦巻いている。

レイアは自分が自分で在る事。自分の肉体が在るという事。

精神が在るという事を確かめる。

言葉に吞まれてはならない。

ざわざわっ、と辺りに気配が充満していくかのようにだった。

ロータスは両手を広げる。

能力を発動させようとしているのが分かった。

レイアは出し惜しみ出来なかった。

全力で戦うしかない。

こいつは……本当に、ヤバイ……………。

時間も空間も分からなくなってしまいそうな場所で。

ただただ。

ただただ、悲鳴と悲痛の叫びばかりが反復し、反芻され不協和音を上げて鳴り響いている。様々な場所の。様々な地域における、絶望の叫び声。

一つの音楽となって、それは奏でられ続けていた。

ヴィア・ドロローサ。

リュミエールが発動している。

ロータスは、レイアの姿を見失う筈だ。

レイアはロータスの背後へと回った。ロータスは彼女に視線を移さない。効果は発動している。問題はこの先だ。

レイアの拳が、先ほど、こいつに届かなかった。

一体、それは何を意味するのか。

彼女の派生能力か。それとも、他に仲間が……？

そして、現在の状況。

辺りが闇に包まれている。

レイアは焦り始めていた。

今。まだ、部屋にいるのだろうか。

ならば、一度、出なければならない。

もし、彼女の異空間に飲まれているとしたら、危険だ。

ならば。一度、引くしかない。

引く……またか？

他の奴ならば、まだしも。

こいつに対しては、屈辱だった。

今までの闘争において、何度となく敗北した事はある。

ついに勝てなかった相手だっている。

しかしだ。

こいつには、負けたくない。

それは、自分自身を超える事。それにも繋がるだろう。

レイアは指先から、光の球を生み出していく。それは虹色の色彩をしていた。

それを、幾つか、ロータスの下へと投げ付けてみる。

この光の球。大体、彼女の拳くらいの威力はある。

そのどれもが、黒衣の女の下まで向かっていった後、まるで何事も無いかのように、彼女の肉体を通過していく。

……幻影？ あそこにロータスはいない？

レイアは考える。

それも、早計ではないか、と。直感が言っている。

再び、撒き散らすように光の球を投げ続ける。

パシッ、とロータスの頬が弾けた。

みるみるうちに、澄ましたような顔の頬が、赤黒く腫れ上がっていく。

ロータスは自身にダメージが通った事に気付いたみたいだった。

そして、後ろを振り返る。

彼女はレイアを認識出来ない。

「クライ・フェイスが、わたしによくしてくれて」

ロータスは困惑したような顔になる。

「わたしを守ってくれるの。でも、彼の力は完全じゃなくて」

「あら？ 教えてくれるの？」

レイアはほくそえんでいた。

彼女は。

自ら、この現象の事を語っている。

敵であるレイアに、自ら教えている。

戦いというものを、知らない。そんな女だ。

レイアは理解する。

彼女を守っている能力者がいる。

どうやら、それは何らかの現象として、攻撃が届かなくなる。

しかし、その壁は完全じゃなくて。何回か、あるいは何十回に一回かは命中する。

ならば、やるべき事は一つ。

攻撃を与え続ければ、いつかは届いて倒せる。

何の障害でもない。

彼女の存在自体に、まだ得体の知れなさを感じているが。

しかし、戦闘においての彼女の態度は段々、理解していた。

.....強くはない。戦いの経験もそれ程、無いように感じる。ドーン辺りの言葉を使うならば、素人とでも言うべきか。戦闘の素人だ。

実際、彼女自体は隙だらけだった。

未だに、レイアの能力もまるで見抜けないみたいだった。

ならば。

迷いさえなければ、すぐにでも勝てるべき相手ではないか。何も苦戦などしていない。

レイアは右手の拳を掲げる。

光と闇。

それは、おそらく、人間が世界を認識するにあたって感じ取ったであろう最初の色彩。

太古の大地より織り成す。

黒衣の女は、右腕を高く掲げていた。

それは、まるで天空に手を伸ばすような。

何事かを行おうとしている。

彼女の全身を、沢山の曼荼羅が蠢くように廻っている。

曼荼羅の一つ一つに彫り込むように書かれた、呪詛の言葉。

森羅万象全てを飲み干していく。無限大の闇。

それは、何処までも、何処までも暗い、深い闇だ。

.....

爆撃音が鳴り響いていく。

彼女は攻撃に移っている。

戦闘機の射撃音が聞こえた。

戦車砲の爆音。

.....

そう。

彼女は召還しているのだ。

かつて、人間達に傷付けられた刻印を。

沢山の子供達の泣き声が聞こえた。

小さな子供だ。悲鳴は唱和となる。さながら、聖歌のような。

彼らは何故、泣いているのか。何の為に泣いているのか。ただただ、悲しみは反復し続けて、永遠の傷痕として、刃のように打ち鳴らしている。

「光の全てを人々は忘れてしまった」

彼女は、とても。とても、悲しそうな声で言う。

「彼らは忘れられてはいけない人々。歴史という記録の中に封じられて、消え去っていった。顔の無い人々。わたしは彼らの言葉なの。彼らは未来の世界においてなお、その顔を。相貌を、現したがっているわ。自分達がどれ程、苦しんできたのかを。自分達がどれ程、苦しんできたのかを。教えたくて」

思わず。

「何が言いたい？」

レイアは思わず、叫んでいた。

「協力しましょう？ 少しでも、世界を救いたい」

それを聞いて。

レイアは頭を抱えていた。

完全に馬鹿にされている気分だ。

一切の対話が出来ていない。

お互いが、お互い、自らの意志の下、好き勝手に言いたい事を言っている。いや、そもそもレイアは対話などするつもりなどない。この女の言葉は、嫌でも耳に入ってきた。語り掛けるだけの才気がある。

しかし。

レイアは世界と自分を完全に切り離して考えている。

その事に対して、一切、曲げるつもりはない。

しかし。ふと、思った。

少しだけ、興味が湧く。あるいは、疑問か。

「世界を救うって何？」

レイアは冷ややかな声で訊ねた。

「みんなが生きる事をしなければならない」

「.....生きる事？」

「何処までも広がって行って。無限に続いていく苦痛の中で、みんな賄えない苦痛の中で生きている。みんな愛を忘れてしまった。愛する事を。大切なものを。だから、ずっとずっと、この世界は悲劇に満ちている」

「そう。けれども、私に愛はいらない。愛したいとも思わないし、愛する事も出来ない。これ以上、無駄だと思わない？」

レイアは彼女を理解した。そう.....。

そう、この女は。

宗教的な神を信じていない。あるいは、思想としての神を。

神が人間の世界を救わない事を。理解した上で……。

「わたしは、人間には神様が必要だと思うの。わたし自身、ずっと求めている。あるいは、元々は人間は神様の一部だったのかもしれない」

神とは何なのだろうか。外側の存在だ。

レイアは神を知っている。神の世界もだ。

レイアは、この世界の外側を知っている。

それでなお、レイアは一切、人間を救済したいだとか、他人を大切にしたいだとかを考えていない。考える事に意味を感じていない。

善悪のどちらにも、興味が無く。そもそも、他人に興味が無いのだ。

黑白と。黒。

歪なパラドックスが、環を為している。

神の世界に行ける力を持ってしても、エゴイストとしてしか生きないレイア。

神が世界を救わない事を知って、それでも神を欲するロータス。

二人は、一切、分かち合えないのだろう。

望むものが、余りにも違い過ぎる。

目指すべき場所が。求めているものが。

ふふっ。ははっ。あははははっ。あははははっ。

レイアは笑う。笑い続ける。嘲笑い続ける。

まるで、全てが闇に塗られるように。

それは、何処までも邪悪で。ある意味で言えば、底無しの無垢さで。

一切の迷いが無い。

レイアは黒に白を足す事によって。より、邪悪で。より、暗い黒が現れるのだと考えている。

黑白の色彩は。漆黒よりも、より邪悪なのだと。強過ぎる光は、何処までも暗い闇であるのだと。そう、考えている。

生の肯定か否定か。

エロティズムの肯定か否定かが、問題なのだろう。

この世界で生きる事に。レイアは意味を見出していない。

神なんていない。

神を信じる事が、良い事とされて。神を信じない事が、悪い事とされる。

ロータスは詠うように言う。

それは、一種の賛歌となって響き渡る。

慄然と空間が歪む。

「弱さを肯定しなければならぬ。人間の持つ、弱さを。それがもうどうしようもなく、美しくって。弱い、という事。被害者である事。支配の世界、搾取の世界。その環から抜け出す為の可能性だと思わない？ 支配的な力。おそらくは人間が誰しも持っている力を得たいという事。逸れは何処までも肥大化して、怪物と化して、この世界を蹂躪していく」

彼女は踊るような声音で言う。

「わたしは闇に閉ざされた者達の側の声。だからこそ、此処には沢山の人々が集まってくるの
でしょうね。疎外された者達。みんな多分、子供達なの。小さな弱い子供達。支配の中に従属出
来なかった、支配する側にもなれなかった子供達。彼らはこの世界を拒み続ける。良い事なの。
それこそが、とても正しい事」

それは、音楽のような歌声に似て。

「人を理由無く、殺す破壊者。理由が無いからこそ意味がある。理由って、ほら、支配の世界
によって作られた価値から生まれてくる。純粹なる悪人ならば、純粹なる善の可能性も秘めてい
ると思わない？ 確かに、殺される人達はとても可哀相。でも、余りにも人間が可哀相過ぎて。
どうしようもない、本当に殺されているのは、この世界にいる全ての人々。肉体は死んでもなお
、魂が死なないのだとすれば。それは生きた証」

.....

世界の環の規範を正そうとする、ロータス。

世界の環から抜け出したがる、レイア。

二人には、境界が引かれている。

分かち合えない境界が。

.....

「カイリに言われたわ。その先に一体、何が待っているのかって。万物の位相を変革するとい
う事。人間の位相を変革するという事。もし、人間同士の支配の世界が無くなった世界が誕生し
てしまったら。この世界はどうなるか。正直、それはわたしにさえも分からない。ひよっとす
ると、みんな一つの塊のようになるのかもしれない。全ての意識と意識の共有。みんなで、一つ
の生命体になるのかもしれない。どうなのかしら？ わたしにはそこまで分からない。けれども
、悲劇を無くせるのなら。人間同士の悲劇を無くせるのなら、その可能性も捨てたものじゃ
ないのかもしれないわね。個体と個体を無くすという事。それは究極の共産主義なのかもしれな
いわね。わたしには分からない。その先に何かがあるのか、を」

自問自答にさえ、聞こえる。言葉。

「仮に、全ての個体を無くす事さえも正しくないとする。だとするならば、全ての個体と個体、
あらゆる様々な人種、価値、思考が分かり合えるのだとすれば。誰も傷付かない世界が誕生する
のだとすれば」

少しずつ。

ロータスは少しずつ、少しずつ、狂的に感情を発露させていく。

自分自身でさえ、自分の思想が分からないのだろう。

感性だけで、先行させている。

「でも、官能の情感は美しいわ。恋愛、友愛。満たされた時。愛する人。抱擁。口付け。あなた
は、何も愛さないと言う。わたしは悲しく思う。全てが本来の意味である愛の環の中に生きら
れるとするならば。虐待でも凌辱でもない官能ならば、それは何処までも美しいし、貴方の考え
ているような、愛無き世界なんかじゃない。艶かしさは聖性で、男女の愛は楽園になる。どちら

かが、どちらかに対して、一切のサディズムが無いならば。それは美になる。他にもあるわね、たとえば食事。誰かを搾取して得た食べ物じゃなければ、それは何処までも清らかだし」

.....。

「闇の中の小さな少女。幼い少年。閉ざされた収容所の中で泣き叫ぶ人々。彼らの悲鳴が聞こえる。彼らは何を視るのかしら？ 彼らは世界を愛するのではなく、世界を憎むのでしょうか。どんな聖典にも彼らは救われない。強制収容所で生き残った人々でさえも、他の囚人達を食い物にしてきたわ。それが、支配の世界。形のある信仰を信じ続けても、涙は報われないの。書物も言葉も、人を救いはしない。世界の構造自体を変えなければならない。でも、それは既存の戦争やテロリズムじゃ駄目でしょうね。人類全てに普遍的に通じる言葉があるとするならば。もし、万物の中に根源があるとするならば。もし、その根源の構造自体を変える事が出来るとするならば」

.....。

「貴方の強さは、弱いという事じゃないかしら？ 貴方は正しさを否定する。この世界の環の中にある事を。それは美しい。けれども、同時に貴方はこの世界の中で生きたくない、という弱さもある。それは、きっと正しくないと思う」

.....。

「憎しみの肯定。悲しみの肯定。怒りの肯定。ありのまま、純粹無垢な感情の肯定。その結果として、他人の殺害行為に移るとしても。自分自身の殺害行為に移るとしても、それは正しい事なの。彼らの生きた事の証明だから。彼らは自分が自分で在るという事を生きた。此処に集まってくる人達は、心的外傷を克服出来ずに、生きる事を行えない。未だ彼らは戦禍の只中にいる。彼らの苦しみを無駄にするわけにはいかない」

.....。

「世界の暗闇の中で、出口の無い、行き場の無い世界の暗闇の中で。闇に閉ざされた世界の中で。わたし達は光なるものを願っている。天空に光が刺し込むように。天空に両手を伸ばすように。外へ、外へ、みんな出たがっている。閉ざされた暗闇の部屋の中から、外へと」

静寂と無音。暗黙。

そればかりが、広がっている。

視られる事を拒んだ私は。もはや、女ではない。

レイアは思う。

自分自身の信念。

肉体嫌悪。

いや、それ処か。

この世界にある自然、万物の一切を肯定していない。

そう。言うならば。

ロータスとの断絶はそこにある。

彼女は、この世界の中でのみ希望を肯定している。みんなの幸福を願っている。

レイアは一人、この世界を抜け出したいだけだ。

.....

彼女は殺す。

.....

レイアは。ロータスを倒す為には、何よりも、彼女の鎧を剥いでいく必要があると考えていた。

気になった事があった。

ビルの中に、住民がない。

おそらくは、別の場所に避難させているのだろうか。

先に始末しなければならない敵がいる。

先ほど、茶髪の青年に会った場所へと戻った。

そこで、男を見つけた。白い服の男。.....

「で。貴方がクライ・フェイスね？」

彼女は冷たく笑う。

「分かっていたんですね.....？」

「ええ」

白いタキシードの男は、口から血を吐いていた。

彼女は、背後から彼を襲撃し、胸板を割り貫いたのだった。

黒い蓮が揺れている。

「貴方の能力は。到達出来る可能性を減らしていくんでしょう？」

彼女は、大体、六十回近く殴って、やっと彼の肉体を破壊する事が出来た。

「ええ、ええ。.....正確に言えば、私の能力は。因果律を操作しているものと、自分では認識しています。たとえば、ボールを壁に投げて、ボールが此方に跳ね返る確率はどのくらいのものなのでしょうか？ もしかしたら、ボールは壁にぶつかった時に、そのまま地面に弾け飛んで、こちらに跳ね返らずに壁の辺りを転がっていくかもしれない。運動神経などの問題もあるのでしょうか。そういう風に、私にボールが命中する確率を操作する事が出来るんですね。サイコロの

目が、一を出す確率を操作する事が出来る」

「やっかいな能力ね。凄いと思うわよ」

彼女は素直に賞賛していた。

「これで、もう。ロータスへの防御は無いわね」

「……………ですね。貴方はやはり、彼女を殺されるのですか？」

「そうするつもりよ」

そうですか、と言って。

泣き顔は、地面に崩れ落ちた。

彼の肉体は、透明な赤色が流れている。

「私は、『アップル』という実験場で生まれた実験体でしてね」

彼は、口元から透明な血を流す。

「そこを離れて、長くなりますが。この場所に身を置いて。幸福でした」

「そう」

彼女は訝しげに訊ねた。

「処で、貴方って心臓を破壊されたら死ぬの？ まさか不死タイプじゃないわよね？」

「違います。後、数十秒もすれば、私はこの世からいなくなる。でも、私は苦痛を感じていない。それはきっと、苦痛の方が私に届いていないんでしょうね。苦痛が私の脳に行く確率は、低く設定してありますから」

「もう少し、巧妙に使える力じゃない。もう少し、私と善戦するつもりはなかったの？」

「いえ……私に、戦闘能力なんて、ほぼありませんよ。応用の仕方も苦手だ、ただ、私はみなが好きでしてね」

彼はそのまま、絶命していた。

『コカドリーユ』のクライ・フェイスは地面に倒れる。

まるで、蠟人形のようなだった。

レイアはロータスの処に、すかさず戻る。

しかし。

階段を登る途中。

そこには、一人の青年が佇んでいた。

彼は凜然と彼女を見下ろしている。

少女は面倒臭そうな顔をする。

「あら、貴方も死にたいのかしら？」

彼は首を横に振る。

「いえ、只、弔いに来ただけです」

「そう」

彼女は、あっさりと彼に興味を失った。

「何処を向いているのかしら？」

ふふっ、と笑い声が響く。

ロータスの背後から、声が聞こえた。

「あら。貴方、他の誰かに話しかけていたの？ それとも、壁に向かってお話していたのかしら？」

レイアは冷ややかな顔で言う。

そして。リュミエールを解除し、ロータスが視ているレイアの幻像は消失する。

クライ・フェイスの殺害によって、彼女の防御は無くなっている筈だ。

『リュミエール』を使って、彼女に幻像を見せ続けて。

途中から、彼女の話を中心に聞くのを止めて。

彼女を守っている能力者を探しに向かった。

さぞ、彼女は滑稽だっただろう。

こいつの話なんて、聞くだけ無駄なのだ。

こいつの世界なんて、どうだっていい。もう少し言えば、こいつの守りたい世界なんてどうだっていいのだ。レイアは自分自身の為だけに戦うだけだ。

たとえ、それがどれ程、他人に犠牲を強いるのが。もう関係が無い。

レイアは修羅蓮華の拳を、ロータスに向ける。

光の粒。

ロータスの全身が発光する。

祭壇が爆裂する。

レイアは理解する。

こいつの能力は……………。

無制限だ。

何度でも何度でも。反復させる事が出来る。

しかし。

法則性はもう、分かっている。おそらく、彼女の能力ヴィア・ドロローサは。

……………。

一度、歴史の中に生じた人間の苦痛を引き戻す事が出来る。同じ苦痛を、何度でも、フラッシュバックさせる事が出来る。何度でも、何度でも。

問題は、その攻撃に。若干のタイムラグがある。それは、距離と時間に関係するのだろう。だからこそ、タイムラグの短い攻撃を起こすべく。クラスタ内において、苦痛を発生させる必要がある。

こいつは。既に呼んでいた。

あの。……………。

……ヴリトラ戦での攻撃を。

そう。……………。

レイアに向かって。

ヴリトラを殴り続けた、レイアの拳が反復され、彼女に襲い掛かる。

ヴリトラはやはり、彼女の重要な駒だった。

能力をフラッシュバックさせる為の。ヴリトラはきっと、本望なのだろうか。

レイアは必死で、自分自身の攻撃を防御し続ける。

何物をも、打ち砕きかねない攻撃の連続。

.....強い。

レイアは、ビルの外に出ていた。

空中の只中にいる。全身が落下していく。

また、再び、体勢を立て直す必要がある。

レイアは思わず、歯噛みした。

あのウォーター・ハウス。彼ならば。

この女を難なく、倒せただろうに。

ウォーター・ハウスの能力である『エリクサー』を思い出す。

光すらも喰らおうとした殺人ウイルスの攻撃。あれならば、彼女がヴィア・ドロローサで何をやってこようか。更に、永続し続けるウイルスの散布によって。先ほどのクライ・フェイスの防御も簡単に超えて、彼女を余りにも簡単に殺せただろうに。

十

ビル全体に衝撃が響き渡る。破壊音が続いている。

カイリはクライ・フェイスの死体を前にして、考え事をしていた。

仲の良い友人の死。

ヴリトラの死体も先ほど、見つけた。

カイリは悔やんでいる。自分の馬鹿さ加減に。

外部からの襲撃。実は、それは日常の一部として還元されていた。

此処の人間は恨みを買っている者も多い。なので、復讐者や始末人がやってくる事もザラだ。みんな、ヴリトラ達が始末していた。しかし。

ヴリトラの死体を見て。

自分の認識の甘さを感じた。そして。

泣き顔の死。

酷い、後悔を感じている。

分かり合える友人だった。彼もまた、帰る場所が失われてしまった者だから。

フェンリルがいつの間にか、彼の背後に立っていた。

「レイアが気になってな」

彼はそれだけ告げる。

「アニマを守らなければならないんだ。それから、ロータスさまも」

カイリは涙を零していた。

「他はもう、どうだっていい。俺は自分の馬鹿さ加減に苛立っている」

彼は独り呟く。

フェンリルは、そんな彼の背中を眺めていた。

めきり、めきりと、骨が軋むような音。そして、木の葉がざわめくような音。

フェンリルは息を飲む。

カイリ。

確か、『ファイヤー・ブリンガー』という能力だったか。詳しくは聞かなかったが。

彼の背中が裂けていく。

かつて、フェンリルが憧れたもの。

鳥の翼だ。

灰色の鳥の翼が生えてくる。巨大な翼。

灰と炎の能力と言ったか。こいつの力は。

「不死鳥……」

フェンリルは思わず、それを口にした。

ざわざわ、と。生い茂る青葉が、さざめくような音が聞こえた。

カイリは翼を広げる。

「そこ。……どいてくれないかな？」

丁度、窓の辺りに、フェンリルは座っていた。

少し、考えて。首を横に振った。

「断る」

明確な拒絶。

「お前をロータスの処には行かせない。何となく、だけど。オレはオレで、レイアの戦いの邪魔をさせたくない、って気持ちになっている。何でだろう？ 不思議な感じだ」

レイアの戦い。

今や、自らの戦いに為りつつなる。

「お前らはロータスの護衛なんだろう？ お前らはロータスの能力を有効に使う為に存在している。違うか？ ならば、お前を行かせるわけにはいかない。オレがお前を始末する」

レイアの戦いを応援しているのだろうか。それは、きっと。

自らに投影しているからだろうか。……。

「……友人になれたかもしれないのにな」

カイリは少し、寂しそうに呟いた。

「少し。何かが、違っていたんだろうな。俺と君とでは」

フェンリルは眼を閉じる。

「そうだな。オレとお前は違う。どうしようもない断裂があるんだろうな。きっと、生き方も考え方も違うんだ。オレは別に世界がどうなったって構わない」

「俺は苦しんださ。俺なりに、そして出した結論が。守りたい者を守るって」

「それは叶わない。何故なら、オレはお前を、守りたい者の下へと行かせるつもりがないからな」

そう、宣言してやる。

二人は、瞬時に動いていた。

ナイフのように鋭く尖った翼。

虚空から生み出した二本の剣。

それらが、激突する。

その、衝撃のエネルギーを。

フェンリルは、カイリの胸元に転移させた。

カイリの胸が引き裂かれていく。しかし。

彼の切り裂かれた肉体の傷は、即座に塞がっていく。

「再生と創造かな？ お前の能力は」

フェンリルは、すぐに、彼の能力を分析していた。

どれ程の事が出来るのか、出来るだけ早く、理解しなければならない。

「お前じゃオレに勝つのは無理だ。経験の差で。オレはお前をこの部屋から出すつもりは無い。残念だけど、大人しく死んでくれ」

そう言って。

彼は勢いよく、壁を蹴り付ける。そのエネルギーを。

カイリの顔面に瞬間移動させる。

「いつも苦戦させられるのは、狡猾な奴らばかりだった。権謀術数を用いてくる奴ら。お前からはそれを感じない。少しはお前の教祖を見習うべきなんじゃないのか？」

フェンリルは壁を蹴る。

今度は、脇腹にヒットする。

骨がへし折れる音が聞こえた。

カイリの両眼は黒ずんでいる。

フェンリルもまた、彼の相棒同様。何処までも冷酷だった。

「一つ、言っておきたい事がある」

数秒、間を置いて。言い放つ。

「お前の教祖は。世界を救えない。それだけは間違いないだろうな」

それでも。

それでも、クラスタの住民達は、彼女に希望を抱いている。

しかし。返ってくる答えも予想出来た。彼なら冷酷に言うだろう。

そのクラスタの住民もまた、他人の希望の破壊者だ、と。

此処には、殺人犯やテロリスト達が集まっているのも事実。

此処の者達が食べている食物。流通してくる食物などは、何処かの貧しい者達から奪っている部分もある。それが、.....世界の環の中で生きているという事実。

「思想で世界を救えるわけがないだろう」

彼の声は、何処までも底冷えしている。

「此処の者達はまだ。幸福なんじゃないのか？」

更に、言葉のナイフを刺していく。

「少なくとも、お前らの言っている官能とやら。食事の楽しみ。景色の楽しみ。それらを味わえて生きているんだろう？」

言葉に悪意を混ぜていく。鋭い刃物をイメージする。

「他人の痛みは、何処までも行っても。他人の痛みだと思うけどな？」

唇が歪んでいた。

この嘲笑は、誰に向けたものなのだろうか。

「君は何の為に生きているんだ？」

「ああ。オレはエゴイズムとナルシズムで生きている」

そうなのだ、彼は。

正義なんて信じていない。他人の為になんて、生きていない。

カイリとの中に引かれた境界線。何処までも分かり合えない断絶。

カイリは、生きる事に絶望していた。けれども、大切な人の為に今を生きている。けれども、彼は他人の為に生きていない。自分の為に生きている。

「オレは悪でいい」

もう一度、彼は壁を蹴り上げる。

カイリの全身が吹き飛んだ。

「君は……」

「オレは搾取する側の人間でいい」

彼は両手の剣をくるくると回転させる。そして。

それを投げ付ける。

カイリの両翼に、それぞれ剣が突き刺さる。

「いいか。人間の生命それ自体が、どのようにしても他人への搾取だと考えている。オレはな。どんなに愛について語ろうが。それは変わらないと思っている。お前らの教祖は、世界を救済したいんだろう？ しかし、何も出来ない」

更に、叩き付けるように言ってやった。

「人間は絶滅してもいいんじゃないのか？」

かつて。

かつて、彼が憎んだ強敵。

ウォーター・ハウスが言った言葉。

それを、そのまま、目の前の男に言っている。

ああ。

闇に塗られていくのだと思った。

……………。

フェンリルは人を殺せない。生理的な意味で。精神的な弱さから、殺せない。

もう、それを認めなければならないのではないか。ならば。

殺せないならば、殺せないで、やり方は幾らでもある。

意思を砕く。

彼の心をへし折らなくてはならない。

彼の行動の一切を、無力化させればいい。

「オレは他人が嫌いだ」

彼は空中に跳ね上がる。そして。

地面に勢いよく、着地する。その衝撃が飛んでいき。

カイリの右足を砕いた。

彼は能力によって、再生させるだろう。

それでも、彼を倒し続ける。彼の何かに負けない為にだ。

フェンリルは彼を追い詰めながらも、思考を続けていた。

一つ、問題がある。

こいつは。

こいつの能力は、一体、何なのかだ。

灰と炎とは、一体、何なのだろうか。……。

もし、こいつの能力が、フェンリルが考えている通りならば。

……ヤバイ。

十

能力者は不死や強化された肉体を持つ者が多い。

カイリの自己再生能力は、彼の能力の本質ではない。

彼の能力は、他人を再生する事が出来るのだろう。

それは、きっと身近な行動にも現れているのかもしれない。

死者達の復活。

彼らの悲鳴が聞こえる。

もしかしたら、カイリが一番、ロータスの言っている事を理解しているのかもしれない。

蓮の香りは何処までも優しい。

その優しさに触れ、彼に意志が灯るのだ。

燃え盛る炎の中、焼かれ続ける。

不死の鳥。

灰の中から生まれる。存在。

闇の中に、落ちていく中で。それでも、光なるもの。炎なるもの。生命なるものを求める心。

彼の絶望の深さは、世界の痛みを視る力故にあった。

人間の持つ。弱さ。脆さ。

ロータスの視せる、荊の道が顕現させる、過去の記録。

カイリ、彼は。

彼は自らの死を願っている。しかし、それでも死ねない。それは何処かで生命の炎の揺らめきを知っているからだ。

その二律背反こそが、カイリなのだ。

彼は知っている。

少しでも、言葉によって光を取り戻した者達の事を。

初めて、その光の温かさに触れたのはいつの頃だろうか。

両足の無いガルドラが。コーン・サラダを食べて、美味しいと笑った顔を見た時。

それから。

アニマ。最初は暗い眼をした女だった。怯えた眼。

料理は苦手だったのだが。頑張った。

カイリの作ったカレー・ライスを美味しいと言ってくれた彼女。

歪な形のジャガイモ。固いニンジン。よく煮込めなかった豚肉。

それらを美味しいと言ってくれた彼女。

自分で食べてみて、駄目だな、と思ったのに。……。

……生きる意味を教えてくれ。カイリは、そう、ロータスに言った事があるような気がする。すると。

あなたが苦しむ事が生きる意味だ、と答えられた。

ロータスの望み。

永遠に到達出来ないけれども。それでも。

光を求めたい。世界を修復したい。悲劇を無くしたい。

最後のたった一人まで、苦しむ者を救済したい。

カイリの信念は、そんなもので作られている。

どうしようもないくらいに積み上げられてきた、流血と苦痛の歴史。

消えていった人々。

拷問の中、死んでいった人々。

カイリは心を痛めている。

いつも、いつも。ずっと、ずっと。

何故、この世界はこれ程までに酷く築き上げられているのだろう。

人間では及ばない力によってなのか。

神の創り上げたこの世界を、彼は赦しはしない。

ロータスは神を感じている。けれども、既存の神がこの世界を救済しない事も知っている。アーティは神をひたすら、信じ続ける事が幸福なのだと言う。彼は見たくないものは見ずに、必死で生きるという。

ロータスとアーティ。二人の違い。

ロータスは弱さを肯定し。

アーティは弱さを否定する。

おそらく、そういう事なのかもしれない。

ロータスはこの世界全ての変革を願う。

アーティはこの世界の現状をありのまま認め、それでも希望を持って生きろと。

カイリには分からない。

正しい事を行うという事が。

たとえば。

鳥や花。それらは秩序を持っているのだろうか。

適者生存によって支えられている、この大地。

この大地の調和。人間は。

自我を持ってしまったが故に。意識を持ってしまったが故に。

不幸足りえているのかもしれない。

だから、人間と自然の差異が分からない。

カイリは。

苦しむ者の視点に立ちたがる。彼らの意識に。

自分もまた、彼らであった可能性がある。

この世界。この地上。この宇宙の下で。様々な可能性の中で、自分は生きている。

誰であった可能性だってある。カイリは特に、苦しむ人間の側に立ちたがる。

彼らから見える世界。

この世界を憎悪しているに違いない。そう考えて、カイリの鬱は激しくなる。絶望は深まり続ける。

小さな虫。誰も眼にも取れない雑草。微生物。

それらにもきつと、意識があるのかもしれない。自然の環。大地の環。

.....環境破壊。カイリの住んでいた地域。

戦争によって死んでいく人々と。.....自然達。

どうすれば、この連鎖を止められるのだろうか。他人の意識が入り込んでくる度に彼は思う。この世界の苦悩、苦痛。それらの業火に焼かれ続けているような感覚。

しかし。

何処まで行っても、それは自らの思考の延長線上でしかなく。

何処まで行っても、彼らには為れないのだろう。.....

爆撃音が鳴り響く。

彼は、無意識の中で行動に移している。

全身の翼。

あるがままの、自由。.....

十

事実。

事実、調和の思想は。悪なるものを作る。

事実。調和の思想は、人間の個性を最終的に潰していく。可能性かもしれない。

どうしても、悪い人間というものが出てくる。

悪人なんて、いるのか、という疑問。

キマイラは。

勸善懲悪は胸糞悪いと思っている。

勸善懲悪の原点は、宗教だ。神と悪魔。善と悪の定義。

レイアだったら、何て答えるのだろうか。自分にはそれ以上、思考しようとする意思が無い。

執念と言い換えてもいいかもしれない。

キマイラは自分のやる事の行為の意味を知っているし。あるいは、その覚悟も知っている。自分自身は、いつ殺されても仕方無いのだろう。そんな事も知っている。

アーティ。あいつは。

疎外された者同士でも、社会体制というものを作ろうとしている。

そんなもの、必要なのだろうか？

子供の頃を思い出す。教会。

思い出した。記憶がどんどん、甦ってくる。

.....ガーデン。リーデラ。そして、今は。モニカ。

アーティはきつと言うだろう。

強くなれ、と。

そして、言うのだろう。みなと仲良く手を取り合って、生きる苦勞を分かち合おうと。

ぼんやりと分かっているのは。

自分はこの世界にある、正義。道徳。あるいは強さ。それらが正しいという事に、敵意を抱いているのかもしれない。

この世界の規律を破壊するという事。

もし、自分が生まれた意味があるのならば。

意味があるならば。.....。

モニカ.....。

自分は彼女の友人を殺した。彼女から、二人の名前を聞いた。キマイラは、あの二人。

イリスを殺した。ホーリィを殺した。

仮に過去が繰り返したとしても。多分、また同じシーンになっても、やはり殺すだろう。

その事に関して、決して後悔するべきではない。

キマイラの理念は単純だ。

敵は殺さなければならない。

敵対する者に対しては、一切の容赦を与えてはならない。

悪は無いが、自分の立場としての敵はいる。

殺す上で、後悔してはならない。可能な限り、脅威を与えて、敵の抵抗の意志を奪わなければならない。合理的に無力化する事を、いつも念頭に入れて戦っている。

恐怖は人の心を砕く。拷問は意志を弱める。

人間らしい心。そんなものは、戦いにおいては必要無いと思っている。

しかし。……。

ロータスの思想の全貌は分からないし。それ程、興味も無いが。

ヴリトラから聞いて、共感した発言。

……弱さを肯定したい。

国家。社会。弱い人間は人の足を引っ張り、悪なるものとされる事が多い。

ただ、その一つの言葉を聞いて。

無意識の内に、キマイラはロータスを始末する事をレイアに任せた。

合理的に物事を進めていく、という結論だったが。果たして、本当にそれだけだったのだろうか。

繊細な感情。

実は、何処かで羨ましいと思っているのだろうか。

弟のせいで、強くならなければなかった自分。早熟のせいで、弱くなれなかった自分。

自分のサディスティックな歓喜は何処から来るのだろうか。

サディズムはおそらく、怨恨からだろうか。何に対して？

しかし、相反する感情。

人間の弱さ。

そう。

キマイラには無いからこそ、守らなければならない。

きっと、それは彼女を支えているものだ。弱さに対する、敬意。

レイアにしろフェンリルにしろ、自分自身の為に戦っているのだろう。

ドーンはまるで関係が無い。

ケルベロスもニアスだって、そうだ。ドーン、アサイラムの為である以上に自らの意志の為に戦っている。キマイラだって同じ事なのだ。

十

「ふーん、アーティの側近はそんな感じなのね」

キマイラはにっこりと微笑みながら、その男に訊ねていた。

下水が流れている場所。

男の名はデハエラと言う。

殺人犯らしい。

服役が終わり、行く当てがなく。此処に流れ着いたとの事だ。

男は顔の中に、大量の汚水が浸透している。

皮膚の中に、汚水が流れていっているのだ。皮膚の中、というか、もしかしたら、血管の中なのかもしれない。ぽとぽと、と男は両目から、汚水の涙を流す。

キマイラはデハエラの頭を後ろから掴んで、強く細長い下水の溝へと沈める。
ぎりぎり、と細長い隙間の中に、男の顔が無理やり挟み込まれていく。
「心配しないで？ 貴方、死にはしないから。ただちょっと。顔の手術が必要になるだけ」
男はもごもごと、狭い排水溝の中に挟まっている。
明らかに、無理やり引き抜く事が無理そうだった。
キマイラはその男を残すと。
その場所を去っていった。
アーティを始末する計画が出来た。
いつもの通りに、行動に移せばいい。
戦う意思が持てない程に、追い詰めていくのと。
彼本人のみを始末するの。どちらがいいか。
答えは後者なのだが。
問題はケルベロス。
彼との関わり。
「私はアーティは殺さないって彼とは約束した。でも、アーティ以外は約束していないつもり。
じゃあ、もうどうするべきか、答えは一つ」
自分の為すべき事を為せばいい。
アーティの兵隊の殲滅。行動不能。再起不能。
速やかに、行動に移さなければならない。
アーティの左腕のようなものを勤めている男。
工場長。
ジュハイ。
そいつを、殺す事に決めた。
おそらくは、そいつを殺す事によって、アーティの意思をある程度、挫く事が出来るだろう。

十

ケルベロスの信念が何処から来ているのか分からない。
初めて、そいつに会ったのは。いつだったか。
場所は。バーだった。
開店して、明かりが付いていたが。他に客も、マスターもいない。
そいつは、バーの奥に座っていた。
捻じ曲がったような長い金色の髪。
真っ黒なドレス。
端正過ぎる顔。逆に、表情が無いので、美しいというよりも、怖いと感じた。
黒さ、暗さ。そういうものとはまた違う。
感情を感じない。

しかし、圧倒的な威圧感だけを感じた。

不気味というよりも、まるで聖なる場所の中に立っているかのような。

「ふむ？ アサイラム。……ドーンの有力者達作り上げた、犯罪者隔離施設。君達は、そこで一体、どうしたいのか。私には興味がある」

メビウス・リングというらしい。

アサイラムの統治者と話した後、ケルベロスにも会いに来た。

「ふむ。君は何がしたいのかな？」

彼女は抑揚の無い声で、そう訊ねた。

人形。

彼はそう感じた。

「俺は……本当に悪い人間なんているのかって、思う。その為に戦いたい」

「その理由はあるのか？」

「俺自身。昔、悪い人間って扱いを受けていたんだ。マフィアのファミリーに生まれた。壊滅したけれども、そんな俺を拾ってくれたのが、アサイラムだ」

「成る程、恩義に報いたい、というわけか」

「そういう事になるな」

彼女は無感動のまま、彼の話聞いていた。

女の姿をしているが、ひょっとすると、女ではないのかもしれない。

「アサイラムは秩序になりたいのか？」

「そうだと思う。俺達は、秩序になりたいんだろう。お前は違うのか？」

「私はシステム。国家や社会とはまた違う形のシステムだ」

「よく分からない……」

ケルベロスは首を捻る。

「たとえば、この世界にあるもの。人間の意志からなるもの、人間が自らの意志を持って、この世界を滅ぼしたいと決意するならば。私はそれすらも肯定的に捉えている。思考を放棄しない事だ。そこに意味がある。そこに可能性があると思っている」

「人間を滅ぼしてもいい、か……」

ケルベロスは、悩む。

「俺はみんな幸福になればいいと、思っている、実は。その為に戦いたい、って何処かであると思う」

お人好しだ、って言われる事もあるけどな。

と、彼は自嘲気味に、自分だけに聞こえるように呟いた。

しかし。それも、また信念なのだと。

「けれども、どうしても。この世界の秩序からはみ出たがる者達がいるな」

「ああ」

「私がかののものも、認めようと思う。それは可能性だからだ。私は秩序ではない。君達の言う秩序ではな。確かに私は秩序のような存在なのかもしれない。しかし、私が統制したいものは、君

達の言う統制とは違うものだ。私は可能性を見守りたい。世界の閉塞を厭っている、という事だ」

「可能性を守りたい、か」

ケルベロスは。

きっと、ハーデスからの影響以上に。

メビウスの言葉の影響があるのかもしれない。

「可能性を守りたい、それは悪も可能性だっていう事だよな？」

「悪とされるものもまたな。私はドーンと、賞金首。実はどちらも等しく肯定している。私はドーンそのものと言ってもいいのだがな。これらは、可能性と可能性の戦いなのだと考えている。私は少しだけ、影響を与える為に、稀に介在する。しかし、本来ならば、人間達が見つげていくべきものなのだろうな」

「そうか」

「たとえば、青い悪魔。死の翼。彼らは大きな可能性だろう。彼らは死を与え続ける。しかしまた、その事によって、何かが生ずる可能性は高い。だから、私は彼らに期待している」

「そんなものなのか」

ケルベロスには分からない。

人間の苦しみ、悲しみ。そして、善と悪。

自分はきっと、善を信じたいのだろう。だからこそ、悪人とされている者達と深く関わりたい。きっと、そこに答えが見つかるのではないのかと。

十

どうしようもない人間。

たとえば、キマイラのような調和を壊したがる者。

あるいは、調和を壊さずにはいられないような者。

どうしようもなく、調和の外にいる者。

ケルベロスはそこで悩む。

アーティの言葉。

間違っていないんじゃないかと思ってしまうている。

少なくとも、彼の思想で救われる人間も存在する。

だから、生き生きとした顔をしている者達がいる。

再三、彼はメビウスと会う事になった。そして、何気なく色々な施設、場所、教団などに付いて訊ねたりした。どう思っているのかを。

たとえば、此処。此処は、確かにこう言っていた。

.....クラスタか。

.....私には意味が無いな。

.....確かに可能性の芽なのだろうな。しかし、私が干渉すべき場所ではない。

神。

メビウス・リング。

彼女はそう言っていた。

彼女は何も救いはしない。

ただ、システムとして機能し、可能性を見続けていると言っていた。

十

薬物の散布によって。

人体が変形していった者達。……。

あるものは頭部が肥大化し、あるものは手足の数が変わり。……。

あるものは両手がカニのような指になり。珊瑚のような指になり。……。

身長が縮み、背骨がないかのような姿になる。……。

両の目蓋が溶けて何も見えなくなった男。……。

あるものは、コブだらけで葡萄棚のような肉体になった。……。

顔面が溶けるようになっている者達。背中が渦巻くようにねじ曲がった者達。……。

多かれ少なかれ、コブのようなものが出来た者達。……。

湿疹のようなものが全身に出来た者達。……。

顔の中に幾つもの、巨大な風船のようなものを入れられたような女。……。

特に生まれてくる乳児は、頭部の肥大化が問題になっていた。……。

彼らは強く生きていかなければならないのだろう。……。

……。

フェンリルは。

カイリと戦う前に、クラスタのもっとも酷い人間達が集まる場所を見てきた。沢山の人間達が、絶望しながら暮らしていた。彼らはやはり何処かで、強く死を望んでいた。

彼らは薬物や爆弾によって、肉体が変形していた。

彼らをどうやったら、救済出来るのだろうか。

クラスタ内には、何名かの医者もあり、何とか彼らの肉体を治そうと頑張っていた。

諦めるしかないのではないかと思われる程の生。

フェンリルは首を横に振る。

決して、折れてはならない。

戦うという事は、このような者達も直視し。それでもなお、前に進まなければならないという事。それこそが、生きる事なのだ。

自分自身が何処までも冷たい人間であろうとする事。たとえば。

レイアのように。

キマイラのように。

二人は、一切、自らを曲げない。

二人共、狂人なのだ。

けれども、彼女達は決してそんな自分を疑っていない。

フェンリルは。

何処かで、迷いがあるのだろうか、自分に問う。

迷いは無い。と言い聞かせる。

カイリの邪魔をしようと思っているのは、何となく、だ。

そこに強い信念があつての事なのか。それとも。

何も無いと思つていても、実はあるのだろうか。

ただ、このクラスタ。

この在り方を、信じていないし。気持ちが悪いと思つてしまっている自分がいる。

その理由の正体が分からない。

だが、直観で感じる事だつてある。全てを言語化する事は出来ないが。

しかし、思うのだ。この教団、この集落は。

終わっている、と。

前に進めないのだろうか、と。そう思っている。

どうやら。

此処の教祖は世界を救いたいらしい。けれども。

世界を救済するとは、一体、何なのだろうか。確かに、分かっている。此処には。

苦しんでいる人間が、沢山、集まってくる。

自分が生きていく事で精一杯だからだろうか。思うに。

他人を助けたい、という事。それは。やはり、自分自身の意志の補完物なのだろう。確かにそれは間違つてはいないのだろう。しかしだ。たとえば、聞く処によると。ロータス、彼女はその意志が世界全てに向かっている。広い、広い世界。無限に反復していく人間達の苦痛。出口が無いと思う。到達地点が考えられない。

人生には、結末というものが存在するのではなからうか。

終わってしまった、地点。それ以上、前には進めない。

少なくとも、クラスタにいる以上は、そうではないのかと思つてしまう。

フェンリルは前を歩く。進む事を決意している。

自分の意志のみを信じる。

だから、彼はカイリの前に立つ。

一切、彼と手を結ばない。

レイアもだろう。

間違いなく、絶対にロータスの言葉に耳を貸さない筈だ。ならば。

自分はたとえ世界のルールに反してでも、彼と一切、分かち合つてはならない。

迷いは無い。

彼は。彼らは。

絶対に分かち合えない存在なのだ。たとえ、どれ程、考え方が似通つていたとしてもだ。絶対

に分かり合えない相手。それは何処までも、何処までも断絶している。

だからこそ、彼らと戦わなくてはならない。

決して、折れてはならない。懐柔してはならない。

十

永遠の環の中に、閉ざされればいい。
誰にも触れられず。何にも触れられず。
世界を構成している、絆。
全ての絆を断ち切っていかなければならない。
自らの意志により、絆を断っていくという事。
その事によって、自分が自分になる。
永劫を手に入れるのだ。
レイアは。
世界の何にも希望を抱いていない。希望というか、在り方の可能性とでもいうべきか。
レイアはレイアとして、生きなければならない。
それは誰の為でもなく。何の為でもない。
ロータスのいるビルが崩れていく。
波動が、一面を砕いていく。全て、レイアの攻撃を返されたのだ。
レイアは、地面へと落下していく。再び、戻らなければならない。
その時、空を見上げて気が付いた。
大きな翼を広げた。
天使のようなものが、同じビルの下階から、飛び去っていくのを。そいつは。
ロータスを掴まえていた。
「やるじゃない。何処までも馬鹿にして……」
彼女は立ち上がった。
そして、彼女の相棒を探す事に決めた。

十

工場労働者達が集っているブロックだった。
グロウ達とはまた違うものを製造している。
彼らは主に。クラスタ内で使う、調理器具などの製造をしていた。
彼らも、アーティの思想の下に生きている。
みなで、焼肉パーティーを楽しんでいた。
工場長であるジュハイがみなを仕切っていた。
ジュハイは、眼鏡を掛けた筋骨逞しい中年男性だった。
ジュハイはワインを空ける。
そして、みなに振舞う。
此処では、畜産業なども営み、牛や豚なども育てている。
それから、ニンジンに玉葱、ピーマン。全て此処で作られたものだ。

やはり、みなで作ったものは巧い。

それは、証だからだ。労苦の証。

工場内の電灯が落ちる。

故障だろうか。

「おいおい、どうしたんだよ」

ジュハイの親友であるヌイメが構わず、焼かれた肉を箸で取る。

ふうふうっ、と熱い肉に息を吹き掛ける。

「あらあら。みなさん、お揃いで」

がしっ、と頭を掴まれて。

ヌイメは焼けた鉄板の上に、顔が近付く。

そして、舌を引き出されて。

舌が熱い鉄板の表面と接合していく。

ヌイメは悲鳴にならない、悲鳴を上げた。

舌を鉄板から離そうにも、見事なまでに融合していて、離せない。しかも、熱が舌を伝わって顔全体にも向かっていく。必死で離そうとした。

「駄目じゃない、折角のお肉が。こぼれちゃうわよ」

ちょうど、ヌイメがいる位置と間逆の場所に。

別の男が、顔を鉄板の上に打ち付けられる。

ぐちゃぐちゃと、男の顔は鉄板に、深く沈んでいく。

彼もガタガタと必死で暴れまわっていた。頭部に野菜の切れ端がアクセサリーのように、埋め込まれていた。接続部が奇妙にも肉体と溶け合っている。

そいつは、悠然と焼け爛れた鉄板の上に乗っかって、箸で肉を挟むと、口に入れる。

「美味しいわ。これ、霜降りね。貴方達、凄いわね」

奇妙な事に、女が座った場所は。焼けてない。熱くないのだろうか。

更に、鉄板がびくりともしない、簡単に外せるものなのだが。

ヌイメは必死で、鉄版から舌を引き剥がそうと、肉体を上下させる。死に物狂いだった。右足を軸にして、顎を強く上げる。

舌がぶちり、ぶちり、と千切れていく。

「さてと」

そいつは、角の生えた女だった。

ジュハイに向かって言う。

「とても単刀直入に述べるわね。ジュハイだっけ？ 死んでくれない？」

女はにっこりと微笑んだ。

ジュハイは蒼ざめた顔で女を見ていた。

「貴方が死んでくれなければ。此処にいる全員と、工場と。農作物と家畜達、全部、壊すわよ？」

とても穏やかだが、本気の口調で言っていた。

「そ、それは困る……」

「あらそう」

彼女はまた、肉を箸で掴んで食べる。

とても幸福そうな笑みを浮かべていた。

「あ。そうだ、彼との約束も守れる。最高の解決法を今、思い付いた」

ぱあっ、と明るい顔になる。

「そうだ。ジュハイ。貴方、アーティ殺してくれない？」

女は優雅に、指先を男に向ける。

「そしたら、全部、解決するわ。みんな守れて。私も約束を守れて、円満に解決する。どうかしらねえ？」

誰かが飛び掛ってきた。筋骨逞しい男だった。

彼は一升瓶を叩き割って、それを武器に、キマイラに襲い掛かる。

彼女は指先を回した。

くるくる、と風が回って、男の鼻筋を通り抜ける。何故か、風が後頭部から吹き出していく。

「あら。新しいアート発見」

彼女は嗜虐的な笑みを浮かべる。

彼女は男の顔を鷲掴みする。男は必死で、彼女の腕に割れた一升瓶を突き立てるのだが、どろり、どろり、と腕が溶けていき、一升瓶が刺さらない。

「ねえ。ジュハイ。選んで。どっちがいいのかしら？」

彼女の口調は何処までも穏やかだった。

「此処にいる全員に加えて、貴方達が作った物質の全てと。貴方達の首領。ねえ、そう難しい事ではないと思うの」

男はキマイラの腹などを足蹴にする、しかし奇妙な感触が返ってくる。まるで、岩か何かを蹴っているような。

キマイラは男を掴んでいる腕とは、別の腕を振り上げる。

くるくる、と肉を焼く事によって起こった熱気が掻き混ぜられていく。

しゅうしゅう、と、辺りに熱気が回っていく。

暑い……。

「ああ、そうだ」

思い出したように言った。

「お前、何がいい？」

キマイラは先ほどから、顔を掴んでいる男に訊ねる。

「何と。混ぜられたい？」

キマイラは底無しにドス黒い声で言う。

ジュハイが溜まらず言った。

「止める。分かった、分かったから。なあ、どうすればいい。俺がアーティさんを殺せばいいんだろ？　なあ、そうなんだろ？」

「ええっ。その通り」

キマイラは掴んでいた腕を下ろす。

男の顔には、くっきりと指で作られた窪みが出来ていた。彼の顔は変形していた。

万力で締められたというよりは、顔の骨格そのもののデザインを変えられた、といったような

。

ジュハイの全身は、震えている。

彼は思わず、走り出した。

バシッ、と全身を叩き付けられるような感触に襲われる。

彼は地面に倒れていた。巧く、動けない。

キマイラは空中に向けて、スタンガンを突き出していた。

スタンガンから発せられる電流を空気に溶かして、離れたジュハイの全身に打ち込んだのだ
った。

「今から貴方の頭に。刃物を入れようと思うんだけど。アーティの首、持ってきたら。抜い
てあげるわ。それから、約束は守る」

彼女は本当に楽しそうな顔をしていた。

「人間の頭の中に、大きな刃物を刺し込んでも。場所によっては、人間って死なないものよ。
人体って不思議でしょう？ そういう事件って、結構、ニュースでも流れるわよねえ？ たと
えば、強盗に頭をナイフで刺されて。生きていた男の人の話だとか。ナイフは手術して取り出し
たらしいわよ。脳内に深々と突き刺さっているのに。別に後遺症とかも無かったらしいわよ。
人体って不思議でしょう？」

そう言いながら。彼女は大振りのナイフを取り出す。

十

ケルベロスは、グロウの足元を切り崩していく。

彼の指先からは、ナイフのような爪が飛び出していた。

「急いで、休憩室に運ぼう。俺がキマイラを説得して、治させる」

グロウの足。

コンクリートと混ざって、ぐしゃぐしゃになっている。

このままだと、壊死していくだろう。

アーティは眉間に皺を寄せていた。

「私は思いますよ。やっぱり。沢山の人々が分かち合う為には、やはり、調和を破壊してくる人
は追い出すなり、最悪、殺すべきだと」

アーティは苦々しそうに、強く言った。

「殺す事も認めるの？」

ニアスは訊ねる。

「仕方……無い、と思います。私だって認めたいです。それも大切な事なのだと。でも、人間は

生きていけないといけない。生きていくって事は、人生があるって事です。他人の人生を壊してまで、生きるべきなのではないでしょうか？」

ニアスは黙った。

そして考える。

悩む。

所謂、アーティの思想とは。共産主義の思想なのだろうか。

「確かに。……でも、俺はアサイラムの者として言わせて貰うし、俺の立場がある。俺は最低な奴こそ救いたい。アサイラムにいる囚人達。何とか、この世界の役に立って欲しい。俺はその信念で生きているんだ。それは曲げるつもりは無い。妥協も出来ない」

ケルベロスはきっぱりと言った。

今度は、アーティは黙る。

ニアスは、何とか彼らの間に割って入ろうと思うが、言葉が見つからない。

そして。気付いた。

……自分を支える信念が希薄な事に。

いや、ひよっとすると。何も、無い事に。……。

「強さってのは。悪と対面する事だ、と俺は思っている。俺は強くなりたい。俺は殴り合う事や、ましてや殺し合う事なんてのは強さじゃないと思っている。話し合いで解決したい。悪人が悪人になった理由ってのはある。彼らの人生観、生き方。否定する事が悪を無くす事なのだろうか？」

アーティはそれを聞いて、溜め息を吐いた。

「難しい問題ですね。本当に」

「とにかく。俺はキマイラを探しに行く。グロウの足を治させる。それでいいか？ 今回の処は。クラスタとアサイラムの協定の件は、それから考えさせてくれ」

ケルベロスは困ったような顔をする。

「ああ、それから。君の能力、解除してくれないか？ クラスタ内に仕掛けているのだろうか？」

「解除は出来ませんが。貴方を対象から外す事は出来ます」

そう言って、彼は指先を突き出す。

彼の中に、光のようなものが刻印された。

「これで、ライト・ブリンガーの幻覚の影響は受けないでしょう」

「助かる」

遠くで。

轟音が響き渡る。

クラスタの何処かで、激しい戦いが行われている。

「……一体、何なんだ？」

アーティは困ったような顔をしていた。

ケルベロスは、更に困ったような顔になる。

ニアスはそんな二人のやり取りを、ただただ眺めているばかりだ。

.....あたしは、本当に。どうすればいいのだろう。

そして、ふと思った。

「多分。キマイラさんは、あなたを暗殺したいと思うんですよ」

彼女は思わず、口に出していた。

男二人はむうっ、といった顔になる。

「確かに。.....私を殺したいだろうね。君との約束なんて聞かずに」

「.....否定は出来ないよ」

苦々しい言葉。

思わず、彼女は言葉を発していた。

「あたしが、キマイラさん探しに行きましょうか？ ケルベロスさんは、此処に残って。アーティさんの護衛をするとか、どうでしょうか？」

ニアスも、アーティによって。ライト・ブリンガーの光を受ける。

そして、ニアスはキマイラを探しに向かった。

広いクラスタ内だ。

一応、地図も渡される。

キマイラが向かうとすれば、何処だろうか。考える。

.....考えても仕方が無い事が分かる。

キマイラ。

一番、何を考えているか分からない女。

一番、常識が通じなさそうな。話が通じなさそうな女。

轟音が遠くから、響いている。

見ると。

遠くで、ビルが爆裂していた。

ニアスは顔を引き攣らせていた。

もう、何が何だか分からない。.....。

十

取り合えず。休憩所の辺りまで戻ってみた。

破壊の痕が続いている。此処で何らかの戦いがあったのだろうか。

周囲のビルが勢いよく抉られている。

一面に、クレーターが開いていた。

ニアスはぎょっとする。

ヴリトラの死体。

彼は完全なまでに死んでいた。何をされたらこんな死体になるのか分からないが、全身をぐしゃぐしゃに砕かれて殺されている。

ニアスは蹲る。

彼女は元々、強い人間ではない。

今にも逃げ出したくなった。しかし。

ケルベロス。……彼の顔を思い出して、何とか立ち上がる。

自分の弱さとは何なのだろうか。そもそも。

アーティ。……。

彼と一緒にいるのが何だか気持ち悪くて、口実を作って逃げ出してきてしまった。出来れば、協定が纏まらなければいいというのが、ニアスの本音だった。

キマイラを探し当てる力なんて無い。しかし、取り合えず。何もしないよりはマシだとも思った。

休憩所の中は、特に破壊された痕跡が無い。

そういえば、と思い出して。

あの赤い少女を探す。

見つからない。

確かに打ち付けた柱の辺りにもいない。いや。

……無理やり、引き千切った痕がある。

何処かに行ったのだろうか。探し当てる。

血が点々と続いていた。それを辿ってみる。

すると、鶏小屋へと続いていた。

……やっぱり。

引き裂かれた羽。

鶏の骨が食い散らかされて、落ちている。

ふしゅううるる、ふしゅうううう。と音がした。

近くにいる。

「アンサー。……出てきなさい」

彼女は赤い少女の名に語り掛ける。

こりこり。ぺちゃぺちゃ。くちゆくちい。

物を食べる音が聞こえる。

ニアスは恐る恐る、近付いた。

かつて、彼女が仕えていた何者でも無い者ルルイエ。

確か名付けたのは、彼女だったか。

ルルイエが創り出した、怪物。

一度、死に甦り。聖なる海溝にて、また死に。また生き返った少女。

生前の記憶が無く。知能が破壊されて、現世を彷徨い歩いている亡者。

ルルイエ。……何の目的も生きる意味も無いが為に、彼女達の王となってくれた者。実質、張り子でしかなかったかもしれないが、それでもルルイエは彼女達の神となつて、彼女達に目的を与えてくれた。……。神が欲しかった。だから、クラスタの住民の生き方にも、何処かで共感している。

「フィア・ゾーン。……あたし、戦えるかな？」

彼女は何者でも無いルルイエを祭り上げようとした男を思い出す。

ルルイエの下に集まった者達は、神が欲しかったし。その為に行動したい、といった弱さを持っている者達だったんじゃないだろうか。彼女と妹と、あの男と。……。

ああ、やっぱり。

支えてくれる相手が欲しい。

それは、ルルイエでもフィア・ゾーンでも。フェンリルでもケルベロスでも良かった。

……人殺す覚悟はあるかって、聞いてんだ。

フィア・ゾーンの言葉。

確か、そんな言葉だったか。あるいは、戦える覚悟と言い換えてもいいかもしれない。戦う中で、何人だって殺せる覚悟とも言っていた。

結局、ニアスは彼から女として見られておらず。彼はアンサーばかり気に入っていた。彼は変態だった。変質者だったし、異常者だった。しかし。

恋心とは違うが、憧れのようなものは、確かにあった。

だから、今、強さが欲しい。戦える強さが。

ニアスは音がする方へと向かっていく。戦わなくてはならない。……。こいつの能力も覚えている。気を付ければ、何とでもなる。

くちゃり、くちゃり、と。

赤い少女は、顔中から粘液のようなものを流しながら、暴れる鶏を頭から噛み千切っていた。服装は、あの巨体の男があしらった時のままだ。赤い服。

ニアスはモーザ・ドゥーグを撃ち込もうと、身構える。

レイアには、きっと二度と勝てないだろう。何故か、ニアスを敵視し、過大評価しているみたいだが。二度と勝てないと思っている。けれども。

こいつには、勝たなくてはならない。

赤い少女の首が、ぐるぐる。ぐるぐる、と回る。

周囲を見回す。

鶏の血が点々と付いている。

血が増殖していく。

ニアスは寒気がした。

こいつは、化け物だ。ルルイエの『ニユクスの母体』により偶発的に生まれた化け物。

「アンサー。……あなたは聖なる海溝でちゃんと死ぬべきだった。ルルイエ様の為にも。今、あたしはケルベロスと共に戦っている。今、あたしはあなたを始末しないとイケない」

ニアスは攻撃を撃ち込むべく、アンサーが此方に向くように言う。

しかし。

どろり、と。アンサーの両眼は溶ける。そして、ぼたぼたと、赤い血が眼孔の中から流れ落ちてくる。

「うっちゅ。うちゃ、うっちゃちゃちゃ」

人間の声とはとても思えない音声で、少女は歌い続ける。

ニアスは、服の中から、ショート・ソードを取り出す。

そして、アンサーの首を斬り付けた。

首が切断出来ない……。

気付くと。

周囲に、ガスのようなものが充満し始めている。

アンサーの背中から、ガス状のものが吹き出ている。

ニアスはすぐに、気付く。……アンサーの能力、それからこれは。おそらく、敵の能力だ。アンサーが新たに能力を身に付けているとするならば。……これは。

ニアスは全力で距離を取る。

ガスが充満している。炎が生まれ始めた。

アンサーの能力『サーキュレーション』。万物に遍くある赤を増大させていき、それを起点に爆裂を引き起こす力。

ニアスは走って、逃げる。

そして、建物の陰に隠れる。

大気が燃焼し。

辺り一面が、爆破炎上を起こしていく。

十

『ヴィア・ドロローサ』の駒と化し、『ファイヤー・ブリンガー』の能力を付随された、赤い少女アンサーは暴走し始めている。

……………。

ニアスは頭を抱えて蹲る。

化け物だ。……。

「るん、るん、るん、るん、るるるんっ。うううううううう」

赤い少女の顔面は醜く膨れ上がり、肥大化していつている。

アンサーの肉体は、泥との混合だ。

何となくだが、ニアスは敵の能力を理解し始めている。

こいつは、土や灰などを操作する奴なんじゃないだろうか。それから、炎も扱える。何だか分からないけど。とてもヤバイ。……。

ニアスは心の底から思う。

何、こいつ。気持ち悪い。……………。

全身にジンマシンのような物が、ぷつりぷつりと生まれる。生理的な嫌悪感。

頭だけが巨大化した赤い少女は、ビルを食べ始めている。

住民達の悲鳴が上がる。

べきいべきい、と。住民達が食われ始める。

醜く膨れ上がった頭部の表面に、ぷつりぷつりと沢山の顔が浮かび上がる。
それは、全て赤い少女アンサーの顔だった。顔達はみな、揃って歌い始める。
人間の声とは思えない声で、歌う。
そして、顔達は徐々に腐っていき、赤い血を垂れ流し始める。
そして、その血は炎上していき。一気に爆裂を引き起こし始める。
悪夢だ。
悪夢が巻き起こっている。……。
ニアスは頭を抱えていた。
どうすればいいのか分からない。
こいつには、ニアスの能力が何も通じない。
彼女は、ほぼ半泣き状態になっていた。

十

「何？」

キマイラは大型のナイフを、ジュハイの頭に刺し込もうとする寸前だった。
窓の方を向く。
周りで、二人に近付けずにいた他の住民達も、窓の方を向いた。
遠くで、巨大な醜い顔の怪物が暴れ回っている。
キマイラは確かに、聴いていた。
これは……。この声は。……。
キマイラは、咄嗟に。ナイフを投げ捨てて、服の中に手を入れる。そして。
無数の針を取り出した。
その針の何本かを、自らの頭に刺し込んでいく。
「貴方達。もういいわ。また、今度ね」
そう言って、キマイラは。
工場の壁を蹴る。その反動で、全力疾走した。

十

ニアスの隠れている建物も、怪物によって食い潰されていく。
がしゃり、ぐしゃりと。大きな歯が建物を飲み込んでいた。
また、小さな少女の顔が無数に現れて、それがどろどろと溶け落ちていく。
ニアスは完全に怯えていた。
そして、震えながら。誰かに向かって、叫んでいた。
怪物は動きを止める。
そして、自らの両手の指をぐしゃりぐしゃりと食い始めた。そして、えへっ、えへっ、と笑い

続ける。

辺り一面に、炎が広がっていく。

ニアスは段々、死を覚悟し始めていた。

自分は、何も達せられない。

このまま、死ぬ。かつて、仲間だった者の手によって、殺される。

怪物の顔は、ニアスの下に迫っていた。

小さな首が伸びてくる。

それは、小さな少女の顔だ。少女の口が開かれて変形していき、口の中から、また顔が生まれていく。それが繰り返される。ぐしゃり、ぐしゃりと。怪物の全身から、手足が生えてくる。

それは、一斉にニアスに掴み掛かろうとしていた。

ニアスはもう、泣いていた。

こんな奴に殺されるのだけは、本当に嫌だった。

死ぬ。

死ぬ。

死ぬ。

怪物は口の中から、沢山の舌を伸ばす。怪物の周りを、舌と舌が巻き付いて行って、怪物を包み込むように、一つの樹木のようにになっていく。あるいは、巨大な桃色の花のように。沢山の赤い唾液が滴り落ちていく。怪物は、ニアスを、どうやって殺そうか吟味しているみたいだった。

「あはっ、あはっ、あへへっ。うちゅ、うちゅ、うしゅしゅ、るん、るん。えええっ、ええん。ええん。しゅる、しゅる、うしゅうしゅ、うしゅしゅしゅしゅしゅ、るん、るん」

怪物は、楽しそうに沢山の首達で、唱和していた。無数の眼球から、血を流す。無数の首にある髪の毛が伸び続ける。沢山の腕達が、ニアスの周囲を取り囲み続ける。

爆裂音がした。

怪物の全身が、揺れる。嘔吐物を大量に吐き出していた。

「大丈夫？」

羊の角を生やした女は立っていた。

そして、右手から何かを取り出す。

パシィ、と盛大な音が鳴る。

それが、怪物の全身を駆け巡る。

気が付くと。

ニアスは、女に掴まれている。

「大丈夫だった？」

女はにっこりと笑う。

「えっ。あっ、あなた。キマイラ」

キマイラは、赤い怪物の方を向く。

「一緒に逃げるわよ」

にっこりと、邪気の無い笑みを浮かべている。

「えっ。ええっ？」

怪物は、口元から鬼火のような炎を吹き始める。

キマイラは指をくるくる、回す。

すると、気流が操作されていき、炎が怪物の下へと逆流していく。

怪物は焼け爛れながら、炎を更に撒き散らしていく。

怪物は、全身から放電を始める。スタンガンの電流を反射させて、辺りに撒き散らしている。

その後、生えた首同士がお互いを喰い始めた。べたべた、と赤黒い粘液を全身から垂らし始めている。赤黒い蛆のような蟲も産み落としとしていく。よく見ると、内臓の一部のように見えた。ぷつり、ぷつり、と蜂の巣のようなものが全身に生まれていく。ありとあらゆる生理的嫌悪感を催すものによって、怪物は構築されていた。

二人は怪物から、ひたむきに逃げ続ける。

「何、何で助けてくれるの？」

「えっ。何って」

キマイラは当たり前的事として、言う。

「何って。だって、仲間でしょ？」

キマイラはニアスを抱きかかえる。

そして、そのまま全力で怪物の下から逃げる。

うわあ。……。

格好いいなあ、と。ニアスは思わず、キマイラを見直した。

そして気付く。

彼女は、ただただ周囲を省みず、走り続けている。

「アーティのライト・ブリンガー。……」

「ああ。空間を迷宮にしていく能力ね。頭に刺した針の一本で防いでいる。レイアのエタン・ローズと違って、概念、認識そのものに踏み込むものじゃなくて。光の屈折現象で網膜に影響を与えて、視覚情報を操作するものだから。話は簡単で、視覚自体を今、脳を弄って操作しているから」

そう言って、キマイラはあっさりと。アーティの能力を破っている事を話す。

走っている間も。

赤い化け物は、足を巨大化させて、追い付いてこようとする。

キマイラはその間も、空中にスタンガンに向けて。空気に電流を流し込んで、赤い怪物の全身に電気を走らせていた。

「大して効かないわねえ」

赤い怪物からの追撃として、炎の吐息が向けられる。

キマイラは指先を回転させ続けて、気流を操作し、此方に火炎が届かないように仕向ける。

彼女はそのまま、アーティのいる場所へと向かっていた。

「ケルベロスの能力は聞いているわ。彼ならば、おそらくは……」

彼女は赤い怪物の方を向く。

フラッシュバックの攻撃、あれをどうすればいいのか分からない。

本当に、やっかいな敵だ。

「私の能力じゃ。ああいう人体を幾ら壊されても平気でいられるタイプは、正直、厳しいのよね。デス・ウィングの時もそうだったけども」

十

アーティとケルベロスは、また熱心に話し合っていた。

二人共、明確な思想の違いが分かってくる。しかし。

妥協点を探し続けていた。

その時だった。

対話の時間が終わりを告げる。

建造物が破壊されていく。

ニアスとキマイラの二人が現れる。

「あっ。ケルベロス。……キマイラ、連れてきた……」

「ケルベロス。後は頼んだわよ」

そう言って。

キマイラとニアスは、ケルベロスの背後に隠れるように立つ。

「はあ？ 何だ？」

アーティは渋面のまま、三名を見ていた。

「本当に、何事ですか」

キマイラは、何かを遠くへと飛ばした。

どうやら。水鉄砲のようだった。

怪物は悲鳴を上げて。

ぐしゅぐしゅ、と身体中の顔の歯が抜け落ちていき、鼻が溶けていき、髪の毛が抜け落ちていき、首がくるくる捻じ曲がっていく。その後、顔面が収束されていき、赤子とも老婆の啜り泣きとも言えるような奇怪な音声を発しながら、また、変形を繰り返し始めた。

そして、顔の一つが大きく口を開き、耳まで裂けた口から何かが発射される。

何かが、アーティの背中に命中する。

「な。一体、何事です……？ ……？」

アーティの全身が、一気に膨れ上がっていく。

サーキュレーションの爆破の攻撃だ。

「ケルベロス。防御しろっ！」

キマイラは叫んだ。

ケルベロスは言われて、『アケローン』を発動させる。

彼は地面に手を置いた。

地中から。

巨大な刃が生まれて。

三名に盾を作った。

アーティの肉体が、爆裂していく。

そして、肉体が四散して。

近くにいた、家畜達に命中する。

次々と、家畜達が爆裂していく。

ケルベロスは、すぐにキマイラに言われて、三人を囲むように剣の盾を作っていたのだった。

巨大な赤い怪物は、すぐ目の前へと迫っていた。

「ケルベロス、あれ。どうにか出来ない？」

キマイラは彼に訊ねる。

「分かった。やってみる」

既に、彼は状況を飲み込んでいた。

とにかく。目の前にいる化け物は倒すべき敵だ。何としてでもだ。

彼は地面に再び、手を置く。彼の掌の中から、刃物が生まれている。

まるで、ミキサーのようになって。

ケルベロスのアケローンの刃は、辺り一面にある地面の岩盤を砕いていく。

周囲が、流砂のようになっていく。

怪物は。

流砂に飲み込まれていく。

深く、深く。沈んでいく。

「フェンリルとかだったら、抜け出されるんだよなあ。この攻撃。……。こいつは、飛べるのか？」

「多分、飛べない」

キマイラは眉間に皺を寄せていた。

「じゃあ。このまま、地中深くに埋めてしまおう」

流砂の中。アケローンの刃が、赤い怪物を切り刻んでいく。その傷が再生していくのを見て、ケルベロスは。この敵を、生きたまま埋葬する事に決めた。

ケルベロスは地面に手を置いて、刃を操作し続ける。

空中から、刃のようなものの幻影が生まれて、彼の全身を刻もうとする。彼は自身の骨格を変形させて、それらの全てを弾き飛ばした。

「這い出てこないかしら？」

キマイラは不安そうに言った。

「どうなるか知らんが。……なるべく深く埋めてみる」

十

アンサーは、深く深く沈んでいく。

真っ赤な灼熱が見えた。

赤い。

赤い。

綺麗だ。とても綺麗。

彼女は、赤が好き。赤色が好き。真っ赤。世界中を赤で埋め尽くしたい。

赤い色が好き。

炎が彼女の全身を焼いていく。

彼女はそれを増やそうとする。ますます、彼女の全身は焼け爛れていった。

宝石のような赤。それは。

マグマだった。

彼女はマグマにサーキュレーションを送り続ける。ますます、攻撃が跳ね返るように、自分自身の身体を焼いていった。攻撃の反射は、全て彼女自身へと跳ね返ってくる。ああ、赤い色と一緒に溶けていくんだと思った。

肉体が灰へと返っていく。元の暗闇の中へと。

此処は温かいな、と思った。

十

ビル全体が爆破炎上していく。

気付くと。

フェンリルは、カイリを見失っていた。

時間が、まるで消し飛んでしまったみたいな感覚。

間違いが無いのは。

確かに、カイリが。フェンリルを退けて、窓の外へと飛び出していったという事。

ビルの振動と衝撃によって、時間が消し飛んでしまったような感覚に陥って。その只中で、カイリを逃がしてしまった事になる。

そして。

気付くと。

レイアが目の前に立っていた。

「ロータス……。始末に負えないわ」

憎憎しげに彼女は言う。

フェンリルは、ビルの破壊の衝撃によって、カイリを逃した事を知る。

気付くと。

空間把握の能力が使えるようになっていた。

どうやら、アーティのライト・ブリンガーが無くなったらしい。

異空間が消滅している。

「ロータスは、まだこの近くにいる。一緒に倒しに行くか？」

「言うまでもないわね。奴は絶対に殺す」

二人は手を取り合う。

そして。

フェンリルは、瞬間移動した。

ロータスの下へと。

十

カイリはロータスを抱きかかえていた。

カイリの背中には、大きな翼が生えている。

「お怪我はありませんか？」

「大丈夫よ。あなたは？」

「大丈夫です」

二人は、別のビルの屋上にいた。

お互い。寄り添うように、立っている。

そして、カイリは険のある眼で、周囲を見ていた。

黒白の男女。

二人は、同じビルの上に立っている。

「もう止めてくれ、って言っても。無駄なんだよな？」

「ああ、無駄だな」

「そう、無理ね」

二人は冷然と。屹然と言う。

一切、妥協しそうにない。

「じゃあ、せめて。戦いの場所を変えられないかな。住民に迷惑を掛けたくない」

「実はオレもそれを望んでいる。頼む」

その点に関しては、両方の意見は一致していた。

カイリは翼を広げる。

レイアは荊の蔓を、彼の翼に巻き付けた。

カイリはロータスを、再び抱きかかえる。

四人は、クラスタを離れていく。

遠くに。

第七章 断絶された境界。分かり合えない答え。

どれくらいの距離を移動したのだろうか。

レイアはカイリの翼と、フェンリルの背中に荊の蔓を巻き付けていた。

……………。

地平線。

広がっている境界。

沈みゆく太陽。

夕焼け。

クラスタに来て、二日程、経過するのか。

もうじき、夜がやってくる。

カイリがフェンリルと、カフェテラスで対話して以来。一時間程しか経過していない。

そこは。

荒野だった。沢山の廃墟ばかりが続いている。

遠くには、海が見えた。

誰もいない無人の場所。

まるで、人間が滅んだ世界だった。

「いいか。オレはカイリを倒す。お前は」

「言うまでもないわね」

十

「どうしても分かり合えないのかしら？」

「言うまでも無いな」

レイアの代わりに、フェンリルの方が答えた。

砂塵が舞っている。

果てしない空漠が広がっていた。

真っ黒な女に。巨大な白い翼を生やした男。

それと対峙して佇む、黒白の男女。

風が吹きぬける。

ヴィア・ドロローサ。

エタン・ローズ。

既に、お互いに仕掛け合っていた。

ロータスは、きっと仕方無かったのだろう。本当は彼女を説得したい。もし、分かち合えるのならば、共に世界を救済する為の解答を探し続けられたのかも、と。今もなお。しかし、戦う事がレイアの解答ならば。仕方無いのだとも。

一面の廃墟に。呪詛の曼荼羅が生まれていく。

それを起点にして。

攻撃が生まれる。

カイリは炎を生み出して、ロータスを守っていた。

彼は、彼自身でさえも。自分の能力の全貌は分からない。しかし、大切なものを守りたい、それだけだ。

「この辺りは。核兵器実験場になっていて」

彼女はとても、強く。強く、悲しみを込めて。言う。

「多くの罪無き者達が、死んだわ。よく、カイリに此処に連れてきて貰った」

彼女は深く、俯いた。

ヴィア・ドロローサにより。

過去の時間を遡って。

兵器による攻撃が、引き戻されていく。しかし、能力の性質上、時間の経過が必要だった。それまでに、カイリはロータスを守らなければならない。

此処では、沢山の人間が死んだ。

核兵器による実験だけではなく。ありとあらゆる兵器による人体実験が、此処では行われていた。

「ねえ。あなた、レイアって言うんでしょう？ 何故、あなたはそんなに強さを求めるの？ 強さは暴力なの、人を支配に導く。それはおぞましいまでに世界中の人間を苦しめてきた存在」

「黙れ」

彼女は冷然と言った。

「私は強くなる。誰にも何処にも、届かないように。無限に永遠に、誰からも触れられたくない。私は誰かの為に戦っているわけじゃない。何かの為に戦っているわけじゃない。あのウォーター・ハウス……彼も。私の思考の環に入ってきて」

「ねえ。あなたが欲しいものって何かな？」

「永遠の孤独。永遠の不可知」

彼女は断言した。

ロータスには、本当に理解出来ないものだった。いや、ひょっとしたら、誰にも理解出来ないものなのかもしれない。

「貴方ごとき。ブラッド・フォースよりも。デス・ウィングよりも。メビウス・リングよりも。ずっとずっと。そう、あのウォーター・ハウスよりもね。弱い。私が意識する程度の相手ではない。彼らはとても強く、この世界を破壊しようとしたし。あるいは、守ろうなどとしていた。私は貴方のような者を倒す。私自身の為に」

二人は、一切、分かり合えない存在なのだろう。

「そう、わたしは弱いよ。ヴィア・ドロローサが無ければ。ただ、暗闇に閉ざされて死んでいくだけだった。弱さはこの世界の支配の強さに対抗出来ると思っている。闇に閉ざされて、誰にも理解されないまま、死んでしまった人々の声を呼び起こさなければならない。その先にあるものは、まだ分からないけれども。わたしは、ただ願いがあって。その為に、神の世界を欲して

いる」

「メビウス・リング、ルルイエと会えなくて残念ね。もっとも、奴らは神であっても、只の神の模造品でしかなかったけれども」

くっくっ、とレイアは嘲る。

そしては、あはははっ、と哄笑した。

「確かに。この世界に神の世界はあるわ。メビウス、ルルイエが教えてくれた。あのアサイラムの自由に死を。とやらも。この世界の外側。私のエタン・ローズの先には、神の世界を破壊出来る『亡びの光』という力が存在する。お互いにとって残念ね？ 貴方は神でなくて。貴方が神であるのならば、私は『亡びの光』で簡単に葬れたというのに。そう、私は神を終わらせる力を持っている。貴方が欲するような力など、私は持ってなどいない」

ロータスはそれを聞いて笑う。笑っていた。

「そう。やっぱり、この世界には神の世界があるのね。外の世界が。人間全体を救済出来る可能性が。それを聞いて、とても嬉しい。やっぱり、あなたに会えてよかった」

噛み合わない会話。

分かち合えない、目的。

「神の世界に行ったのよね？ どのような場所だったのかしら？」

「無限の宇宙。無限の可能世界。これは貴方が嬉しいものなんでしょう？」

ロータスは、ぱあっと明るくなる。

「貴方は私と戦え。貴方が暴力を欲さなくとも、貴方は暴力を顕現出来る。それはもうどうしようもない事実よ。貴方の存在によって、傷付く者がいる。どうしようもない事実ね」

「悲しいな」

ロータスは、涙を流していた。

その境界は、どこまでも分かち合えない。

世界に、暗闇が灯されていくかのようだった。

ロータスは痛んでいる、自らの力を暴力に向けざるを得ない事実。目の前の少女が、自らの欲した世界に行けながらも。それさえも嘲弄している事実。そして、世界中の苦しむ者、苦しみ死んでいった者達の為に。ただ.....。

「戦いましょう、ロータスさま」

翼の青年が言った。

「俺達は、彼らへの敬意の為に戦うんだ。それも、全力で。フェンリル、そうなんだろう？」

「ありがとう、オレ達の我儘に付き合ってくれて」

「悲しいわ、きっと別の形で会えたのなら」

「そんなものは無いな。いいか、オレはお前らを殺しに来た。お前らは戦え、お前らの思想と目的の為に。全力で戦え。お前らの弱さとやらの肯定の為に。世界を守る為に、オレ達はきっと、世界を破壊する。お前らにとっての邪悪さの顕現だ。お前らはオレ達を殺す事によって、お前らに救済の道が開かれる。そうなんだろう、きっと」

フェンリルが言った。

絶対に、此方の意志を押し通さなければならない、と思った。

四人はしばらく、無言になる。

そして、戦いは始まった。

境界線が引かれるかのように。

大気が揺れて。

大地が爆裂していく。

暗黒の焰が、大気を焼いていく。

レイアは。

両手に黒い蓮を纏っていた。

カイリが動く。

荒野にファイヤー・ブリンガーの力が行き渡り。

巨大な翼が地面から、生え出してくる。それが、レイアの下へと向かった。レイアは構わず、翼を破壊し続ける。そして、カイリの頭へと拳を向ける。ロータスの攻撃により、沢山の弾丸の照射が引き戻されて、彼女へと打ち込まれる。全て、リュミエールに巻き込まれたロータスは、認識外にいるレイアに攻撃を届ける事が出来ない。

レイアは拳を振り翳す。カイリはロータスの頭を翼で防御する。しかし。レイアはそのまま、拳を振るフリをして。風を食い破るかのような音のする回し蹴りを、カイリの腹に叩き込んでいた。カイリの全身が浮く。ロータスが、カイリと自分以外の方角へ向けて。小型ミサイルの攻撃を引き戻して、辺り一面を焼いていく。

爆裂に次ぐ、爆裂。

ヴィア・ドロローサの攻撃を、全力で使って。レイアを核兵器の攻撃で倒したい。しかし、問題は。それを何らかの手段で、防がれると。しばらく、また引き戻すのにタイムラグが生じる。その前に、小回りの効く攻撃で牽制し続けている。

光の海原。

辺り一面が火の海へと変わっていく。

過去の犠牲者達の悲鳴も引き戻されて、辺り一面に戦慄していた。

悲しみ、苦しみ。痛み。それらが混沌となって、渦巻いている。

夕日が海へと沈んでいく。もうじき夜。

それらは一つの映像となって、渾然一体に一面の景色に溶けていた。

燃え上がる沢山の犠牲者達。炎によって肉体を焼かれ続ける人々が、姿を現す。

荊の道により、生み出された過去の映像の記録。

土の下に埋もれ、記憶の底に埋もれていった人々の歴史。

爆撃が。一面に降下していく。

カイリは、ただひたむきに。ロータスを守り続ける。

カイリの顔面に。勢いの良い蹴りが叩き込まれる。

フェンリルは。

カイリだけを狙っていた。彼を彼女から引き離す為に。

二対二ではなく。

一対一を、レイアもフェンリルも望んでいた。

何度も。何度も。

カイリは顔面を蹴られ続ける、そしてロータスから距離を離されて、吹っ飛ばされていく。全身が跳ね上がる。翼を広げる。翼を二つとも、両断されていた。

容赦の無い蹴りが。カイリの全身に打ち込まれ続ける。

カイリが抵抗しようにも、抵抗の意志さえ奪おうとする。無情な攻撃の連続。

ロータスは。

何度も、自身の能力で。周囲をガードし続けるが。

方陣の隙間を縫うように。

光の粒が。ロータスの髪をかすめていく。

お互いに一步も引いていない。

それぞれ、譲れないものがあるから。意志の剣を持つ。

炎が一面に、渦を巻いていく。巨大な火柱が膨れ上がり、竜のように猛る。

人間を焼き焦がしていくもの。生命であり死であるもの。

一面を光が舞う。巨大な光が。

余りにも強過ぎる光は。闇だろう。世界全体を、光の深淵が覆っていくかのようだった。

そして。周囲が膨大な熱を帯びていく。

それは、およそ現代における科学兵器で。一番、人の命を奪える力。闇の中より繰り返される、どうしようもない邪悪さの収束。軽く何十万もの命を奪った死そのもの。人間が創り出したもので、もっともおぞましいものの一つ。

巨大な紫煙。

茸雲が、登っていく。それは、髑髏のようにも見えた。

ロータスは使わざるを得なかった。全力の攻撃を。

辺り一面、数十キロに爆撃が及んでいく。

暗黒なまでの、光芒が、一面へと広がっていく。

廃墟の中、残った崩れかけの建物も次々と吹き飛ばしていく。

全身が黒ずみながら、焼け爛れていく者達の影が。沢山、見えた。彼らは叫んでいる、皮膚が焦げ、肉が溶けていく苦痛に対して。熱い、と叫ぶ。

ロータスの全身は、ファイヤー・ブリンガーの膜によって。熱気が防がれている。

そして更に。

灰によって作られた巨大な壁が、ロータスの周りを纏っていく。カイリはフェンリルとの戦いではなく。ただひたすらに、ロータスを守る事だけに集中していた。それを知っていて、フェンリルは歯噛みする。彼は、核攻撃から逃れられる場所に飛んでいた。

噛み合わない意志。

みんな、自らの持つ何かを守る為に。戦っていた。

負けられない。

それぞれ。

レイアは地面を割り貫いて、地中へと。

フェンリルは、誰も視ていないが為に。“何処でも無い空間”へと飛んで、核の攻撃を避けていた

しばらくして、二人共。再び、彼らの前に立つ。

二人は、すぐに動いた。

何度も。何度も。

フェンリルの蹴りが、カイリの全身に再び、打ち込まれる。

どんどん、ロータスから引き離されていく。

レイアは。

ロータスの周囲の壁を殴って、割り貫いていく。

ロータスは破壊されていくファイヤー・ブリンガーの壁を見て。咄嗟に、再び、爆撃を召還していた。

周囲を、焼夷弾の雨が焼いていく。

ロータスの首の辺りに。

荊の蔓が巻き付いていた。

絞首刑のような蔓だ。

そのまま、ロータスの全身が地面へと倒される。

首を蔓が締め付けていく。

「貴方は。やっぱり。殴って、殺す」

レイアは飛び上がって。倒れているロータスの下へと拳を振り下ろしていた。閃光。

ミサイルの爆撃が、一面に飛び駆っていく。悲鳴。嗚咽。残響する涙。叫び声。殺されていった人々の戦慄。それはメロディーとなっている。歌のようだった。啜り泣き。沢山の顔達が現れては消える。此処は強制収容所だったのだろうか。繰り返される悲しみ。苦痛。絶望。死んでいった存在の叫び声。彼らは光を求めている。暗闇の中に閉ざされた者達。まるで、生贄の羊のようだ。神に奉げられた供物のよう。

痛みが、世界を焼いていく。

世界中の悲しみが、此の地に集まってきた。

ロータスが集めている。

断頭台によって首を落とされる人々。生きながらにして火刑台に上げられる人々。毒殺される者達。虐げられる人々。あらゆる拷問器具に掛けられる人々。飢餓により残飯を貪る人々、人肉を貪る人々。銃殺刑に処される子供達。ガス室に押し込められた死体。それぞれが、時間も場所も飛び越えて。悲鳴となって、引き戻されていく。誰にも理解されずに、暗闇の中、孤独に死ぬ少女。沢山の腕が、蛆が這い回る傷口を剥き出しにして、空に手を伸ばす。延々と反復していく、歴史。終わらない苦痛の数々。救われない者達の声。無限に反復していく、苦痛。地獄の景色。曼荼羅を描く。呪詛の言葉達。

レイアは、全ての悲劇の只中で。

ただただ、笑っていた。

全ての歴史を嘲笑していた。

レイアはもう、人間では無い。

歴史の環の中から、抜け出したい。そればかりを願っている。

ただ独り。ただただ独り。

闇に塗られていく。膨大な光の中で。ただただ。

その行き着く先が、何処にあるのか。分からずとも。あるいは、その行為こそが、永遠でさえあるのか。未来など、分からずに。

あらゆる時間。あらゆる空間において。

人々は、様々な苦しみを背負う。

様々な苦悩に焼かれ続ける。拷問の痛み。生きる痛み。それが購われない。天国も地獄も、死後において何も無く。悪人、加害者は裁かれない。しかしまた、加害者でさえも被害者であるという事実。無限に反復していく、絶望の円環。

誰も、誰もその円環を救えない。

人間は、何故、生まれてきたのだろう。かと。思わずには、いられない。光景。

しかし、それでも。レイアは一切を遮断するかのよう。

ロータスを倒すべく、向かっていく。

黒い。黒い雨が降り注ぐ。

大気が腐っていく。

皮膚が裂け、肉が腐った者達が歩いている。亡霊。まるで、地獄の亡者のよう。彼らの罪は何なのだろうか。分からない。しかし、苦しむものは存在する。六道輪廻を描いた宗教画のような景色。地獄の世界。永劫に回帰していく、苦痛の歴史。

彼らは生きたかったのだろう。違う人生もあったのかもしれない。幸せな、人生。世界中が、搾取し、搾取されていくという構造。人間の環。抜け出せない。悪意の氾濫、蔓延。

どうしようもない。もう、どうしようもない。

ロータスは召還出来る。忘れ去られ、風化させられていく人々の声を。

彼らは、ある意味で言えば、正義の為に死んだ。道徳の為に死んだ。他の者達の為に死んだ。彼らは誰かの為に死んだ。犠牲になった。彼らは赦せるのだろうか、未来に繋がった人々を。代わりに生きた人々を。代わりに幸福を得た人々を。彼らは、他の者達の為に苦しみ死んだとも言える。底無しの暗黒。弱さ。彼らは誰かの為に殺された。奪われたのだ。フェンリルならば、きっと赦さないだろう。自分自身の生き方、生を奪った者達を。決して赦さず。亡霊となったならば、憎悪し、敵視し、怨嗟し続けるだろう。

監獄の奥深くでさえ、強制収容所でさえ、食べ物を奪い合い、希望を奪い合い、押し退けて人々は生きた。強さを求め続けた人々。弱き者は闇の中へと沈んでいく。

再び。

辺り一面が。

閃光によって、覆われていく。巨大な爆音。

核兵器程ではないが。巨大な爆弾。

暗黒が渦を巻いているかのようだった。

カイリは立ち上がる。

再び、フェンリルと激突する。

お互いに、何かを言っていた。しかし、爆音によって何も聞こえない。

フェンリルは。

カイリの脇腹を、勢いよく、剣で、切り裂いていた。

カイリが、思わず、意識を失いそうになる。

そのまま。

フェンリルは、カイリの顎を蹴り上げる。そして、頭蓋も打ち付ける。カイリがダメージを負えば負う程、ますます、カイリは不屈の意志を持って。自身の能力で、ロータスの周りに壁を作り出していた。カイリはフェンリルとまるで戦う気が無い。目的が違う。だから、斬られながらも、蹴られながらも、彼に見向きもしなかった。

フェンリルは、それが悔しい。徐々に。はらわたが煮えくり返っていく。

自分が置き去りにされているような感覚。

そして。

ロータスの全力の攻撃。

それが、再びやってきた。

彼女の掌の中に、闇が収束されていくかのようだった。

全世界の闇が集まっていくかのようだった。

もう一度の核攻撃。

今度は、命中させなければならない。

ロータスは、全身を緩める。

しかし。

レイアは。

ロータスの眼の前にいた。

リュミエールを解除して。彼女の前に姿を現す。

そして、黒い蓮の拳を振り上げて。

彼女の顔面を撃ち抜こうとする。ロータスは。攻撃を放っていた。

爆発。

引き戻された。核のエネルギーが、収束していく。

それは。

黒い光を纏う、蓮の中へと飲み込まれていく。消滅していく。ロータスは驚愕の眼で、それを眺めていた。最強の攻撃。それが、砕かれていく。反動で、ロータスは吹き飛ばされていく。

レイアは。

自身の修羅蓮華の光が消えた事に気付く。そのまま、勢いも失っていた。

彼女は。

ロータスの。

腹を。

撃ち抜いていた。

修羅蓮華の黒白の光はもう、無かった。

勢いを失った、拳の殴打。

レイアは。

彼女自身が、一番、驚嘆していた。

ロータスの肉体。レイアの攻撃の勢いは、もう殆ど殺されていた。しかし、それでも。彼女の拳は。ロータスの腹を割り貫いたのだった。

余りにも。余りにも、彼女の肉体は脆過ぎた。まるで、紙屑のように。

レイアは、拳を引き戻す。ロータスは。既に、意識を失っていた。そのまま。

彼女は、地面に倒れる。

沈黙。

静寂。

ヴィア・ドロローサによって引き戻された、過去の亡霊達が消えていく。

まるで、何も無かったかのように。そこにいた、確かな気配は、全て非現実のものであったかのように。闇に、闇に戻っていく。

歴史の闇の中へと、……戻っていく。また、忘れ去られていく。

カイリは。

レイアに襲い掛かっていた。

自身の能力で持てる、全力の攻撃を使って、炎を纏った翼の剣を彼女へと向けていた。

レイアは動かない。

カイリは。

フェンリルの全身を使った蹴りを撃ち込まれて。地面に深く、昏倒する。力が入らない。相当な打撃を全身に入れられていた。……お前はオレが相手だろう、と言わんばかりの。忌々しさに満ちた、攻撃。

そのまま、時間が流れ続ける。

フェンリルは憎憎しげにカイリを見ていた。

「ふん」

レイアは冷やかに、カイリを見下ろしていた。

フェンリルは、服の埃を払っている。

そして、自らの髪の乱れを直した。

ロータスの意識は、闇の中へと沈んでいく。

勝負は終わっていた。

しばらくして、カイリが立ち上がり。ロータスの下へと駆け寄る。

レイアもフェンリルも。そんな彼の行動を黙殺していた。

もう。終わったのだから。……。

カイリは、ロータスを背負う。

そして、二人に言った。

「もう、いいでしょう？ 俺達の事は、そっとして置いて。欲しい……」

答えは歴然としていた。

「ああ」

フェンリルは言う。

レイアも無言で頷いた。

遠くに見える。海は暗く、深い。

カイリは、自身の能力によって。彼女の腹の傷を塞いでいく。

「ロータスさま。……死なないで下さい。もし、旅立たれるのであれば。俺で良ければ、ご一緒に。……」

あなたには、アニマがいるでしょう。……カイリはそう言われたような気がした。

ロータスは傷を塞がれても、なお。意識を取り戻さない。

灰が空を舞っていた。

「行くわよ」

レイアがつまらなそうな顔をする。

フェンリルは無言で頷く。

世界の景色が美しい。

既に夕日は沈んでいた。

一面は星月夜だ。

十

ケルベロス達と合流する。

アーティは死亡したと言われた。

ロータスは、ロータス達はどうなったのだろうか。知らない。

フェンリルは、ありのままの出来事を、ケルベロスに報告した。

キマイラは、ケルベロスに言われて。グロウの両足を治した。

ニアスは無言だった。

レイアは何処でも無い空間へと戻った。

四人は、クラスタを後にする。

四人は、ヘリの中にいた。

クラスタが遠ざかっていく。

「クラスタの件は終わった、と。アサイラムには報告する」

「また出張るのは良くないんじゃないのか？ お前が死んだら、あの施設は拙いだろう？」

「そうだな。もう無茶は止めないと」

「処で、今回の件。ちゃんと報酬出るんでしょうね？」

キマイラは強く言った。

「あ、ああ」

「そう、良かった。今度、お洋服、買おうかと思って」

「どんな服だ。また、そんな服なのか？」

フェンリルは彼女に冗談めかして言う。自分を棚上げして、キマイラの奇抜な格好を指摘しているのだ。

「私じゃなくて。そうね。お姫様の為に」

キマイラは煙草に火を点けた。

「フェンリル。一緒に選んでくれない？」

「何で。オレが？」

「じゃあ、ニアス」

「ええっ？」

ニアスは思わず、声が裏返る。

「.....私じゃ。センス無いから.....ねえ、お願い。仲間でしょう？」

二人は、神妙な顔になる。

少し、返答に困っているといったような。

十

セルキーは涙を流し続けていた。

彼は絵画を描き続ける。闇の絵画を。

アニマは彼の描く絵画が好きだ。大好きだ。しかし。

彼女は、別の絵を描き続けた。柔らかい、水彩画。

長い夜。

二人は、同じ空間で。それぞれ、絵画を描き続ける。

.....。

ヴリトラが死に。

クライ・フェイスが死に。

アーティが死んだ後の夜。.....。

.....。

ロータスとカイリの二人は戻らない。何処に行ってしまったのだろうか。

二人は戻らない。何となく、二度と戻らないのではないか、と思った。

ガルドラの嗚咽が何処からか、漏れる。

アニマは、彼の絵も描いていた。アニマの描くガルドラの肖像には、足がある。勇敢な兵士の絵ではなく。楽器を持って、演奏している。ギターを弾く、ガルドラ。

セルキーは描き続けている。

汚染されていく、大地。緑と黒の混合。

それは、おぞましい絵だった。

彼は泣きながら、絵を描き続けている。

セルキーは、同時に複数の絵を描いていた。

他にも、兵器の爆撃によって、汚染された街の絵画を描いている。沢山の黒い顔達が浮かんでいる。アニマも、彼の絵が好きだ。

好きだからこそ。彼とは違う絵画を描きたいと思っている。

アニマは明日も、男達に肉体を奉げに行く。此処でのみんなの生活を支える為に、その事に生きる意味を見出している。他の仕事は出来ないだろう。

セルキーは生涯を通して、描き続けると言った。人生の全てを描く事に奉げると。ロータスが自身の力を、彼に注いで視せた世界。それを出来るだけ多く、残したいと。

部屋には、沢山の画材で溢れ返っている。

いつか、出来るだけ。これらの絵を、世界中の多くの場所に届けたいと願っている。

世界は救われない。分かっている。

けれども。

言葉で芸術で、救われる人間もまた、存在する。救済とは何なのか、誰も分からない。どんな思想も、暴力を生み続けてきた。支配の世界を。

生きる事の意味。誰にも分からない。見つけ出すしかない。

強さと弱さ。その環の中で、みな。生きている。

正しい事。何なのか、分からない。永遠に続けられる思考。

繰り返される歴史。終わらない傷の連鎖。

「セルキー、お腹、減っていない？ ボクが何か作ろうか？」

アニマは優しく笑う。

セルキーは頷く。

アニマは、彼女の恋人の帰りを待っていた。カイリ。大好き。

E N D